
ファイアーエムブレム ～テリウス動乱記～

D．ナイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファイアーエムブレム ～テリウス動乱記～

【Nコード】

N8955Q

【作者名】

D・ナイト

【あらすじ】

女神に愛されし大陸、テリウス。

この大地には、神に近い姿をした「ベオク」と、神と獣の境の姿をした「ラグズ」という、異なる2つの種族が暮らしていた。

鉄の武器と英知をもって戦う「ベオク」と、自らの姿を獣に化身させて戦う「ラグズ」。彼らは、決してお互いを認め合うことができない。

彼らは長い年月、抗争と和解を繰り返しつつも、現在は比較的穏やかな時代を迎えていた。

だが、人々の知らない所で、動乱の影が忍び寄っていた。

（この小説とは別に、「蒼炎のもとに　　戦いの記録」 という小説を書いています。そちらの方は小説ではなく、この「テリウス動乱記」の登場キャラクターやアイテムなどの紹介をしています。ゲーム設定に加え、オリジナル設定も入っています。・・・もしよろしければ、このお話のお供にどうぞです^^）

追憶（前書き）

大人気SRPG「ファイアーエムブレム」の、「蒼炎の軌跡」「暁の女神」のストーリーに、オリジナル要素を加えた二次創作小説です。

二次創作が苦手な方はご注意ください。

追憶

「はっ！でやあー!!」

まだ春も浅い野山に、威勢のいい声と木刀がぶつかり合う音が響く。
剣の特訓のようだ。

「くああ！だあーっ!!」

小柄な方は、まだ子供時代を抜け出たかしてないかのような年頃の少年。蒼い髪と瞳に、ハチマキが特徴的だ。大きな声をあげて木刀を振りかざして相手に打ちかかるが、全く打撃が決まる様子はない。

一方の相手は、大柄な中年の男だ。明るい茶髪に整った顔、筋骨隆々とした身体から、相当戦い慣れた戦士を思わせた。蒼い髪の少年の振る木刀を、無駄のない動きで軽々と防ぐ。

「ふんっ！」

「ぐあー！」

大柄な中年の方が、攻撃の隙を見つけて突き技を決める。少年はあっさりと吹っ飛ばされてしまった。

「どうした、アイク？・・・もう終わりか？」

そう言われて、少年は再び立ち上がり、打ちかかっていった。

この少年こそが、物語の主人公である「アイク」。そして、中年の方が彼の父親である「グレイル」である。

「はぁーっ！！！！」

アイクがグレイルめがけて振り下ろした木刀はやはり、グレイルの木刀によって防がれる。
と、その時だ。

「お父さーん！お兄ちゃーん！」

一人の少女が、大声で二人を呼びながらこちらに走ってきた。グレイルのものと同じ、明るい茶髪の少女である。
アイクの妹でグレイルの娘である、ミストだ。

「おお、ミスト」

グレイルの顔がほころぶ。その瞬間、彼に隙ができたのを、アイクは見逃さない。

思い切り木刀を振りかざして、叩きつける。

「はぁー！！！！っ！！！！」

だが、グレイルはあっさりとその攻撃を見切った。体をひねって木刀をかわし、逆に隙だらけのアイクの背中に強烈な打撃をぶつける。

「っぐあああっ！！！」

うつぶせのままアイクは吹っ飛ばされる。ミストが心配して、アイクに駆け寄った。

「お兄ちゃん！？お兄ちゃん！！」

アイクはそのまま、気を失った・・・。

ぼんやりとした意識の中、どこか懐かしい歌声が聞こえる。

（母さんの子守唄だ・・・）

特徴的な旋律で、どこか神々しさもある歌。

目の前には、アイクと同じ色の髪をした女性が映った。

（母さん・・・）

再び、意識があいまいになる・・・。

目を覚ますと、そこは花畑だった。さっきまでグレイルと修行をしていた場所から、体を移されたらしい。

「ルルルルルルルルルルルル・・・」

ミストが向こうで、鼻歌を歌いながら花を摘んでいる。その旋律は、さっき夢に出てきたアイクの母の子守唄だ。

額に置いてあった水をしみこませた布をとりながら、アイクは声をかけた。

「ミスト、その歌は・・・」

するとミストはアイクが目覚めたのに気が付き、満面の笑顔をうかべる。

「あ、お兄ちゃん。気が付いた？」

その笑顔は、母の笑顔にそっくりだった。

追憶（後書き）

次回は、「序章：傭兵」です。
お楽しみに！

序章 〱 傭兵〱 (前書き)

今回も、まだ実戦は入りません><
実戦を期待していた方、申し訳ないです〱。

序章 傭兵

「大丈夫？」

アイクに気が付いたミストは、アイクのことを気遣う。

「あ、ああ」

まだ頭がはつきりしてない気もするが、そう答えた。するとそこへ、グレイルが現れた。

「気が付いたか、アイクよ」

ミストはグレイルに対して、声をあげた。

「もう！お父さんったらやりすぎだよ！いくら練習用の武器だからって、本気で殴ることないじゃない」

「このくらいで音を上げているようでは、傭兵として生き抜いてはいけん」

「でも！」

二人のやり取りを聞いていたアイクが、口をはさむ。

「ミスト、親父。俺は大丈夫だ」

するとグレイルがフツと笑い、木刀を構えた。

「ふん、そうではなくてはな。・・・さあ、構えろ！」

「え？ちよつと・・・まだやるの？」

ミストが心配そうにアイクに聞くが、アイクは毅然と答える。

「せめて一撃・・・親父に食らわすまでは、やめる訳にはいかない」

「いい覚悟だ。だが、今のままでは何度やっても同じ・・・ん？」

向こうの林の中からガサガサと音が聞こえたかと思うと、中から濃い緑髪の少年が現れた。見たところ、アイクと同年代のようだ。彼は、ボーレ。この傭兵団の少年戦士だ。

「おお、やってるやってる」

ボーレの姿を見て、ミストが聞く。

「あれ？ボーレ、どうしたの？」

「どうしたも何も。団長たちを呼びに出ってたお前が戻ってこねえから、副長が見て来いって」

ミストはすっかり自分の役目を忘れてたようだ・・・。

「あ・・・そうだった。ごめんごめん」

ボーレはそんなこと全く気にせずに、今度はアイクの方を見る。

「ま、団長にボコボコにされてるアイクを笑ってやろうかと思って

ただけど・・・意外と元気じゃねえか。つまんねえの」

「・・・悪かったな」

アイクはそうつぶやいたが、ミストが余計な一言を言う。

「一足遅かったね。ついさっきまで伸びてただけど」

「おいミスト！」

「えへへ、ごめんなさい」

そのやり取りがひと段落ついてから、グレイルはボーレに言う。

「ボーレ、ちょうどいいところに来た。お前がアイクの相手をしてやれ」

「え？おれがですか？」

グレイルは後ろに放つてあった大きなカバンから、木でできた訓練用の木斧を取り出す。

「ちょうど、この訓練用の斧も持ってきているんだ。それに、まずは腕の近いものと戦ってコツをつかんだ方がいいだろう」

その間、アイクはすっかり頭もはつきりしていた。横に転がっていた木刀を拾う。もう、平気だ。

「分かった。ボーレ、よろしく頼む」

「へっ、腕が近いつていうのは気に入わねえが、仕方ねえ。相手を
してやるぜ！」

お互い、離れた位置に向かい合って立つ。これが、グレイル傭兵団
式の訓練の作法だ。

ボーレが木斧を素振りして、声を上げた。

「さあ、どつからでもいいぜ。かかってこい！！」

「ああ。すぐそっちに行つてやる」

アイクは木刀を片手に、ボーレのもとに走っていく。ボーレは木斧
を体の前に構えてアイクの方を向いた。
ミストの声援が響く。

「お兄ちゃんががんばれ〜！ボーレなんかやつつけちゃえ〜！！」

「おいおい、『なんか』はねえだろ、『なんか』は・・・」

一方のアイクは、ボーレの前までようやくたどり着く。そして、体
を横に傾け、剣を相手の方に倒す特徴的な構え方をとる。

「いくぞ」

「おう！かかってこい！」

木刀を振りかざして、ボーレの体に打ち付ける。

ブウン！バシッ！！

「へへ・・・なかなかやるじゃねえか。けど、戦いはまだこれからだぜ！！」

ボーレはそう言うつと、肩に担いだ木斧をアイクめがけて振り下ろした。

ドカツ！！

「くっ・・・」

木斧が当たった左腕が、打撲で紫色に変色する。アイクはそのまま片膝をついた。

「おれの力も、中々なもんだろ？」

「・・・ああ。だが・・・」

ボーレが得意そうに言うのに対して、アイクは冷静に答える。

「俺は、負けない！」

何とアイクは、片膝をついた状態から、あり得ない反撃をして見せた。

木刀を片手で旋回させ、ボーレの脳天に叩きつける。

ヒュン、バシィン！！

「ぐあ！？」

そのままボーレは背後の草むらに吹っ飛び、倒れ込んだ。

グレイルは今の戦いの様子を見て、思った。

（・・・以前教えた戦い方を、確かに身に付けつつあるな。最も、まだまだが）

しばらくして、ボーレは草むらの中から起きあがった。

「や、やるじゃねえか・・・」

「ボーレ、かつこわるゝい！」

「るせえ！！」

ミストがやし立てたことに、ボーレは顔を赤くして怒る。そんな様子を見て、グレイルが声をかけた。

「ボーレ、ご苦労だった。もう戻っていいぞ」

「あ、はい。・・・おいミスト！待てこらゝ！！」

「キャハハハ、だって本当のことだもゝん」

ミストとボーレの鬼ごっこを横目で追ってから、グレイルはアイクに向き直る。

「・・・ボーレの油断があつたにしろ、今の動きはまずまずだった。それを覚えておくがいい」

「分かった」

そして、グレイルはまたバッグのところに行き、木刀を取り出す。

「さあ、次はまた俺が相手だ」

「ああ。望むところだ！」

アイクも再び木刀を構え直す。だが、グレイルは戦う前にもう一つ思い出したことがあった。

「・・・その前に・・・ミスト！」

鬼ごっこの結果、ミストはどうやら逃げ切ったようだ。ボーレはさっきの訓練での疲労もあり、息が上がっている。

グレイルに呼ばれて、ミストは何をすればいいのかすぐに理解したみたいだ。

「あ、はーい！お兄ちゃん、はい、きずぐすり。さっきの訓練で腕をぶつけたでしょ？お父さんと戦う前に、ちゃんと使ってたね？」

「ああ、分かった」

アイクが言われたとおりにきずぐすりを飲み込むのを見ながら、グレイルも一言言う。

「小さな怪我でも、余裕があるうちに治すよう心掛ける。ヤバいと思った時には手遅れだった・・・なんてことがないようにな」

さっきのボーレ戦と同じように、二人は離れた位置で向き合った。準備ができ、グレイルが叫ぶ。

「全力でかかってこい!!」

「・・・ああ」

再び、アイクは木刀片手に走り出す。そして、走る勢いそのままに、グレイルの体に打ちかかった。だが。

「・・・甘い!」

瞬時に木刀を特殊な構えで受け止めて、アイクの体に逆に打撃を与える。

ベシッ!

「ぐ・・・!」

「アイク、こちらからも行くぞ!」

グレイルはいきなり足払いを仕掛ける。予想できない動きに、アイクはそのまま地面に転がった。

型にはまらない我流の戦い。それが、傭兵の戦い方なのだ。

「ふんっ!」

転んだアイクめがけて、容赦のない一撃が襲いかかる。
それでも、アイクは冷静だった。

「・・・でやあああ!!」

アイクは渾身の力を込めて、木刀で目の前をなぎ払った。その結果
グレイルの一撃は逸れ、すぐ横の地面に木刀を叩きつけることとなる。

起きあがった後、アイクは体制が崩れたグレイルに向け、思い切り
木刀を叩きつけた。

「ぬん!!」

ドカアッ!!!

「む・・・」

そのままグレイルは倒れ込んだ。

「お兄ちゃん、すっごーい!!」

アイクがグレイルに勝ったのを見て、ミストは歓声を上げて飛びは
ねる。だが、アイクは静かに言った。

「・・・親父。本気じゃなかっただろう?」

「え、そうなの？」

するとグレイルは起き上がり、フツと笑いながら答えた。

「・・・それに気付けたなら、お前も少しは成長したということだ」

その話を聞いて、ボーレも言う。

「そうそう。おれも実は本気じゃなかった・・・」

「それはウソ」

「ちえっ」

再びあの二人は鬼ごっこを始めたようだ。仲がいいんだか悪いんだか。

アイクは真剣なまなざしになって、グレイルに話を切り出す。

「・・・じゃあ、俺ももう一人前だって認めてくれるかな？」

グレイルはアイクが言う言葉の意味をすぐ理解した。

「仕事に出る話か？」

グレイル傭兵団。

アイクの父親であるグレイルが立ち上げた、クリミア王国西部を拠

点とする傭兵団である。

団長であるグレイルを含め、現在団員は8人。皆、家族のように共に生活をし、強い団結心を持っている。その一方で、実力は様々だが、団員は皆個性豊かだ。

アイクはグレイルの息子ということもあり、将来いずれ団長の座を引き継ぐことになっている。

「・・・ボーレだつて危険な戦場に出ているんだ。俺もいい加減、見習いは卒業したい」

アイクの強い決意に、グレイルは少し考え込む。ボーレはまた調子に乗ってきた。

「そりゃあ、お前と違っておれは腕が立つからよ」

で、やはりミストが横やりを入れるのだった。

「さっきは負けたくせに」

「あれはたまたまだよ。た・ま・た・ま」

しばらく考え込んでいたグレイルは、ようやく顔を上げて答える。

「そうだな・・・まあいいだろう。お前も明日から傭兵団に参加しろ」

「本当か!？」

まさかこんなにすぐに許可されるとは思っていなかっただけに、アイクは驚いた。

「ただし、無理だと思ったら、すぐに訓練に逆戻りさせるからな。せいぜい頑張ることだ」

「大丈夫だ。すぐ・・・みんなに追いついて見せる」

アイクの決意は、固かった。その様子が、グレイルの目には好ましく映った。

「どうだかな。さあ、そろそろ砦に戻るぞ。みんなが待っている」

帰り道の道中も、みんなと食事をとっている時も、アイクは明日からのことで落ち着いていられなかった。

どんな日常が、待っているのだろうか・・・。

序章　く傭兵く（後書き）

今回は「1章：初陣」です。実戦がようやく入ってきますよー！

FE蒼炎の軌跡、および暁の女神は、どうしても話が多いため、このようにとても長くなってしまうのです><;　これから先、もしかしたら話の部分を削ったり2部構成にしたりするかもしれません
が、どうかご理解ください。

1章 く初陣く（前書き）

グレイル傭兵団の団長であるグレイルの息子、アイクは、父の背中に憧れる。見習いの傭兵である。

彼は幼いころから、傭兵として生き延びるための知恵や力をグレイルによって体に叩き込まれてきた。傭兵団の次期団長の座を、いずれ継ぐことになるからだ。

そして、ついに彼はグレイルによって、傭兵として実際に戦場に出て戦うことを許されたのだった。

1章 初陣

傭兵団の砦

昨晚から興奮していたせいで、アイクはあまり夜眠ることができなかった。だが、いつの間にか眠ってしまったらしい。目が覚めたら、もうすでに外は明るくなっていた。アイクは起き上がった。

服を着替え、皮鎧を着込む。グレイルから18歳の誕生日祝いにもらった赤いマントを手に取り、羽織って肩に留める。最後に緑のハチマキを頭に巻く。これで、準備は完了だ。

自室のすぐ横にある階段で1階に降り、廊下を進んでいく。その先にある食堂には、グレイルと、副団長のティアマトが何か話合っていた。

「おはようアイク。今日からあなたも、私たちの仲間入りね」

赤くて長い髪が目印の女性、ティアマトが、アイクにあいさつをする。

彼女は傭兵団の副団長で、長い間グレイルの補佐をしてきたのだ。

「ああ。よろしく頼む」

すると、グレイルが厳しい顔をして、アイクをとがめた。

「遅いぞ。他のやつはもうとっくに準備を始めている」

やはり、起きるのが遅かったようだ。もっと早く寝ればよかったと、アイクは少し後悔した。

「すまない。次からは気を付ける。・・・それで？俺の任務は・・・」

アイクは謝り、任務について聞こうとした。だが、またしてもグレイルは厳しい反応をした。

「ティアマトからの報告が途中だ。ちょっとそこで待っている」

「分かった」

アイクは仕方なく話が終わるのを待つことにした。

ティアマトは再びグレイルの方を向き、報告を続ける。

「では、グレイル団長。依頼の話の続きですが・・・」

「確か、山賊退治のところだったな？」

「はい。すぐ近くのカリワ村からの依頼です。調べたところ、さほどの勢力ではなさそうですので、まず、私とオスカー、ボーレの兄弟で一当たりしてみようかと考えています」

ティアマトの報告を聞き終わると、グレイルはアイクの方を向いた。

「だったら、アイクもその任務に加えよう。前の二つの依頼は、俺とシノン、ガトリー組でそれぞれ片付ける」

ティアマトもその意見に賛成した。

「分かりました」

グレイルは壁に立てかけてあった巨大な戦斧を手に取り、背中に背負う。この斧はグレイル自身がずっと前に自ら鍛え上げたものらしい。不思議なことに刃こぼれしないのは、彼の手入れの賜物だろう。彼はという訳か、剣よりも斧で戦うのを好んでいる。

グレイルは戸口のところでティアマトを振り返る。

「ティアマト。アイクのことは、お前に任せる。基本から鍛えてやってくれ」

そして、グレイルは出発した。

「了解しました。・・・じゃあアイク、すぐに出発しましょう」

アイクはテーブルの上に置いてあった彼の分の朝食であるパンを口に入れ、決意を新たにうなづく。

「・・・よし、いよいよ初任務だ」

「ティアマト副長。準備、完了しました。副長の騎馬も連れてきましたよ」

二人が戸口を開けると、緑の鎧をまとい鉄の槍を手にした、髪の色まで緑の青年が、2頭の馬を引き連れながらやってきた。

糸目が特徴の彼の名前はオスカー。ボーレの兄で、物静かで冷静な性格だ。

ちなみに、アベルなどと同じくFEシリーズおなじみの、「緑の騎士」である。

「そう、助かるわ。いつもながら手際がいいわね」

ティアマトがオスカーにお礼を言っていると、彼の後ろから鉄の斧を担いだボーレもやってくる。

「おれも準備いいすよ」

「あら、ボーレ。あなたにしては珍しいわね」

ボーレはかなり嬉しそうに答える。

「へへっ当然ですよ。なんたっておれ、今日からセンパイなんすからな、アイク？」

やっぱり調子に乗ってるか・・・と思いつつも、確かに彼の言うことには間違いない。仕方なくアイクは、

「まあ、・・・一応な・・・」

と答えておいた。

オスカーが、馬にくくりつけておいた袋の中から、鞘の中に入っている鉄の剣を取り出してアイクに渡す。

「アイク、団長から預かってたんだけど、これが君の武器だ。……
いよいよ初陣だね。緊張してるかい？」

鉄の剣を受け取って腰に鞘を留めながら、アイクは答える。

「そうだな……昨日の晩の方が緊張してたな。今はわりと、落ち着
いたと思うが……」

だが、今も少しは緊張している。オスカーはそれを見抜いたみたい
だ。

「少し、肩の力を抜くといい。私たちも一緒なんだし」

「ああ、そうだな」

ティアマトがアイク達3人に声をかける。彼女はすでにオスカーが
引き連れてきた白馬の方の馬にまたがり、背中には鉄と鋼、2種類
の斧が背負われていた。

「さ、みんな。そろそろ出発するわよ」

彼らは、目的地のカリワ村へ向けて、出発した。

砦の中にいたアイクの妹のミストと、オスカーとボーレの弟のヨフ
アが、4人に向けて声を上げる。

「お兄ちゃん！頑張ってきてねー！！」

「オスカー兄ちゃん、ボーレ、無事に帰ってきてね！」

オスカーは馬の上からちらっとヨファの方を向き、返事をする。

「ヨファ、いい子で待っていてくれよ」

ボーレはヨファの方を振り向き、両手を振って答えた。

「任せとけて！大活躍してやるからな！」

アイクはミストを見て、軽く返事をする。

「・・・ああ」

くカリワ村く

村の入り口にたどり着いた一行は、林に隠れて様子をうかがっていた。村の中にはやはり山賊が数人、うろついているようだった。カリワ村はちゃんと領主もいるが、小さな村ゆえに大した自衛能力は持たない。そのせいで、山賊に目を付けられたという訳だ。領主館の目の前には、この山賊団の幹部が陣取っているらしい。

「ここがカリワ村。敵の数は大したことないけど・・・油断は禁物よ」

ティアマトがカリワ村の見取り図を広げて、村の北にある領主館を指差す。

「この領主館の入り口を抑えているのが、この山賊団の幹部である『ザワナー』という男。彼を倒して領主館を奪還し、村の平和を取り戻しましょう」

次にボーレが、アイクに話しかけてきた。

「アイク！よく聞けよ？センパイのおれから、ありがた〜い忠告だ。一人でいきがって前に出たりはしねえことだ。必ず痛い目を見る」

・・・何だか、以前そうやって痛い目に遭ったことがあるみたいなセリフだな。そう思いながらも、アイクはその忠告を頭に刻み込んだ。

オスカーも、アイクに注意を呼び掛けた。

「アイク、無理はしなくていい。危ない時は、いつでも私たちを頼ってくれ。敵の動きをよく見れば大丈夫。最初は、勉強するくらいの気持ちでね」

「ああ。オスカー、ボーレ、よろしく頼む」

アイクの緊張は、いつしか消えていた。オスカーはやんわりと、ボーレは明るくアイクに答える。

「こちらこそ」

「ま、おれの戦いぶりを見てろって！」

すると、その時だ。村の入口の近くにいた山賊の一人が、一行が隠れていたのを見つけて声を上げた。

「ああ？なんかあやしいやつらがいるぜ。おい野郎ども、かかれー！！」

ティアマトがその声を聞き、3人に注意を呼び掛ける。

「気を引き締めて！どうやら敵が気付いたわ！」

（一人でいきがって前に出ると、痛い目を見ることになる・・・）

さっきのボーレの言葉を思い出し、アイクは山賊たちの中心には飛びこまずに少し手前で足を止めた。

「なんだ？てめえら、村の連中が雇ったっていう傭兵だな？来ないんだったら、こっちから行かせてもらうぜえ！！」

剣を持った山賊Aが、アイクの方へ向かってくる。

「覚悟しやがれ！！」

剣を振りかざして、アイクに向けて斬りかかってきた。だが。

ガキンツ！！

アイクは鉄の剣で山賊Aの剣を受け止める。鉄同士がぶつかり合い、火花が散った。

「ダァッ！！」

バシュ！

そのまま、山賊Aの胴を斬り裂く。膝を付いた山賊Aのもとに、オスカーが鉄の槍を突き出した。

「とどめだ」

ズンッ！

「ぐ・・・ちくしょう・・・」

ボーレは民家の裏の茂みで、斧を持つ山賊Bと戦いをしていた。

「おらおらーかかって来やがれ！！」

「くそ、傭兵どもめ、死ね！」

山賊Bの斧の一撃は、ボーレに命中してしまう。

「チッ、だが、おれの方が力は上だぜ！！」

ブウン、ズシャアア！！

ボーレは力任せに斧を2回振り回し、山賊Bを倒す。

「お、覚えていやがれ・・・」

そのころティアマトは、村の入り口にある民家を訪れていた。その民家には、領主館を追われたこのカリワ村の領主が避難していた。

「おお、傭兵団の人たちか。よく来て下された。話は聞いておりますぞ」

「あなたが、依頼を下さった領主様ですね？」

ティアマトが聞くと、領主は困ったような顔をして答える。

「全く・・・山賊どもには本当に困っておるのだ。どうか、やつらの討伐をお願いしますぞ。この鋼の剣をぜひ受け取って下され。わしには使えぬが、あんたらのお役には立つじやろって」

「立派な剣を、ありがとうございます。この村の平和を取りもどすことを、お約束いたします・・・」

と、その時だ。村の一角で火の手が上がったのは。

「村のやつらめ・・・傭兵団を雇っておれたちを追っ払おうったってそうはいかねえぞ。見せしめに家をつぶしてやる！！」

山賊の一人（山賊C）が、一つの民家に向かっていった。

山賊Cはその民家に向けて、火のついたたいまつを投げ込む。たいまつのはらはまたたく間に建材に燃え移り、火災が発生した。黒煙が上がり、近くの谷からの風を受けて、炎が燃え上がる。まるで無数の赤い舌が、空を舐めるかのように。

「ぎゃははははは！全部燃えちまえー！！」

その様子を見て、向かいの民家から住民が避難してきた。

オスカーは即座にアイクとボーレに指示を出す。

「アイク！君は民家に火を付けた山賊を見つけて倒してくれ！ボーレは避難民の安全確保を！私は、副長に更なる指示を仰いでくる。みんな、気を付けて行動してくれ！」

「ああ、分かった！」

「オスカー兄貴、合点だぜ！！」

ボーレは避難をしている村人の誘導を始めた。

「村の入り口の方に向かってくれ！そっちはあまり風がこねえし、山賊たちも残ってねえから！」

こういう時は、ボーレの明るくて人懐っこい性格がとても役に立つ。あまりに突然の火災に茫然自失していた村人たちも、少しは落ち着きを取り戻していた。

だが、そこに山賊Dが現れる。

「へへへ・・・お前ら傭兵どものせいでおれたたちの格好の獲物を逃がすなんてことはしたくねえんだ。悪いが、死んでもらうぜ！！」

「くそう！何でこんな時に・・・！」

ボーレは仕方なく斧を構える。山賊Dの、斧による強烈な一撃が襲いかかってきた。

ブン！

間一髪でボーレは斧をかわす。そして、山賊Dの背後をとることに成功した。

「食らええええ！！」

大きく斧を振りかぶり、一気に背後から山賊Dめがけて斧で斬りつける。そのあまりに強い衝撃で、山賊Dの体は、ボーレが使っていた鉄の斧とともに真つ二つになった。

「・・・ふう・・・」

手元に残った斧の柄を見て、ため息をつく。買ったばかりの斧だったのにな。

でも、どうやら村人の安全を守ることが出来たみたいだ。それが何よりよかった。

村人の中から、一人の女性が進み出る。

「危ないところを助けていただき、ありがとうございます」

「あ、いいや、おれたちは当然のことをしただけっすから」

ボーレは慣れていない謙遜をするが、女性は本当に感謝している。

「いいえ、本当に、お礼をしたいです」

女性は手に持っていた薄い衣のようなものをボーレに差し出しながら、続けた。

「これは『天使の衣』というもので、母の形見なんです。使うと体力が増えるという珍しいものなので、あなたがたの役に立てばいいのですが・・・」

「え！？そんなに大事なものをいいんすか！？」

「はい。あなたがたに持って行つて頂きたいです。・・・どうか、平和な村を取りもどしてください！」

仕方なく、ボーレはそれを受け取った。

「分かった。必ず、この村を平和にして見せますよ！」

一方アイクは、炎上した民家のすぐ裏手に来ていた。

「この民家に火を付けたのは、あんただな？」

目の前にいるのは、鉄の斧を担いだ山賊。さっき民家に火を投げ込んだ張本人である。

「その通りだ。だが、だったらどうだつてことだ？」

山賊Cは全く悪びれる様子はない。アイクはそのことに、頭にきた。

「・・・こいつ!」

鉄の剣を水平に構え、力をためる。そして。

「居合斬り!!」

一気に目にもとまらぬ速さで間合いを詰め、山賊Cを思い切り斬り飛ばした。

草むらの中に転がった山賊Cは、もう動かない。

その時、炎上する民家の中から子供の泣き声が聞こえた気がした。

「中に子供が・・・!?」

アイクは迷わなかった。一気に炎の中に飛び込んでいく。

とんでもなく熱かった。こうしているだけで体が溶けてしまいそうなほどに。降りかかる火の粉が体に燃え移るのを防ぎつつ、アイクは炎の中を走って行く。

奥の部屋に、うずくまって泣いている子供を見つける。

「うえーん・・・あついよう・・・あついよ・・・」

「しっかりしろ、もう、大丈夫だからな」

背中に背負い、再び来た道に戻ろうとする。しかし・・・。

ドスウン！！

天井が崩壊して、逃げ道を塞がれてしまった。

「しまった・・・！」

ティアマト、オスカー、ボーレの3人は、残った敵を倒しつつ炎上する民家を目指した。

「さっき、中にアイクが入って行くのを見ました！」

オスカーがそういったのを聞いて、ボーレがオスカーにつかみかかる。

「おい兄貴・・・ちょっと待てよ！何で止めなかったんだよ！あんな中に入っちゃったら、冗談抜きで焼け死ぬぜ！？」

「い、いや、ボーレ落ち着け・・・止める間もなく、中に飛び込んで行ったんだよ」

と、そこへ敵の首領である山賊団の幹部、ザワナーがやってきた。

「へっへっへ・・・てめえら、よくもおれの部下たちをやってくれたな。やられる準備は、出来ているだろうな？」

ティアマトは冷静な判断を下す。

「・・・ザワナーは私とオスカーが相手をするわ。ボーレ、あなたはアイクを探して、助けてきてちょうだい！絶対に彼を失う訳にはいかないの！！」

「分かりました！アイクのやつを連れてきますね！！」

ボーレは民家に走っていく。

ティアマトとオスカーは、ザワナーに向き直った。

「へへへ・・・おもしれえ。相手になってやるぜ！」

ザワナーはオスカーめがけて斧を振り上げながら突っ込んでいった。オスカーは槍を構え、迎撃態勢をとる。

ブンっ！

ザワナーが振り下ろす斧は、オスカーの鎧に思い切り当たる。鎧の上からも結構な痛みが来た。おそらく、怪我をしただろう。

「く・・・これを食らうがいい！」

オスカーは槍を振り回してザワナーに叩きつける。だが、彼の攻撃は空を切った。

「くそ・・・やはり斧が相手では相性が悪いか・・・。ティアマト副長、交代お願いします！」

「分かったわ、任せてちょうだい！」

ティアマトは鉄の斧を構えて一気に馬を走らせ、ザワナーに突き進む。そして、彼の目の前で目にもとまらぬ素早い攻撃を繰り返す。

「ハアアアーツ！！！」

ドカツ！！バシュツ！！！！

「ぐわあっ！お、おれさまともあろうものが、こんなところで・・・」

ザワナーは、倒れた。

アイクは必死に脱出方法を考えていた。だが、すさまじい熱と無数の火の粉、黒煙のせいで、まともなものを考えることは出来ない。

「おにいちゃん・・・あついよう・・・」

「もう少しだから大丈夫だ！絶対に助けて見せる！！」

だが、炎はもうすぐそこに迫ってきていた。もはや万策尽きたかに見える。その時。

「おーい！アイク！聞こえるかー！！」

ボーレの声が、壁の向こうから聞こえてきた。すぐにアイクは返事を返す。

「ああ、聞こえるぞ！子供がいるんだが、逃げ道がふさがれて出ら

れない！」

すると、ボーレが答える。

「そうか・・・だったらこの壁をぶち壊すから、そこをどいていてくれ！もう少しだから、頑張れよ！！」

一体どうするつもりだろう・・・とその時、壁から「ズシーンズシーン」という音が響いてきた。体当たりをしているみたいだ。

音が何度も響いた後、唐突に壁が崩れた。奥には外の様子が見える。

「ボーレ、助かった！よし、脱出する！」

「おう！何とか、間に合ったみてえだな・・・」

アイクが子供を背負って民家から飛び出したその瞬間、民家が大きな音を立てて崩れ落ちた・・・。

「おにいちゃんたち、ありがとう！！」

子供は軽いやけどをしたが、元気に助かったみたいだ。本当によかった。

彼を助けたアイクも、大きな怪我はしていなかった。奇跡のようである。

ティアマトが3人の方を向き、声をかける。

「これで終わったようね。アイク、大丈夫？」

「ああ、問題ない」

ティアマトはすすまみれのアイクの様子を見て、感慨深そうに言う。

「それにしても、驚いたわ。アイクがこんなに成長していたなんて」

「親父に比べたら、まだただけだな」

昨日の訓練の様子を思い出しながら、アイクは答えた。

「それは仕方ないわ。だって、グレイル団長は・・・」

そこまで言っ、ティアマトは口を閉じる。

「？ 親父が、どうしたんだ？」

「いえ、何でもないわ」

ティアマトはグレイルの何かを知っているみたいである。

「そう言われると、余計に気になる」

だが、彼女は答えなかった。

「いずれ、分かる日が来るわ・・・」

「よ、アイク！初めての实战にしちゃ、まずまずだったぜ。ま、おれの方がもっと目立ってたけどな！」

すぐ調子に乗るのが、ボーレの悪いところだ。オスカーがボーレにツッコミを入れる。

「確かに目立ちはしたな。張り切りすぎて武器を壊せば、いやでも目につく」

「兄貴っ！くそっ、余計なこと言っなって!!」

「とにかく、アイク。初任務成功おめでとう。仲間として歓迎するよ」

「ああ、俺もうまく行けてよかった。あの子供も、助けることができたしな」

ティアマトが、全員の顔を見渡す。

「全員無事ね？では、帰還しましょう。ミスト達が、おいしい夕食を作って待ってくれているはずよ」

こうして、アイクの初陣は無事に終了した。

ミストが作った夕食はあまり上手ではないが、それでもこの日の食

卓は、明るい笑顔で満ち溢れた。

1章 く初陣く（後書き）

しょっぱなからオリジナル要素を入れて行きました
アイクの活躍、いかがだったでしょう？

実際には、炎上した民家から子供を救いだすイベントはないのですが、アイデアとして思いついたので入れてみました。

次回は「2章：救出」です！お楽しみに！

2章 〽救出〽（前書き）

アイクの初陣となったカリワ村での山賊との戦いは、無事に勝利に終わった。

山賊の討伐だけでなく、火災から子供を救ったエピソードをティアマトから聞かされたグレイルは、確かに息子の成長を感じていた。

（いつか、立派な戦士になれるぞ・・・）

それから4日後の出来事である。

2章 〱救出〱

〱傭兵団の砦〱

砦の敷地内の隅、納屋の前を、一人の青年が歩いていた。白い衣装に薄い橙の髪、人のよさそうな顔が、聖職者を思わせる。ただ、その顔色はあまりよくはなく、病弱そうな雰囲気醸し出していた。

手には手紙を持ち、辺りをきょろきょろと見回しながら彼は歩きまわっている。人を探しているようだ。と、ちょうど目的の人物を見つけたようだ。

「あ、ティアマトさん。こちらにいらしたんですね？」

ティアマトは厩舎で馬の世話をしていた。彼女の騎馬である白馬の体を拭きながら、声がした方を見る。すぐにティアマトは目を丸くした。

「・・・キルロイ！起きだしたりして、大丈夫なの？」

手紙を持ってティアマトを探していた青年の名はキルロイ。この傭兵団の一員で、杖を使った回復魔法で味方を援護する神官だ。見た目通り、心優しい性格だ。

ただ、病弱なこともあってここ1週間ほど高熱を出して、ずっと寝込んでいた。そんな彼が起きあがっていたのを見て、ティアマトは心配になって聞く。

「はい。もう熱は下がりました」

だが、どうにもまだ顔色が悪いのはティアマトでも分かる。

「本当に？何だかまだ顔色悪いわよ？それに、ふらふらして見えるけど・・・」

「それは・・・何しろ1週間も横になっていたので。きっと、そのせいです」

キルロイはそう言ったが、それでも不安はぬぐえない。

「だったらいいけど・・・。どちらにしても、本調子になるまで任務には加えないわよ。だって私達傭兵は・・・」

「『少しの油断が、死を招く』でしょう？分かってます。みなさんには申し訳ないですが、あと少しだけ、療養させていただきます」

キルロイはティアマトの口ぐせをすっかり覚えていた。それを聞いて安心したティアマトは、首を縦に振った。

「ん、よろしい。しっかり治して、完全復帰してちょうだい。キルロイは、うちで唯一の杖使い・・・厳しい任務ほど、あなたを頼りにしてるのよ」

「・・・ありがとうございます」

そこでティアマトは、キルロイが持っている手紙に目をやった。

「ね、ところで・・・さっきから手に持っているそれ、手紙じゃない

いの？私、午後から街に出かける予定だから、ついででよかったら届けるけど？」

「あ、いえ。これはティアマトさん宛なんです。それでさっきから探してたんです」

「私に？」

キルロイは先ほど、起き上がって気分転換に砦の周りの林の中を散歩していたのだった。その時、この手紙を渡されたらしい。

「先ほど近くを散歩していた時なんですけど・・・見知らぬ男性から『赤毛の聖騎士様に、渡してほしい』と頼まれました」

そう言いながら、手紙を彼女に渡す。

「一体何かしら・・・」

ティアマトは封を切って便せんを取り出した。そして、中身を読みます。

「お礼状とかじゃないですか？」

「・・・っ！・・・よくも、こんな・・・！！」

読み始めてしばらくして、ティアマトは顔に怒りをあらわにしながら

ら、手紙から目を離した。キルロイは驚いた。

「ティアマトさん？ど、どうしたんですか？何か悪い知らせが・・・

」

ティアマトはそれには答えず、手紙をキルロイに突き返す。

「・・・キルロイ！オスカーにこの手紙を渡して、戦闘準備をして待機しておくよう伝えて！私は少し、出掛けてくるわ」

そう言うと、彼女はさっき世話をしていた白馬の背中に鞍を置く。

「え、あ、ティアマトさん？」

あまりに突然のこと過ぎて訳が分からないキルロイにはわき目も振らず、ティアマトは白馬に飛び乗る。

「すぐに戻るから！頼んだわよ！」

そして、手綱をとって駆け出してしまふ。あっという間に、彼女の姿は門の向こうに消えた。

あとに残されたキルロイは、突き返された手紙を見る。

「この手紙に、一体何が・・・」

「み、みんな！大変だ！」

手紙の内容を読んだキルロイは、大慌てで砦の戸口を開けて駆け込む。あまり体が丈夫ではないため走るのは苦手だが、それでも彼は必死だった。

食堂で雑談をしていた留守番組のメンバーは、キルロイの姿を認めて雑談をやめる。

（この時グレイルとあと二人の実力の高い団員は、ちょうど外出していた）

「お、キルロイ。体の方は、もういいのか？」

ボーレは久々にみるキルロイに、体の心配をする。

「え、うん・・・つて、それどころじゃなくて！」

もちろん体は平気だが、今はそんな問題じゃない。手紙の内容を伝えないと！

オスカーとアイクが、不安になって聞く。

「どうしたんだ、そんなに慌てて？」

「何かあったのか？」

ようやく息が落ち着いてきたキルロイは、堰を切ったかのように話した。

「ミストとヨファが・・・さ、山賊団にさらわれたんだ！！」

「はあっ!?!」

ボーレが思い切り聞き返す。

「どういうことだ？」

アイクも突然のことで驚く。

「二人は朝早くから、野草摘みに出掛けているはずだが・・・確かに、まだ戻ってないな」

オスカーが冷静に壁にかかった時計を見ると、もうすでに時刻は昼前となっていた。

「さつき、門のところで・・・ティアマトさん宛の手紙を預かったんだけど・・・それが、山賊団からのもので・・・。ど、どうしよう？」

キルロイはかなり慌てている。このメンバーの中で最も年上であるオスカーが、そんなキルロイに手紙を指差して言う。

「見せてくれ」

オスカーは手紙を読みだした。確かに、二人をさらった旨の内容が書かれている。

キルロイは真剣に落ち込んでしまった。

「・・・悪い人には見えなかったのに・・・」

そんな一言を聞いて、アイクはちよつと思つた。

（おいおい、仮にも相手は山賊だろ？そんなに人がよさそうな顔の

山賊だったのか？先日戦った連中も、『いかにも悪人』って感じの顔ばっかだったのだが・・・」

手紙を読み切ったオスカーが顔を上げる。

「・・・なるほど。先日のカリワ村の時の報復ということか。それにしても、子供を誘拐するとは・・・なんて卑怯な！」

珍しくオスカーが激情をあらわにする。手紙をビリビリに破り、机に叩きつけて丸め、そのままゴミ箱に放り投げた。ゴミ箱まで結構な距離があつたが、手紙は見事に3ポイントシュートが決まる。

「くそっ！」

アイクは傍らに置いてあつた鉄の剣をとり、突然戸口に向かいだした。ボーレが慌てて聞く。

「！ アイク！？ おまえ、どこ行くんだよ！？」

戸を開けながら、アイクは振り返って答えた。

「ミスト達を助ける！」

それを聞いてキルロイは、ティアマトから言われたことを思い出した。

「あ、でも！ティアマトさんは・・・すぐに戻るから、みんなは戦闘準備をして待ってて・・・」

だがアイクはそんなこと聞かない。

「そんなこと言ってる場合か！？俺は行く！！」

そう叫んで、アイクは飛び出して行ってしまった。

そんな様子を見て、ボーレも立ちあがる。

「新米のおまえ一人が行ってなにがきんだよ！？待てよ、おれも行くぜ！！」

ボーレも飛び出していったのを見て、キルロイも立ちあがった。

「待ってくれ、二人とも！！！！ぼ、僕も行くよ！！」

最後に残ったオスカー……。

「おい、みんな、ちょっと待て……！まったく、副長の命令を何だと思ってるんだ」

そう言いつつも、彼もみんなを放っておくことができずに後を追いかけることにした。槍を手に、厩舎へ向かう。

アイクとボーレは、道が二手に分かれている場所までやってきた。ボーレが、アイクに聞く。

「道がふたまただな……。で、どっちに行けばいいんだよ？」

「俺が知る訳ないだろう？」

何とアイクは、道も知らずに飛び出してきたみたいだ……。
ボーレが頭を抱える。

「おまえ、もしかして知らねえで飛び出したのか！？　……だー
！　もあつー！　いきおいだけで行動すんなよ、このバカ野郎っ！
」

「……なんだとー！！」

アイクは頭に血が上ってボーレにつかみかかる。

「やんのか、こらっ！」

ボーレもアイクをつかむ。こぶしを固めて、アイクを殴ろうとした、
その時。

「ふ、二人とも、今は争っている場合では……」

「……そんなことだろうと思ったよ」

オスカーが、キルロイを馬に乘せてやってきた。ボーレがそれを見て、
アイクから手を離す。

「なんだよ。結局、オスカー兄貴たちもきたのか。命令違反なんて、
おりこうさんの二人らしくねえな。一体どんな風の吹きまわし……
」

ふてくされた様子のボーレに構わず、アイクは今度は、オスカーに

つかみかかった。

「オスカーなら知ってるよな!? どっちだ!?!」

アイクにゆすられながら、オスカーは答える。

「・・・山賊団の根城なら、左の道だ」

「分かった!」

すぐにオスカーを解放すると、アイクは一目散に左の道へ突っ走っていく。その様子を見て、ボーレは呆れながら言う。

「おれがしゃべってる途中だろ。最後まで聞け・・・」

だが、そんなボーレを無視して、キルロイが提案する。

「オスカー、僕たちも行きましょう!」

「仕方ないな」

再びオスカーはキルロイとともに馬に乗り込み、左の道へ駆け出した。

最後に残ったボーレ・・・。

「・・・っておい! おれを置いていくんじゃない!」

「山賊団のアジト」

山賊団のアジトは、小高い丘にあった。周りは茂みや林でおおわれ
ており、山賊たちが身を隠しやすいようになっている。丘の上には
小屋が建てられている。そこが、本拠地のようだ。

丘の斜面にある大岩の上に、人相の悪い、いかにも悪人面の男が立
っていた。よく砥がれた鋼の斧を背負い、たどり着いたアイク達を
睥睨する。

「よく来たなあ、おまえたち！」

アイクはたった今馬から降りたキルロイに聞きたいことがあった。

「なあキルロイ。あいつが、あんたに手紙を渡したってやつか？」

「うん。・・・いい人そうだったのに、まさか山賊団の頭だったな
んて・・・」

どうやら、本気でいい人に見えているらしい。

（なんだかな・・・どっからどう見ても悪人にしか見えないのは、
俺だけ・・・じゃないよな？）

山賊の頭はそんなことは全く気にせずに、だみ声で話します。

「それだけの人数でここに来るとは、おれら『イカナウ山賊団』も
ずいぶんと、舐められたもんだ。・・・ザワナーのやつを倒した、

あのクソ生意気な赤毛女はどうしたあ!？」

アイクは答える。

「ティアマトはいない。俺たちだけだ。それより、ミストとヨファは無事かつ!？」

すると、イカナウというらしい山賊の頭は、妙に親切に答える。

「ああもちろんだ。あっちの小屋ん中で、おとなしくしてもらってるぜ。こちら、あのガキどもには恨みはねえ。おれらの狙いはあくまでも、赤毛女とその手下の・・・おまえたちだ」

ボーレがイカナウのすぐ真下まで進み出て、声を上げる。

「だったら、さっさと解放しろっ!おれたちが来たんだから、もう用済みだろ!？」

だが、イカナウは首を縦には振らなかった。相当、ティアマトに恨みを持っているようだ。

もしかしたら、カリワ村を襲っていた連中の首領のザワナーは、彼の片腕クラスの男だったのかもしれない。

「赤毛女がまだだ。あいつがくるまで、預かっとくぜ」

「・・・くそっ!」

イカナウは辺りを見渡し、鋼の斧を素振りして叫んだ。

「とりあえず、おまえたちだけでも先に始末しておくか。おい!で

てこいや、みんな!!」

その声が丘に響くと、あちこちの茂みやら林やら岩陰から、大量の山賊たちが姿を現した。

キルロイが、緊張した声を出す。

「す、すごい数だ・・・! でも・・・負ける訳にはいかない!」

オスカーがそんな様子のキルロイに言う。

「キルロイ、君は下がって! 負傷者が出たら、杖で治療を頼む!」

「わかった!」

イカナウが岩の上から、山賊たちに檄を飛ばす。

「かかれ、野郎ども! あの女騎士がいなけりや、こいつらはただの雑魚だ!!」

オオーーーーッ!!

一斉に山賊たちが雄たけびを上げ、丘を駆け下りてきた。ボーレとアイクが、それに答える。

「なんと、こら!!」

「そのセリフ、後悔させてやる!!」

オスカーはすぐ近くにある岩場に向けて、馬を走らせた。3人の剣士が、鉄の剣を振りかざしてオスカーに襲いかかる。

「おらおら！歯あ食いしばりやがれ！！」

だが、3人の攻撃はむなしく、全て槍で防がれる。

「こちらからも行かせてもらおう！」

ヒュンヒュンヒュン・・・ ドカツ！！ ズン！！ ブシャア！！

「な・・・なんて強さだ・・・」

槍を華麗に振り回し、オスカーは難なく剣士3人を屈伏させた。

アイクは茂みに紛れて、前方からやってくる鉄の斧を持った戦士たちの迎撃に当たる。

「ガハハ！ イカナウ山賊団の恐ろしさを、教えてやるよ！！」

しかし、戦士たちの斧は全く当たらない。

（斧を持つ相手には、剣が有効・・・さらに茂みに隠れることで、戦闘面でより有利になる・・・）

アイクはグレイルから教わった方法で戦った。すると本当に見事なまでに、攻撃が当たらなくなる。確かに相手が斧だと、戦いやすい

のだ。

「・・・イカナウ山賊団の恐ろしさは、この程度なのか？」

「な、何だと・・・！」

「隙がありすぎだ！・・・ぬうん!!」

ザシャアア!!

大きく鉄の剣を振りかぶって、目の前の戦士を叩き割る。

「よし、おれもいっちゃってやるぜー!!」

ボーレも背中に手を回し、斧を取り出そうとした。だが・・・？

「・・・ん？・・・な、ない・・・？」

何ということだ！ボーレは武器を持つてくるのを・・・。

「し、しまった！ 確か先日の任務でおれ、斧ぶっ壊しちゃったんだっけ・・・どうしょ・・・」

するとアイクが振り返り、ボーレを呼ぶ。とりあえずボーレはアイクがいる茂みの方に歩いていった。

「ボーレ、この鉄の剣を貸してやるから、これで戦え。俺はカリワ村の領主からティアマトがもらったこの鋼の剣があるから」

「はあ！？・・・おいおい、冗談だろ？　だいたいおれは斧専門だぜ？　剣の扱いなんかこれっぽっちも・・・」

ボーレは突然「剣で戦え」などとアイクに言われ、困惑する。

「それでも、何もないよりはあったほうがいいだろ？　それに、敵は斧を持った敵が多い。剣の方が断然有利だと思うぞ」

「あのなあ・・・仕方ねえな全く・・・」

とりあえず、鉄の剣を受け取るボーレ。柄を握った感覚が、ものすごくなじまない・・・。

だが、山賊たちは構わずに襲い掛かってくる。

「傭兵どもめ・・・カリワ村で散った仲間たちの恨みだ、死ねえ！！」

鉄の斧を振りかざした山賊が、ボーレに狙いを定めて斧を振り降ろす。

「く、くそ・・・！」

ボーレは力任せに鉄の剣を振った。使い慣れた鉄の斧よりもはるかに軽い分、その一撃はとんでもない素早さとなる。だが。

ヒュン！　サッ！

「残念だったな。そんな甘い攻撃、当たんねえよ！」

ドカァ！！

「ぐわあー!!」

「ボーレ!!」

山賊はボーレの攻撃をかわし、逆に強烈な一撃をお見舞いする。

「死ねやー!!」

振り上げた斧が、ギリリと光る。ボーレは目をつぶった。だが、次の瞬間。

「はっえいっ!」

ヒュン! グサツ!!

「ギャアア・・・」

オスカーが間一髪鉄の槍を突き出し、山賊を倒した。

「あ、兄貴・・・すまねえ・・・」

「ボーレ、無茶はするな。キルロイに治してもらってこい」

「キルロイ、治療を頼む」

ボーレは後方で待機していたキルロイのもとへ行く。

「あ、はい。ただいま!・・・ライブ!!」

先端に赤い玉が取り付けられた杖でボーレの目の前で念じると、青白い光がボーレの体を包み込む。刹那、ボーレの傷はすっかり治っていた。

「へへ、サンキュー！」

「ボーレ、無理せずにね」

と、そこへ突然蹄鉄の音が響いてくる。音の方を向くと、ティアマトがこちらにやってくるのが見えた。

「待機している言っただけなのに・・・困ったものだわ。でも・・・グレイル傭兵団副長の名にかけて、これ以上、団員を傷つけることは許さないわ！」

ティアマトが到着して、ボーレは彼女のもとに走っていった。

「ティアマト副長！！勝手に飛び出して、すみませんでした！」

「その話は後。今は戦いに集中よ、ボーレ」

「あ、はい！」

そこでティアマトは、ボーレの手に持っている鉄の剣に目を付ける。

「あら？　ボーレ、何で剣で戦ってるの？」

「あゝそ、それはですね・・・」

ボーレが事情を話すと、ティアマトは馬にくくりつけた袋から、新品の鉄の斧を渡す。

「はい。さっき街に行つて、ついでに買つてきたの。・・・今度は、大事に使うようにしてね?」

「あ、ありがとうございます!!」

丘の上の小屋の中では、ミストとヨファが手足を縛られて閉じ込められていた。
オスカーとボーレの弟であるヨファは、さっきからずっと泣いている。

「う・・・ひつく・・・」

そんなヨファを、ミストは元気づける。

「しっかりして、ヨファ!男の子がそんなんで、どうするの」

「だって、怖いんだもん・・・。ミストちゃんは、平気、なの?」

正直、ミストも怖かった。でも、明るく答える。

「平気じゃないけど・・・けど、だいじょうぶ!ぜったい、お兄ちゃんが助けに来てくれるもん!」

それを聞いたヨファも、泣きやんだ。

「う、うん・・・そうだよね・・・！ぼくのおにいちゃんたちも、きつと来てくれるよね？」

「そうよ！だからなかなかいでがんばろう、ね？」

一方、小屋の外での戦いは、おおかた決着が付いていた。ティアマトが加勢してくれたのが、最も大きいだろう。

「へっへっへっ待つてたぜ。赤毛の姉ちゃん。てめえにや、たつぷりと痛い目を見てもらうぜ。村でやられた連中の分もな！」

ティアマトとイカナウが向き合う。

「・・・どんな理由があるにせよ、戦えない者を人質にとるなんて・・・人として、あつてはならないこと！あなたたちに、女神の恩恵は下されないわ！！」

ティアマトは騎馬を走らせてイカナウとの距離を詰める。そして、鉄の斧を素早く2回、馬上から振り下ろす。

バシユ！ザシユツ！！

「ぐ・・・てめえらなんかに、負けてらんねえぜ！」

イカナウが鋼の斧を振り下ろした場所には、もうティアマトはいない。代わりにアイクが、目の前に進み出る。

「・・・二人を返してもらおうか」

「へへ・・・いいぜ、連れてけよ。ただし・・・おれに勝てたらなああー!!」

鈍く輝く鋼の刃がアイクを襲う。アイクは、その動きをよく見て、凶刃をかくぐる。

「でやあー!!」

すれすれの距離で、鋼の剣の切っ先を突き立てる。刃は、見事にイカナウの体を一文字に斬り裂いた。

「バ、バカな・・・おれさまが・・・こんなやつらに・・・」

「よし!なんとかなったな」

鋼の剣の血を拭って鞘に収めつつ、アイクが言う。ボーレも相槌を打った。

「いや、なんつか、おれたち強えって」

しかし、ティアマトが怒って反応する。

「ボーレ、いいかげんにしなさい!」

4人の顔を見ながら、ティアマトは言った。

「あなたたちのした事は、明らかな命令違反よ。結果よしならいいという話ではないわ」

オスカー、キルロイが口々に謝る。

「副長、申し訳ありません」

「すみませんでした・・・」

「オスカー、キルロイ。あなたたちがついていながら・・・ふう。あなたたちの処分については、団長が戻られてからにします。とりあえず、ミスト達を探すのが先決ね」

アイクは、さつきイカナウが言っていた言葉を思い出す。

「さっきの山賊の口ぶりでは、向こうの小屋の中に・・・」

その時だ。その小屋の方から悲鳴が響いたのは。

「キャアーツ!!」

「ミスト!？」

小屋の前には、ミストとヨファがいた。手足が縛られたまま、生き残りの山賊に、斧を向けられて。

「は、放して！ 放してっば！」

ミストが必死に縄をほどこうとしている。だが、硬くてとても無理そう。アイクが駆けつけてきた。

「ミスト！！」

「お兄ちゃん！ みんな！ 来てくれたのね！？」

ヨファは泣きじゃくっている。

「ひい……く……怖いよお……」

オスカーが馬から降りて進み出る。

「ヨファ！」

「オスカー兄ちゃん！？ たすけてえ……」

ボーレも前に出た。

「ヨファ！ おれもいるぞ！」

「ボーレ……！ うえ……ひ……く……」

「泣くな！ すぐに助けてやっから！」

「そうだ！ しっかりするんだ！」

「……うん！」

アイクは斧を向けている山賊を、憤怒の目でにらんだ。

「貴様、二人に何かしてみろ！ 絶対に許さん！！」

山賊はパニックに陥っていた。

「うるせえ！ うるせえうるせえうるせえ！！！！ こいつらの命が惜しかったら、とつとと武器をこっちに放りやがれ！ ないと、この娘っコから順に……！！」

「キャッ！ いやーっ！！」

ミストに向けて山賊が斧を振り上げたのを見て、アイクは我慢できずにもう一步踏み出す。

「やめろっ！！！！」

しかし、それをティアマトが止めた。

「待つて！」

「！？」

「んん？」

ティアマトの突然の発言に、アイク、山賊双方が不思議そうにした。ティアマトは背中に背負った鉄と鋼の斧を取り出し、目の前に放り投げる。

「・・・武器を渡すわ、ほら」

「へ・・・へへっいい心がけだぜ、女あ！」

「副長・・・」

オスカーが残念そうに言うが、ティアマトは静かに返す。

「二人を助けるためよ。みんな従ってちょうだい」

「はい・・・」

オスカーは鉄の槍を、

「くそっ！」

アイクは鉄と鋼二本の剣を、

「ちくしょうっ！」

ポーレは鉄の斧を地面に放り投げた。

だが山賊は完全におかしくなっていた。

「へへへ・・・よし、これでおまえらは丸腰だ。つまり、おれが今このガキを仕留めるのを見ていることしかできねーってわけだあ
！！！！」

「何！？」

「ははははは！死ねえええ！！」

山賊がヨファめがけて、斧を振り降ろし・・・！！

「がつふっ・・・！？」

突然、山賊は倒れ込んだ。ヨファも。

「うーん・・・」

ミストが、心配する。

「ヨファ！？　しっかりして！」

ボーレが大急ぎでヨファのもとに駆けつける。

「ミ、ミスト！　ヨファは・・・」

「大丈夫、気絶してるだけ・・・。けがはないよ」

「ふう・・・びっくりさせんなよ・・・」

オスカーとキルロイがミストとヨファの縄をほどいている間、アイ

クは山賊の死体を調べた。

ちょうど眉間に、一発の矢が突き刺さっている。

「こいつ、死んでいるな？ この矢は一体誰が・・・？」

すると、聞き覚えのある声がそのアイクの問いに答えた。

「眉間に一発必中させる達人技！ オレさま以外にいねーだろうが
よお？」

「その声は・・・！」

すぐそばの茂みから二人の男が現れた。

赤紫の髪を後ろで縛り、緑の皮鎧を身に付けた、鋭い目をした方が、
シノン。ひねくれ者だが実力は確かな、傭兵団の狙撃の達人である。
弓の腕ではもちろん、作る方に関しても超一流の腕前を持っている。

ちなみに、ジョルジュやクレインなどと同じくFE恒例のイケメン
スナイパーである。

金髪を短く刈り込み、青くて重厚な甲冑に身を包んだ方はガトリー。
傭兵団の中で唯一の重歩兵で、戦いのときは前線に出て味方を守る
盾となる。シノンの舎弟で、よく一緒に行動することが多い。

ちなみに、ロジャーやサウルなどと同じくFE恒例のナンパ野郎で
ある。

「感謝しろよ、ガキ共」

シノンがそう言うてから、ガトリーはヒィヒィ言いながらついてきた。

「ひ・・・ひでえよ。副長もシノンさんも・・・。おれの鎧じゃ、そんなに速く、走れ、ねえってのに・・・」

「シノン、ガトリー！」

「じゃあ、ティアマトさんは・・・」

アイクとキルロイが口々に言うことに對し、ティアマトが答える。

「もちろん、街に出ていた二人を援軍に呼びに行ってたのよ。無駄にならなくてよかったわ。御苦労さま、二人とも」

シノンは満足そうに言う。

「ま、おいしいところをいただけたんだ。急いできた甲斐はあったさ」

ガトリーはどうにも納得できなさそうだ。

「お、おれは・・・しんどかった・・・だけ・・・なんすけど・・・」

「お兄ちゃん！」

縄が解かれたミストは、アイクの方に飛び込んできた。

「ミスト！ よくがんばったな。怖かっただろ？」

するとミストは、その言葉を少し肯定するが・・・。

「うん・・・ううん！」

すぐに否定した。

「だって信じてたもん。お兄ちゃんとみんなが、助けに来てくれるって。わたし、信じてたから！ だから、全然平気！」

「そうか・・・」

最後にティアマトが全員をまとめる。

「さあ、みんな！ 皆に帰還しましょう。まったく・・・大変な一日だったわね・・・」

丘の上から見る辺りの景色は、もう夕暮れ時だった。

（俺は、傭兵団の命令違反の行動をとった。もちろん、ミスト達を思ってたことだったが、どんな理由があるにせよ、違反は違反だ。

どんな罰が下るのか……。でも、ミストとヨファを助けることは出来た。先日、炎上する民家から、村の子供も救い出すことができた。……。俺のやったことに、後悔はしてない（

2章 〽救出〽（後書き）

予想以上に長くなってしまった><；

今回は、「3章：海賊討伐」です！今回戦いでは登場しなかったシン、ガトリーが活躍しますので、シン、ガトリーファンの方は
お楽しみに！

ちなみに、俺はシンファンです！！

3章 く海賊討伐く（前書き）

イカナウ山賊団との戦いの翌日、アイク達命令違反を犯した団員4人は、帰還した団長グレイルに食堂に呼び集められる。

4人ともお互いをかばい合って罰則を一人で受けようと主張したが、グレイルは厳しく全員10日間の謹慎処分を言い渡す。しかし、仕事の依頼が立て込んでいるということもあり、謹慎処分はひとまず保留となった。

傭兵団に立て込んでいた依頼は2つ。

片方は近くの小さな港町「タルマ」での海賊討伐任務。そして、もう片方はクリミア王国西方の都市「カタオール」の街で暗躍する、盗賊団の討伐任務だ。

ティアマト、シノン、ガトリー達が先日街に出かけていたのも、盗賊団の調査のためである。

グレイルとオスカー、ボーレ、キルロイは、カタオールの盗賊団の討伐に、ティアマトとアイク、シノン、ガトリーは、港町タルマの海賊討伐任務に、それぞれ二手に分かれることになった。

3章 く海賊討伐く

く港町タルマく

港町タルマは、クリミア王国北西に位置する小さな港町である。古くから漁業を主体とした一次産業を続けてきている。目の前に広がる海の眺めが美しいことで有名で、近年は観光分野にも力を伸ばし始めているらしい。港町の一角には、「街に近い・安い・サービスいい」で評判の、酒場を兼ね備えた宿屋もあつたりする。

だが、そんな美しい景観を遮るように、大きな帆船が港に停泊している。真つ黒い帆にはドクロマークが描かれ、船の上にも町の中にも、バンダナを身に付けた男たちがうろついていた。

海賊船である。

「あれが、海賊の船ですね？」

町にたどり着いたアイク達は、この町の町長に話をうかがっていた。ティアマトの質問に、老齢の町長は困り顔で答えた。

「そうじゃ。数日前からああして居座つて、嫌がらせを続けてるんじゃないよ。おまえさんたちの力で、何とかあいつらを追い払ってくれんかのお・・・」

「分かりました。全力をつくします」

「すまんのぉ・・・」

ティアマトが力強く答えたのを聞いて、町長は集会所に戻っていった。

シノンがその後ろ姿を流し目で見やり、つばを吐く。

「海賊退治なんざ、オレにかかっちゃ朝飯前だ。適当にやって、さつさと帰ろっぜ」

ガトリーもかなりやる気の様子で、ティアマトに進言する。

「副長！作戦は例のやつですかね？」

アイクはその『例のやつ』というものがよく分からなかったため、ガトリーに聞く。

「例のやつ？」

「ああ。おれが体張ってあの船のはしごを塞いでいる間に、シノンさんの弓で数を減らすんだ。そして、結構減ってきたら副長とアイクが船に乗り込み、残りを叩いて敵将を討ち取る！・・・ってわけ」

「なるほど」

ティアマトもその作戦を認めた。

「そうね、特に問題ないでしょう。・・・じゃあ、準備はいいわね？グレイル傭兵団、出撃よ！ー」

その掛け声に、シノン、ガトリー、アイクは応じて、町の中につるつく山賊たちに攻撃を開始する。

「ブヒヒヒ、腹減ったなあ・・・」

海賊船の船室の上に、赤いバンダナを身に付けた太った男がいた。丸い腹を手でさすりつつ、手斧を砥ぐ。

彼がこの海賊団のキャプテンである、ヒブツディという男だ。

・・・どうでもいいが、「FE 新・紋章の謎」の4章に出てきたマケドニア・バイキングのボス、「ガイル」と、ものすごく顔が似てる・・・。バンダナ付けてるし、海賊だし、太ってるし・・・。

その時、船室のドアが開き、中から桃色の髪をした少女が飛び出してきた。ヒブツディに向け、叫ぶ。

「わ、私をだましたのね!？」

するとヒブツディは手斧を砥ぐのを止め、少女の方を向いて笑う。

「ブヒヒヒ、だますってなあ、人聞きが悪いなあ。な、兄弟？」

ヒブツディの横にいた海賊も、それに応じて笑う。

「そうつすね。おれたちは正直者の海賊っすからね」

少女はそんな二人に、悲しそうに言う。

「兄さんの居場所を知ってるっていうから、わざわざこの船まできたのに……」

ヒブツディとその部下は、相変わらず気持ち悪い笑い方で答える。

「知ってるさあ。しばらくこの船にいて、それから……どうなったかなあ、兄弟？」

「あの男、文無しだったつすからね。身ぐるみ剥いで、海に放り込みましたよ。うひゃひゃひゃ」

「ひ、ひどい……！」

少女は泣きそうになりながら、声を絞り出す。だが、それに対して部下の海賊は逆上した。

「ひどいのはどっちだあ！？ てめえの兄貴はな、博打で負けたんだよ。負け分は払うつてのが、道理ってモンじゃねえのかい！？」

怒る部下を、ヒブツディがなだめる。

「まあ、カッ力するな、兄弟」

「チツ……」

そして、桃髪の少女の方に、下卑た目線を送る。

「こうして妹が来てくれたんだ。兄貴の借金分……あんたが返し

てくれるんだろ？」

少女は怖がりつつも、気丈に返す。

「わ、私に指一本でも触れたら、ただじゃすまないわ！ ケダモノ・
・・・！」

船の下では、戦闘が起こっていた。

「やあー！！！」

ドカツバシュ！！

ティアマトは素早く鉄の斧を2回振り回し、アーチャーを倒す。

「ぐはぁ・・・つ、つええ」

「町の連中め、余計なことしやがって！！」

剣士が鉄の剣を振り上げてガトリーに斬りかかる。

ガキンッ！！

しかし、鉄の剣ごときの一撃は、彼の重厚な甲冑には全く通じない。

「残念つすね・・・全然そんな攻撃通じないっすよ！」

ザシュツ！！！！

ガトリーが繰り出す鉄の槍の攻撃で、剣士は倒れ込んだ。

「ぐお！？」

「アイク！今がチャンスだ！！」

「分かった。・・・でえい！！」

前方に鉄の剣を振り抜き、剣士を斬り裂く。

「ギャアアア・・・」

「・・・ほら、かかって来いよ」

シノンは、弓兵にもかかわらず前線に飛び出して敵を挑発する。やはり、挑発に乗った斧を持った戦士がシノンに襲いかかった。

「へへ・・・挑発したことを後悔しな。確か弓兵は、接近されると反撃できねえんだっただなあ！！！」

ブウン！！・・・サツ！！

しかし、戦士が放った鉄の斧による一撃は全く当たらない。攻撃をかわしたシノンは、距離をとる。そして、鉄の弓を構える。

「後悔するのは、あんたの方だぜえ？」

ヒュン！　ズシャ！

「ぐわ・・・なんてこった・・・」

「けっ、どいつもこいつも、大して強くもねえ。準備運動にもなんねえぞ・・・」

シノンは退屈しのぎに、町の一角に見つけた酒場に入る。入口には「街に近い、安い、サービスいい！」の看板がかかっている。どうやら、宿屋も兼ね備えているみたいだ。

店内には、大勢の客でこった返していた。まさにすし詰め状態といった感じに。

「おいおい、これはどういうことだ!？」

「キャンセルの受付はこちらです!!」

「金返せ、このやろう!」

「お、お客様、申し訳ありません！　ただいま海賊が・・・」

どうやら、海賊が居座っている影響で店と客たちが揉めているようだ。シノンは面倒なことは嫌いなため、速やかに踵を返そうとする。その時、突然腕をつかまれ、聞かれた。

「君は、この町には詳しいのかな?・・・この町はずいぶん騒が

しいね。ここに来るのは初めてなのだが、いつもこんな感じなのかな？」

シノンは自分をつかんだ相手を見てみた。身長はほぼ同じで、このあたりではあまり見られない褐色の肌をしている。白にほんの少し青を混ぜたような色の髪で、入れ墨なのか、顔には模様が描かれている。服装から察するに、どうやら旅人のようだ。

「・・・あんだ、だれだ？」

そう聞くと、褐色の肌の男ははぐらかす。

「・・・ただの旅人だよ。宿をとりたいのだが、どうにも店の対応が悪くてね・・・困ってるんだ」

「なるほど。あんたは知らねえみてえだなあ？ たった今、この町は海賊どもが暴れまわってるんだ。きっと宿が取れないのは、そのせいだと思っぜえ？」

「ああ、そういうことだったのか」

男は合点がいったようだ。それから、シノンの背中に背負う弓と矢立て、さらに皮鎧を見て、聞いてくる。

「君は見たところ、傭兵のようだけど・・・もしかして、海賊退治に雇われたのかな？」

「けっ、あんな海賊ども、オレさまの相手にすらなんねえぜ。確かに雇われはしたが、まあすぐにでも終わると思っぜえ？」

「やっぱりそうか」

すると男は、背中に背負った袋からビンに入った薬を取り出す。中の液体は、水色に輝いていた。特効薬という薬で、飲むとどんな怪我もあつという間に治るというすごいものだ。

「だったらこれをあげるから、出来るだけ早く海賊を町から追いつてくれないかな？宿が取れなくて困ってるんだ。・・・頼むよ」

（何なんだ、あいつは？）

妙に親切な、あの男のことを不審に思いながらも、シノンには戦場に戻っていった。

「じゃあ、さつそく例の作戦いきますね、シノンさん！」

ガトリーが槍を振り上げ、シノンを呼ぶ。もうすでに町の方は制圧が済んだため、これから船の方の攻略に乗り込むのだ。

まずガトリーが縄ばしごを登りだす。鎧も含めるとかなりの重量だが、縄ばしごは丈夫で切れなかった。

「さあ、海賊ども！ かかってくるがいい！！」

縄ばしごを背に、ガトリーは立ちふさがった。

手斧が飛び、矢に射掛けられ、鉄の斧がガトリーを襲う。だが。

「全然、効かないっすよ!!」

ガトリーは全ての攻撃を受け止めてみせた。そして、鉄の槍による反撃を浴びせかける。

「シノンさん、後は頼んだっす!」

「けっ、……てめえら、覚悟しろよお?」

ヒュンヒュンヒュン……! ズカカカカ!!

「おわ!」

「ぎゃ!」

「ひ、人ごろ……」

シノンは矢の雨を降らせて、船上の海賊を一網打尽にする。後には敵は残っていないかった。

「シノン、ガトリー。御苦労さま。……じゃあアイク、早速乗り込むわよ!」

ティアマトは馬から降りて、アイクを呼ぶ。

「ああ」

アイクとティアマトも、縄ばしごを登っていった。

船の上では、さっきの桃髪の少女が海賊たちに襲われていた。手にした細身の槍で、必死に海賊に対抗する。

「へへっ、姉ちゃん・・・ペガサスがいねんだったら、本当に何もできねんだな？」

「ぺ、ペガサスがなくても・・・私は戦えるわ！」

槍を振り回して、海賊を倒す。だが、相手の方が数では勝っていた。

「くつくつく・・・お兄さんの借金、体で払ってもらっぜ！」

「ち、近づかないで！」

そんな様子を、ガトリーが見つけた。

「!?! あいつら、可憐な乙女になんてことを・・・! 待ってて下さい、今助けに行くっすー!!」

アイクも、それに気付く。

「海賊たちめ・・・許せん！」

ティアマト、シノンもそれに続いていった。

ガトリーが吠える。

「おい、お前ら！ その子から離れろ！！」

「あゝん？ なんだてめえは。邪魔すんじゃないね・・・ぐお！？」

いきなり海賊が倒れる。眉間には矢が突き立っていた。当然、射たのはシノンしかない。

「見たか？ オレさまの達人技！」

「く・・・くそ！ おい、お前ら、かかれや！！」

他の海賊たちも反撃に乗り出す。

それに対し、アイクとティアマトが応戦する。

「ええい！！」

ブンブン・・・ドグシャア！

ティアマトは馬から降りての戦いも慣れている。無駄のない斧さばきで、海賊たちをなぎ倒す。

「・・・はあっ！！」

アイクはジャンプをして、大上段から海賊を叩き割る。最近、実戦

のコツも何となく分かってきた気がする。

辺りの海賊はいなくなった。アイクとガトリーは、さっき襲われていた少女のもとに駆け寄った。

「おい、大丈夫か？」

「しっかりするっすよ!!」

少女はひどいけがをして気を失っていた。アイクとガトリーが必死に呼びかけると、ようやく目を覚ます。

「え・・・あ、あなたがたは・・・？」

すると、ガトリーが先に自己紹介を始めた。

「おれはガトリー！ 町の人たちの依頼で海賊と戦ってた、無敵の傭兵っす。で、こっちがおれの後輩っす」

少女は目をぱちくりさせて、聞き返す。

「私を・・・助けてくれるんですか？」

今度は、アイクが答えた。

「当たり前だ。ここは俺達が引き受けるから・・・その隙に、あんたは逃げる！」

少女はその言葉に、とても感謝した。

「ありがとうございます・・・！ 私、私・・・なんてお礼したらいいか・・・」

ガトリーは話し相手を取られて、かなり残念そうにしている。それには気付かず、アイクは答える。

「・・・いや、気にしないでいい。どうせ仕事のついでなんだし」

「でも、本当に助かったから。何か、お礼したいです！」

「・・・そう言われてもな。・・・ん？それより、あんたひどい怪我してるだろ」

「あ、はい・・・」

アイクは腰みの中を探り、薬が入ったビンを取り出す。さっきシノンが謎の男からもらい受けた、特効薬だ。

「これをあんたにやる。早めに怪我は治した方がいいぞ」

「え！？ で、ですが・・・こんな高価なもの、いいんですか？」

「命には代えがたいだろ？ いいから、受け取ってくれ」

「本当に何から何まで・・・ありがとうございます・・・！！」

少女が特効薬を飲み込むと、あのひどい大怪我が全て瞬時に治ってしまった。特効薬はまだ余っていたが、アイクはそれを全て少女に渡す。

別れ際、少女はアイクの方を振り返った。

「じゃあ・・・またお礼に伺います！ お名前を教えてください、お願いします！！」

「・・・アイク。グレイル傭兵団の一員だ」

それを聞くと、少女は嬉しそうに手を振る。

「アイクさん・・・！ 私、ベグニオン聖天馬騎士団のマーシャです。覚えておいてくださいね！ では、これで！！」

マーシャと名乗った少女は、縄ばしごを降りて行った。

「・・・おい、アイク・・・」

半分泣きながら、ガトリーがアイクを呼び掛ける。

「ん？ どうしたんだガトリー？」

「『どうしたんだ』じゃねえよ！ どうしておれの出番を横取りするかな？ ！！・・・せつかくかわいいコ見つけたのに・・・」

「・・・」

アイクは相手にせずに、その場を後にした。

「絶対あれって運命の出会いだとおも・・・ってアイクゝ置いてく

なよ〜!」

船の船尾では、ティアマトとシノンが海賊のボス、ヒブツディと対峙していた。

「ブヒヒヒヒ! こいつぁお笑いだ! このヒブツディさまに勝てるつもりでいるのかなぁ?」

ティアマトはヒブツディに静かに言う。

「町の住民から奪った物を返し、ここから出て行きなさい」

だが、ヒブツディは全く聞かない。

「ブヒヒヒヒ! やなこったぁ。ちょいと脅してやれば、金でも食いもんでも手に入るんだ。こんな楽な商売がやめられるかよぉ!」

「そう・・・だったら力づくで止めるまでよ!」

鉄の斧片手に、ティアマトはヒブツディ目掛けて突っ走る。そこにヒブツディは手斧を投げつけた。

「ブヒヒヒ! 近づく前に倒しちまってやらぁ!」

ヒュルルル・・・ドカッ!!

「く・・・っ!」

だが、ティアマトはうまく受け流す。手斧は再びヒブツディの手に戻っていたが、ティアマトはもうすでに射程圏内に入っていた。

「やああっ!!」

ブン、ザッシャー!! ドカッ!!

「ひいッ!？」

そして、離れた場所から狙いを付けているものがいた。シノンだ。

「けっ、気分悪いぜ・・・あんたのせいでいろんな意味で、船酔いしたか、も・・・な!!」

ヒュッ・・・ズシャー!!

「ブヒイ・・・助けてくれえ・・・」

シノンが射た矢はやはり、ヒブツディの眉間に刺さる。こうして、海賊討伐任務は無事に終わった。

「海賊は全て掃討しました。これでもう、町の人に危害を加えることはないでしょう」

全員で、町長のところに報告に行く。町長はすでに報酬金を用意し

ていたみたいだ。

「おお！ 助かったぞ。これが、約束の報酬じゃ」

まあ、小さな港町だからそれほど額はないのだが……。

「ありがとうございます。また、お困りのことがございましたら、いつでもご依頼ください」

報酬が入った袋を受け取りながらティアマトが言う。

町長は、先ほどの戦いを思い出して独り言を始める。

「もちろんじゃ。しかし、しかし、あんたらの戦いぶりは見事なものじゃった。いやな、団長のグレイル殿が来てくれるもんじゃと勝手に思い込んでおったからな……あんたら若い者だけで大丈夫かと、実のところ心配しておったのじゃ」

そう言われて、ティアマトははつとなる。依頼する側は、人を選ぶことができないという問題点に。

「それは……申し訳ありませんでした。団長は別の仕事についておりまして……」

すると町長は、すぐに自分の意見の続きを言う。

「いやいや、どうして。こうして無事、奴らを追い払ってくれた。予想以上の活躍ぶりじゃったわい」

「お褒めに預かり、光栄ですわ」

町長は、少し思案顔になる。

「あんたらくらいの腕があれば、王宮騎士に志願しても十分通用しそうなもんじゃ。特に団長のグレイル殿は、そこらの将校よりも、よっぽど腕が立つ。なにゆえ海賊退治のような、地味な仕事をいておられるんじゃない？」

「それは・・・」

ティアマトは突然の質問に、返事に困ってしまう。

「いや。おかげでわしらは助かつとるんじゃが・・・じゃがな、団長殿もあんたらも、真に活躍出来る場所はクリミア王宮にこそあるんじゃないかと・・・そう思ったまでの話じゃ」

「・・・団長も私たちも、今の生活で満足してますから」

そうティアマトは答えたが、どうにも歯切れが悪い。だが町長は、そんなこと気にしなかった。

「まったく、欲のないことじゃ。では、また用ができたら使いをやるでな、よろしく頼むぞ」

町長が去った後も、ティアマトはまだ何か考えていた。アイクは気になって声をかける。

「ティアマト、どうかしたのか？」

「いえ、何でもないわ。とにかく、任務完了よ。みんな、よくやってくれたわ」

シノンは、どうも不機嫌そうにしている。

「けっ、この程度の仕事、暇つぶしにもなりやしねえ。さっきのジジイの言い草じゃねえが、もっとオレたちにふさわしい仕事ってのがあると思うんだがねえ」

ティアマトはその言葉に、シノンをとがめる。

「シノン！」

「冗談だよ、じょーだん」

だが、しまいにはガトリーまで真剣な顔をしてシノンの意見を支持し出す。

「でもさ、ティアマトさん。真剣な話・・・おれたちの仕事ってさ、なんつーか、こう・・・ちょっとしょぼくないですか？」

「！ガトリーまで、何を言い出すの！？」

「だってさーおれたち本当に腕が立つし。ただの傭兵でくすぶってるのって、もったいない逸材なんじゃないかなーって、シノンさんとも、よく話してるんすよね」

ティアマトはそれを聞いて、とても残念そうに言う。

「・・・そう。あなたたちは、団長のやり方に不満があると・・・そう言いたいわけね？」

ガトリーが慌てて弁解する。

「わわっ！ いや、その！！ 別にそんな意味じゃあ・・・」

アイクは彼らの会話をずっと聞いていたが、どうにも違和感を感じた。思い切って、ティアマトに聞いてみる。

「・・・どうしたんだ、ティアマト？」

「何が？」

やっぱり、何か変だ。ティアマトがこんな風に言うなんて。

「そんな物の言い方、いつものあんたらしくない」

ガトリーも賛成してきた。まあ、普段から優柔不断なやつだが。

「そ、そうっすよ。アイクの言うとおりっす！」

ティアマトはしばらく黙っていたが、ようやく口を開いた。

「・・・わたしは、ただ・・・人の役に立つ仕事をやっていることに、誇りを持ってほしかっただけ・・・。地位や名声を得られない仕事には価値が無いって、そう言われた気がして・・・悪かったわ」

ガトリーも反省して謝る。

「いえ、おれたちも悪かったっす」

暗くなった空気を変えるように、ティアマトは明るく言った。

「・・・そろそろ帰還しましょう。休息も任務の一環よ。次の戦いに、疲れを残さないようにしないとね」

ちようどいい感じに、ガトリの腹が盛大な音を立てる。

「がつてん！おれ、もう腹ペコっすよ」

ティアマトが騎馬の準備をしているとき、アイクは少し言いたいことがあったので言いに行った。

「ティアマト」

ティアマトは手綱を結びつける手を止めて、蒼い髪の少年を向く。

「なに、アイク？」

「ティアマト、誇りならば、ある」

「！」

そう言うアイクの姿はなぜか、たった数日前よりも一回りたくましく見えた。

「俺は、この傭兵団の・・・親父やティアマトが守ってきた、グレイ傭兵団の一員になったことを誇りに思っている。・・・それだけだ」

そう言うと、アイクは再び歩き出してしまった。

「アイク・・・」

「けっ、甘い奴らばかりだぜ・・・」

シノンは、どうもこういうメンバーと行動するのが苦手なようだ。
ガトリーにはなぜかなつかれているが、他の連中のことはどうしても好きになれない。

（グレイル団長・・・）

ただ一人、グレイルだけは尊敬していた。

（あの人は、オレを救ってくれたんだ・・・）

3章 〱海賊討伐〱（後書き）

今回はメンバーががらりと変わって、シノンやガトリーが仲間として戦ってくれるお話でした。オスカーとボーレもいいけど、こういったキャラの話もやはり好きです。

さて、次回ですが・・・

4章・・・ではなく、今回は完全にオリジナルストーリーが入ります

題して、「3章外伝：カタオール街で」です！

次回の主人公はまさかのグレイル！？

どうぞ、お楽しみに！

3 章外伝 くカタオールルの街でく 前編（前書き）

アイクやティアマト達が港町タルマでヒブツディ海賊団と戦っていたまさに同じ時間に、グレイルら別の傭兵団のメンバーはもう一つの任務を行っていた。

クリミア王国西部の、カタオール地方。この地の中心部である都市カタオールでは近頃、凶悪な盗賊団が暗躍していた。当初はただ盗みを働くだけであつた彼らは次第に勢力を拡大させ、殺人や強盗、さらには放火などまで行ふようになっていた。

カタオール地方の領主であるカタオール侯は重い病気を患い、彼の一人息子であるシュロキもまだ若さゆえに政治能力は持たない。そんな背景もあつてか、街を荒らす盗賊団の悪行は留まることを知らなかった。

グレイル、オスカー、ボーレ、キルロイの4人は、カタオール侯の側近からの依頼で、盗賊団の討伐にやってきたのであつた。

3章外伝 くカタオールの街でく 前編

くカタオールの街く

「すげえ・・・！」

ボーレが、感嘆の言葉を口から紡ぎ出す。

「これが、街つてところかー！！」

ボーレは、いわゆる大都市と呼ばれる街に足を踏み入れるのは初めてだった。

石畳で舗装された道に並ぶ、街路樹と街灯。周りを見渡せば様々な商店が店を開き、威勢のいい声が聞こえてくる。道ゆく人は皆様々な格好をした町人たちで、たまに白い鎧を身にまとったクリミア兵が見回りをしているのも見かける。

道の先には、立派な建物が見える。あれが、カタオール城らしい。

「ボーレ、街に来るのが初めてでも、そんなにはしゃぐなよ？」

オスカーが弟であるボーレに諭す。彼は元クリミア騎士ということもあり、街というものには慣れていた。

「分かってるって、兄貴」

キルロイも、街に来るのは初めてだ。さっきから落ち着かずに、あ

たりをきよろきよろ見回している。

「けど、やっぱりすごいなあ・・・みんな、すごく楽しそう」

グレイルはただ、一言もしやべらずに全員の先頭を歩き続ける。舗装された道を何度も曲がっていくうちに、彼らはとある古びた建物の前にやってきた。

グレイルはその建物の前で立ち止まり、全員に振り返って作戦の説明に入る。

「さて・・・ティアマト、シノン、ガトリーが事前に調べた情報によると、今回の討伐対象の盗賊団はこの建物の中を拠点に活動しているらしい」

オスカーが聞く。

「この建物ですか？・・・入口が見当たりませんが・・・」

すると、グレイルが答えた。

「フツ、わざわざ盗賊団を名乗る連中が、正面で出入りするわけ無かるう？どうも連中は、秘密の通路を通ってこの中に入っているらしいのだ」

ポーレも首をかしげる。

「通路？ 一体そんなものが、どこに・・・」

「まあ、ついてこい。こつちだ」

グレイルの言うとおり、一行は建物の横に向かう。すると、そこにはいかにも怪しげなレバーが壁から突き出ていた。キルロイが疑問に思う。

「団長、これですか？・・・怪しすぎる気がするのですが・・・」

「まあ、確かに怪しい。だが、報告によるとこれは手の込んだ仕掛けのようだ」

グレイルはポケットからメモ用紙を取り出した。

「・・・レバーをまず左いっぱいに動かし、2秒待ってから中央にそこから2秒待って、再び右に動かせば、入口が開く・・・か」

ティアマト達が仕入れた情報である。グレイルはその通りにレバーを操作した。

すると、レバーの横の何の変哲もなく見えた壁が、突然向こう側に開いたのだ。こうやって入口が開くように、工夫されていたらしい。

「すごいな・・・盗賊にしてはなかなか工夫している」

オスカーは感心した。それに、これくらい入口が大きければ馬に乗ったまま中に入れそうだ。

「しばらくすると入口は閉まるから、グズグズしてないで中に入るぞ！各自、戦闘の準備もしておけよ」

グレイルの指示で、全員武器を構えて中に入っていた・・・。

中は、とても暗かった。少し先が全く見えない。

「索敵か、厄介だな・・・」

グレイルはそう呟いた。索敵とは、辺りが暗かったり霧が出ていたりといった、視界が悪い環境のことを言う。敵に対してもこちらが見えにくいことは変わらないが、こちらからも当然近付かなければ相手が見えない。

なにより、今回は敵は盗賊が中心の勢力。夜目が利く盗賊側の方が、圧倒的に有利なのである。

「みんな、むやみに前に出たりするな。必ず固まって行動するように。特にキルロイは打たれ弱いから気を付けるんだ」

「はい！」

「分かりました」

「気をつけます！」

「お？・・・て、敵襲だー！！」

どうやら、盗賊たちがこちらに気付いたようだ。急に足音が聞こえてくる。音の大きさからすると、結構大勢のようだ。

ボーレは斧を担ぎつつ、辺りを見回した。と、その時！

「死ねえー！！」

軽器（盗賊などが戦いのときに使用するナイフの類）のナイフを逆手に持った盗賊Aが、いきなりボーレの右側から飛びかかってきた。もちろん対処できるわけもなく、ボーレはナイフで切り傷を負う。

「ちくしょう！ いきなり襲いかかってきやがって！！」

ボーレは斬り裂かれた腕を見て、つばを吐きかける。そして、斧を振り下ろした。

スカッ・・・！

「そんな遅い攻撃、当たらぬわ！」

スパァン！

「く・・・くそぉ・・・！ 相手がよく見えねえ・・・」

「ボーレ、しっかりして！・・・ライブ！！」

キルロイが駆けつけてきて、杖でボーレの治療をする。

「助かったぜ・・・！？ おい、キルロイ後ろ！！」

「え！？」

ボーレは、キルロイの後ろに回り込んだ盗賊Aを見つめる。盗賊Aは、キルロイを今まさに斬りつけようとしていた。

「させるかつ!!」

盗賊Bを何とか倒したオスカーが、馬を走らせてキルロイのもとにはやての如くやってくる。

ヒュンヒュン・・・ザシュ!!

「ぐあ・・・しまったあ・・・」

盗賊Aの断末魔が、暗い建物の中に響いた。
キルロイはオスカーに感謝する。

「オスカー、本当に助かったよ。・・・僕は戦えないから、もっと周りを見ないといけなかったな・・・」

「いや、とにかくキルロイが無事でよかった」

ボーレはさっきオスカーが倒した盗賊Aを調べていた。そして、声を上げる。

「おい、こいつこんなものを持っていたぜ!」

ボーレが手に持っているのは、先端に黄色い玉が付いた杖。黄色い玉は、ほのかに光をたたえていた。
キルロイが、嬉しそうにそれを見る。

「ボーレ、これは『トーチの杖』だよ! トーチは、光を起こして

辺りを明るく照らす魔法だ。僕なら、たぶん使えると思うから、それ貸してくれる？」

「へーそんな魔法があるんだな。じゃあ、この状況を何とか打開できるかもしれねえな！」

その頃、団長であるグレイルは単独行動をとっていた。

「ふんっ！！」

ブンブン・・・ザッシャアア！！

「ぎゃあああ・・・」

巨大な戦斧がうなりを上げ、盗賊が5、6人くらいまとめて吹っ飛ばす。グレイルは、とんでもない強さだ・・・。

「なかなかやるな・・・だが、わが剣、見切れるかな・・・？」

グレイルの目の前に、軽装の剣士が現れる。手にした毒の剣が、紫色に輝いて見える。雰囲気からすると、かなり実力がありそうだ。この盗賊団の用心棒だろうか？

（斧では剣に対して不利・・・この戦い、勝てる・・・！）

毒の剣を持った剣士は、そう確信していた。だが・・・。

「ぬん!!」

ブウン・・・ドカアア!!

「な・・・に・・・!?!」

グレイルはただの一撃で、剣士を真つ二つにして見せる。戦斧を持った雰囲気からは想像できないほど、素早い攻撃で。

「こんな賊に雇われなければ、こんな最期はなかったかも・・・」
そう言い残し、グレイルはさらに先に進む。

「トーチ!!」

キルロイがそう叫ぶと、トーチの杖についた黄色い玉が力強く輝いた。辺りは、まるで昼間のような明るさに包まれる。暗闇に潜んでいた他の盗賊たちの姿も、丸見えとなった。

「すごいな・・・これがトーチの魔法・・・」

オスカーが感心する。

「よし! じゃあ、早速戦闘の続きと行こうぜ!!」

ポーレは斧を構えた。

「く・・・しまった・・・トーチが奪われたなら仕方ねえ！ 生きては帰さねええ！！」

盗賊が一斉に襲い掛かった。オスカーとボーレは狭い通路でお互いに背中にキルロイを守る形で、前後の敵に対峙した。

グレイルは、最深部の小部屋にたどり着いていた。かがり火が燃えていて、奥には玉座のようなものが置いてある。そこに、一人の男がいた。

「貴様ら、一体何者だ！ なぜこんな場所に入り込んだあ！？」

男は必死の形相でグレイルを見た。グレイルは静かに答える。

「カタオール侯の側近からの依頼で、あなたたちの討伐にやってきた、グレイル傭兵団だ。もしあなたたちが武器を捨てて盗んだ物を全て返すというのなら、命だけは助けてやろう。・・・その場合、城に身柄を引き渡すことになるがな」

だが、男は応じなかった。いかにも切れ味鋭そうな軽器を手に、叫ぶ。

「く・・・傭兵だか何だか知らねえが、このガンドルフ様がそんな真似でもすると思ったか！」

男はガンドルフという名前らしい。

暗くてよく見えなかったが、手にしている軽器はおそらく、今のと

ころ最新のもののようだ。確か、「ステイレット」とか言うもので、重い鎧をまとうものに対して威力を発揮するとか……。

なお、FE聖戦の系譜にも、同じ名前の敵がいるが、関係はない。あと、なんとかフォースの力を継承してたり賢者から聖剣を奪ったりしてる某魔王に名前が似てるが、全く関係ない。

「そんな大斧、あたんねえよ!!」

ガンドルフが、ステイレットを逆手に持ってグレイルに襲いかかる。だが、グレイルは戦斧を持っているにもかかわらず余裕でかわす。

「な、なに!？」

「……そうか、戦つか……。ならば、仕方ない。ふうん!!」

グレイルは戦斧を頭上に掲げ、力をためる。

「せめて、一撃で終わらせてやる……。!」

グレイルの持つ斧が、徐々に赤く灼熱し出す。どこからともなく地響きが聞こえ、あたりの空気がピリピリと震える。刃は赤から黄色、さらには白い輝きを始める。風が渦巻く。

「!？ ……なんだ？ 一体何を……。!？」

そしてある時、グレイルは斧を地面に振り下ろし、「それ」を放った。

「噴火 ウルヴァン !!」

続く！

3 章外伝 〱カタオールの街で〱 前編（後書き）

やっぱり、オリジナルストーリーを作るのって大変ですね><;
ぐだぐだな感じになっちゃった……

ちょっといろいろ事情があって、今回は2部構成にさせていただきます。あと、少し予定があるので次回の更新は遅れますので、よろしくです。

では、続きをお楽しみに〱

3 章外伝 くカタオールの街でく 後編（前書き）

グレイルとガンドルフの対決は、まだ続いていた。

3 章外伝 くカタオールの街でく 後編

焦げたようなにおいが、部屋を満たす。グレイルが斧を叩きつけた床には、焼けた石材が穴を開けていた。グレイルが持つ戦斧は、いつの間にか元通りとなっている。

「あ……ああ……」

ガンドルフは、「噴火」のあまりの威力に、腰を抜かしていた。ステイレットを取り落としたことにも気付かずに。

「……さあ、それでも、まだ抵抗するつもりか？」

グレイルは静かにガンドルフに聞きながら、戦斧を再びガンドルフに向ける。

「い……いやだ……死にたく……ないです……」

震えながら、ガンドルフはかるうじて答えた。

「よし、それなら、おとなしく捕まるがいい。カタオール侯は人情に厚いから、それほどひどくは扱わないだろう」

「……な、何だ？」

噴火による振動は、オスカー達のもとにも届いた。おおかた敵を倒した後だったため、3人は音がした方を目指して移動を始める。

開けた場所に出ると、そこにグレイルがいた。グレイルは敵の首領とおぼしき男の武器を取り上げ、縛り付けている。

「団長、こちらの方のせん滅は完了しました。・・・その人は？」

オスカーが聞く。

「この盗賊団を率いていた首領だ。討伐ではなく、あえて逮捕という形に持っていていこうと思っただけ」

「なるほど・・・確かに、その方が更生とかも期待できそうですね」

キルロイが感心した。

「盗賊団の討伐と首領の逮捕にご協力いただき、ありがとうございます！」

出迎えに来たクリミア兵にガンドルフの身柄を預ける。クリミア兵は身柄を受け取り、代わりに謝礼金を渡した。大きな街を収める諸侯からの依頼ということもあり、金袋はかなりの重さだった。

「いや、俺たちは仕事でやっただけのことだ。まあ、これでこの街はまたしばらく安全になるかもな」

グレイルはそう答えた。すると、クリミア兵は何度も振り返りつつ、

城の方へ帰っていった。

「よし・・・予想以上に早く仕事が片付いた。もう日暮れのようにだし、今日はこの街に泊まるとしよう」

グレイルは団員にそう伝えた。ボーレは目を輝かせてグレイルを見る。

「え、本当ですか！　じゃあ、ちょっと街を見に行ってきた方がいいですか？」

ボーレにとって、街というのは初めてだったからだ。

「ああ、もちろんだ。宿は街の入り口のやつだから、あまり遅くならんうちに合流するように」

「ありがとうございます！！」

グレイルは珍しく、自由行動を許す。

「オスカーとキルロイも、自由に行動していいぞ。こんな経験は、なかなかできないからな」

「あ、はい。ありがとうございます」

「では、ボーレと一緒に行動していますね」

3人が喜びながら雑踏の中に消えていくのを横目で見てから、グレ

イルは歩きだす。そして、一人で考え事をする。

（アイク・・・まだまだ、半人前にもならない息子よ・・・）

アイクのことについて、考える。

（お前の人生の行く先は、きっと困難に満ち溢れるだろう。そしてそれは、決して逃げることは出来ない）

辺りはみるみる暗くなっていく。道にともされる街灯にも、灯がともり始めた。

（俺はかつて、大きな過ちを犯した。もはや、取りもどすことは出来ない・・・）

空には、星が見え始めていた。

（剣を捨てた理由、名を捨てた理由・・・そして、俺が犯した過ちアイク、こんな重責を担わせて、本当にすまん・・・平穏な家庭に生まれた方が、幸せな一生を過ごせたかもしれないのにな・・・）

いつの間にか、グレイルは宿にたどり着いていた。

（エルナ・・・俺は・・・）

グレイルは、過去に何があったのだろう・・・？

3 章外伝 くカタオールの街でく 後編（後書き）

短めですみませんくく；

次回は、「4 章：街道の戦い」を予定しています。とうとう、物語が動き始めますよく！
お楽しみに

4章 　　街道の戦い　　前編　　（前書き）

海賊、盗賊の討伐任務が終わった後も、傭兵団には次々と依頼が舞い込んできていた。だが、傭兵団の実力はかなりのもので、一人の犠牲者も出さずに任務を遂行できていた。

ある、任務が無かった久しぶりの休日となった日のこと・・・。

4章 〱街道の戦い〱 前編〱

日を追うごとに、辺りは春の陽気に包まれていくのを感じる。まだ春は浅いが、確かに以前より暖かくなっている。

ヒュッ……ストン！

何かが風を切って飛んでいくような音に続いて、それが何かに当たる音が響く。

「やったあ！！ シノンさん見てた？ ぼく、的に初めて命中したよ！」

薄い緑の髪をした少年、ヨファが訓練用の弓を片手に、喜んで飛びはねる。横にいたシノンが、答えた。

「ああ、見てたぜ。……だが、まだ当てたのは初めてだろあ？ 連続して命中させなきゃ、意味はないってもんだ」

「分かったよ。じゃあ、もう一度当てて見せるね！」

ヨファは再び弓を構え、離れた場所にある的に狙いを定め、弦を引く。

ヒュッ……

しかし、今度は的を大きく外す。

「ああ……さっきは当てたのに……」

ヨファはガツカリと肩を落とす。シノンは縛った髪を後ろに回しながら、声をかける。

「そうだな・・・射る時、もっと集中しねえと外すぜ？ 1回目うまく当てたからって、気を抜くなつてことだ。弓の持ち方とかもまだ改良するべき点はあるな」

「はい、シノンさん」

「ようし！ 次はこのオレさまの達人技を見せてやるとすつか。ヨファ、その弓を貸してみろ」

「え、本当！？ 見たい見たい！！！」

シノンはヨファから訓練用の弓を取り上げ、なぜか上空に向けて弦を引く。そして、矢を射る。

少し間をおいて、再び弓を構えて、今度はさっき射た矢に向けて狙いを澄ます。

「見てろよ、オレさまの達人技をよお？」

シノンが射た2本の矢は、空中で見事に衝突。2つともつれ合いながら、二人の目の前に落ちてきた。

ヨファが感嘆の声を上げる。

「す・・・すごすぎ・・・！」

「ま、お前もこのくらい出来るようになれば、上等ってもんだ」

「む、無理だよ・・・シノンさんにはかなわないよ」

「おいおい、勝手に決め付けないよ。それに、ぼくも戦いてえ、強くなりてえってオレのもとに弟子入りしたのは、お前だろーが」

そう。ヨファはあのイカナウ山賊団にさらわれた事件以来、「ぼくも戦えるようになりたい」と考え、シノンのもとに弟子入りしたのだった。

最初は渋ったシノンだったが、なぜか突然ヨファの弟子入りを認める。

と、その時。木陰に見覚えのある恰好をした人物を、シノンは見つけた。黒い髪に黒い装束。厳しい表情をした、少女にも見える小柄な少年。

「ゲツ・・・あいつセネリオ・・・。何であいつがもう帰ってくるんだよ・・・」

「お兄ちゃん、聞いてよ大ニュース！」

ミストが叫びながら、アイクの部屋に駆け込んでくる。

「騒がしいぞ。ミスト、どうした？」

アイクが聞くと、ミストは嬉しそうに答えた。

「セネリオがね、今、戻ってきたの！」

「本当か？ 予定より、ずいぶん早いな」

「だろうねえ。なんでだろ？」

セネリオとは、この傭兵団の一員である少年だ。風の魔法を得意とする魔道士で、団の参謀役も務めている。少年とは思えないほど徹底的な現実主義者で、齒に物を着せぬ話し方から、シノンなど彼を苦手に思う団員も多い。だが、アイクに対してだけはどいう訳か、絶大な信頼をしている。

「まあ、いい。直接聞けば分かることだ。今どこにいる？」

よその傭兵団に参謀の修行に出ていたセネリオだが、予定ならまだ修行を続けるはずだ。アイクはそのことを彼本人に聞こうと思ったのだ。

ミストは少し考えてから、答える。

「食堂じゃないかな？ お父さんに用があるみたいだったし」

「分かった。すぐ行く」

食堂にはグレイルとティアマトの他に、黒い装束をした黒髪の少年、セネリオがいた。グレイルはなぜか緊張した趣で、ティアマトに伝える。

「……直ちに全員を集めてくれ」

「了解しました」

ティアマトも緊張した様子で応じ、戸口を開けて外に出ていった。
グレイルはその様子を見やり、振り返ると、アイクが来ていることに気が付いた。

「アイク！ お前もぼさつとしてないで、さっさと作戦室へいけ！」

唐突に、大きな声でグレイルは言う、そのまま奥の作戦室へ歩いて行ってしまった。

「あ、ああ……。なんだよ、急に……」

「僕が持ち帰った情報の報告。そして、それに対する対策を練るためです」

アイクはしばし茫然としていて、セネリオが答えた。

「セネリオ！」

「お久しぶりです、アイク。今、戻りました」

無表情のまま、セネリオはアイクに言う。

「無事で何よりだ。だが、どうしたんだ？ もうしばらく修行するんじゃないかったのか？」

「それが……」

すると、作戦室からグレイルの声が響いてきた。

「何をしている！ 早く来い！」

セネリオはアイクを諭す。

「とりあえず行きましょう。詳しい話は後で……」

二人は作戦室へ向かった。

作戦室に傭兵団のメンバーがそろったところで、グレイルは話した。

「……みんなも知つての通り、よその傭兵団へ修行に出ていたセネリオが、さつき戻ってきた。……とんでもない情報付きでな」

作戦室に集まったメンバー達が静かに聞き入る中、アイクが聞き返す。

「どんな情報なんだ？」

すると、セネリオは少しグレイルの顔を見る。グレイルがうなずくのを見て、セネリオが答える。

「クリミアとデインの間で……戦争が始まりました」

その言葉を聞いて、みんながざわめきだした。

「せ、戦争！？ うそでしょ！？」

ミストが声を上げる。いくら子供でも、「戦争」というものがどういうものなのかは分かる。つまり、互いの利益のために大勢の兵隊が殺し合うということを。グレイルは全員を静める。

「それを今から詳しく聞くとところだ。セネリオ、頼む」

「はい」

「この地図を見てください」

セネリオは壁にかかったクリミアの詳細図を指し示す。セネリオの指は、クリミア王国の東部の、大きな街を指していた。

「ここが、クリミアの王都メリオル」

続いて、そこからずっと西の方の、なにも描かれていない場所を指す。

「我々傭兵団の砦があるのは・・・大体このあたりになります」

クリミア王国は、テリウス大陸の北西に位置する国だ。セネリオは続ける。

「・・・事の始まりは、3日前の昼下がりです。ちょうど調べものがあつた僕は、クリミア王都メリオルにある王立学問所の書庫にいました。突然獰猛な獣・・・おそらく飛竜の咆哮が響いたと思うと大きな振動が建物を揺らしました。慌てて外に出た僕の目に飛び込んだできたのは、王都になだれ込む騎馬部隊、それに続く重歩兵部隊、さらには空には十数の竜騎兵・・・それらは、全て黒い鎧で身を包んでいました」

セネリオが言う出来事は、とても緊迫した話だ。グレイルが舌打ちをする。

「デイン王国軍が」

「はい」

「兆しは？」

セネリオは席に戻り、話し始める。

「ご承知の通り、クリミアとデインの関係は建国以来、順調であるとは言いかねるものでした。しかし、数百年にも渡る歴史の中で、数多の小規模な戦はあれど・・・いきなり国境を越え、相手国の王城を奇襲するようなことは、今回が初めてです」

話を聞いていたティアマトが口をはさむ。

「ずいぶん、乱暴な策だものね」

グレイルは腕を組んだまま、ある人物を思い浮かべながら相槌を打つ。

「それだけに、成功すれば効果的ではある。・・・デイン現国王、アシュナードならではの奇策というところだな・・・その後は？」

セネリオは報告を続けた。

「王弟レニング卿が率いるクリミア王国軍が出撃し、徹底抗戦の構えに入りました。一般人には市街地へ退避するようにとの達しがありましたので、やむなく王都を離れ、その足でここに戻りました」

グレイルは腕組みを解く。

「現在、戦況がどうなっているかは、分からんということか・・・」

「どちらにせよ、この田舎には、まだ戦争の第一報すら届いておらんような状況だ。よく知らせてくれたな、セネリオ」

「いえ・・・」

グレイルが礼を言うと、セネリオは静かに返した。

ティアマトは考え込んでいる。

「デインのクリミア侵攻・・・この傭兵団も、無関係という訳にはいかないんでしょうね・・・」

その後しばらくの間、ティアマトとセネリオは意見を戦わせた。

ティアマトは元クリミア騎士ということもあってか、クリミア軍と協力してデイン軍と戦うべきという意見、セネリオはクリミアの勝ち目が薄いことから、座してクリミアの滅亡を見ろという意見である。お互い意見を戦わせていたがラチがあかないのを見て、グレイルは待ったをかけた。

「二人とも、そこまでだ。言いたいことは分かった。まずは現状を正確につかむことだ。王都メリオルを、一度偵察した方がいいだろう」

そこまで言って、グレイルはアイクを見る。

「アイク、ここはお前に任せる。偵察部隊として、何人が連れて行け」

あまりに突然のことで、アイクは驚いた。

「！？ 俺が？」

グレイルはアイクのことなど気にせずに続ける。

「補佐としてティアマトと・・・」

アイクのことが嫌いなシノンも立ちあがって、グレイルに意見する。

「冗談じゃないぜ、団長！ アイクみてえなガキに何を期待して・・・」

「よし、心配ならシノン、お前も付いて行け」

意見をしたばかりに同行を命じられたシノンは、

「げ・・・」

といいながらしぶしぶ従う。

「あとは壁となるガトリー、杖使いのキルロイ、道案内としてセネリオでいいだろう」

あっという間に反対する声を抑えて、グレイルは決定させてしまう。アイクはそれでも反論をした。

「団長命令だ。さつさと準備を始めろ。時間の猶予はないぞ。テイアマト、俺は少し出掛けてくる。アイクの補佐は任せたぞ」

「了解しました」

「親父！」

もはやグレイルは、アイクの言うことなど全く聞いてくれなかった。壁に立てかけてある戦斧を担いで、扉を開けて出て行ってしまふ。

なぜかグレイルの横顔に、不安の類のような色の表情が出ている気がした・・・。

「お兄ちゃん！ ちょっと待って！」

出掛ける直前に、ミストがアイクの方に走ってくる。

「何だ？」

「はい！ これ持ってたって」

ミストは、鞘に入った立派な剣をアイクに手渡す。

「この剣は・・・？」

「お父さんがね、お兄ちゃんに渡してって」

アイクは試しに鞘から剣を抜いてみる。曇り一つなく日光を浴びて輝く刀身が、とても美しい。

「いい剣だな・・・」

「『リガルソード』って言うらしいよ。重い甲冑をまとった騎士や馬に乗った騎士に有効なんだって。あ、でもこの剣はこれ一振りしかないから、大切に扱ってね！」

「分かった」

「お下がりがじゃない剣って、初めてじゃない？ よかったね！」

「ああ」

ミストの笑顔には、いつも癒される。戸を開けて、中に入りつつも、両手を振ってミストはアイクを送り出す。

「じゃあ、気を付けてね！ お土産待ってるからー!!」

そして、すぐに中に入ってしまった。

「別に遊びに行くわけじゃな・・・ったく・・・」

続く！

4章 〽街道の戦い〽 前編〽（後書き）

話をこれでも削ったんですが、それでもかなり長くなってしまいました><

例によって、今回も前半と後半に分けさせていただきます。

次回はあの、重要人物が登場！

4章 く街道の戦いく 後編（前書き）

デイン・クリミア間で開戦・・・。

他の傭兵団にて参謀の修行をしていたセネリオが帰還とともにもたらした情報は、アイク達に強い衝撃を与えた。

グレイル傭兵団は、この戦いに参加するか否かを決めるべく、王都の調査を決める。なぜか団長グレイルはその役目のリーダーを、アイクに任せるのだった。

グレイルからもらった新品の剣、「リガルソード」を手に、アイク達一行はクリミア王都メリオルを目指す。

4章 く街道の戦いく 後編

く王都への道く

傭兵団の皆と王都メリオルのほぼ中間地点までアイク達がつどり着いた時には、もう日が西に傾くころだった。

街道ということもあって、道は舗装はされていないものの、草刈りなどそれなりに整備はされている。道の両脇には延々と森林が広がり、茂みもいたるところにある。

そんな道に、無数の死体が転がっている。皆、鎧を身に付けており、兵士だということは一目で分かる。死体以外にも、剣や槍、斧が落ちていたり、矢が地面に刺さっていたりしている。最近、ここで戦闘があったようだ。

「これはひどいっす・・・」

戦い慣れしているはずのガトリーがつぶやく。確かに、気分のいいものではない。

キルロイなど、早速立ちくらみを起こして倒れそうになる。アイクはそれを支えてやった。

「大丈夫か？ 無理するな」

「あ・・・ありがとう。傭兵としての自覚はあるんだけど、まだこういうのに慣れてなくて・・・」

キルロイはもともと、血や死体を見るのが大の苦手なのだ。

「ケツ、こいつら全部鉄の武器かよ。鋼や銀の武器なら、高く売れたのになあ」

シノン は勝手に死んだ兵士の武器をあさっている。そんなシノンを、セネリオとティアマトがとがめる。

「シノン！ 余計なことしていないで、向こうの方でも調べてきてください。時間はないんです」

「そうよ。早く仕事終わらせて、団長に報告しないと。見たところ向こうにもたくさん死体があるみたいだから、見てきましょう」

「チツ、分かったよ。はいはい分かりましたよっと・・・」

大儀そうに向こうに歩いて行ったシノンを軽く見やっってから、セネリオはアイクを向いた。

「僕はこっちの林の中を調べてきます」

ガトリーも言う。

「じゃあ俺はあっちの茂みを調べてくるからな！」

残されたアイクは、キルロイに聞いた。

「どうだ？ もう平気になったか？」

「うん、とりあえずは大丈夫。心配掛けてごめんね」

「いや、いいんだ。あんたには倒れられたくないからな」

アイクとキルロイは、道の上の死体を調べることにした。みな鎧を装備しているが、色は違う。

白い鎧はクリミア兵のもの、黒い鎧はおそらくデイン兵のものだ。数で見たところ、デイン兵の方が死体の数が多い。クリミアの方が勝っているのだろうか？

（・・・それにしても）

アイクはグレイルの態度を思い出す。

（どうして王都の視察なんていう大役を、親父は俺に任せただ？いくら俺が将来団長になるからって、俺はまだ見習いを卒業したばかりの、新米傭兵なのに・・・）

「どうしたんだい、アイク？」

キルロイが呼ぶ声で、アイクは我に帰った。正直に、自分の気持ちを言う。

「親父の真意が分からない。どうして新米の俺に、この場を仕切らせようとする？」

少し考えて、キルロイは言った。

「・・・アイクは、グレイル団長を継ぐ人だからね。人を動かすことを学ばせたいんじゃないかなあ」

「俺に、そんな器があるのか？ いや、仮にあつたとしても遠い先の話じゃないか」

アイクは夕焼け色の空を見上げ、自嘲気味に吐き捨てる。

「・・・今の俺は経験も力もない・・・ただのガキだ」

「そうかな？ 僕の目から見れば、とても将来有望に見えるけど？」
すっかり調子も元に戻つたらしいキルロイは、アイクの前に来る。
キルロイのオレンジの髪も夕焼け色にそっくりだと、アイクは少し思った。

「グレイル団長はすごい人だけど・・・アイクならきつと、追いつける。追いついて、それから追い越すことだってできるんじゃないかな？」

「・・・無茶を言つなよ」

「僕の勝手な想像だから、気にしないでいいよ。ただ、力が無いと思うなら、少しでも早く一人前になれるよう、努力するってのはどうだろう？ その方がアイクらしいよ」

「そつだな・・・」

しばらくして、他のみんなも帰ってきた。おおかた調べ終わつたらしい。

「このことと同じように、兵士の死体が散乱しています。結構な数ですね」

セネリオの報告に、ティアマトが聞く。

「クリミア兵のもの？」

「いいえ。鎧で見る限り、デイン兵の方が、ずっと多いみたいです」
その答えに、アイクはさっき自分で考えたことをセネリオに質問する。

「クリミア軍が優勢なのか？」

だが、セネリオは首を横に振った。

「その反対でしょう。クリミア兵の鎧は、近衛 このえ のものでした。国王ラモンか、王家の誰かが・・・移動中にデイン軍の攻撃を受けたと考えるのが自然です」

元クリミア騎士のティアマトは、青ざめた。

「まさか・・・王弟レニング卿？」

「いえ、正規軍が戦っている以上、指揮を執るレニング卿がそこにいないとは思えません。おそらく、それ以外の・・・」

その時、ずっと話を聞いていたガトリーが声を上げて全員を注意する。

「お、おい！　デイン兵がこっちに近付いてくるぞ！」

「！？」

そちらを見ると、黒い鎧を身にまとった集団が、街道をこちらに向かってくるのが分かった。今から隠れるのは遅すぎる。ひときわ重厚な甲冑に身を包んだ男が、兜を外して部隊に停止命令を出す。黒い甲冑を見につけた男は、アイク達に呼びかけた。

「おい貴様ら、何者だ！？　こんなところで何をしている！」

ティアマトはその男に言い訳をする。

「私たちは怪しいものでは……」

だが、リーダー格の甲冑男は全く聞き入れない。

「武器を所持する一団か……全員武装解除し、我らに投降すればよし。さもなくば……」

シノンも抗議をするが……

「おい、勘違いするんじゃないよ！　オレたちは別に……」

聞き入れてはくれない。

「……おとなしく従う気はなさそうだな。全兵、攻撃態勢に入れ！　この一団を駆逐する！」

「了解、マイジン隊長！」

マイジンというらしい甲冑男の部下のデイン兵たちは一斉に武器を構え、隊列を組む。マイジンも兜をまたかぶった。

「くっ！　なんて乱暴な・・・！！」

ティアマトは唇を噛みながら馬に乗り、斧を手にとった。
セネリオもため息をつく。

「戦闘に巻き込まれると、後々、面倒なのですが・・・」

「だが、向こうは話を聞いてくれる気はなさそうだ。応戦するぞ！」

アイクの手には、鉄の剣が握られていた（リガルソードは1つしかない貴重品でおいそれと使えないから）。

シノンも弓を取り出して、アイクに詰めかかる。

「さあて、アイク。お手並み拝見と行こうか？　さつさと指示を出せよ。てめえの言うとおりに動いてやるからさ」

「分かってる、今考えてるから。ちょっと待っててくれ、シノン」

「ケッ」

考えはすぐに思いついた。

「・・・すぐその茂みにいる奴らを倒して、そこを拠点に粘ろう。この数相手じゃ分が悪いし、街道は隠れる場所が無くて危険だから」

まず動き出したのは、セネリオだ。茂みの中に紛れて、呪文詠唱を始める。対象の剣士は、まだ気が付いていない。

「・・・ウインド！」

緑の魔道書を片手に、セネリオは叫ぶ。その声に剣士は気が付くが、時すでに遅し。セネリオの手から繰り出す風の刃に、全身を切り刻まれる。

「ぐわあ！ 何だこの風はあ！？」

剣士は全身血だらけになる。

セネリオが得意とする風属性の魔法は、強力な風を起こして敵を攻撃するものである。ドラクエで言うバギ、FFで言うエアロみたいな感じのものだ。

リンクがスマブラで使う疾風のブーメランも、これに近いと言える。

「お前か、風魔法を放ったのは！ おのれ！！」

剣士は鉄の剣を構えて、茂みにいるセネリオに斬りかかるが・・・。

ガキン！！

青くて巨大なもの・・・ガトリーが間に入り込み、鎧にはじかれてしまう。

「そうはさせないっすよ！ やあっ！！」

ガトリーは槍を手に、剣士を思い切り突き飛ばす。剣士はもう、起き上がらなかった。

「えーい！！」

ドカツ！！バシュ！！

「ぐおああ！！！」

ティアマトは鉄の槍を所持したソルジャーを、鉄の斧2振りで倒す。倒した後は再び馬を走らせ、茂みの方へ駆けていく。

と、その時だ。

ヒュッ・・・グサッ！

「！！」

ティアマトの肩に、矢が突き立った。ティアマトはそれを引き抜くが、傷はそれなりに深くて出血がひどい。

「ティアマトさん！ 今治療します！」

キルロイがライブの杖を手に、駆け寄ってきた。杖をかざすと、光が起こる。

「ライブ！」

傷は跡形もなく治療された。

「ありがとうキルロイ。・・・何だか、1年前を思い出すわね・・・

」

「そうですね。あ、でも今は戦闘中ですから」

「そうね。じゃあ、また怪我をしたらよろしくね」

ティアマトはこの物語の1年前に、あることでキルロイに世話になったことがあったのだ。キルロイがこの団に所属するようになったのも、それが元となっている。

「ケツ、てめえらの動きなんざ、止まって見えるぜえ」

シノンは次々と矢を放ち、敵をものすごい勢いで減らしていく。

「くっ・・・何だあいつは！？ 信じられないくらい強いぞ・・・

」

「あんな奴と戦っちゃ駄目だ！ 他のやつを狙え！」

しかし、デイン兵の多くはシノンの挑発に乗せられて、無謀な戦いを挑んでしまっている。

「ぬうん!!」

ドカアアア!!

アイクは近付いてきた戦士を鉄の剣で叩つ切る。だが、敵はまだ多くいた。

「くそ! でやあ!!」

居合斬りで、敵を斬り飛ばす。その時、彼の死角からソルジャー（槍を使って戦う一般的な兵士）が、鋼の槍でアイクを狙っていることに、彼は気付かない。

「死ね!」

「!?!」

しかし、ソルジャーが鋼の槍を振りかざしたその時、強烈な風が身を包んだ。ソルジャーは、風に身体を切り刻まれる。

「ぐぎゃああ!!」

風を放ったのは、セネリオだ。

「ソニックウインド!!」

直後、セネリオはウインドを連続で叩きこむ。ソルジャーはなすすべもなく、かまいたちの餌食となった。

「セネリオ、助かった」

「いえ、アイクが無事なら僕は・・・」

敵も順調に片付き、残るはマイジン含めて数人となった。

「ふん、傭兵風情が我らとともに張り合おうとはな。身の程知らずも甚だしい」

マイジンは未だに余裕そうにいる。

アイクは答えた。

「相手の話も聞かないで、一方的に仕掛けてくるってのが、デイン軍人のやり方か？」

その言葉に、マイジンは怒気を含んだ声で応じた。

「・・・小生意気な小僧だ。死して、後悔をするがいい。おい、そのお前」

「は、はい？」

マイジンに呼ばれたアーチャーは、困惑した様子でマイジンを見る。

「あの小僧を仕留めろ。外したら・・・どうなるか分かっているだろうな？」

「む・・・無論でございますー！」

アーチャーは、震えながら弓を構える。ティアマトは非難の声をあげる。

「あなた、人としてそれはどうなの！？ 自分の部下を、何だと思っ
っているの！？」

マイジンは涼しく答える。

「傭兵風情が何をわめいている。戦場で戦う兵は皆指揮官の手駒に
すぎぬのだ」

ティアマトはそれに対してもう、何も答えなかった。

確かに兵士は指揮官にとっては手駒だ。

でも・・・兵士一人ひとりにも、家族が、友がいる。皆、必死に生
きている。どうして、こんなことで死ななければいけないのだろう。
・・・。

アーチャーはアイクめがけて矢を射た。だが、アイクはそれを反射
的に剣ではじいてしまう。

アーチャーの顔は、みるみる青ざめる。

「あああ・・・す、すみません隊長！！」

「・・・貴様、外したな？ 上官の命令に従わなければ死刑、とい
う、デイン軍規を忘れたとは言わせないぞ」

「や・・・いやだ・・・し、死にたくない・・・！！」

「死ね」

グサツ!!

マイジンの手にした手槍は、アーチャーの体をつらぬいた。

その瞬間、アイクの中で何かがはじける。

「あんたは・・・最低だ!!!!」

気が付くとアイクは、グレイルからもらったリガルソードを抜いていた。リガルソードの刀身は、夕日を浴びて燃えるような色合いとなっている。

リガルソードを片手に、アイクは突進をする。

「小僧に何が分かる。食らえ」

マイジンは手槍をアイク目がけて投げつける。手槍は正確にアイクに向けて飛んでいく。走っている今のアイクなら、必ず当てられるとマイジンは確信していた。しかし。

「せい!」

何とアイクは、飛んでくる手槍を踏み台にして空高く大ジャンプをした。手槍はガシャンという音を立てて、地面に落ちる。

「何だと!?!」

「でやあああつつ!!!」

リガルソードを両手に持ち、落下の勢いそのままにアイクはマイジンを斬りつけた。リガルソードの刀身は、甲冑ごとマイジンを斬り裂く。

「ガッ・・・ハ・・・貴様ら・・・デインに逆らった・・・こと・・・後悔・・・」

マイジンは、倒れた。

「とにかく、ここを離れて砦に戻ろう。親父に報告をしないとな」

シノンがデイン兵の死体から鋼の槍や手槍などをいくつか頂いていたが、アイクは全員をまとめる。戦いに支障のある者は、どうやらないみたいだ。

「こちらの道から行きましょう。森を斜めに抜けられたはず・・・」

セネリオが言いかけたが、途中でなぜか言い留まる。

「どうかしたか？」

アイクがそう聞くが、

「いえ、やはりこの道は・・・」

セネリオはこう言う。

一体何が・・・と思っていると、ガサガサという音が聞こえた気がした。

「アイク！　今、あの茂みの向こうで何かが動いたみたいだ！」

キルロイがアイクに注意する。

「負傷兵か？　行ってみよう」

キルロイが、先に茂みの中に入っていた。

「キルロイ、何か見つかったか？」

「・・・女の人が・・・」

アイクが見ると、キルロイの目の前の木の根元に、女性・・・というか少女というくらいの年齢と思われる人物が倒れている。

エメラルド色の髪に、色白の肌、薄いオレンジ色のドレス。きれいな顔立ちをしているが、目を固く閉じている。

「・・・放っておきましょう。余計なことに関わらない方がいい」

セネリオもやってきたが、そんなセリフを言い放つ。その後続くガトリーはひたすらわめく。

「何でだよセネリオ！　こんなにかわいいコが倒れてるのに見

捨てるなんてひどいじゃね〜か〜！」

アイクとキルロイは、そんな会話など全く気にしていない。
少女が小さなうめき声をあげる。

「……う……」

それを聞いて、キルロイが安心する。

「よかった。気絶してるだけみたいだね」

アイクも安心する。

「よし、連れて帰って手当てしよう。キルロイ、手を貸してくれないか？」

「いいよ」

アイクとキルロイは、少女を連れ帰ることにした。

この出会いが彼らの人生を大きく変えていくことを、アイクはまだ知らない……。

4章 く街道の戦い く 後編（後書き）

ガトリー「ああ、かわいいな、あのコ。これは運命の出会いの予感が。」

シノン「ったく。お前な、いい加減その性格変えたらどうだ？」

ガトリー「ああ・・・絶対これ赤い糸ですよ。」

シノン「全然聞いちゃいねえか・・・。」

オスカー「まあそれはさておき、次回は『5章：脱出』です。」

ボーレ「おれたちも活躍するから、よろしくな！」

逃避の果てに（前書き）

王都メリオルへの街道のわきで、一人の少女を助けたアイク。

この出会いが彼の人生を大きく変えていくということも知らず・・・。

逃避の果てに

く傭兵団の砦く

アイクとグレイルは、砦の広場にて剣の訓練をしていた。もちろん、手にしているのは例の訓練用の木刀である。

「だあーっ!!」

バシッベシッ!

アイクの攻撃は、相変わらずグレイルには全く通らない。グレイルは無駄なく木刀でアイクの打撃を全て防ぐ。

「ふんっ」

ドカツ!!

「ぐわああっ・・・!!」

グレイルの一撃で、またしてもアイクは吹っ飛ばされる。

・・・『グレイル団長は、すごい人だけど・・・アイクなら、きつと追いつける』・・・

(・・・キルロイはそう言ってくれた。だが、今の俺ではまだ全然かなわない。なら、努力するのみだ)

アイクは再び立ち上がり、木刀を構えた。

一方、砦の中の一室では・・・

ミストが、一人の人物を看護していた。ベッドに横たわり目を閉じているのは、アイク達が街道で助けた“あの少女”だ。

「・・・う・・・ん・・・」

少女がうめき声を出す。

「あ、気が付きました？」

ミストは、彼女の額に置いてある水をしみ込ませた布を取って、聞く。

「・・・ここは・・・？」

「よかつたゝ気が付いたみたいですね。ちょっと待ってて下さいね。お父さんたちを呼んでくるから！」

ミストは元気よく、飛び出していった。

「お父さーん！ お兄ちゃーん！」

アイクとグレイルは、その声で訓練をやめた。声が聞こえた方を見ると、ミストがいつぞやの訓練の時のように手を振りながら、走ってきた。

「ミスト、何があつたんだ？」

アイクが聞く。

「あの女の人、目が覚めたよ！」

「！」

グレイルはそれを聞いて、砦の方に歩きだす。

「よし、会いに行くか」

アイクとミストも、それに続いた。

「具合はどうだ？」

グレイルは、碧玉のような色をした髪の少女に聞く。少女はまだ警戒した様子だが、答える。

「え、あ．．．はい。大丈夫です．．．あなたは．．．？」

「俺はグレイル。この傭兵団の長だ」

すると少女はベッドから起き上がる。

「グレイル様・・・私を助けてくださったのですね？ 何とお礼を申し上げればよいか・・・」

グレイルは首を振って、アイクを向いた。

「おっと、あんたを見つけて連れ帰ったのは、息子のアイクだ。礼ならこいつに言ってくれ」

「え、いや、俺は別に・・・」

アイクはそう言うが、少女は構わない。

「アイク様ですね・・・？ ありがとうございます」

「ああ・・・」（俺は別にそんな大したことしてないんだが・・・）

グレイルが咳払いをして、二人の注意を引く。そして、話を切り出す。

「早速で悪いが、聞きたいことがある。・・・あんたは、一体何者なんだ？ なぜあんな場所に倒れていた？」

「・・・」

碧の髪の少女は、答えない。グレイルはまだ続ける。

「あんたを拾ったあたりは、クリミア近衛騎士とデイン軍が激しくぶつかり合ったところのようだ。・・・あんたは、クリミア王家ゆかりの者か？」

「・・・」

少女はまだ答えない。目までつぶってしまう。今度は、アイクが聞く。

「ひよつとしたら俺たちが、力になれるかもしれない。話してくれないか？」

するととうとう、少女は目を開ける。澄んだ瞳が、妙に印象的だ。

「・・・私を救ってくださった、あなた方を・・・信じます」

少女は、問いに答える。

「私は、エリンシア・リデル・クリミア。クリミア王ラモンの、娘です」

そう、彼女は・・・

クリミア王国の王女なのだ。

逃避の果てに（後書き）

とある事情で、5章の冒頭で止まってしまってますみません……

次回はちゃんと「5章：脱出」を予定していますので、今度こそよろしくです！

5章 く脱出く 前編（前書き）

アイクが王都への道のわきで助けた少女は、クリミアの王女エリンシアを名乗った。

エリンシアは、自分は王位継承争いを避けるべく、隠されていたことをグレイルとアイクに伝える。その事實は一般には知られていないが、各国の王族には伝えられているらしい。

つまり、デイン国王アシュナードは、血眼になってエリンシアを探しているということだ。

彼女の目の前で、アシュナードは、彼女の両親を殺した。その後エリンシアは、王弟レニング（つまりエリンシアの叔父）により脱出の手助けをされ、クリミア王国軍第5小隊を護衛に伴って王都から逃走を図る。

だが、途中でデイン軍に追いつかれ、第5小隊はほぼ全滅した。エリンシアはその混乱のさなか、奇跡的に発見されずに済んだのだ。

エリンシアは傭兵団に、自分を南の「ガリア王国」へと送ってほしいと頼んできた。

ガリア王国は、クリミア王国とは同盟を結ぶ国である。

両親を失い、王弟レニングの行方も知れない今、彼女には他に、頼るものが無いのだ・・・。

5章 く脱出く 前編

く傭兵団の罅く

「クリミアの王女？ 本当に？」

アイクはティアマトに、先ほどの話の報告をした。するとティアマトは、驚いた表情を返す。

無理はない。いきなりこんな貧乏傭兵団に、自国の、しかも隠された存在である王女がやってきたから・・・。

「親父は本物だと考えているような口ぶりだったな」

「そう・・・」

ティアマトは目を虚空に向け、何かを思い出しているかのような表情になる。

「ティアマト、どうかしたのか？」

「ううん、何でもないわよ」

だが、アイクは何を考えているか、だいたい予想が付いた。

「昔、ティアマトが王宮騎士だったころのことか？」

するとティアマトは、驚く。

「！　どうして、それを知ってるの！？」

「前に、シノン達が噂してるのを聞いた」

ティアマトはそれを聞くと、ため息をつく。だが、なぜかどこか安堵したようなため息だった。

「もう・・・口が軽いんだから」

「秘密だったのか？」

「そうじゃないけど・・・アイクより多くの経験を積んでいる分、心配事もたくさんあるのよ」

（心配事、か・・・）「クリミア王女のこととか？」

あえてアイクは、深くはその心配事については問わなかった。

「そう、ね。私自身は彼女のことは知らなかったんだけど・・・言われてみると、彼女の容姿は、国王夫妻のどちらにも・・・よく似てるわ」

「じゃあ、やっぱり本物なんだろうな。・・・親父はどうするつもりだろう。王女の依頼を受けるのか・・・」

アイクとしては、エリンシアを助けたいと思っていた。彼女には、頼るものがないから。

不意に、足音が響いてくる。二人が戸の方を向くと戸が開いて、薄

緑の髪の少年が息を切らせて駆け込んできた。ヨファだ。

「ヨファ、一体どうしたんだ？」

ヨファは呼吸を整えるのもわずらわしそうに、答えた。

「た、大変だよ！ 外に、兵隊がいっぱい・・・！！」

「なんだって！？」

傭兵団の砦は、完全に包囲された。夜のため暗くてよく分からないが、偵察してきたセネリオによると、デイン軍が包囲したらしい。指揮官はダッコーワという重歩兵のようだ。

グレイルの命令で、全員は作戦室に集められた。

「団長、デインの連中はなんて言ってるんだ？」

シノンの問いに、グレイルは答える。

「・・・クリミア王女を直ちに引き渡し、この地を去れ。さもないと、攻撃を開始する・・・だそうだ」

団員はそれを聞いてざわめく。ガトリーもグレイルに聞く。

「ど、どうするんっすか？」

「それを、これから決める。ただ、連中が来たことで一つ、はっき

りしたことがある」

グレイルのセリフに、セネリオが続ける。

「彼女が・・・本物のクリミア王女だということですね」

グレイルは団員全員を見渡した。

「団そのものを左右する問題だ。ここにいる全員の意見を聞きたい」

ティアマトは元クリミア騎士ということもあり、やはりエリンシアをガリアに送り届けるべきという意見を出す。それに対してセネリオは、徹底的に物事を現実的に考え、デイン軍に引き渡した方が利になると意見を出した。

シノンはガリアという国そのものが嫌いらしく、セネリオに賛成する。ガトリーは優柔不断な性格もあってか、全員の決定に従うという意見だ。

オスカーは王女の命を救うべく、ボーレは「助けた方がカッコいいから」という理由でティアマトに賛成。

キルロイは、困っている人は放って置くべきではないという意見で、ティアマトに賛成。ミストとヨファも、ティアマト派だ。

「最後にアイク、お前はどうか？」

グレイルから、アイクに問いかける。アイクの心はすでに決まっ

いた。

「・・・ティアマトの意見に賛成だ。王女を助け、ガリアを目指そう」

「なるほど。・・・では、決を伝える。我々は、王女をガリアまで護衛する」

セネリオとシノンは残念そうだったが、多くの他の団員は嬉しそうだ。

アイクは、一応グレイルに聞く。

「・・・本当に、それでいいのか？ 親父」

「ああ。どっちみち、選択の余地はなくなったようだからな」

「え？」

グレイルの言う意味がまるでよく分からないのは、アイクだけではない。そんな団員に向けて、グレイルは言う。

「耳を澄ませてみる。ほら、全員だ」

耳を澄ませたが、全く何も聞こえない。

「つつつても・・・」

「何も・・・聞こえないんっすけど・・・」

ボーレとガトリーも疑問に思っただけらしい。

と、シノンが注意する。

「バカ野郎！　それが問題じゃねえか！　おかしいと思わねえか？
四方全てから音が聞こえないなんてよ」

「ああ、そう言うことっすか！」

ガトリーが納得する。確かに、おかしい。

「・・・獣たちだけでなく、虫の声も聞こえない。これは、いくらなんでもおかしい。つまり・・・」

オスカーの言葉を、アイクは継いだ。

「デイン兵に囲まれた！？」

グレイルは、重々しくうなずく。ティアマトも険しい顔で言った。

「どうやら、最初から約束を守るつもりなんてなかったようね」

セネリオも、デインにエリンシアを引き渡すことはあきらめたようだ。

「我々を油断させ、この砦を始末というところでしょうか」

グレイルは立ちあがる。

「だろうな。・・・だが、こちらもそれに乗ってやるほど甘くはない。全員、配置に付け！　一気に片付けるぞ！！」

砦の外には、夜の闇にまぎれて大勢のデイン兵が待機していた。デイン兵たちは静かに砦の入り口を見ていると、中から傭兵団のメンバーが出てきたのを認める。

「！！ 傭兵どもが武器を持って出てきた！ ダッコーワ將軍に報告しなければ……！」

「ダッコーワ將軍、報告します！ 傭兵どもが武装し、砦の入り口に現れました！」

さっきのデイン兵は、砦の前の坂を下りたところにいた甲冑の男に報告をする。この男こそが、ダッコーワだ。

「ほう……こちらの計略が気取られたか？ だとすれば、一筋縄ではいかん相手らしい」

「作戦は続行しますか？」

デイン兵が聞くと、ダッコーワは首を横に振る。

「いや、砦にはクリミア王女が匿われている。火矢を射かけさせ、いぶし出す作戦では、王女に負傷させる恐れがあったからな。できるだけ、無傷のまま連行せよとお達しだ」

そして、ダッコーワは手にした手槍を振り上げ、命令を下す。

「奴らが出てきたのなら、むしろ好都合。王女以外は抹殺せよ！
攻撃、開始！！」

オオーーーーー！！！！

グレイル傭兵団も、進撃準備は済んでいた。グレイルはこの正面での戦いの指揮をアイクに任せる。

「裏口は、俺が押さえておこう。アイク！ここはまかせたぞ。敵に入口を奪われるな！」

「わかった。気をつけるよ、親父！」

「フツ、そうしよう」

グレイルが裏口に走っていったのを見て、アイクは指示を飛ばした。

「正面は、ガトリーとティアマトが押さえてくれ！シノンはその後ろから弓で支援を！」

オスカーとボーレは、西の方の入り口を塞いでくれ！セネリオは二人の後ろから魔法を頼む！

キルロイは安全な後方で待機して、トーチの杖で暗闇を照らして、けが人が出た時の治療も頼む。

俺は、戦いの厳しい正面を手伝う。暗いから、みんなはなるべく前に出ないでくれ！

・・・じゃあ、こつちも出撃だ！」

アイクの指示に従い、団員全員は所定の位置に向かって行った。

5章 く脱出く 前編（後書き）

またまた前半と後半に分かれちゃった・・・。

戦いの様子は、また次回に書きますね。

あと、新しく「蒼炎のもとで」という小説・・・じゃないけど・・・を書いていきます。この物語の登場人物について簡単に書いていくので、そちらの方も併せてご覧になって頂けたらと思います。

では、また！

5章 く脱出く 後編（前書き）

傭兵団の砦を包囲したデイン軍は、傭兵団に対してエリンシア姫の引き渡しと立ち退きを要請する。

だが団長グレイルは、デイン軍は約束を守る気はさらさらないことを見破り、団員に徹底抗戦の命令を出した。

デイン軍と傭兵団の間で、今、戦いが始まる。

5章 く脱出く 後編

く傭兵団の砦く

「トーチ！」

キルロイが杖を振りかざすと、手にしたトーチの杖からは光があふれる。砦の周囲は、昼間のような明るさとなった。

「セネリオ、行きます」

セネリオはウインドの魔道書を片手に出撃をする。西の門から侵入を試みるデイン軍のソルジャーが、セネリオに気付く。

「お？ ガキは引っ込んでオネンネしてるよ。何ならこのおれが永遠に眠らせてやるぜ？」

ソルジャーは鉄の槍を手にセネリオに襲いかかる。だがセネリオは落ち着き、ソルジャーに向けて手をかざす。

「・・・ウインド！」

セネリオの手からは、強力な風が巻き起こる。風はかまいたちとなつて、ソルジャーの体を切り刻んだ。

「ぐ、ぐわあ！ な、何だこの風は！？」

傷だらけになり、ソルジャーはセネリオをにらむ。

「やりやがったな!! 死ね!」

鉄の槍をセネリオに向けて突き出す。しかし……。

ガキン!!!

緑の鎧をまとった騎士……オスカーが、セネリオの前に現れ、敵のソルジャーの槍をはじく。

「な、何だと……!」

「はあっ!!」

ザシュツ!!

オスカーは滑らかな動きで槍を操り、ソルジャーを倒した。

そんな彼らの横を、ボーレが雄たけびを上げながら突っ走っていく。

「おれはこの傭兵団の戦士ボーレだ! デインの野郎ども、かかってきやがれ!!」

すると、鋼の槍を持ったデイン兵がボーレに向かって行った。

「ふん、この槍のさびとなるがいい!!」

だが、ソルジャーの動きが遅くてボーレにはまるで当たらない。どうやら、力が足りなくて鋼の槍をともに扱えていないようである。

「へへっ、武器に振り回されてるぜ！」

ドカツ!!

「ぎゃああ!!」

ボーレはあっさりとソルジャーを鉄の斧で倒した。

「けっ、デインの連中め・・・さっさとここから出てけよな」

ヒュッ・・・グサッ!

「ぐおっ！」

シノン正面から突入をしようとするデイン軍の剣士に、必殺の一撃の矢を放つ。

しかし、そんなシノン目がけて、ソルジャー数人が一斉に手槍を投げつけた。シノンはそれを余裕でかわす。

「そんなにこのオレさまにかまってほしいってか？ やれやれ、このくらいの美女に囲まれてみてえもんだぜ」

ヒュンヒュンヒュン・・・ズガガガ!!

矢の雨を降らせて、敵を一掃する。

「シノンさーん、おれの方も少しはとっておいてくださいよー」

少し遅れて、ガトリーがやってくる。

「はぁ？ お前の足が遅いせいだっつーの」

「無茶言わないでくださいよー！ こんな鎧身に付けてたら速く走れるわけ・・・」

「おいガトリー。前見ろよ。敵がお前を狙ってるぜえ？」

見ると確かに、一人の剣士がガトリーに向かってくる。

「お！ じゃあおれも早速行きますね！ うおー燃えてきたぜー！
」

張り切ってガトリーは槍を振り回す。その横を、白馬にまたがったティアマトが走ってゆく。

「デインの思い通りにはしないわ！ 必殺の一撃！！！」

ティアマトは鉄の斧を敵のアーチャーに向けたと思った次の瞬間、大きく振りかぶって斧を振りかざす。

ズッシャアアア！！

アーチャーは一瞬で飛ばされ、もう立ち上がらなかった。

アイクは南の門の前で、剣士と相對していた。剣士がアイクを挑発してくる。

「この数相手に抵抗するとは、ずいぶんと身の程知らずな傭兵団だな」

「・・・そうかもしれない。だが、俺は傭兵団のみんなのため、依頼主のため、あんたたちに抵抗する」

アイクはそう返した。そんな彼に、橙色の髪をしたデインの剣士は続ける。

「ふふつ、なかなか威勢がよいことだ。・・・この俺にも、かつては家族がいた。今となつては、何も残っていないがな・・・」

（なんだ、こいつ？ 何を一人で言っているんだ？）

アイクは疑問に思ったが、相手はそんなアイクのことなど気にせず、に襲い掛かる。

「・・・戦いに私情は不要だ。覚悟！！」

橙色の髪の剣士は、鉄の剣を構えたままアイクに向かって走ってきた。アイクは冷静になって考える。

（・・・親父から教えてもらったあの技、使ってみるか）

アイクは動かないまま、剣士を待つ。そしてある距離に達した瞬間、アイクは特殊な剣の構えで敵の剣を受け止めた。

ガキーン！

「な、何だと・・・！」

「・・・そこっ！・・・！」

スパアアン！！

一気に鉄の剣を振り、橙色の髪 of 剣士を斬り飛ばす。カウンターという、反撃の剣技だ。

「く・・・エディよ・・・駄目な親父を許せ・・・」

橙色の髪 of 剣士は、そのまま果てた・・・。

「・・・どうなっている！ 完全に包囲したのではないのか！？」

デインの将であるダッコワは、報告に来たデイン兵に大声で聞き返す。

「は、はい。しかし、傭兵どもがあまりにも強く、次第に我々は押されつつあります・・・！」

「くそっ・・・おいお前！ 今すぐに援軍要請ののろしを上げろ！」

「はい、ただいま！」

デイン兵は大急ぎで、のろしを上げに向かう。その姿を見やり、ダッコワは頭を抱えた。

「クリミア王女を匿う傭兵団・・・まさかこれほどの強さとは・・・」

ヒュルルル・・・どどーん！！

夜空に、赤い煙が上がる。その様子をオスカーが見て、首をかしげる。

「何だ？・・・敵が上げたのろしか？」

すると、キルロイに怪我の治療をもらって戦線に復帰したセネリオが、それに答えた。

「そのようですね・・・もしかしたら敵の増援があるかもしれない。気を付けてください」

「セネリオ、分かった。私が他の団員に伝えてくるから、君はボレと一緒にここの門を守っていてくれ」

オスカーは馬を走らせ、南門に向かった。

「みんな、伝令だ！」

南門で戦っていたアイク達のもとに、オスカーが駆け込んでくる。

「オスカー、どうしたんだ？」

「アイク！ セネリオが、さっきのろしは敵の援軍要請かもしれないと言っていたんだ。それを伝えに来たんだ」

アイクはそれを聞いて、周りのみんなにも伝えた。

「オスカー、わざわざすまん。・・・よし、みんな！ 敵の増援に備えて、一度門の中まで撤退してくれ！」

アイクの指示に従い、団員は皆砦の庭まで前線を下げた。

程なくして、増援が到着する。

西門では、騎兵達が一気になだれ込んできた。ボーレとオスカーで門を塞ぎ、セネリオが魔法で援護をする。

南門は、ソルジャーたちが大挙して突撃を試みる。ガトリーとテイアマトで前線を守り、シノンとアイクが時たま攻撃に参加する。

「キルロイ、また周りが暗くなってきたぜ！」

ボーレが後ろのキルロイに向かって叫ぶ。

「わ、分かった。・・・トーチ！」

トーチの魔法で、再び辺りは明るくなる。トーチによる明るさは、時間をおくとだんだんとまた暗くなってきてしまう。ゆえに、たまに唱え直す必要があるのだ。

「ケツ、いい加減敵さんの相手には疲れてきたぜ・・・」

シノンはだんだんと疲れてきたみたいだ。シノンだけではない。

「敵が多すぎる・・・いつまで続くんだ・・・」

アイクも、他の団員も、かなり疲労が溜まってきていた。

「ダッコーワ將軍、報告します！ 援軍要請も行いましたが、傭兵たちは未だに一人も死者を出しておりません。このままでは、我が部隊の消耗だけが嵩んでしまいます！！ どうか、撤退命令を！」

報告係のデイン兵は、青ざめた様子でダッコーワに報告する。それを聞くダッコーワもまた、青ざめた顔をしていた。

「なぜだ？ どうして傭兵団の一つすらつぶせぬ・・・！？ 撤退は出来ない・・・こうなったら、この私自ら出撃するしか・・・！！」

「！？ 將軍御自らですか！？ お願いです！ どうかここにとどまって指揮を・・・」

デイン兵は必死にダッコーワを説得したが、ダッコーワは聞く耳を持たない。

「いや、私自身が行くしかなく・・・」

何かに取りつかれたような様子で、ダッコーワは砦に向かって歩き出していた……。

「どうやら、敵がまばらになってきたみたいね」

ティアマトは斧を振るいながら、ふと思ったことを口に出す。隣にいたガトリーに話したのかもしれないが。

「え？ あ、そういえばそうみたいっすね」

後ろにいたアイクとシノンも、少し困惑した様子だった。

「どういうことだ？」

「オレに分かるかっての」

そんな彼らの前に、甲冑で身を包んだ男が現れる。

「傭兵ども……貴様らはこの私が倒す！」

アイクは思った。たぶん、こいつがセネリオが言っていた、この部隊の将であるダッコーワという男だろう。こいつを倒せば、戦いは終わる！

「おっと、敵の將軍さんがお出ましじゃねえか。……かかってこいよ、卑怯なデインの將軍さんよお」

「な、なんだと……!!」

シノンの挑発に乗り、ダッコーワは手槍をシノンに投げつける。だが、シノンは余裕でそれをかわした。

「その程度の強さで將軍？　ハッ笑っちまうぜ」

ヒュッ・・・ズガッ！！

シノンが反撃で放った矢は、ダッコーワの鎧のつなぎ目に正確に突き刺さる。ダッコーワはその痛みで悲鳴を上げた。

「シノンさん、ナイスっす！　じゃあ、おれからも行かせてもらうつすよ！」

ガトリーがダッコーワの前に立ちふさがる。ガトリーの手には、鉄の槍が握られていた。

「おれの一撃を食らうつす！　・・・やあああ！！」

ガトリーは槍を頭上で回転させ、その勢いでダッコーワに強烈な一撃を叩きこむ。

ブンブンブン・・・ズシャアアア！！

「グハッ・・・信じられ・・・ん・・・一体何が起こ・・・」

こうして、ダッコーワは倒れた。その様子を見て、周りのデイン兵たちは急に慌てだした。

「ダッコーワ將軍を失い・・・兵を失い・・・もはや、これまでか・

・・」

さっきダツコーワに報告をしていたデイン兵は、周りの兵に大声で呼びかける。

「・・・退却だ！ 速やかに退却せよ！！」

その声が響き渡ると、デイン兵は全員、蜘蛛の子を散らすように撤退をしていく。中には武器を放り捨てて逃げていく者もいた。当然、そういった武器に興味を示すのはシノンだ。

「お！ あいつらなかなかいい武器持ってんじゃないか！ こっちは鉄の大剣で、こっちはハンマーか」

で、セネリオはそれをとがめるのだった。

「シノン、そんな場合じゃないでしょう！ 我々も、砦に戻りますよ」

「ちっ、いいじゃねえか・・・」

こうして、砦を守り抜いたアイク達グレイル傭兵団。

彼らには今後、どのような運命が待っているのだろうか・・・。

5章 脱出 後編（後書き）

更新が遅れてしまいましたが、何とかできました！

今回は、「炎の紋章」を予定しています。

6章の方は、また後日！

炎の紋章（前書き）

クリミア王女エリンシアを狙ってグレイル傭兵団の砦を襲撃したデイン軍の一個小隊は、傭兵団の予想以上の反撃によって撤退していた。

ダッコーワ將軍を討ち取ったグレイル傭兵団は、デイン軍の更なる追撃を警戒し、脱出の準備を始めるのだった。

「付近から、敵の姿がなくなりました」

セネリオがアイクにそう報告していると、そこへ裏門を守っていた団長、グレイルが戻ってきた。

炎の紋章

辺りに立ち込めるのは、鉄と血のにおい。先ほどの戦いの激しさを思わせる。アイクは、セネリオの報告を聞きながら、一人思った。

（これで完全に、デイン王国を敵に回したというわけだな・・・）

そこへ、足音が聞こえてくる。誰もが、誰の足音かすぐに分かった。グレイルが、戻ってきたのだ。

月明かりに浮かびあがったグレイルは、着ている皮鎧やマントに多数の血が付着していた。だが、動きが全く鈍っていないのを見ると、どうやら全てが返り血らしい。あの激戦の中で、無傷とは・・・。

グレイルは巨大な戦斧を担いだまま、集合した傭兵団のメンバーに向け、声を張り上げた。

「休んでいる暇はないぞ。全員、荷物をまとめろ！ 敵の増援が来ないうちに脱出する！」

「了解しました！」

すぐ近くにいたオスカーは、自分のするべき仕事を瞬時に考えて、返事をする。そして、隣できずくすりを飲んでけがの手当てをしていたボーレを呼ぶ。

「ボーレ、こつちだ！」

「あいよ、兄貴！」

オスカーとボーレが砦の中に駆け込んでいくのを見て、ミストもあわててヨファを呼んだ。

「わわっ、わたしたちも急がなきゃ！ 行こ、ヨファ！ 日持ちする食べ物、いっぱい詰め込まないと！」

「う、うん。ミストちゃん！」

ミストはヨファを半分引きずるように、倉庫の方に歩いて行った。

グレイルはティアマトを呼んだ。

「ティアマト！ お前は、シノン、ガトリーを連れて先行し、この砦から、ガリアに続く樹海までの安全路を確保してくれ」

「了解しました！ シノン、ガトリー、行きましょう」

ティアマトに呼ばれて、二人が手早く準備する。

「分かったす！」

「しょうがねえ、行つてやるか」

残ったのは、アイクとキルロイだ。グレイルはキルロイを手で招く。

「キルロイは、こつちだ。書棚から、必要な書類を選び分けるのを手伝ってくれ。残りは全て燃やすぞ！」

「は、はい！」

最後に残ったアイクは、キルロイを伴って砦の中に入ろうとするグレイルを呼び止めた。

「親父、俺は一体何をすればいいんだ？」

「アイク！ 王女のことはお前に任せるぞ」

「分かった」

グレイル達と入れ違いに、クリミア王女エリンシアは砦内から出てきた。

「アイク様、お怪我はございませんか！？」

「ああ、俺のことは大丈夫だ。心配しないでくれ」

「そうですか・・・」

アイクは、エリンシアの心配をよそに歩き出す。少し歩いてから振り返った。

「俺は、あんたの分の馬を用意してくる。あんたは・・・そうだな、倉庫へ行ってくれ」

「え・・・？」

なぜ倉庫へ行くように言われたのかまるで理解できないエリンシアに対して、アイクは簡単に付けくわえた。

「ミスト達の手伝いをしてれば・・・ただ待ってるより、気分がまぎれるんじゃないか？」

「！ はい、分かりました！」

そう言つて、エリンシアは歩きだし・・・すぐに引き返してきた。

「ん？ エリンシア姫、どうしたんだ？」

「あ、あの・・・誠にお恥ずかしいんですけど・・・」

エリンシアは口ごもる。

「倉庫は・・・どちらでしょうか・・・？」

「ああ、そういえば言つてなかったな・・・あの、灯りがともつてるやつだ。ミストとヨファが食料を詰めてるはずだから、そこで手伝いでもしたらどうだ？」

「は、はい！ ありがとうございます！」

再びエリンシアがそちらにいくのを見送つて、アイクは厩舎の方に向かいだした。

倉庫の中では、ミストとヨファがひたすら、食料を袋に詰め込んでいた。エリンシアはアイクに言われたことを二人に伝えて、そこに腰を下ろす。

「全くも〜お兄ちゃんってば……。エリンシアさまに対して、何てこと言ってるのよ……」

ミストはアイクに対して不満を抱いたが、当のエリンシアは全くそんな無礼など気にしていなかった。

そのうち、オスカーとボーレが手が足りないとかでヨファを呼びに来た。そのため、倉庫の中でミストとエリンシアの二人だけでひたすら詰め込み作業することとなった。

しばらく沈黙が続いたが、ミストがその沈黙を破る。

「うーん、なんか申し訳ないなあ……。エリンシアさまにまで手伝わせるなんて」

「気にしないで、ミストちゃん。それより、かえって足手まといになっっていないといいけど……」

それを聞いて、ミストは首を大きく横に振る。

「全っ然！ わたしなんかより、よっぽどテキパキしてて助かります！ でも……お姫様って、こんなに何でもできるものなんですか？」

確かに、ミストよりもエリンシアの方が荷物がたくさんできあがっていた。

「ふふ、私は離宮育ちだから、普通のお姫様の生活とは違ったのかも。お料理、お洗濯、お裁縫……。何でもしたのよ」

それを聞いて、ミストは感嘆の声を上げる。

「へえ、意外だなあ。そんな風には見えません！」

「そうかもね。でも他にも、乗馬や剣の稽古だって・・・」

そこまで言いかけて、エリンシアはミストの胸元に目をやる。

「・・・あらミストちゃん。その胸元は・・・？」

ミストは慌てた。

「え！？ あ、えつと・・・！」

「？」

慌てて何かを隠そうとしたミストだったが、観念してエリンシアに向き直る。

「・・・エリンシアさまになら、見せてもいいかな・・・」

ミストは服の内側から、首にかけたものを取り出し、手の上に乗せる。

それは、青銅のメダリオンだ。メダリオンの中心に膨らみがあり、そこから放射線状の溝が走る。形だけなら、ごく普通のものだ。

だが、それは普通ではなかった。

なぜなら、不思議な蒼い光がメダリオンの中心から、炎のようにあふれていたからだ。

蒼い炎。そう形容するのが、もっとも妥当である。

「まあ・・・青銅の・・・メダリオンね？　この光は何かしら？」

エリンシアは美しい光に魅了されながらも、首をかしげた。

「お母さんの形見なんですけど・・・。うん、何だろう、この光？　今までこんなことなかったのになあ。このあいだ突然光り出して・・・」

ミストの方も、よく分からないらしい。

「不思議なこともあるものね。だけど・・・とてもきれいな光」

「ほんと、なんなんでしょう？」

二人はしばらく、作業の手が止まっていた。

くクリミア王国東部　ナドウス城く

ナドウス城は、クリミア王国に点在する城砦の中でも、最大のものである。

この城の少し北にあるピネル砦とともに、東方の勢力ににらみを利かせる、クリミア王国の国防のかなめとして建てられたものであったが、先日のデイン軍の強襲により、現在はデイン王国の勢力のもとに、完全に占拠されてしまっている。

武よりも文を重んずるクリミア王国だが、この城は国防のためということもあり、戦いに向いた作りとなっている。だがさすがはクリミアというべきか、城のいたるところには絵画が飾られたり置物があつたりし、窓もステンドグラスで美しく装飾されていた。

そんなナドウス城の奥の間から、女の声が響いてくる。

「・・・はあ！？　今なんて言ったんだい？　あたしの耳はおかしくなったのかねえ、『逃げられた』って、そう聞こえたよ」

声の主は、深い緑の髪に切れ長の目をした女だ。デイン王国軍特有の黒い装備を身に付け、薄い化粧をした顔を憎々しげに歪め、目の前のデイン兵をにらむ。かなりの豊満な体つきだが、どちらかというところと恐怖を感じさせる雰囲気漂っている。

「・・・どうやら、たがが傭兵ごとくと甘く見すぎたようです・・・」

震えながら女に報告しているのは、グレイル傭兵団の砦を襲撃した

部隊の、ダッコーワの部下の一人である。あの、のろしを上げたり撤退命令を出したりしていたデイン兵である。

「・・・ダッコーワ將軍を討ち取るほどの、強敵に対し、我ら一兵卒では、かなうべくもなく・・・」

「で？ おめおめ尻尾巻いて敵前逃亡してきたってわけだね？」

デイン兵の報告を途中で遮って、女は冷たく言い放つ。

「デイン軍規を忘れたとは言わせないよ。成功か失敗、生か死。・・・おい、そこのお前。こいつを連れて行きな！」

すぐ近くで控えていた別のデイン兵は、女の指示を受けて動き出す。

「はっ！ さあ来い！！」

「うわああ！！ い、いやだ！ 死にたくない・・・！！」

報告していたデイン兵は問答無用でひっ立てられ、処刑場へ連れて行かれた・・・。

そんな様子を見送って、女は独り言を言う。

「ったく、どいつもこいつも、まともに使えないねえ」

デイン兵の姿が消えたのを確認し、女はすぐ横に控えていた別の女性を呼ぶ。

「イナ！ 小娘と傭兵団を追うには、どっちに向かえばいいか考え

な」

イナと呼ばれた女性は、浅黒い肌をした人物だった。あまり表情の変化が無い。イナは少し考えてから、淡々と話した。

「・・・クリミア王都メリオルは、すでにアシュナード様の手申・・・クリミア軍残党も残りわずか・・・すなわち、王女の逃亡先は、南のガリア王国しか考えられません」

ガリア、という単語を聞いて、女はまた顔を憎々しく歪めた。

「ハッ、亡き国王ともども親子そろって、あの毛だらけ“半獣”と慣れ合おうってわけかい。まったく、物好きにも限度があるだろうに」

女の独り言を聞いているのかいないのか、イナはまだ淡々と話す。

「ガリア領内に逃げ込まれると・・・王女を捕らえることは、困難になります。・・・護衛についた傭兵団は・・・あなどれない相手のようです。至急、情報を集めて・・・」

「その必要はない。王女追跡には、あたしが出る」

イナの話を遮って、女は言った。すると初めて、イナの表情が驚いたように少し変化した。

「プラハ將軍、御自ら・・・ですか？」

どうやら、この女はプラハという名前らしい。

「王女の行き先が分かってんなら、小細工は不要だ。追いかけて、潰せばいい」

プラハは残忍な冷たい笑みを浮かべる。

「傭兵団？ ハッ、それがどうしたってんだい。この、プラハ様が
出向くんだ。どんな相手だろうと、しくじりようがないさ。ククク・
・・」

このプラハという女は、一体何者なのだろうか・・・？

そして、イナとは一体・・・？

果たして、グレイル傭兵団の運命は・・・？

炎の紋章（後書き）

この度、更新が遅れてしまつてすみませんでした。

次回、「6章：陽動作戦」を予定しています。

震災の復興が一日も早まりますように・・・。

6章 く陽動作戦く 前編（前書き）

女神に祝福されし大陸、テリウス。

その北西に位置するクリミア王国に、グレイル傭兵団は拠点を構えていた。

だが、東の隣国デイン王国により、王都メリオルが、突如強襲される。

セネリオのもたらした報を確かめるため、アイク達は王都へと向かった。その途上、一人の少女を助けることになる。

彼女は「エリンシア」と名乗り、自分がクリミア王の娘であること、デイン国王アシュナードの手により、両親はすでに討たれたことを語った。

傭兵団は、王女エリンシアの依頼を請け、ガリアまで護衛することとなる。

ガリア王国・・・

クリミアの南に位置するこの国には、アイク達「人間」とは異なる種族が暮らしている。

クリミアとガリアはお互いの種族の違いを乗り越え、近年、ぎこちないながらも友好的な関係を築いていた。

アイク達傭兵団は、背後から迫るデイン王国の追撃部隊をかわし、ガリア王国へと続く樹海に足を踏み入れるのだった・・・。

6章 く陽動作戦く 前編

くクリミア南部の樹海く

「はあっ!!」

ソルジャーのデイン兵の投げた手槍が、樹海特有の湿った空中を突き進んでくる。デイン兵の標的は、ボーレだった。

手槍はボーレには当たらず、彼のすぐ後ろの熱帯樹の幹に突き刺さる。ボーレが体をひねるのがあと一瞬遅かったら、彼は大概我を負っていたことだろう。

「デイン兵め、おれの一撃、覚悟しやがれええ!!」

ボーレは鉄の斧を頭上で回転させながら、デイン兵の懷に駆け込み、回転の勢いそのままに、斧を敵に叩きつける。手槍を投げつけたソルジャーは、その一撃で倒れ込んだ。

グレイル傭兵団が樹海の中に入って程なく、デイン王国の追撃部隊に遭遇した。数はそれほど大したものではないが、見通しが悪い森林戦ではお互いに戦いが行にくい。現在は部隊の後方を守るオスカー、ボーレの2人だけで、追撃部隊と戦っていた。

「えいつ!!」

グサツ！！

ボーレを狙おうとしていた剣士に対し、オスカーが間に入って槍を突き出す。剣士がささず反撃を入れるが、敵の剣を槍で見事に防いだ。

「兄貴、助かったぜ！」

グシャア！

「ぎゃあ・・・」

ボーレの斧が命中し、剣士は倒れた。

「なに、お互い様だ」

オスカーは優しくボーレに笑いかけた。

「グレイル団長、大変です！ 後方にて、敵部隊との接触があったようです！」

ティアマトが馬を走らせて、最前列を歩くグレイルのもとに駆け込んできた。すぐにグレイルは緊張した表情をして、ティアマトに向き直る。

「そうか、デイン軍、もう追いついたというのか……。戦況は、どうなっている？」

「私とともに最後尾を守っていたオスカー、ボーレの2人が、敵部隊の侵攻を食い止めている状態です。ただ、相手の勢力がどれほどか分からない上、2人だけでは戦いが厳しいと思われます！」

グレイルはティアマトの話を聞いてから、隣にいたセネリオに問いかける。

「セネリオ、このことに関して、どう思う？」

セネリオは少し目を閉じてから、淡々と話し始めた。

「そうですね・・・みなさんもお察しの通り、敵はデインの追撃部隊と思われます。追撃部隊というのはおそらく、大部隊では編成はされておりません。ましてやこのような樹海内部、小隊単位で追ってくるのが普通です」

セネリオのすぐ後ろで積荷を乗せた馬車を操っていたアイクが、セネリオに自分の意見を言う。

「じゃあ、奴らを取りあえず倒した方がよくないか？ 背後に不安を抱えたままじゃ、先に進むのは危険だと思うが・・・」

「・・・いいえ、それはできません」

セネリオはアイクの意見に、首を横に振る。

「追撃部隊は一つ一つの部隊は少人数の構成という場合が多いですが、その分散発的に襲いかかってきます。たとえ今現在の部隊を食い止めたところで、第2、第3の敵が襲いかかってくることでしょ

う。それに、それだけではありません。おそらくガリアとの国境付近でもデイン軍の非常線が張られていることでしょうから、この樹海の中での戦いを長引かせると、そちらの駐留部隊にも居場所が見つかってしまう恐れが出てきます。そうなってしまったら立ちどころに挟み撃ちにされ・・・我々は、全滅します」

セネリオの言うことは、どこまでも真実だった。とにかく今は、逃げ切るしかないのだ。だが、後方で戦っている二人を見殺しにすることになってしまう・・・。

アイクはたまらず、グレイルに問いかけた。

「親父！ オスカーとボーレがまだ後ろで戦ってるんだ、あの二人を見殺しにして、このまま国境へ逃げ切るっていうのか！？」

するとグレイルは、少し考えた末に、一つの結論を言う。

「・・・アイク、この本隊の指揮はお前が執れ。二人は、俺がシン、ガトリーを連れて援護に向かう。二人を救出したら本隊に合流させ、俺とシン、ガトリーは追撃部隊のかく乱を行う」

「どうということだ？」

アイクはグレイルが言っている意味がまるで分からなかったが、セネリオだけは理解をしたようだ。

「なるほど、部隊を本隊と別動隊に二分し、少数精鋭の別動隊が追撃部隊をかく乱。その隙に、やや戦闘力に難がある本隊が全速力で国境を越えてガリアに逃げ込む・・・という策ですね。悪くはないでしょう。十分、勝算があります」

戦闘力に難がある・・・といういい方はややはつきり言いすぎな気もするが・・・。

「本隊はアイクが指揮をとり、補佐としてティアマトを置く。あとはセネリオとキルロイもこちらだ。オスカー、ボーレの二人も、こちらに合流させよう。別動隊は俺とシノン、ガトリーの3人。オスカーとボーレの支援が完了したら、陽動作戦を開始する！」

「はいよつと」

「がつてん！」

シノンとガトリーは、グレイルの指令に対して了解の意を伝えた。

グレイルは全員の顔を見渡し、声を張り上げた。

「いいか、多分これが、俺たち傭兵団にとって、これまでで最大の戦いとなるだろう。命令は一つだけだ。『誰も死ぬな』！！血の繋がりとかなないとか、そんなことは、どうでもいい。俺たちは、一つの家族だと思え。家族を悲しませたくなければ、生き延びろ！！！」

グレイルの言葉は、誰の胸にも強く残った。

「誰も死ぬな」・・・。

グレイル率いる別動隊が出発するとき、グレイルはアイク達を振り返って、一言言った。

「ガリアで会おう！！！」

「兄貴・・・こいつら、結構やるみてえだな・・・」

全身に傷を負ったボーレが、苦しそうにオスカーに言う。もう、何人のデイン兵と戦ってきたのだろうか、数える気力もない。

矢を放とうとする敵アーチャーを槍で倒したオスカーも、傷だらけだ。

「予想以上に敵が多い・・・さすがに厳しいな・・・」

するとボーレはとうとう、倒れてしまう。驚いたオスカーは、慌てて馬から降りた。

「!?!? おい、しっかりしろ!!」

ボーレは仰向けになり、力ない目をオスカーに向け、うわごとのように話します。

「なあ、団長やアイク達、無事ガリアには入ったかな? 王女様は・・・ヨファは・・・」

「ボーレ・・・」

ボーレの脳裏には、一人の少女が思い浮かんだ。ひたすら世話好きで、人一倍明るく、ボーレが知る誰よりも優しい少女。兄のことを慕い、決してそばから離れようとしない。あの立派な団長から引き継いだ、明るい茶髪の少女。

「ミスト・・・どうか、無事でいてくれよ・・・」

（思えば、おれはアイクがすぐくらやましかつたんだ。それは、団長の息子だからってのもある。天性の戦いの技術を持つてるつてもある。でも・・・）

だんだんと、意識が薄らいでいく。すぐ横で兄貴がなんか言ってるような気がするが、よく分からない。

（ミストが、あんなにアイクになつてるのが、すぐくらやましかつた。おれにも、そうやって接してほしかったんだ。結局、そんなことはなかったんだけどな）

苔むした、土のにおいが鼻を刺激する。

（おれは、こんなところでやられるなんて思ってた。もっともっと、強くなれるはずだった。アイクの、先輩なんだから）

だが、常に死と隣り合わせの戦いをするのが、傭兵というものだ。

（おれは、甘く見てたのかな・・・悪い奴をやつつけるかっこいい戦いとか、そういうこと、望んでたのかもしれない・・・）

ここまで、死を間近に感じたことはなかった。これが、死というやつなのか・・・。

（オスカー兄貴・・・ヨファ・・・ミスト・・・）

意識が、闇にのまれた・・・。

「おい、ボーレ！！　しつかりしろ！！」

オスカーは必死にボーレを呼ぶが、返事は全くない。

幸い敵の攻撃はやんでいるが、それもいつまでも続くものではない。いつ次の部隊がやってくるか、分らないのだ。

究極の決断が、オスカーの目の前に迫っていた。すなわち、ボーレを連れて逃げるか、ここに置き去りにするか。

置き去りにすれば、オスカーは確実に逃げ切れる。おそらく、ガリア王国領までいけることだろう。だが、ボーレはあきらめなければならぬ。

ボーレを背負って逃げた場合は、逃げ切れない可能性が高い。それに、ボーレはもう助からないかもしれないのだ。ボーレはまだ心臓、呼吸ともにわずかに動いているものの、蘇生できない可能性もある。逃げ切れなかった場合は、自分自身の命も危ない。

（どうする？　考えろオスカー。冷静に状況を判断するんだ・・・）

オスカーは考えた。だが、考えれば考えるほど、頭が混乱してくる。冷静になど、なれるはずがない。

本来ならば、ここは見捨てるべきだろう。血のつながりだとか、仲間だとか考えず、見捨てて逃げるべきだろう。そうすることによつ

て、生き残った自分が、後で再起することもできる。

（だが・・・！！）

オスカーは迷っていた。むぎむぎ、置き去りにして逃げるなどできない。

気が付いたら、彼は馬を走らせていた。樹海という、足場が悪い地形にもかかわらず、馬を全速力で走らせていた。

彼の後ろには、ぐったりとしたボーレが縛り付けてあった。まだ、かすかに心臓の鼓動が感じられる。

「ボーレ、死ぬなよ！！」

相手が聞いているかどうかなど分らない。だがオスカーは叫んだ。後ろからは、デインの追撃部隊が迫ってきていることだろう。でも、振り返る余裕は彼にはなかった。

「お前はこんなところで死ぬやつじゃないだろう？ だから、絶対生きててくれ！」

オスカーが乗る騎馬は、スタミナ切れでとても苦しそうにしていた。だんだんと、足取りが重くなっていく。

それでもオスカーは、鞭をあたえた。強引にでも走らせた。

「このまま、ガリアに行くんだろう？ 王女を助けるんだろう！？
こんなところで死んだら、かっこわるいだろう！！」

小さな小川を飛び越え、大樹の下をくぐり、茂みを突っ切る。普段の冷静沈着なオスカーは、そこにはなかった。

「ヨファが心配して待ってるぞ！　だから、死ぬんじゃない！！！」

オスカーは、夢中だった。

6章 く陽動作戦く 前編（後書き）

さあ、果たしてボーレは助かるのだろうか！？ オスカーはアイク達に合流できるのだろうか！？

陽動作戦は、無事成功するのだろうか・・・

グレイル傭兵団は、より過酷な運命に立ち向かう。

6章 く陽動作戦く 後編（前書き）

ガリア王国国境付近で、デイン軍追撃部隊に追いつかれたグレイル傭兵団。隊列の最後尾を守っていたオスカー、ボーレの二人は、多勢に無勢の戦いを強いられた。

デイン兵はかなりの数で二人に襲いかかり、オスカー、ボーレともにかんりの怪我を負う。特にボーレは、生死の境をさまよう危険な状態となった。

傭兵団長のグレイルは、セネリオの推測に基づき、部隊を2分することを決定した。

部隊を分けて、国境越えと二人の救出を同時に行うということである。

背後から迫る追撃部隊の、かすかな足音を聞きつつ、本隊を率いるアイクはついに、クリミア＝ガリア国境の川のほとりまでたどりついた……。

6章 く陽動作戦く 後編

くクリミア＝ガリア国境く

「アイク、とうとう国境の川のほとりにたどりついたわ!」

先頭に行くティアマトが、アイクを振り返ってそう告げた。耳には、川のせせらぎが聞こえてくる。

「ああ、そのようだな」

アイク達が今いる場所は、国境を流れる川の北のほとりに生い茂る、葦の茂みの中だ。よく聞き耳を立てると、川のせせらぎに交じって、人の話し声も聞こえてくる。

「・・・どうやら、結構多くの人数が国境にいるみたいだな。セネリオ、デイン軍が非常線を張ってるのか?」

やや遅れてやってきたセネリオに聞くと、彼も耳をすませる。

「ええ、おそらくデイン王国軍の待ち伏せでしょう。僕が様子を見に行ってきますので、アイク達はここで待っていてください」

「分かった、気をつけろよ」

セネリオが行ったのを確認し、アイクは後ろから来た馬のところに行く。

馬には、エリンシアが乗っていた。ミストがその馬を引っ張っており、ヨファとキルロイはその後ろから、大量の物資を載せた馬車を操っていた。

「エリンシア姫、セネリオが偵察から戻るまで、しばし休息だ。長旅、大丈夫だったか？」

アイクに手伝ってもらいながら、エリンシアはゆっくりと馬から降りる。

「ええ、私は平気ですが・・・アイク様こそ、大丈夫でしょうか？」

「ああ、俺も問題はない」

「そうですか、それはよかったです」

キルロイが近くで水がわき出している場所を見つけ、水を汲んできてくれた。あらかじめ作っておいた魚の干物や乾パン、ソーセージといった保存食を取り出し、自然と休憩時間となる。

本当なら火をおこして野ウサギなどを焼きたいところなのだが、そんなことをしたらデイン軍にばれてしまう。

水が入ったマグカップを手に、キルロイが隣に座った。

「この戦い、どうなるんだろうね・・・」

水を飲みながら、そうつぶやく。

「・・・さあな」

アイクはそれだけを答えて、ソーセージにがつつく。アイクは肉が大好きなのだ。

ソーセージを食べながらも、アイクは独り言を言う。

「親父はまたしても、俺をこんな大役に任せた・・・。やっぱり、よく分からんな」

偵察部隊の隊長に始まり、拠点防衛の指揮官、さらには国境突破の本隊の指揮・・・。どんどん、役目が重くなっていく気がする。

「俺はそんなに強くない。強くなる努力はしてるが、力不足だつてことくらい分かってる。親父はどうして、あんなにあせってるんだ・・・？」

ソーセージを水で流しこむと、隣にいたキルロイが答える。

「僕も、よく分からないけど・・・きっと、それが団長のやり方じゃないのかな？」

「そうなのかな・・・でも・・・」（なんか、釈然としないんだよね・・・）

そこへ、偵察を終えたセネリオが戻ってきた。

「報告します。国境付近にデイン軍一個小隊を確認、国境の待ち伏せ部隊と思われます。騎馬兵、重歩兵の姿も確認できました」

「やっぱり、待ち伏せしてたのね・・・」

セネリオの報告に、ティアマトは苦い顔をする。

「セネリオ、何とか安全に突破できそうな方法はありそうか？」

アイクの問いに、セネリオは目をつぶって考える。

「・・・今われわれがいる場所の付近には、橋が2つかかっています。そして、葦の茂みはここから西・・・下流側の橋のたもとまで茂っています。このまま茂みに紛れたまま、橋のたもとまで行き、一気に奇襲を仕掛けて下流の橋を制圧。そこを拠点に回り込み、上流側の橋も制圧するのが最善の策と思われます」

「分かった、そこからが陽動作戦だな」

「はい。あと、戦えない王女、子供たちは別の方面からガリア入りさせるといいでしょう。ここよりもさらに下流にも、もう一本の橋がかかっていました。そちらには、デイン軍の姿も確認されています」

それを聞いて、エリンシア、ミスト、ヨファがやってきて、口々にアイクに言う。

「アイク様、みなさん、どうかご無事で」

「お兄ちゃん、がんばってね！ また後で！」

「大丈夫、かくれんぼなら、得意だから・・・」

アイクはそれを聞いて、3人に言う。

「ガリアで会おう。絶対に見つかるなよ!!」

3人の姿が見えなくなってから、アイク達4人は行動を開始する。

「橋のたもとまで、このまま茂みに紛れたまま近付こう。物音をたてないように、慎重に行動してくれ」

4人の影は、ゆっくりと橋に近付いてゆく。その気配に、茂みのそばで居眠りしていたデインの剣士が気付くことはなかった。そしてその1分後、彼の眠りは永遠のものとなった。

くクリミア南部の樹海く

一方、グレイル達別動隊は・・・

オスカーとボーレを樹海の中で探していたのだが、どこにもその気配がみあたらず、焦りが募っていた。

「シノン、ガトリー！ そっちの様子はどうだ？」

グレイルの問いかけに、別の場所を探していた二人は顔を上げ、答

える。

「団長、こっちにもあいつらの痕跡は見当たらねえぜ」

「こっちもつす。二人とも、どこ行っちゃったんでしょうか・・・」

自分たちが来た道をちゃんとたどっているはずなのに、見つからない。一体どうということなのだろうか。

「まさか、敵の捕虜にでもなっちまったとか・・・」

シノンが不安なことを口にする。グレイルも苦い顔をして、重くうなづく。

「ありうるだろうな・・・俺たちはデインにとっては、敵国の王女を匿ってるんだ。捕虜にとらえて情報を洗いざらい吐かされ・・・」

「最後には、処刑つすか・・・？」

「ああ・・・おそらくは」

ガトリーが継いだ言葉に、グレイルは再びうなづく。

と、その時だ。グレイル目がけて矢が飛んできたのは。

「！！」

反射的にグレイルは、背負った戦斧を前に構え、矢をはじく。

「お、敵さんのお出ませ！」

言うや否や、シノンはすぐに弓を取り出し、狙いを矢を放ったデイン兵のアーチャーに向ける。

グググ・・・ヒュッ・・・グサッ！

「くっ・・・応援を・・・求む・・・ぐふっ」

「なにイ、味方がやられた！ 至急増援要請をせよ！！」

デイン兵の一人がほら笛を吹き鳴らすと、岩の陰や木の上、茂みの中から、つぎつぎとデイン兵たちが現れ出てきた。

「うわわ、たくさん出てきたっすね。団長、応戦しますか？」

ガトリーもすでに、鋼の槍を手にとっている。

「ああ、戦うでしょう。ただし、無理はするな！ 俺たちの目的はあくまで、敵部隊のかく乱だ。ほどほどのところで、撤退するようにな！」

グレイルは、戦斧を手に敵中へと突撃していった。

くクリミア！！ガリア国境、傭兵団サイドく

「ウインドー！！」

ビュウウウ・・・ズバァッ！！

「ぐはぁ・・・」

ザッパーン・・・

セネリオが放ったウインドの魔法をまともに受けたデインのアーマ
ーナイトは、そのまま橋の下の川に転落する。盛大に水しぶきを上
げたアーマーナイトは、どんどん沈む。あんな鎧身に付けてたら、
浮かんでこれないだろう。

「よし、これで下流の橋は制圧完了だな」

アイクはそう安心する。だが・・・。

「国境、デイン軍サイド」

「むむ・・・傭兵団ども、なかなかやるではないか・・・」

国境を守る待ち伏せ部隊の司令官は、傭兵団のあまりの強さにあせ
りの顔色を見せ始めていた。手にしたショートスパ（手槍の改良
版。軽量化と威力向上の両立を実現させた直間両用の投げ槍）を、
落ち着きなさそうにもてあそぶ。

そこへ、騎馬にまたがったデイン兵の一人が伝令にやってきた。

「エマコウ隊長、報告いたします！　ここより下流へ下った川の対

岸地点に、怪しげな人影を目撃したとの報告を受けました！」

「なんだと・・・どのようなやつらだ!？」

エマコウと呼ばれた司令官が聞き返すと、伝令の騎兵は報告を続ける。

「情報によりますと、人影は3人。そのうち2人が子供とみられ、もう一人の外見が・・・」

「まさか・・・クリミア王女かもしれないのか!？」

「はい。エメラルド色の髪が特徴的で、間違いないと思われます！」

エマコウは、目を輝かせる。

「ふははっ、どうやらこの俺のところにもツキが回ってきたようだな」

「隊長、いかがいたしましたしょう？」

「ふっ、案ずるな。実はな、今傭兵団のやつらが乗っている橋には、仕掛けがしてあるのだよ。おい、工作兵、いるか!！」

エマコウの呼び声に、斧を手にしたデイン軍の戦士がやってくる。

「ここに」

「例の仕掛けを動かせ。あの橋を落とし、傭兵どもを川に落とすのだ！」

「かしこまりました」

エマコウの命令の通り、戦士はアイク達がいる橋のところへ向かっていく……。

〈国境、傭兵団サイド〉

制圧した橋の上で、アイク達は次なる攻撃の準備をしていた。

「ライブ！」

キルロイのライブで、アイクの怪我がみるみる消えてゆく。

「助かった。キルロイ、ありがとうな」

「いえいえ、無理しないでね」

そんな二人の横で、セネリオは何かを見つめていた。

「……」

「セネリオ、どうしたの？ さっきから何を見てるの？」

ティアマトが聞くと、セネリオは顔を向けずに答えた。

「対岸にいるあの戦士……挙動不審ではありませんか？」

セネリオに言われて、他の3人もそちらを見る。

すると、戦士もこちらを見て声を上げる。

「傭兵団どもめ、これで終わりだな！」

「!?!」

戦士はそう言つて、橋の横に置いてあつたタルに斧を振り下ろす。
すると次の瞬間……!!

ベキベキベキ……ドッカーン!!!!

「うわああーっ!?!」

タルが爆発を起こしたのと同時に、その爆発が次々と橋の方にも伝わり、最後には橋そのものが爆発を起こしたのだ! おそらく、タルの中には大量の火薬が詰められており、さらに橋にも爆弾のようなものが設置してあつたのだろう。

ティアマトは運よく橋には乗っていなかったため爆風には巻き込まれず、セネリオとキルロイも爆風に吹き飛ばされたが、川には落ちなかった。

だが……。

「アイクっ!!」

セネリオが叫ぶ先には、アイクが川に流されていた。聴こえているのかいないのか、アイクは返事をしない。そのまま、流されてゆく。目の前にあった橋は、完全に落とされていた。キルロイは気を失い、セネリオも爆風に巻き込まれてかなりの怪我を負っていた。だが、セネリオはそれにかまわずアイクを呼ぶ。

「アイク！　しっかりしてください！！　アイクー！！」

だが、セネリオの叫びも届かぬうちに、アイクの姿は見えなくなつた……。

そしてその直後、敵将エマコウによる、デイン軍総攻撃の命令が下り、敵が一気に上流側の橋から、生き残った3人に向かって突撃を始めた。

続く！

6章 く陽動作戦く 後編（後書き）

絶体絶命のアイクとボーレ。彼らは無事に、生還できるのだろうか？

そして、傭兵団のメンバーの戦いの結末は・・・！？

次回は、「6章外伝：噴火の大斧」を予定しています。

6 章外伝 く噴火の大斧く 前編（前書き）

アイク率いるグレイル傭兵団本隊は、ガリア国境にてデイン軍の敵将エマコウの罠にかかる。

橋の爆破により、アイクは川に転落、セネリオとキルロイも、大きな負傷を負った。さらに、別ルートからガリア入りをすべく行動していたエリンシア達の居場所も、デイン軍にすでに発見されてしまった。

オスカー、ボーレとの合流もいまだなされていない状況のところへ、デインの待ち伏せ部隊が一斉に襲い掛かる。

一方、再び樹海の中に舞い戻った、グレイル率いる傭兵団の別動隊は、デインの追撃部隊を相手に、決死のゲリラ戦を繰り広げていた。

6 章外伝 く噴火の大斧く 前編

くクリミア南部の樹海く

襲い来るデイン兵を相手に、時にはやり過ぎ、時には戦う・・・を繰り返すグレイル一行。戦い慣れた3人ではあったが、徐々に疲労が溜まりつつあった。

「くたばりやがれやー!!」

「シノンさん、危ないっ!」

ガキーン!!

デインの戦士が、斧を振りかざしてシノンに斬りかかるとする。その間にすれすれで、ガトリーが割り込み、斧を防ぐ。

「ふーっ・・・危なかったす・・・」

「けっ、助けを呼んだ覚えはねえのに・・・」

ヒュン・・・グサツ!

「ぐっ・・・」

シノンの放った矢で動きが止まった戦士めがけて、ガトリーが槍を突き出す。

「えいつ！」

ズシャッ！

「がはっ・・・デイン王国に・・・栄光あれ・・・」

戦士は、倒れた。

「ぬおあー！！！」

ズシャアア！！

グレイルの斧一振りで、彼の周囲を囲んでいたソルジャーがまとめて四方に吹っ飛ばされる。断末魔も、あまり長くは聞こえなかった。

グレイルは、ただ戦っていた。一言も話さず、ひたすら斧を振るい、敵を倒すのみだった。

そんな彼の様子を見て、シノンがふと思う。

（団長は・・・変わったな。普段から厳しい人だったが、デインとクリミアの戦争が始まって、妙にピリピリする雰囲気を出すようになった・・・）

思いながらも、シノンはちゃんと敵に正確に矢を送り込む。だが、ときおりグレイルの方をちらちらと見る。

（オレの尊敬するグレイル団長・・・あんたは一体何をあせってるんだ？ いきなりアイクの小僧に大役を任せたりして）

考えだすと、そのことが気になって他のことを考えられなくなる。シノンのくせだった。

（以前、金に困って山賊の用心棒をやってたオレを、あんたは快く傭兵団に迎え入れてくれた。相変わらず裕福とはいえない生活だが、それでもオレは嬉しかったんだ）

すぐ隣で、ガトリーが敵の剣士を倒した瞬間、彼の鉄の槍が真つ二つに折れる。彼はあわてて背中に背負った鋼の槍を取り出し、再び向かってくるソルジャーに向き直った。

（弓と斧、全く戦い方が異なる2つの武器だったが、一騎討ちでオレを負かしたのはあんたが初めてだった。重傷を負ったものの、オレのことを連れて帰ってくれたのはあんただって聞いている。目が覚めたオレの顔をのぞいたあんたの目は、すごく優しいそうだった）

ガトリーが攻撃したアーチャーを、シノンが撃ち抜く。その先では、グレイルが果敢に斧を振り回し、5、6人を相手に戦っているのが見えた。

（オレはその時、心に決めたんだ。グレイル団長に、ついて行くことを。オレが今まで、心から尊敬したやつは、グレイル団長ただ一人だけだ・・・）

追撃部隊の襲撃が収まったのを見て、グレイルがシノンとガトリー
に向き直る。

「敵部隊の掃討はあらかた完了した。引き続き、オスカーとボーレ
の搜索を開始する。二人とも、怪我をしているようならすぐに治す
ように。あと、新たな敵部隊との遭遇については、厳重な警戒をす
ることだ」

「了解っす！」

「分かったぜ」

3人は、バラバラの方向に散って搜索を始めた。

一方、エリンシア達は・・・

「クリミア」ガリア国境」

エリンシア、ミスト、ヨファの3人は、国境を流れる川の北岸（ク
リミア側）を、ひたすら西の下流に向かって進んでいた。

道中は葦が背高く生い茂り、進むのは困難を極める。まあ、逆に考
えれば敵の目をあざむくこともできるのだが・・・。

もったいないが、馬車はすでに捨て、それぞれ必要なものは袋に入
れて背負っている。体力があまりない3人にとっては厳しいことだ
ったが、仕方がない。

「ミストちゃん、ヨファくん、こんな大変な目にあわせてしまって

「ごめんね。私のせいなのに・・・」

エリンシアは申し訳なさそうに二人に謝る。すると、先頭に行くミストが振り返った。

「エリンシアさま、気にしないでくださいよ。それに私たちの方こそ、王女様なのにこんな危ないことさせてしまつて・・・」

「ミストちゃん・・・」

少し進むと、茂みがだんだんと開けてきた。見ると向こうに、橋が見える。

「あ！ セネリオが言った通り、橋だ！」

「まあ、本当ね。これを渡ればガリアへ・・・」

敵もいない様子だ。2人は茂みから出て、橋へと行く。ヨファもそれを追いかけようとして・・・立ち止まり、叫んだ。

「二人とも、危ないっ！！！」

「!？」

次の瞬間、ミストの体のすぐ横を、矢が掠めた。矢はすぐ足元の地面に突き刺さる。

「矢・・・!？」

ミストが茫然としていると、橋のすぐわきの立ち木の上から、大きな声が聞こえた。

「チツ、外したか・・・仕方あるまい、ものどもかかれ!!」

立ち木の上からはデイン軍のアーチャーが飛び降りたと思った瞬間、その背後の茂みから斧を持った戦士たちが一斉に3人に向かって襲いかかってきたのだ!

「エリンシアさま、逃げてえっ!」

ミストはエリンシアに向けて、そう言った。だが、エリンシアは逃げる事ができなかった。

「そんな・・・無理よ・・・」

目の前には子供が2人。そんな状況で、エリンシアが逃げられるわけがなかった。ここで逃げたら、二人は助からない。自分が逃げたことで、二人を見殺しになどできない。

「・・・ぼく・・・戦うよ・・・」

ヨファが、そういう。見ると、手には棒きれに弦を取り付けたようなものを持っている。

「ヨファ!? ヨファが戦えるわけないでしょ!」

ミストがヨファに反論する。

「た・・・戦えるもん! シノンさんから、弓を教えてもらったも

ん!!」

「弓？　それが弓だって言うの？」

ミストが言うとおり、ヨファが持っているものはどう見ても弓といえるような代物ではない。袋から取り出して背中に背負っている矢こそは本格的ではあるものの、とてもではないが戦えるような装備ではなかった。

「弓だよ！　ぼくががんばって作ってみたんだ。戦えるから・・・
ミストちゃんはエリンシアさまを連れて、逃げて！」

それでも、二人は逃げない。

「逃げられるわけ・・・ないじゃない。震えて、泣いてる男の子を放って・・・逃げられるわけじゃない!!」

ヨファは、泣いていた。本当は、ものすごく怖いのだ。それに、3人を目がけて襲いかかる戦士はざっと5、6人。戦い慣れていないヨファにとっては、とても互角に渡り合えないだろう。

その時だ・・・。

すぐ横を流れる川から、盛大な水音が聞こえたのは。

「くっ・・・はあっ・・・はあっ・・・」

川から這い上がってきた人物は、体を振って軽く水を吹き飛ばす。

そして、目の前の光景を目にした。

「エリンシア姫、ミスト、ヨファ・・・今助けるからな」

彼は腰に佩いた鉄の剣を抜き、走り出した。

デインの戦士たちは、もうかなり近くの位置にいた。

（シノンさんだって危険な戦場に出て戦ってるんだ。ぼくだって、やれる！）

ヨファはかなり緊張して、弦を引く。

「ははっそんなおもちゃの弓で何ができるっつーんだ？」

戦士の一人が斧を振りかざして、ヨファを狙う。

「ぼくだって、やれる！！」

ヨファは弦から手を離し、矢を放つ。だが、矢はまるで見当違いの方向へと飛んでいった。しかも、その一回かぎり、ヨファ手作りの弓は真っ二つに折れてしまった。

「ひやはは、バカなガキだぜ！」

「そ、そんな・・・」

「さあ、ガキはそろそろ寝る時間だぜえ！！」

戦士はその勢いで、ヨファめがけて斧を掲げ、振り下ろす・・・その瞬間！！

「であっ！！」

スパアン！！

突然、ヨファの目の前を何者かが通り過ぎたと思った直後、ヨファを襲おうとしていた戦士は茂みの中へ吹っ飛ばされた。

「！！」

ヨファの目の前で、蒼い髪にハチマキ、赤いマントをはおった人物は、剣を持った右手をまっすぐ、横に伸ばす。

「・・・3人には、手は出ません」

エリンシア達3人は、その人物を信じられない様子で眺めていた。

「アイク・・・様・・・？」

「お兄ちゃん・・・？」

「アイクさん・・・どうしてここに？」

アイクは振り返らず、答える。

「話は後だ。俺はこいつらを片づけるから、あんたたちは危害が及ばないよう、茂みに隠れていてくれ」

3人は、近くの茂みに逃げる。デインのアーチャーがヨファを目がけて矢を放ったが、アイクはそれを剣ではじいた。

デイン兵のアーチャーは、驚く。

「なんてやつだ・・・おいお前ら、やつを仕留めろ！」

一斉に、5人の戦士がアイクに襲いかかってきた。

「ぬうん!!」

アイクは戦士の一人を、剣で思い切りたたき割る。続いて、次に襲いかかってきた戦士を切り上げた。

「ぐふっ・・・強すぎる・・・」

「やられた・・・」

3人目の戦士が斧を振り下ろすが、アイクはすでにバック宙で距離をとっていた。そこから、居合斬りを決める。

「ぎゃああ・・・」

さらに後ろから別の戦士が手斧を投げつけるが、アイクはそれを前転で回避しつつ、距離を詰めて懐に入る。反応できない戦士をつかみ、上に放り投げたのちに川の中へ斬り飛ばす。

最後の戦士の鋼の斧の一撃は、剣をカウンターの構えで受け止める。

ガキン！

「甘いっ！！」

シャキン！！

「ぐはっ・・・」

こうして、アイクはあっという間に戦士たちをせん滅してしまった。

「な・・・嘘・・・だろ・・・？　こうなったら・・・逃げるっ！
！」

事の様子を見守っていたデインのアーチャー（どうやら様子からして、この部隊のリーダーらしい）は、一目散に密林の中へと逃げていった・・・。

「お兄ちゃん、無事だったんだね！」

ミストはアイクのもとへと駆け込んできた。

「ああ、俺は何とか無事だ」

「アイク様・・・ご無事でよかったです」

エリンシアも、アイクの無事を安堵していた。

「エリンシア姫、あんたを危険な目にあわせて、すまなかったな」

「いいえ、こうして助けに来ていただいたて、うれしかったです」

そこへ、辺りの様子を見に行っていたヨファが戻ってきた。

「この辺りにはもう敵はいないみたいだよ！」

「そうか、それはよかった」

そこでヨファは、気になっていたことをアイクに聞く。

「ねえアイクさん・・・どうしてアイクさんがここにいるの？」

アイクは3人に、事情を話す。するとミストが声を上げた。

「えっ・・・じゃあセネリオやティアマトさん、キルロイの3人は、今すごく危ないってこと!？」

アイクは川の上流の方を向き、答えた。

「・・・ああ。あの3人相手に、デイン軍は攻撃を開始していると思う」

「そう・・・か」

戦い慣れているティアマトがいるとはいえ、セネリオとキルロイと

いう、体力が低い団員を守りながらの戦いは、困難を極めるだろう。

今度はヨファが口を開いた。

「でも、オスカー兄ちゃんやボーレが合流できれば、きっと何とかなるよね？」

「それが・・・俺が知る限り、まだ二人とは連絡が取れていない」

「そんな・・・」

ヨファの二人の兄は、まだ樹海の中にいるということなのだろうか・・・。

やがてアイク達は、橋を渡ってガリア領へたどり着いた。

「お兄ちゃん、私たちガリアに着いたんだよね？　なんか・・・実感ないかも」

ミストが言っており、どうも実感がわかない。ただ橋を渡っただけで、隣の国に着くということが・・・。

「オスカー兄ちゃん、ボーレ・・・死んじやいや・・・だよ・・・」

ヨファは元気がない。

「ヨファくん、元気出して。きっと二人とも、元気だから」

「エリンシアさま・・・」

「さっきの様子を見た限りでは、エリンシア姫の位置が敵にバレている可能性も考えられる。俺も、あんたと一緒に行こう」

アイクはそう言った。ティアマト達のこと心配だが、こればかりは仕方ない。

アイクはエリンシアの前に立ち、先頭を進む。

「アイク様・・・ありがとうございます」

エリンシアが頬をわずかに赤く染めたことに、アイクは気が付かなかった。

6 章外伝 〱 噴火の大斧 〱 前編（後書き）

アイクは無事だったが、オスカーとボーレは大丈夫なのだろうか・
・？

次回はちょっと早めに、あのキャラが登場！

6 章外伝 く噴火の大斧く 後編（前書き）

アイクは無事に生還したが、グレイル傭兵団の本隊は非常に危険な状況だった。

アイク達は本隊を助けるべく、当初の国境突破地点へと向かう。

一方グレイル達別動隊は、いまだにオスカー、ボーレとは合流ができずにいた。焦りばかりが募る・・・。

6 章外伝 く噴火の大斧く 後編

くクリミア南部の樹海、別動隊サイドく

「団長・・・全然見つからないっすね・・・」

全身に大汗をかいたガトリーが振り返る。

「・・・ああ。もしかしたら・・・すでに捕虜として捕らえられたかもしれん・・・」

グレイルもそう答えた。さつきからデインの追撃部隊とも戦いつつだが、全く二人の手掛かりが見つからないのだ。

その時、シノンがグレイルの注意を引いた。

「おい団長！ 見てみるよ。デインの連中が・・・」

シノンが指差した方を見ると、少し開けた場所で、多くのデイン兵がたくさんの人を長いロープでつなぎ、たくさんの収容用の馬車の中に載せているところだ。捕らえられている人々は、みな皮鎧を身に付けている。

「団長、何なんでしょうあれは？」

近くの茂みに身をひそめ、ガトリーが首をかしげる。グレイルは答えた。

「おそらく・・・捕まってる彼らはクリミアの傭兵だろう。このあたりで戦闘があつて、勝ち目が無くて投降した・・・といった感じだろうな」

「そうっすか・・・」

武器は全て取り上げられているようだ。丸腰のまま、馬車へ次々乗せられていく。

「・・・団長、もしかしたらこの傭兵たちに紛れて、あの二人が捕まってるかもしれないっすよね？」

ガトリーがそう聞く。

「確かに、俺もそう考えた。それに彼らは同じクリミアの民・・・幸い敵の戦力はさほどはなさそうだし、ここには追撃部隊は来ないだろう」

グレイルは斧を取り出す。

「お、じゃあ早速奇襲でもかけるかぁ？」

シノンも矢を一本取り出した。

「おれも賛成っす。いつでも行けるっすよ」

ガトリーもうなずいた。

グレイルは二人の方を向き、考えた策を話す。

「よし、そうと決まれば早速動き出すぞ。まず、俺が敵の渦中に飛び出して注意を引くから、ガトリーはその隙に馬車から捕虜を順々に解放しろ。シノンは遊撃で敵をかく乱してくれ。いいか、くれぐれも捕虜に危害を加えるんじゃないぞ」

「けっ任せておけって」

「分かったっす！」

ガトリーは馬車の横まで茂みに紛れながら移動し、シノンは近くの木の上に登った。

「じゃあ、作戦開始だ！」

グレイルは立ち上がり、敵中へ飛び出していった。

「なっ・・・！？ 敵襲！！ 敵襲だぁー！！」

グレイルの雄たけびに気が付いたデイン兵は、そう叫ぶ。

「ふんっ！」

ズシャアア！！

「ぎゃ・・・」

デイン兵の一人は剣を振り上げる間もなく、グレイルの戦斧の餌食

となった。

「なんて強さだ・・・よくも仲間を・・・!! かかれ!!」

この部隊のリーダーと思われるアクスナイト（斧を使って戦う騎兵）が、ショートアクス（手斧の改良版、威力などが向上した直間両用の投げ斧）を振り回しながら部下に命令を下す。

「はっフォッセル隊長！」

どうやらこの部隊の隊長は、フォッセルという名前らしい。

フォッセルの命令を聞き、その場にいたデイン兵たちはすぐに隊列を組み、グレイルを囲む。

「どこの誰か知らねえが、生きて帰さね・・・ぐっ!？」

威勢よく叫んだデインのソルジャーは、突然言葉を詰まらせ、倒れ込む。見ると、そのソルジャーの眉間に矢が一本突き立っていた。他のデイン兵たちは慌てだす。

「この矢は一体・・・!？」

「見たか？ オレさまの達人技！」

「な、何者だ！」

デイン兵の声に答えるように、シノンが木の上から飛び降りてきた。空中で一回転をしつつ、スタッと着地を決める。

「グレイル傭兵団のシノンだ。死ぬ前までは少なくとも、覚えていろよなあ？」

同じころ、ガトリーは一つの馬車に取り付き、守っていたデイン兵を槍で倒していた。見るとデイン兵は、扉の鍵を持っていた。おそらく、この馬車を開ける鍵だろう。

「さてと・・・じゃあ早速、捕虜を解放するとするか！」

馬車の最後尾にあった鍵付きの扉をさつき奪い取った扉の鍵で開けると、中から捕虜たちの歓声が上がった。

「誰だか知らねえが、助かったぜ！」

捕虜たちのロープをほどいていく。すると一番前には、藍色の長い髪に白いハチマキをしてオレンジの服に皮鎧を身に付けた少女がっながっていた。

「あ、あたしたちを助けてくれるの？　ありがとう！」

「はははっ、当然っすよ！　何てったって俺は無敵の傭兵ガトリーっすからっ」
「（うわっかわいいコだなっ！　これは絶対運命の出会い・・・）

ガトリーが運命の出会い（？）を感じてることには全く気付かず、少女はガトリーに話しかける。

「あたしワユって言うんだ！ クリミア軍に雇われた傭兵なんだけど、ドジって捕まっちゃってね・・・ガトリーさん、ありがとうね！」

「いやいや、全然大したことないですよ！ このおれにしてみれば、この程度のことなんて楽勝です」

ガトリーはワユのロープをほどく。

「あ、ガトリーさん！ できたらお願いがあるんだけど・・・先頭の馬車を守る敵をやっつけてくれない？ その馬車に、あたしたちから取り上げた武器が積んであるはずだから！」

「がつてんっす！ うおー燃えてきたぜー！！」

ガトリーは、一気に先頭の馬車まで走っていく。途中の馬車を守っていた兵士も、全て撃破してしまった。

「こういうところであの口がいい所見せて、おれのポイント稼いでおかんとな！」

動機が不純な気もするが、何はともあれ普段よりも彼は調子がよかった。あっという間に先頭の馬車もたった一人で制圧し、馬車を解放。

捕虜としてとらわれていたワユを始めとするクリミア傭兵たちは、自分の得物を手にデイン兵たちへ反乱を起こしたのだった。

青ざめた様子のデインの重歩兵が、フォッセルのところへ駆け込む。

「フォッセル隊長、大変です！ 捕虜どもが脱走し、武器を手に我らに反乱を！！」

「な、なんだと！？ 馬車の警備はどうなっていた！！」

「そ、それが・・・青い甲冑の何者かに襲われて、警備兵はみな・・・」

「く・・・くそ・・・！ よし、お前らは反乱を鎮圧せよ！ 捕虜どもは全員斬り捨てて構わん！ 私はこいつらと戦うから、全員で捕虜どもとその青甲冑とやらを皆殺しにしろ！」

「はっ」

デインの重歩兵が去っていくのを見て、シノンがグレイルに言う。
なお、二人はすでに近くのデイン兵は全員倒していた。

「ガトリーのやつ、うまくやったようだな？」

「そのようだな・・・よしシノン。お前はガトリーや捕虜たちの支援をしてこい。フォッセルの相手は、俺がする」

「了解！」

シノンはそう言うと、戦いが起きている馬車群の方へと走っていった。

「さてと・・・あんたがこの部隊の隊長だな？」

グレイルは戦斧を構える。

「そうだ！　デイン王国軍第13小隊隊長のフォッセルとは、この私のことだ！　貴様らは何者だ！？」

フォッセルもショートアクスを構える。

「グレイル傭兵団、団長のグレイルだ」

「一傭兵団ごときに・・・我々の任務が潰されるとは・・・！！
かくなる上は貴様らも道連れだ！　食らえ！！」

フォッセルはショートアクスを振りかぶり、グレイルめがけて投げつけた。ショートアクスは弧を描く軌道でグレイルを襲う。

だがグレイルは全く動かない。ショートアクスの軌道は確実にグレイルをとらえていたため、動かなければグレイルに命中してしまう。

（・・・当たった！）

フォッセルはそう確信した。だが・・・。

そこにグレイルはいなかった。

「消えた！？」

何にも当たらずに戻ってきたショートアクスをうまく受け止めたフォッセルは、目を疑う。慌てて周囲を見渡すが、グレイルの姿が確認できない。

「ど、どこに行っただんだ!？」

「上を見てみる、ここだ」

「!?!？」

すぐ上を見ると、グレイルが木の枝に片手でつかまっていた。

「何・・・だと・・・! 速すぎる・・・!!」

慌ててフォッセルがショートアクスを再び投げるが、今度は見当違いな方向へと飛んでしまう。ショートアクスは、うまく手元に帰ってこなかった。

「しまった!」

愕然としたフォッセルの目の前に、グレイルは飛び降りた。

「これで、終わりにしてやる・・・」

グレイルは斧を大きく振りかぶる。すると、急に辺り一面がすさまじい熱気を帯びてきた。

「な、何をするんだ・・・?」

グレイルが持つ戦斧が、白く灼熱する。足元がゆがみ、周囲の空気が渦巻く。以前の、カタオールを荒らす盗賊の首領を前にしたときと同じだ。まるで、火山だ。

「噴火 ウルヴァン ！！」

そして、それは解き放たれた。

捕虜とデイン兵との戦いは、さつきまではこう着状態が続いていた。だが、シノンが加勢してから、徐々に捕虜側が優勢となっていた。

「必殺の一撃だ」

ヒュッ・・・グサッ！！

「ぐえあ・・・」

シノンが放った必殺の一撃の矢で、デイン兵が倒れる。その向こうでは、ガトリーがちらちらワユの様子を見ながらも、鋼の槍を片手に勇敢に敵と渡り合っていた。

「グレイル傭兵団って・・・強いんだな〜！ ようし、あたしもがんばるか〜！！」

ワユは細身の剣を手に、近くの戦士に向き合う。

「へへ・・・女の細腕で何ができるってんだ？　このアマ！！」

戦士は鉄の斧を振りかざしてワユに襲いかかるが・・・

「あははっ遅い遅いっ！」

「なにっ！」

スパアン！

ワユは目にもとまらぬ速さで、先手の一撃を繰り出したのだ。

「先手必勝！　待ち伏せの極意、がんばって身に付けた甲斐があった」

「く、くそっ！」

戦士が振り下ろした鉄の斧は、むなしく空を切る。

「そんな力任せの一撃なんか、当たらないよ」

シャキン！

「は、速すぎるぜ・・・」

「ようし、だいたいこっちの方は片付いたみたいだね」

ワユは汗をぬぐいながら、横にいたガトリーに話しかける。

「あ、そうっすね！ まあ、おれに任せておけばこんなの朝飯前で
ゝ・・・」

「あははっ、でもグレイル傭兵団って本当に強いんだねー！ あた
しちよっと尊敬しちゃった！」

「そりゃあ強いっすよー まあ、おれはそこでもかなり上の方
っすけどねー」

さりげなくガトリーは、自分を売り込む。だが、ワユの興味は別な
所にあつた。

「ねえ、そのグレイル傭兵団の団長さんってここにいろの？ あた
し、お礼言いたくって！」

「あ、団長っすか？ ほら、今敵の隊長と相対してる人っすよ。も
のすごく強い人っす。で、おれは団長の次に強いくらいの男でー・
」

「ありがとっ、じゃあ、行ってくるねー！！」

ワユはそう言うと、グレイルのところへ走って行ってしまった。

「あ、ワユさん・・・」（なかなか手ごわいな・・・でも、絶対あ
きらめないもんね！ そのうち振り返らせて見せるぞー！）

そこへ、シノンが戻ってきた。

「あ、シノンさん！ もう終わったっすか？」

「ああ、この程度の敵なんぞ、相手になりやしねえな。．．それよりガトリー。お前な、いい加減その軽い性格何とかしたらどうだ？」

「え、何のことっすか？」

きよとんとするガトリーに、シノンは言葉を補う。

「今度は、あの女を口説いてただろ？ いい加減、そっいうのやめろってんだよ」

「ああ、あのことっすか！ シノンさんも分かってないな、いいっすか？ おれは彼女との出会いは絶対に運命だと思ってるっす！ 赤い糸で結ばれるんすよ！」

得意げに熱くなって話すガトリーに、シノンは目頭を押さえる。

「．．．お前の『運命の出会い』とやらは、一体いくつあるんだよ．．．オレの記憶が正しければ、もう26回目のはずだが．．．」

「わあ．．．あの人がグレイルさんかー！」

ワユは駆け込もうとした。だが、今は敵将と相対している。とりあえず、危なくない場所で様子を見ることにした。

敵将がショートアクスを投げつけるが、グレイルは動かない。

（危ないっ！！）

ワユはそう思ったが、ショートアクスが当たった瞬間にグレイルは、瞬時に姿勢を低くする。そして斧をかわし、反動で大きく跳躍。頭上の枝にぶら下がったのだった。

「す、すごい・・・！」

再び敵将がショートアクスを投げつけるが、今度は大きく外れ、手元には戻ってこなかった。

グレイルが飛び降り、敵将の目の前に降り立つ。

そして、大きく戦斧を振りかぶると、突然周囲に熱気が満ちた。戦斧が、白く灼熱する。辺りの空気が渦巻き、景色が歪んだ錯覚まで起こる。

（な、何をするの・・・何が起こるの・・・？）

そして次の瞬間、グレイルは叫んだ。

「噴火 ウルヴァン ！！」

灼熱、轟音、閃光。渾然一体となった圧倒的な破壊の奔流が、斧を振り下ろした地面からあふれる。破壊の奔流は火柱のようなものを形成し、フォッセルを馬ごと飲み込んだ。

時間自体は短いはずだが、奔流が収まった時には、フォッセルの体は残っていなかった。目の前には、ただ焦げた地面が残るのみ。

「ハアツ・・・ハアツ・・・」

『噴火』という技は、グレイル自身の体力も大幅に消耗する。その反面、絶大な破壊力を生み出す奥義だった。

あえてこんな大技を用いて敵を倒したのは、苦しみが残らないようにするという、彼なりの心遣いなのかもしれない。

パチパチパチ・・・

どこからか拍手が聞こえたため、グレイルはそちらを見る。すると、一人の少女剣士、ワユが拍手をしていた。

「すごい・・・グレイルさんすごいよー!!」

「あんたは・・・?」

「なるほど、話は分かった」

ワユの話を聞いて、グレイルはすぐに理解する。

「グレイル傭兵団に助けられて、本当によかったよ。ありがとう！」

「なに、俺はただ戦いの指示を出しただけだ」

「ううん、あたしグレイルさんのこと尊敬しちゃった。なんて言うか、『これぞ男！』みたいに」

「そうか、そう思ってくれて結構だ」

そこで、グレイルはあることを思い出した。

「なあ、あんたと一緒にとらわれてた傭兵たちの中に、騎兵と戦士の二人組はいなかったか？ どっちも髪が緑色で、片方は糸目、もう片方はガタイがいいやつで……」

ワユはちよつと考えて、首を横に振る。

「うーん……あたしは見てないな。捕まってた傭兵たちはみんなあたしと一緒に戦ってて、全員顔はだいたい知ってるけど……そんな二人は見てない」

「そうか……」（ここにもオスカーとボーレはいないのか……）

その後、傭兵団別動隊の3人は、捕らえられていた捕虜たちと別れ

を告げ、再び樹海の中へと入っていった。捕虜になっていた傭兵たちは、それぞれ今後の方針を考えていた。

「こうして無事だったのも女神のお導きだ。俺は最後までデインと戦うぜ！」

という傭兵もいれば、

「せっかく助かった命・・・無駄には出来ないから僕は傭兵やめて故郷に帰るよ」

といった意見もあった。

自然と、意見が出てきて、結果的には全員、好きなように行動しようということに落ち着いた。家に帰るもの、戦いに生きるもの・・・。

「なあ、あんたはどうするんだ？」

一人の傭兵が、ワユに聞く。ワユはほんの少し考えて、答えた。

「あたしは・・・もっと強い相手と戦ってみたい。いつか出会う宿命のライバルに負けないよう、もっともっと強くなりたい。だから、あたしはまだ戦うよ」

「じゃあ、俺たちと一緒に来るか？ まとまっていた方が、いいと思うぜ？」

だが、ワユは首を横に振る。

「せっかくだけど・・・あたしは、一人で行くよ。行くあてがあるんだ」

すると話相手の傭兵は、顔をほころばせた。

「おおそれはいいことだな。女とはいえ、あんたの太刀筋はなかなかのものだ。きっと、うまく行けるだろうな」

「・・・うん」

「じゃあな、ワユ！ 今度会う時は、できたらあんたとは戦いたくねえな。そうならねえことを祈ってるぜ！」

傭兵たちが森の中に見えなくなってから、ワユは歩きだした。

（占いで聞いた、いつか出会う宿命のライバル・・・あたしは、絶対に負けない）

彼女は、頭にある人物を思い描いていた。

グレイル・・・彼の戦う姿は、まるで恐ろしかった。鬼のような強さだった。

（あんな人に、あたしはなりたくない・・・）

話は変わって・・・

くクリミア＝ガリア国境く

ティアマトは、圧倒的窮地に立たされていた。

彼女の背後に守るのは、怪我をしたセネリオとキルロイ。キルロイは気絶しており、彼が目覚めなければ、回復魔法「ライブ」は使えない。

「くっ・・・敵の数が多すぎる・・・!」

馬上で斧を振り回し、次々と向かってくるデイン兵と戦う。いくらティアマトがパラディンであろうと、戦いはかなり厳しかった。

すると、川向こうの防衛地点から、敵将、エマコウの笑い声が聞こえてきた。

「ははっ傭兵団どもよ、我らデイン軍の前には手も足もでんというものよ!」

その声に、ティアマトは顔をゆがめる。

「っ・・・こんなところで・・・私たちは・・・!」

その時だった。

「・・・動くな」

「!?!?!」

エマコウは突然体を押さえられ、喉元に剣を突き付けられた。

「少しでも怪しい動きをすれば、あんたの命はない」

アイクである。

死角からエマコウに近付いていたのだ。デイン兵の誰もが、気が付かなかった。

「なつ・・・貴様、何者だ!?!」

「エマコウ將軍から離れる!」

気が付いたデイン兵が、アイクのそばに行つて口々に言う。そんな彼らに、アイクは静かに話しかける。

「取引をしてほしい。俺は、なるべくお互いの損傷を抑えた決着を望んでいる。そこで、停戦しないか?」

「なにを・・・!?!」

デイン兵たちに動揺が走った。もちろん、ティアマトもアイクに気が付いた。

「ここに、エリンシア姫はいない。俺たちと戦っても、まるで無意味だと思っただが?」

アイクが言うことは、実は本当のことである。エリンシア、ミスト、ヨファの3人とは少し前ですでに別れ、後々また合流することになっていたのだ。

「よ……傭兵の言うことなど信じられるか!!」

「信じる、信じないは自由だが、俺は本当のことを言っている。俺たちはただの、ガリアを指す旅の一団だ。クリミア王女を匿う傭兵団ではない」

もちろん、こっちは嘘である。

「嘘に決まっている!!」

「どうしてそう思うんだ? 信じないというなら、仕方ない。俺たちはこの指揮官を倒し、その間にガリアへ逃げ込むのみだ。それに、こうしている間にも、クリミア王女エリンシア姫は、別のどこかでガリア入りしようとしてるかもしれないんだぞ。俺たちにかまっている暇が、果たしてあるのか?」

「ぐ……くそ……!!」

アイクはとどめの一言を言う。

「さあ、どうするんだ？　俺たちを通すか、指揮官の命を差し出してしまうのか・・・」

アイクがとっさに行った出まかせの説得は、うまくいった。グレイル傭兵団本隊は、無事ガリア王国領内へとたどりついたのだ。

別ルートで行動していたエリンシアとも無事に合流し、セネリオ、キルロイの治療もエリンシアに手伝ってもらって事なきを得た。

だが、オスカー、ボーレとの合流は未だになされていない・・・。

果たして、どうなるのだろうか？

6 章外伝 く噴火の大斧く 後編（後書き）

アイク達は見事ガリア王国へと入ったが、グレイル達別動隊やオスカー、ボーレはまだ本隊に追いついていない。

彼らとの合流は無事なされるのだろうか？

最後の方、何だかなり無理やりな設定になってしまったような・
・（汗）

7章 く漆黒の魔手く 前編（前書き）

どうにか国境を突破したグレイル傭兵団本隊だが、別動隊やオスカ
ー、ボーレとは連絡が付いていない。

そこでアイクは、一つの考えを出した。

「エリンシア姫、一度俺たちと別れよう。あんたとミスト、ヨファ
は、先に行っていてくれ。俺たちは、他の団員と合流して、すぐ追
いつくから」

敵の増援が来る前に、すばやく合流しなければならぬ。アイク達
は、来た道に戻っていく。

そんな彼らを、エリンシアは心配そうに見送る。

「女神アスタルテよ……どうか彼らにご加護を……」

その頃、国境線の別の地点にあるデイン軍の陣営では……

7章 く漆黒の魔手く 前編

くクリミア＝ガリア国境、デイン軍陣営く

陣営の中心にあるひとときわ大きな天幕の中で、偵察役のデイン兵がある人物に報告をしていた。

「・・・報告は以上です」

「ご苦労、下がってよし」

「はっ、ではこれにて・・・」

報告を受けていた人物は、そう言って兵士を払う。緑の髪に切れ長の目をした女、プラハである。

プラハは椅子の背もたれにもたれかかって、独り言を話した。

「クリミア王女一行は、ガリアを目指し、樹海を南下中・・・と」

そして、すぐ横で控えていた褐色の肌の女性、イナの方に顔を向けた。

「イナ！ おまえの予想通りに動いて正解だった。よくやったね、ほめてやるよ」

そう言うプラハは、実にうれしそうだった。それに対してイナは、

表情を全く変えずに礼を言う。

「ありがとうございます・・・」

ブラハはイナに笑いかける。機嫌がいいようだ。

「陛下から賜った軍師がおまえのような小娘だったと分かった時には、どうしたもんかと思ったが・・・意外に悪くない。これからも頼むよ」

「はい・・・」

ブラハは立ち上がり、すぐ横に立てかけてあった紅の槍を手にとった。その瞬間、その槍はより燃えるかのような紅蓮の色合いに変化し、熱気を放った。

ブラハにとっては、心地よい感覚だ。現在のデイン王国国王、アシユナードにこの槍を授けられたのは、自分の実力が認められ、四駿ししゅんと呼ばれるデインの誇る四人の名将の一角を任された時だ。

フレイムランスという名を持つこの槍は、歯向かう者を全て焼き尽くす、絶大な魔力を宿していた。

「さあてと・・・楽しい狩りの、始まりだ」

フレイムランスを背中に収めたブラハは、天幕の外へと出ていった・・・。

一方、再びクリミア王国領へ戻ったアイクは、合流できていない他の団員達の搜索をしていた……

「……ここにもいないか」

深い森の中にひっそりとたたずむ古い時代の砦。その近くの森で、アイク達は他の団員を搜索していた。だが、彼らとの合流は出来ずにいた。

セネリオが、アイクのところへ駆けこんでくる。

「アイク、これ以上の追跡は危険です。一度、ガリア領へ戻りましょう。別動隊も、違うルートからガリア入りを果たしている可能性も……全くないわけではありませんし」

少し考えて、アイクは返事をする。

「そうだな……別動隊に合流できないまま、やられては本末転倒だ……無事を信じて、一度退くしかないか」

その時、横にいたティアマトが、古い砦の方を指さして叫んだ。

「アイク！ あの砦のところに今一瞬……人影が見えた気がしたけど……行ってみる？」

「本当か！？ よし、確かめよう！」

「メリテネ砦」

「メリテネ砦」と書かれた入口の看板は、コケに覆われていて文字は擦り切れ、読みにくくなっていた。一応付近に警戒をしつつ、アイク達は慎重に砦の中へ足を踏み入れる。

「ここは・・・長く使われていないようですね」

セネリオが言うとおり、中は静かだった。樹海特有の蒸し暑い空気は砦の中まで満ちている。床や壁はあちこち崩れ、植物の根のようなものも生えていた。

「ここを探しても見つからなければ・・・一旦、ガリア領へ戻ろう」

「そうね・・・」

アイクの提案に、ティアマトはうなずく。

その時だった。

「いたぞ！ クリミアの傭兵どもだ、囲めっ！！」

「！！」

黒い鎧をまとったデインの兵士が、砦の別の部屋から飛び出し、アイク達を見つけたのだ。

次々と、デイン兵たちが集まってくる。

「しまった！ みんな、こっちだ！」

アイクは走り出す。こんなところでデイン兵たちにやられる訳には
いけない！

だが、通路を走り続けて角を左に曲がった途端、そこにもデイン兵
がたくさん待ち伏せていたのだった。

「逃がさないぞ、覚悟！」

「くっ、仕方ない・・・みんな、応戦するぞ！」

アイクは剣を抜き、

「ええ、分かったわ！」

ティアマトは馬上で斧を構え、

「分かりました」

セネリオはウィンドの魔道書を手に取り、

「怪我したら、僕が治すよ。みんな、無理しないで」

キルロイはライブの杖を取り出した。

前から来る敵はアイク、左から来る敵はティアマトで食い止め、そ
れぞれの後ろからセネリオはウィンドの魔法で援護する。

「えいつ！」

バシユッドカツ！

「ぐはっ・・・」

ティアマトの斧の連続攻撃で、鋼の槍を持ったデインのソルジャーは倒れる。

「このやろっ！」

その後ろにいたデイン兵が、手槍をティアマトめがけて投げつけた。手槍はティアマトの腕に当たり、彼女は怪我を負う。

「ぐ・・・やあっ！」

ザシユン！！

「や、やられた・・・」

何とかティアマトは敵を倒す。そして、キルロイのもとへ。

「ティアマトさん、今治しますから動かずに・・・ライブ！」

ティアマトが負っていた怪我は、ライブの杖であっという間に治った。

「ありがとうキルロイ。また何かあったらよろしくね」

再びティアマトは、襲い来る敵を食い止める。

「ウインド!」

ビュウウ・・・スパァン!

「ぐはっ、何だこの風はあ!」?

セネリオが放ったウインドの魔法は、デインの戦士に大きな怪我を負わせる。

「アイク、今です!」

「ああ、任せろ! やあっ!」

ズシャァア!

「れ、連携攻撃かよ・・・」

アイクとセネリオの息の合った連携攻撃で、デイン兵の戦士は倒れた。

その頃、メリテネ砦の外では・・・

「おい、あの女はどこいった!」

「確かにこつちに逃げ込んだはずなのに・・・逃げ足の速いやつめ！」

デイン兵たちがあわただしく、砦の外の森の中をうろついていた。

「おれはもう一度あっちの方を調べてくる。お前たちは向こうの方を調べてきてくれ！」

「了解！」

ザッザッザ・・・

デイン兵の足音が遠のいた時、茂みがガサガサとゆれ、中から少女が出てきた。

「ふゝ何とかバレずに済んだゝ・・・」

ワユである。

「・・・それにしても、グレイルさん達どこ行っちゃったんだろう？
何とかあたしも仲間に入れてもらおうよ、頼みたいんだけど・・・」

ワユは茂みから出て、辺りを見渡す。

「・・・でも、こんな場所にいたらまたデイン兵に見つかっちゃうかもね・・・どっか隠れるところないかな？」

だが、見渡してみても隠れられそうな場所は、目の前に立っている

古い砦しかなさそうだった。

「仕方ない、この砦の中に隠れて、ほとぼりが冷めたらまたグレイルさん探そう」

ワユは、メリテネ砦の東側の小さな出入り口に入っていた。その中で、アイク達がデイン軍と戦っていることなどつゆ知らずに・・・。

ワユはとりあえず、中に入っていた。すると中には、すごい数のデイン兵がいた。

「・・・つとと、ここにもデイン兵がうじゃうじゃいるよ。えっ」と出口はつと・・・」

ワユはあわてて引き返そうとしたが、なぜかデイン兵の様子がおかしい。よく見ると、大勢のデイン兵が数人の男女を相手に、戦っているようだ。

「あれ？　なんで戦いが起こってるんだろ？」

状況が読めないワユのところへ、デインのソルジャーが襲いかかる。

「てめえもやつらの仲間だな！　死ね！！」

「え！？　いや何のことだか・・・そもそもあたし状況が・・・」

「しゅちゃしゅちゃうるせえ！　覚悟しやがれ！」

ソルジャーはワユの話など全く聞かずに、鉄の槍を突き出す。

「あゝもう!」

シャキーン!

「!?!」

ワユは反射的に、先手を取ってデイン兵を細身の剣で斬りつけた。

「こいつ、抵抗しやがって!」

ソルジャーは手傷を負いながらも鉄の槍を突き出す。ワユはよけきれずに槍に当たってしまふ。

「痛っ・・・」

「へへっ、これで終わりだぜ!」

デイン兵がとめとばかりに鉄の槍をワユめがけて突き出した、その時。

「でいやあぁー!!」

ドカァッ!!

「ぐばぁっ!」

アイクは、ワユを攻撃しようとしていたソルジャーを、居合切りで思い切り斬り飛ばす。

すぐにアイクは、横に倒れていたワユのところに駆け寄った。

「おいあんた、大丈夫か？」

「え・・・あ、助けてくれてありがとう！」

「いや、礼なんかいいいんだ。それより、あんた怪我してるな？ 今杖使いを呼ぶから・・・おいキルロイ、ちよつと来てくれ！」

キルロイは、アイクに呼ばれてやってきた。

「アイク、どうしたの？」

「こいつの怪我を治してやってくれ」

「分かったよ。・・・ライブ！」

ライブの杖の赤い玉から出た光で、ワユの怪我は全てきれいに治った。

「二人とも、ありがとう！」

「それより、ここは危険だ。すぐに外に逃げた方が・・・」

アイクがそこまで言いかけた時、ワユが口を開いた。

「ねえ、あんたたちもしかして、グレイルさんの仲間？」

アイクは、ワユが言った言葉に耳を疑う。

「親父を知ってるのか!？」

今度はワユの方が驚いた。

「え、あんたグレイルさんの子供なの!？」

「あ、ああ・・・それより、親父たちどこで会ったんだ？」

ワユは少し考えて、アイクに言う。

「ここよりちょっと北に行ったとこだよ。あたしはクリミアの傭兵なんだけど、ドジってデインの収容所に送られそうだったところを、グレイルさんに助けられたんだ」

「そうか・・・無事だったんだな」

アイクはグレイルの無事に安堵する。そんなアイクに、ワユは聞いた。

「ねえ、あんたとグレイルさんって本当に親子？」

「ああ。俺は団長グレイルの息子、アイクだ」

「へえ、そうだったの！　ってことは、あんたたちもグレイル傭兵団のメンバーってことだよね？」

「ああ、確かにそうだが・・・」

ワユが言った言葉の意味が分からず、アイクは不思議そうな顔をする。ワユはそんなアイクに言う。

「この戦い、あたしも加勢させてもらおうよ！　いいでしょ？」

「それは構わないが・・・俺の一存では、手当てが出せないかもしれないぞ？」

「細かいことは気にしない！」

ワユは給料のことなど全く気にしていないようだった。

「そうか、じゃあいいだろう。ところで、あんたの名前は？」

「あたしはワユ！　じゃ、そういうことで、よろしく、大将！！」

「ああ、よろしく頼む」

そこへ、新たな敵がどんどん押し寄せてきた。アイク達は気を取り直し、迎撃体制の隊列を組む。

ティアマトとアイクを先頭に通路を切り開き、後ろからはセネリオとキルロイ、ワユが援護する・・・といった姿勢だ。

砦の中にあつた一室を辛くも制圧し、そこを拠点に防戦の構えをとる。

「ウインドー！」

ビュウウ・・・ズバッ！

「やあっ！」

シャキン！

セネリオがウィンドで弱らせた戦士を、ワユが倒す。

「ふゝ何とか倒したゝ・・・あれ？ この戦士・・・」

ワユはデインの戦士が腰に結び付けていた鍵をとる。

「大将ゝ！ この戦士こんな鍵持ってたよゝ！」

アイクがワユから鍵を受け取る。

「これは・・・何の鍵だろうな？」

キルロイも見てみる。

「アイク、もしかしたらこの向こうにある宝箱の鍵じゃないの？
この戦士、宝箱の前に立ってたし」

「確かにそうかもな。・・・よし、ティアマト、見てきてくれ」

「ええ、分かったわ」

ティアマトは鍵を受け取り、馬から降りて部屋の奥に行った。

部屋の奥にあった宝箱に、ティアマトは鍵を差し込む。みごとに鍵は合った。

宝箱の中からは、分厚くてギザギザの刃を持つ、かなりの重量がある剣が見つかった。まるでのこぎりのようなその剣を見て、ティアマトはうなずく。

「ティアマト！ 何か見つかったか？」

アイクの声が聞こえたため、ティアマトは戻ってアイクに見せた。

「この剣は？」

「アーマーキラーよ」

「アーマーキラー？」

アイクの疑問に、ティアマトは答えた。

「重歩兵やジェネラルといった、重厚な甲冑を叩き割るために造られた剣よ。そう言った相手に強いから、アイクかワユのどっちかが持っていて」

「ああ、分かった。・・・俺にはリガルソードがあるから、この剣はワユにやろう」

「分かった！ ありがとう大将！」

そんな彼らを、キルロイが呼んだ。

「みんな、大変だ！ こつち！！」

「どうしたんだキルロイ？」

アイクは、キルロイが手招きしている方へ行ってみる。

「・・・敵の増援か？」

「いいえ、違うようです」

セネリオが隣で答える。

「あちらを見てください」

セネリオは、砦の奥の方を指差した。そこには・・・

「くくく・・・見つけたよ。思ったよりは楽しめたね」

女の声が聞こえた。アイクは聞き返す。

「誰だっ！」

通路の奥には、緑の髪に切れ長の目をし、黒い鎧を身に付けた女が、馬にまたがっていた。

そう、プラハである。

プラハはアイク達の方に向かって、声を上げた。

「自分たちの不運を嘆くがいい、傭兵ども！ このプラハ將軍が来たことで、お前たちは、万に一つも生き延びるチャンスがなくなっちまったんだからねえ！」

その声を聞いたセネリオが、アイクの隣で息をのむ。

「プラハ・・・四駿の・・・？」

「知ってるのか？ セネリオ」

アイクの質問に、セネリオは答える。

「おそらく、デイン王の腹心たる四將軍の一人です。あの女の武器、『フレイムランス』は、高位の炎魔法を繰り出すとか・・・」

「何だと・・・そんなやつが、俺たちの目の前に・・・!!」

7章 漆黒の魔手 前編（後書き）

デイン王国が誇る四將軍、四駿の一人、プラハと遭遇したアイク達。
果たして、彼らの命運やいかに！？

7章 く漆黒の魔手く 後編（前書き）

ガリアとの国境付近にある、メリテネ砦。その砦の中で、アイク達はデイン軍に発見されてしまう。

偶然出会ったクリミアの傭兵ワユを仲間に加えたアイク達だったが、デイン兵たちは容赦なくアイク達に襲いかかった。アイク達はそんな彼らに対し、抵抗の姿勢を示す。

その時、砦の奥から姿を現したのは、デイン王国が誇る国王の腹心たる四將軍、「四駿」の一人であるプラハ。アイク達の運命やいかに？

7章 く漆黒の魔手く 後編

くメリテネ咎く

セネリオの説明で、アイクは驚いた。まさか、四駿などという敵の大幹部が、自分たちの前に現れるとは……。

四駿の一人であるプラハは、得意げに言う。

「くくく……あたしを知ってるなら、話は早い。さ、おとなしく王女を渡しな。お前達と一緒に王女を焼いてしまったら、首級くびを陛下にささげられないからねえ」

それに対し、アイクはなるべく冷静に答えた。

「……残念だが、王女はここにいない。とつくにガリア領内に入った」

「なん……だつてえ……!?!」

プラハはわが耳を疑う。さっきまでの得意げな表情は、どこかへ消えてしまったようだ。

「そんなことが信じられるか！ 鷹が傭兵ふぜいが、このプラハ様の部隊を出しぬけるはずが……」

「その過ぎた自信が、しくじりを誘発するということだ」

「!？」

プラハの言葉を、何者かがさえぎる。アイク達は、思わず顔を見合わせた。聞き覚えがある声だったからだ。

「え……その声もしかして……」

「グレイル団長……？」

次の瞬間、アイク達から見てプラハの左側の壁の向こうから、一人のデイン兵が吹っ飛ばされてきた。デインのソルジャーは、鎧ごと体を縦に真っ二つにされている。

「親父っ！」

他のデイン兵たちが驚いて立ち往生しているところを、アイクは駆けだした。案の定、グレイルは砦の西側の出入り口から、シノンとガトリーを引き連れてやってきていた。

グレイルはアイクの姿を認めるなり、怒りをあらわにした表情でアイクを怒鳴りつけた。

「……なぜ戻ってきた！ このバカ者め!!」

どうやらグレイルは、アイク達は任務を放り出して戻ってきたと思っているようだ。アイクは誤解を解くべく、大声で返す。

「姫は無事、ガリア領へ入った！ 親父たちやオスカー達が合流してくれば、任務は完了だ!!」

それを聞いて、グレイルはフツと笑う。

「仕方のないやつだ。だが、よくやった。ほめてやるう」

アイクは続いて、グレイルにオスカーとボーレがどうなったかも聞こうとした。だが、おとなしくしていたプラハが、それをさえぎる。

「くっ……！ あたしを無視するとは、いい度胸じゃないか」

プラハはグレイルを見やる。

「察するに、お前が団長だね？ へえ……どんな偉丈夫かと思えば、その辺の傭兵と変わらないじゃないか」

「……？」

グレイルは、プラハの言うことに首をかしげる。プラハは少しの間グレイルの様子を見てから、言い放った。

「フフ……お前の身柄、このプラハがもらい受けるよ！ 陛下は、それはそれは強い男がお好きだからねえ、お前を捕らえて、土産にしようか。おとなしくしなよ？ 生け捕りじゃなきゃ、価値がないんだから」

グレイルはプラハの言うことを理解したようだ。あまり表情を動かさず、静かに言う。

「……狂王 きょうおう アシユナードの悪趣味は、うわさ通りということか」

「シノンさん、アシュナードの悪趣味って何のことっすかね？」

グレイルの後ろで、話の意味が分かっていないガトリーは、隣にいたシノンに聞く。

「・・・デイン王は、大陸中から強い野郎を集めて、たがいに潰し合わせるって話だ。そこで勝ち残ったものは素性がどうであれ、側近に取り立てるってうわさだが・・・どこまでが真実は、とんと分からねえな」

シノンの説明に、ガトリーは頭をかいいた。

「うつつ・・・団長も変なのに見込まれちゃったなあ・・・」

そうこうしていると、グレイルは二人を振り返って言った。

「シノン、ガトリー！あの女は俺が引きつける。お前たちは、アイク達と一緒にここを抜け出せ！」

「了解！」

シノンは素直に応じたが、ガトリーは不安そうに聞き返す。

「だけど、団長！一人じゃさすがに危なくないっすか！？」

だが、そんなガトリーをシノンは引っ張った。

「バカ野郎！ 団長なら、あのくらいの女なんかどうってことねえよ。ほら、いくぞ！」

それでもまだ渋るガトリーに、グレイルは言い募った。

「急げ、ガリアで落ち合おう！」

その言葉で、二人は動き出した。プラハはその様子を見て、グレイルに言う。

「逃がさないよ！ あんたも、あんたの部下たちもね！」

グレイルは、静かに応じた。

「プラハ、と言ったか？ パラディン（戦い慣れた騎兵のこと）のお前は、ここでは全力は出せまい。場所を移すぞ、ついてこい！」

どうやら、グレイルはやる気のようなのだ。だがプラハは、それに渋る。

「あたしが、そんな手に応じるとお思いかい？」

グレイルは、フツと笑って答えた。一見笑っているが、目は明らかに戦う気だ。それは、プラハでも分かった。

「お互い、他とは実力を隔する者なんだ。めったに会えるものでもない。邪魔の入らぬところで、存分に殺り合いたいのだが？」

グレイルの、宣戦布告だ。一騎討ちを望んでいた。プラハも、分かったと言わんばかりに笑って見せる。やはり目を見れば、戦う気だ。

「フフン、意外に女の扱いを心得ているじゃないか・・・いいだろう、乗ってやるよ」

フレイムランスが熱を帯びるのを、プラハは感じた。フレイムランスは、所有者の意思を反映し、武器自体を共鳴させる。

グレイルは、手招きして砦の奥へ駆けだした。

「こつちだ！」

プラハは横にいたローブの男に言う。

「バルマ、後は任せた！ クリミアのネズミどもを一匹たりとも逃がすんじゃないよ！ いいね、あたしが戻るまでに、潰しておくんだ！」

「はっ、プラハ様、お任せ下さい。クリミアの雑魚どもなど、我がエルファイアーの魔法で焼き尽くしてくれましょう」

バルマと呼ばれた男がそう返事したのを聞いて、プラハはグレイルを追って砦の奥へと馬を駆けていった。

アイクは再びみんなのところへ戻り、剣を抜いた。

「シノン達と合流し、ここを突破する！ みんな、遅れるな！」

傭兵団のメンバーは、デイン兵たちに攻撃を開始した。

その頃、メリテネ砦の南西にある階段の下で・・・

「へへっ、兄貴見てくだせえ。デインの連中とクリミアの残党どもが、派手に戦っていてやすぜ！　やっぱり兄貴が言ったことは、本当だったでやんすね！」

茶色い外套をまとい、ナイフを手にした盗賊が、階段の上から姿を見せた。その後ろから、同じく茶色い外套をまとい、ダガー（ナイフより強力な軽器）を持った盗賊が現れる。

「ゲハハ、当然だろ。やれデインだやれクリミアだと、偉い連中は大変なご時世だ。こう言う時こそ、おれたち盗賊の稼ぎ時ってモンよ！　ゲハハ！」

盗賊の二人組はデインの兵士たちに紛れて、戦場となったメリテネ砦1階へやってくる。

「さてと、じゃあ早速仕事といくか！　ゲハハ！」

「兄貴、どこまでも付いて行くでやんすよー！」

アイク達は、アーマーキラーがあつた部屋の出入り口を塞ぎ、そこで徹底抗戦をした。黒い甲冑をまとった、多くの重歩兵たちが押し

寄せてくる。

「えいつ！」

ガキン！

「クツクツク、そんなぬるい攻撃など、通用するものか！」

ワユの攻撃を受け止めた重歩兵は、手にした鋼の槍でワユを突く。

「きゃっ……」

「ワユさん、大丈夫！？ 今治すからね、ライブ！」

ワユが受けた傷は、キルロイの杖で治った。

ワユの隣で斧を振るうティアマトは、ワユに言った。

「あなた、さっきのアーマーキラーはどうしたの？ あれがないと
なかなか、ダメージは通らないわよ？」

「あ、あの剣……今のあたしには重すぎて、ちょっと……」

「そうなの、じゃあ仕方ないわね」

そこへ、セネリオが魔道書を持ってやってくる。

「重歩兵は物理防御に優れる半面、魔法には弱いはずですよ。僕に任せてください……ウインドー！」

かまいたちが巻き起こり、敵の重歩兵を巻き込む。

「ぐわあ、魔法は・・・防ぎきれ・・・ん・・・」

相対していた重歩兵は、それによって倒された。

「よし、じゃあ俺も行くぞ！」

アイクはリガルソードを手に、別の重歩兵に向き直る。

「何だ、その蛮族のような構えは？」

敵の重歩兵がそう言うように、アイクの剣の構え方はかなり変わっている。剣先を相手に向け、体を傾ける姿勢のまま、アイクは答えた。

「これが、俺の構え方だ。覚悟しろ」

スパアン！

「な、に・・・！」

アイクはその姿勢から、敵を斬りつけた。予想外の速さに、重歩兵は反応できない。

槍を突き出すものの、全くアイクには当たらない。

「とどめだ」

ズバァッ！

「ぐふっ・・・強い・・・」

「何とか倒したな」

そう安心するアイク。だが・・・

「ファイアー！」

そんな彼目がけて、炎の弾が飛んできた。

「！？」

炎の弾がアイクにぶつかった途端、アイクは炎に包まれた。

「熱っ！ 何だ一体！？」

炎自体は一瞬で消え去ったものの、アイクは火傷を負う。

「アイク、気を付けてください。敵に魔道士がいます」

キルロイのライブを受けているアイクに、セネリオは言った。

「魔道士は離れていても近くても攻撃が可能です。接近戦で、一気に勝負を付けるべきでしょう」

「分かった」

「じゃあ、あたしの出番だね！」

ワユは鉄の剣を手に、魔道士に斬りかかっていった。

「愚かなクリミアの残党よ、燃え尽きてしまつがいい・・・ファイアー！」

魔道士はファイアーの魔法を唱えるが・・・

「やあつ！」

シャキン！

ワユの攻撃の方がわずかに速かった。その直後に敵のファイアーが発動するが、ワユはそれをすれすれでかわす。

「なに、しまった・・・」

ザシュッ！

魔道士は、倒れた。

「やった〜！ 何とか勝った！」

どうやら、この辺りの敵はあらかた倒したようだ。アイクは先頭に立つ。

「よし、このままシノン達と合流するぞ、急げ！」

「クリミアの傭兵ども・・・祖国はもはや絶望的状况だというのに、

どこからどんな力が出てくるのだ？」

手槍を持ったデインのソルジャーは、シノンに聞く。

「けっ、オレにもよく分かんねえけどよ・・・オレが戦う理由は一つ。団長が命じた、任務だからだ」

ヒュッ・・・グサッ！」

「なる・・・ほど・・・」

倒れたソルジャーの後ろから、剣士がシノン目がけて斬りかかってくる。

「この野郎、よくも先輩を・・・！ 覚悟お！！」

剣士がシノンを斬る寸前で、ガトリーが前に出て盾となる。

ガキーン！

「くっ・・・！」

「もしかして、この人は君の先輩だったっすか？」

ガトリーはデインの剣士に聞く。

「ああ・・・おれの、信頼できる先輩だった・・・。戦いの仕方から、人生相談まで、おれのすごく信頼できる先輩だったんだ！ それを、お前たちが・・・！」

「そうっすか・・・」

ガトリーは槍を降ろそうとしたが・・・再び構える。

「おれにとつてもね、このシノンさんは信頼できる先輩なんすよ。シノンさんを斬ろうとするやつからは、おれが守るんす」

「・・・」

ガトリーは少し悲しい顔をして、槍を突き出す予備動作をする。

「悪く思わないでほしいっす。これが・・・戦争っていうもんなんす」

ズシャアッ！！

「うぐっ・・・先輩・・・今行きます・・・」

デインの剣士は、倒れた・・・。

「へへっ、兄貴、この部屋に宝箱がありますぜ」

盗賊二人組の弟分の方は、兄貴分の方を手招きする。

「ゲハハ、本当じゃねえか。じゃあ頂くとしようぜ」

「分かったでやんす！」

盗賊の二人は、部屋の宝箱に取り付く。ふたが開き、二人は歓声を上げた。

「おおっ兄貴見てくだせえ！　なんか、紫色した杖が入っていたっすよ！」

「見せてみる・・・おおっこりゃあ『マジックシールド』とかいう魔法の杖じゃねえか！　こりゃあ高く売れるぜ、ゲハハ！」

「兄貴の方の宝箱の、その本みたいなのは何でやんすか？」

「こいつか？　これは多分『祈りの書』とかってやつじゃねえかな？　これ読むと不思議な能力に目覚めるとか・・・まあ、どっちにしろ高く売れそうだが、ゲハハ！」

盗賊二人組は満足して、来た道を引き返す。だが・・・

「ここは通さないわよ！」

ティアマトが、出口を塞ぐ。

「な、なに・・・」

別の方から出ようと、盗賊たちはさらに踵を返す。だが・・・

「けっ、逃げられるなんて思っただよ？」

そっちはシノンが塞いだ。

「く、くそう・・・！」

盗賊たちはそれぞれに襲いかかる。だが、かなうわけがなかった。あつという間に盗賊たちは、成敗された。

「お、こいつ変な杖なんか持ってるぜ？」

シノン盗賊からマジックシールドの杖を取り上げる。キルロイはその杖を見てみた。

「シノンさん、これはおそらく『マジックシールド』の杖ですよ。魔法に対する抵抗力を高める魔法が使えるんです。きっと、僕なら使えると思いますよ」

一方ティアマトは、祈りの書を拾い上げた。

「これは、『祈りの書』ね。使えば女神への祈りが通じて、たまに敵に確実にやられる攻撃受けてもギリギリ生き残ることができるようになるみたいだけど・・・今はこれを使ってる場合じゃないわよね」

アイクは、シノンとガトリーに会いに行く。

「シノン、ガトリー、無事だったか」

それを聞くと、シノンは床につばを吐きかけて言った。

「あいにく、こうしてピンピンしてるぜえ。くたばってなくて、残念だったなあ？」

「・・・」(やっぱり、シノンはまだ俺のことをよく思っていないみたいだな・・・)

シノンはさっさと背を向けてしまう。

「さあてと、気を引き締めて続きといくかあ。何せ、また足手まといと一緒になっちまったんだからなあ。オレが二人分戦ってやんねえと」

シノンはそう言うと、敵の中へ行つて矢を放ち始めた。それと入れ替わりになる形で、今度はガトリーがアイクに話しかけてきた。

「アイク、ちゃんと王女をガリア入りさせたんだって？ よくやった！ 大したもんだ！」

ガトリーは明るい顔をしてアイクに話しかけてきたが、ふと真顔になる。

「・・・あれ？ でもさ、だったらどうしておまえがここにいるんだ？」

アイクはちよつと間をおいて答える。

「・・・余計なことだとは思ったが、あんたたちが心配だった」

ガトリーはそれを聞いて、笑顔になる。アイクに手を回し、肩を組んだ。

「くぅっ泣かせるじゃねえか、こんちくしょう！ ようしよし！
今夜は特別に、このおれが一杯、おごってやつからな！」

「あ、ああ」

そこでガトリーは、傭兵団のメンバーの中にワユがいるのを見つける。

「おおおー！ ワユちゃん、君もここにいたんすか！？」

「え？ あ、ガトリーさん！」

ガトリーは重い甲冑など意も介さず、ワユのところへ行く。

「おれのこと覚えててくれたんすね！ いやゝまさか君にまた会えるとは！ とところで、どうしてワユちゃんがここに？」

ワユはアイクの方をちらつと見て、答えた。

「大將に頼みこんで、この傭兵団の一員にさせてもらったの」

「そうだったんすかゝ！ じゃあ、これからもおれと一緒に戦えるってことっすね！ よろしくっす！」

「うん、こっちこそよろしくね、ガトリーさん！」

「どーんと任せてほしいっすゝ！」「（これ、やっぱり運命っすよね
く……）

シノン達と合流したアイク達は、敵を順調に片付けてゆく。最後には、バルマだけとなった。

頭にサークレットをはめ、黒いローブをまとったバルマは、赤い魔道書を手にアイク達の前に立ちはだかる。

「貴様らのような雑魚など、プラハ様の手を煩わせる必要すらない・
・・」

そう言うと、バルマは魔道書を開く。

「魔道の使い手が・・・!」

「そうですね。アイク、この者に戦いを挑む場合は、魔法防御を高める必要があるかもしれません」

セネリオはアイクにそう助言する。

「分かった・・・キルロイ、俺にマジックシールドをかけてくれ!」

「あ、うん」

キルロイは、さっき盗賊から取り上げたマジックシールドの杖を取り出す。

「・・・マジックシールド!」

紫の光があふれた途端、アイクの体を光の膜のようなものが覆った。

「よし、行くぞ！」

アイクはバルマに向けて走り出した。

「雑魚が・・・焼き尽くしてくれるぞ！ エルフファイアー！！」

バルマは両手を上げ、魔法を叫ぶ。すると、強烈な熱が発生した。アイクの周囲を炎が渦巻き、アイクを飲み込む。

「くっ・・・なかなかやる」

だが、アイクはそれほど大きな火傷は受けなかった。マジックシールドのおかげというべきか。

炎が収まった途端、バルマは驚く。

「何だと！ 我がエルフファイアーを受けて、なぜそこまで無事でいられるのだ・・・」

「それは、マジックシールドのおかげだ」

「マジックシールド・・・だと・・・！！」

言われてみれば、アイクの周囲を紫の光がつつすらと包んでいる。

「今度はこっちから行くぞ！」

アイクは一気にふところまで入り込み、斬りつける・・・と見せかけて、剣を持たない左手でバルマを殴りつけた。

ボカッ！

「うぐっ」

間髪いれずに、アイクは足払いをかける。バルマは反応が遅れ、足払いに引っ掛かって床へ転がる。

「これで、終わりだ！」

アイクはそのまま剣を振り下ろし、バルマを斬り伏せる。

「ぐ・・・こんな雑魚ごときに・・・プラハ様、お許しください・・・」

バルマは、倒れた。

「親父を探さないと・・・どこだ！？」

アイク達は手分けして、グレイルとプラハが行った部屋を探すこととした。早く見つけないと、グレイルがやられてしまうかもしれない・・・。

7章 　く漆黒の魔手く　後編（後書き）

どうにか合流を果たしたアイク達。だが、ブラハとグレイルは一騎打ちを始めてしまう。

何とかアイク達は二人を探すか……？

続く！

クリミアの落日、そして・・・（前書き）

デインの誇る四駿の一人、「プラハ」の登場によって一気に窮地に追い込まれたかに見えたアイク達だったが、グレイル達の加勢によってどうにか窮地を脱することに成功する。

グレイルはプラハに一騎討ちを申し出て、プラハもそれに応じる。二人はメリテネ砦の別の部屋へ行ってしまった。

プラハの手下である炎魔法の賢者バルマを撃破したアイク達は、グレイル達を探すべく全員で砦の中を各2人ずつで搜索することとする。

クリミアの落日、そして・・・

（メリテネ等）

アイクは、セネリオと一緒に行動していた。

「親父・・・一体どこに行っただんだ!？」

アイクは、ややあせりながら砦の通路を走る。そんなアイクに、セネリオは忠告した。

「アイク、あせりすぎではいけません。この砦のどこかに、まだデイン兵が隠れている可能性がありますから」

「ああ、分かったよ・・・」

だが、見つからないとあせってしまうのは仕方ないのかもしれない。そんな時アイクは、セネリオに聞きたいことがあることを思い出した。

「セネリオ、前お前は、『ガリアは半獣の国だ』って言ったよな？俺は半獣というものを見たことがないんだが、お前は何か知っているか？」

するとセネリオは、アイクの顔を向いて答える。なぜかそのセネリオの顔は、どこか不快そうな表情をしていた。

「・・・はい。半獣というものは、自らの体を他の動物の姿に一時的に化身することが出来る者を言います。半獣には、『獣牙族　じゅうがぞく』、『鳥翼族　ちようよくぞく』、そして『竜鱗族　りゅうりんぞく』・・・この3種類に大きく分けられます」

「なるほど、そういうやつのことを半獣というのか・・・」

「ええ。ガリア王国に住んでいる半獣は、猫や虎に化身をする獣牙族ですね。鳥翼族はるか西南の島々に、竜鱗族はガリアのさらに南、ゴールドア王国という場所に住むと言います」

セネリオは見た目は子供だが、かなりの知識を持ち合わせている。アイクの頼れる相談役だった。

「ありがとうな。俺はそう言う知識はさっぱりだから、助かった」

「いえ・・・」

アイクとセネリオは、再び搜索を進める。

シノンとガトリーは、2階部分を搜索していた。所々の床には穴が開いており、慎重な搜索を要求された。

「シノンさん・・・この砦っていつ頃作られたもんなんでしょうね？」

ガトリーがふと、シノンに質問する。先に行くシノンは、振り返ら

ずに答えた。

「さあな。けど、建材の傷み具合から考えて・・・多分100年前くらいまで使ってたんじゃないか？」

「100年！　ずいぶん古いんですね・・・」

「そうだな」

言われてみれば、砦の傷み方はかなりひどい状況だった。

「一体、何のためにこんな砦作ったんすかね？」

「オレに聞くなよ。おおかた、半獣どもがクリミアに入ってくるのを防ぐためとかじゃねえのか？」

「あ、なるほど！　シノンさん頭いい」

「けっ、お前がバカなだけだっつーの」

ガトリーを軽く小突き、シノンはさっさと先へ進んでしまっつ。

「シノンさん、待って下さいよー！」

ガトリーは重い鎧を鳴らしながら、シノンを追った。

ワユとキルロイは、3階部分を搜索する。2階よりも更に足元が不

安定なため、身軽な二人がこの階層の捜査を買って出たのだ。

「よっ・・・と！」

ワユはキルロイよりもどんどん先を進み、多少大きめの穴でも身軽に飛び越えてしまう。

「キルロイさん、早く早く〜！」

そのずっと後ろを、キルロイはこわごわ恐る恐る進んでいた。

「ワユさん・・・ちよつと待って・・・」

どうにかキルロイは追いつく。

「ワユさん、その・・・できたらもつと慎重に進めないかな？ 怪我したりするかもしれないし・・・」

「そんなの平気だよ！ この程度のことです怪我なんかしないって！それに、もし怪我してもキルロイさんが治してくれるし」

キルロイの心配をよそに、ワユはどんどん先へ進んでいく。

「ワユさん・・・本当に大丈夫かな・・・」

ティアマトは一人で、地下の探索をしていた。

「グレイル団長、一体どこに・・・」

ふと、遠くから音が聞こえてきた。わずかに声も聞こえる。グレイルと、プラハの声だ。

「団長、今行きます！」

メリテネ砦地下の広間で、グレイルとプラハは向かい合っていた。今まさに、お互いが戦っている。

「ぬん！」

グレイルが振るう戦斧が、プラハを襲う。

「くっ・・・！」

プラハはギリギリのところで騎馬を後退させるが、腕に切り傷を負う。

「やるじゃないか！」

後ろへ下がってグレイルとの距離を取ったプラハは、そこからフレイムランスを振り回し、投げつける。フレイムランスは激しい炎をその身にまとい、グレイルを目掛けて空中を突き進む。

「当たるか」

グレイルは余裕で身をひねり、フレイムランスをかわす。

プラハはフレイムランスを拾うために馬を走らせるが・・・

「隙だらけだ！」

グレイルはその場から飛びあがり、プラハを蹴りつつ反対側へ着地する。

（さすがね・・・）

ティアマトは広間の入り口で、戦いの様子を見守っていた。グレイルは明らかに、手を抜いている。プラハが本気でかかっているのだ。グレイルは、まるで子供の相手でもするかのような戦い方だ。

「ティアマト！ 親父は・・・！！」

そこへ、アイク達が出てきた。上の階を探したが見つからず、地下へとやってきたというわけだ。

アイク達の姿を認めるなり、ティアマトは言う。

「大丈夫、グレイル団長が優勢よ」

アイクも広間の様子を見ると、プラハがわめいていた。

「何なんだい、お前は！？ 一介の傭兵ふぜいが、どうしてここまで戦える！？」

するとグレイルは、フツと笑いかける。

「どうした、もう終わりか？」

プラハは愕然とした。

「負ける・・・？ このあたしが・・・そんなバカな・・・」

その時だった。どこからか足音が響いてきたのは。

4つある広間の出入り口の一つから、デイン兵の大群ががなだれ込んできたのだ。

「いたぞ、こつちだ！」

「プラハ様をお守りしろ、傭兵どもは皆殺しだ！！」

アイクはその様子を見て、グレイルを呼んだ。

「まずい、敵の増援だ！ 親父、退こう！ すごい数だ・・・！！！」

「・・・仕方あるまい」

グレイルは残念そうにそうつぶやき、別の出口へ向かう。だが・・・

ザッザッザ・・・

「！」

その出口からも、ものすごい数のデイン兵が現れたのだ。ならばさ

らに別の・・・と思いきや、残り2つの出入り口からもデイン兵が大勢出てきた。

アイク達は、完全に包囲された・・・。

「くくく・・・形勢逆転だねえ」

さっきまで絶望的な表情をしていたプラハは、嬉々とした表情でアイク達を睥睨する。

「・・・全軍、突撃！ あいつらを殺せっ！！」

プラハがフレイムランスをアイク達に向け、デイン兵に命じると、デインの無数のソルジャーたちは一斉に突撃体制をとる。

「万事休す・・・か・・・」

グレイルは力なく言う

「親父っ！」

アイクがそう励ますと、グレイルは斧を担いだ。

「・・・生き残るぞ、アイク。何がなんでも、こんなところでくたばる訳にはいかん。覚悟はいいな！」

「ああ！」

グレイルの言葉に、団員は全員従った。各々が武器を取り出し、デイン兵たちに向き直る。

ブラハは、笑いながら言葉を浴びせる。

「もう逃げ場はないよ。お前たちを見放した、神を呪うがいいさ！」

と、その時・・・

「グオアアア！！！！」

大きなうなり声のようなものが、広間を反響した。

「な、なんだ？」

アイクは驚いたが、それ以上にデイン兵たちも狼狽し始める。

「グオアアアア！！！！」

さつきよりも近いところからうなり声が響く。デイン兵たちは明らかにパニックとなっていた。

「け、獣だ・・・ガリアの獣兵だ・・・！！」

「に、逃げろっ！ 食い殺されるっ！！」

数人のデイン兵が逃げ出すと、それに続いて他のデイン兵も我先に

と逃走を開始する。プラハはあわてて、兵士たちの中心に行き、フレイムランスを掲げた。フレイムランスは再び、紅蓮に輝きだす。

「ま、待ちなっ！ お前たちっ、うろたえるな！ 敵に背を向けたやつはこの場であたしが黒焦げにするよ！！」

「ひいっ！」

プラハは兵士たちの逃走を食い止めようとそう言ったつもりだったが、どうやら逆効果だったようだ。恐怖に駆られたデイン兵は、一人残らず逃走してしまう。

「くっ、どいつもこいつも、腰抜けばかりだ」

残されたプラハは、そうつぶやいた。

その後すぐ、出入口の一つからデイン兵たちは戻ってきた。完全に、自制がおかしくなっている様子だ。

「け、け、け……獣……」

デイン兵たちの後ろから広間になだれ込んできた者達の姿に、アイク達は驚かされた。なぜなら、彼らは猫や虎だったからだ。

さらに驚くことに、そんな彼らを率いる先頭の水色の猫が、ピンク色の煙を出しつつ、みるみる水色の髪をした人の姿へ変わっていったのだ。これにはただ、驚くしかなかった。

「デイン軍に告ぐ！ 直ちにこの場から立ち去れ！ さもなくば、

我々ガリア軍が相手となるぞ!!」

さっきまで水色の猫だった人物が、そうデイン軍に告げる。一見若い男のようだが、彼は人型に戻ってもなお、猫の特徴を持った耳を持ち、尻尾を生やしている。

「・・・そう言われて、『はい』と返事ができるもんか」

ブラハは開き直る。

「どのみち、陛下のもとに戻れば処刑されるんだ。ここで戦って死ぬ方がまし・・・」

「退け、ブラハ將軍」

「!」

ブラハの言葉を、何者かがさえぎる。若い男の声だが、妙に威厳がある声だ。ブラハ含めた全員が、声のした方を向く。

声がした方の出入り口から現れた人物は、漆黒の甲冑に身を包んだ人物。顔も含め、全身くまなく甲冑で覆っているため、相手がどういう表情をしているのか全く分からない。背には深紅のマントをたなびかせ、腰には金と銀、2本の大剣を帯びている。

「漆黒の騎士・・・!?!」

ブラハは、そうつぶやいた。漆黒の騎士、と呼ばれた黒甲冑の人物は、構わずに話を続ける。

「王には、私がとりなしてやろう。ここは、兵を退くがいい」

プラハは悔しそうな表情を浮かべたが、

「チツ・・・全軍、退却！」

退却命令を下す。

プラハ以外の兵士は、逃げるようにして広間から出ていった。

プラハが去っていった後、黒甲冑の男は何も言わず、その場にたたずんだ。

「・・・」

グレイルは、そんな彼を見て、不思議そうな顔をした。

「・・・？」

何となくアイクには、グレイルと漆黒の騎士が、お互いを見つめているような気がした。

「親父を・・・見ているようだな？」

「ああ・・・」

謎の沈黙が流れる。その沈黙を破ったのは、獣兵たちを率いてきていた水色の髪をした青年だ。

「・・・おいっ！ 一人でやるつもりか！？ デイン兵！」

「・・・」

漆黒の騎士はそれに応じず、静かに背を向け、出入り口から立ち去っていく・・・。

そして、グレイルは漆黒の騎士の姿が見えなくなるまで、その後ろ姿をただ、見つめていた。

「・・・」

「親父・・・？」

アイクが聞いても、しばらくグレイルは心を奪われたように、棒立ちとなっていた・・・。

「お兄ちゃん、お父さん！」

夕暮れのメリテネ砦から出てきたアイク達を最初に出迎えたのは、ミストの声だった。

「おい、アイク！！」

「アイクも無事だったか、よかった・・・」

さらに、ボーレやオスカーの声も聞こえた。

「オスカー、ボーレ！生きてたんだな？」

アイクが二人に聞くと、ボーレは得意そうに言った。

「おう、当たり前だぜ！ 何てったっておれは、お前の先輩だからな！」

「そうやってまた調子に乗る……」

オスカーはボーレに横やりを入れ、言葉を継ぎ足した。

「デインの追撃部隊と戦ったとき、ボーレは一度死にかけたんだ。私はボーレを背負ってどうにか国境を突破したのだが、私自身かなりの痛手を負っていてね……国境を越えたところで私も意識を失ってしまったんだ」

オスカーは、自分が体験したことをアイクに話す。

「気を失っていた私たちを、偶然エリンシア姫が見つけてくださったんだ。それで、彼女の回復魔法で私たちは九死に一生を得たというわけだよ」

「そうだったのか……何にせよ、あんたたちが生きていてよかった」

アイクが見渡すと、ミストやヨファ、エリンシアだけでなく、合流できずにいたボーレ、オスカーの姿も見えた。そして、5人を守っているのは、ガリアの獣兵たちである。

「アイク様、グレイル様……ご無事でよかった……」

エリンシアが安心した様子でそう言ったが、アイクはエリンシアに聞く。

「エリンシア姫、どうして戻ってきたんだ？」

すると、獣兵たちを率いている様子の水色の髪の子猫青年が、エリンシアに代わって説明する。

「王女は、あんたたち傭兵団の救助をガリア軍に要請してきた。だから、オレたちが来たってわけだ」

そう説明する青年に、アイクは聞きたいことがあった。先ほどセネリオから聞いた話では、こいつは半獣……ということになる。

「お前は、ガリアの……半獣か……？」

アイクは青年に聞く。すると、青年は不快そうな顔をした。青年だけでなく、周りの獣兵たちも。

「“半獣”？ ハッ、思い上がった呼び名だよな？ お前たちから見れば、オレたち『ラグズ』は半端者の“半獣”だってのかい？」

どうやら、猫青年は怒っているようだ。あまり怒りを表面に出してはいないように見えるが、目が笑っていない。

「……他に呼び方を知らなかった。気に障ったのなら、すまん。あんたたちのことは、『ラグズ』……そう呼べばいいのか？」

アイクはとりあえず謝しておく。すると、ラグズの猫青年は怒りを

収めたようだ。

「へえ？　礼は通すつてのか、気に入ったよ。で、お前さんは……ええっと？」

猫青年は、どうも人懐こい性格のようだ……と、アイクは思った。

「アイクだ。グレイル傭兵団のアイク」

「アイクか。オレはガリアの戦士ライ。よろしくな」

「ああ」

簡単に自己紹介を済ませると、ライはエリンシアの方を向いて話します。

「それにしても……突然、ガリア領内に駆けこんでくるやつらがいるから、何かと思えば……クリミアの王女だって言うじゃないか……驚いたよ。二日前にクリミア王都メリオルのクリミア王城でデインが出した勝利宣言で、王族は全て殺害されたと思っていたからな」

ライが言った言葉は、アイク達に強い衝撃を与えた。アイクは愕然となり、思わず聞き返す。

「勝利宣言……？　じゃあ、クリミアはもう……？」

ライはその質問に対し、何も答えない。だが、答えないこと自体がすでに、返事であることは明らかだった。

クリミア王国はデイン王国に敗戦。

テリウス大陸の地図上から、「クリミア王国」という国名が、二日前に消えたのだ・・・。

エリンシアはうつむく。

「・・・私も・・・先ほどライ様から伺いました・・・私が・・・逃げ出した直後に・・・レニング叔父様は・・・もう・・・」

エリンシアの目から、涙があふれる。

「私は・・・本当に、たった・・・一人に・・・」

「エリンシア姫・・・」

アイクは、エリンシアに何もすることができなかった。

重くなった空気を変えるためか、ライが再び話した。

「・・・それがあつたからこそ、我が王は、念のため国境の警備を強化されていた。オレの部隊が救援に来れたのは、偶然じゃないってわけさ」

「そうか・・・」

「とりあえず、エリンシア姫を王の元へご案内する。アイク、あなたたちには、上の指示を仰いでみるから、ガリア領にある古城で待機してくれ。悪いが、こんなに大勢の他国者を、いきなり王宮に連れていくわけにはいなくてね」

ライの提案は、アイク達にとってもいい話だった。自分たちよりもまずは、エリンシアの安全を確保する必要があるからだ。

「分かった。それで問題ないよな、親父？」

アイクはすぐ横に立っていたグレイルに、意見を求める。だが、なぜかグレイルは上の空になっており、アイクに気付かない。

「親父？」

「・・・！ 何だ？」

ようやくグレイルは気付く。

「どうしたんだ、ぼうつとして。・・・らしくないな」

「ちょっとした考え事だ。それより、どうなったって？」

どうやらグレイルは、今までのやり取りをずっと聞き流していたようだ。

アイクは手短に、要点だけ説明することにする。

「エリンシア姫だけ、先に王宮へ向かうこととなった。俺たちは、

ガリア領内の古城を借りて待機だ。場所は・・・どっちの方だ、ライ？」

「部下に案内させよう。おい、誰か・・・」

「無用だ。ここから遠くないなら、国境を越えて西の・・・ゲバル城だろう？」

ライは部下を呼ぼうとしたが、グレイルがさえぎる。

「場所は分かる。あんたたちは、一刻も早く王女をカイネギス殿に
対面させてやってくれ」

グレイルが言ったことは、まさにライが言おうとしていたことである。ライは少しの間固まっていたが、すぐに人懐こい笑顔を浮かべた。

「・・・ずいぶん、気の利くお客さんだ。じゃあ、失礼しよう。迷惑でなければ、後で食料なんかを届けるように手配するけど？」

「そうしてもらえんなら、助かる」

グレイルはそう答えた。

「では、参りましょうか。エリンシア姫」

ライはそう、エリンシアを呼んだ。エリンシアはだいぶ、落ち着いたようだ。

「それでは、みなさん・・・また後ほど。・・・すぐにお会いできますね？」

「ああ」

グレイルはそうとだけ答える。

「気を付けてな」

アイクは、エリンシアにそう言った。

「はい、アイク様たちも、どうかお氣をつけて・・・」

エリンシアを連れたライ率いるガリア兵たちは、もうすっかり日が落ち、暗闇となった樹海の中へ消えていった・・・。

くクリミア＝ガリア国境く

（親父・・・一体どうしたんだ？ プラハと戦った後あたりから、様子がおかしいぞ）

クリミアとガリアの国境を流れる川。その川にかかった橋を、グレイル傭兵団一行は渡っていた。

グレイルは終始、無言状態だ。何かを深く考えているようだ。

（親父は考え事をしていると、眉間にしわが寄るからな。何を考え

ているんだ・・・」

だが、聞きだすことは出来なかった。

「団長、ゲバル城つてのはどっちの道行くと着くんですか？」

分かれ道があり、ボーレが聞く。だが。

「・・・」

グレイルは気が付かない。

「団長！」

「親父、ボーレが呼んでるぞ？」

アイクは軽くグレイルをつつく。

「・・・！ん、ボーレ、どうしたんだ？」

ようやくグレイルは気付いた。

「ゲバル城に行くには、どっちに行けばいいんですか？」

「ああ、分かれ道か。その道は右だ」

グレイルはそうとだけ答えると、再び眉間にしわを寄せる。

（親父・・・）

西の空をつつすら明るくさせていた名残惜しそうな太陽の光も、すっかり消えた。辺りは真っ暗な夜である。

闇が支配する刻限が、やってきたのだ。

東の空には真円を描く満月が昇りだす。月明かりは、かなり明るめだった。

そんな月明かりに照らされる古城が、見えてきた。あれがゲバル城であろう。

古い城だが、堅牢な作りである。この城ももしかしたら、メリテネ砦と同じ時代に、全く同じ何らかの理由で造られたのかもしれない。

古城の中に必要な物資を運び込み、使用する部屋の中を掃除する。簡単な食事も済ませ、早めの就寝に着くことになった。

アイクは、なぜか寝付けなかった。

（親父・・・何考えてんだよ・・・）

クリミアの落日、そして・・・（後書き）

グレイルの様子がおかしい・・・一体どうしたというのだろうか？

ただ、これだけは言っておきます。

次回の話は重要です・・・

運命の一夜（前書き）

ライが率いるガリア軍の救援のおかげで、グレイル傭兵団は九死に一生を得た。謎の黒甲冑の男、「漆黒の騎士」の指示で、プラハを始めとするデイン兵たちは全員、メリテネ砦から撤退をする。

ライの口から出た衝撃の事実・・・クリミアの敗戦・・・その事実
に打ちひしがれるエリンシア。ライは彼女を、ガリア王宮へ先に案内し、傭兵団にはガリア領内の古城、ゲバル城にて待機するよう告げた。

グレイル傭兵団がゲバル城に着いた、その夜のこと・・・

運命の一夜

くゲバル城く

アイクは、眠れずにいた。疲れてるはずなのに、全く眠れなかった。早く寝よう寝ようと思うと余計に眠れないというのは、本当のことだ。

体の右側を上にして横になってみたが、どうにも居心地が悪い。そつと今度は、左側を上にしてみるが、やはり違和感がする。仰向けになったり、うつぶせになったり、枕を取り払ったり、寝る体の方向を変えてみたり・・・いろいろ試してみたが、どれも居心地が悪かった。

（ああっ・・・くそ！）

アイクは起き上がり、窓の外をぼんやりと眺めた。満月が照らす夜の熱帯雨林の中から、動物の鳴き声がときおり聞こえてくる。

眠気は、全く訪れない。アイクは半ば、眠るのをあきらめた。

ガリア王国はクリミアの南という位置関係から、気候はクリミアと大きく異なる。温暖で過ごしやすいクリミアと比べ、ガリアは熱帯と言っているいい気候だ。じっとしているだけで、汗をかく熱気だ。

まだ確か、春真っ盛りのころだったはずだ。だがここガリアは、と

つくに夏が到来している。

あるいは・・・一年中が夏なのかもしれないが。

外を見ていたアイクは、ふと気付いた。黄色い服を身に付けて巨大な戦斧を背負った明るい茶髪の男が、城を抜け出そうとしているのに。

「親父・・・？」

アイクは迷わず、すぐに服を着替える。皮鎧を身に付け、赤いマントを羽織り、新緑色のハチマキを頭に巻く。鋼の剣とリガルソード、2本の剣を納めた鞘をそれぞれ、腰のベルトに留める。最後に、鏡の前で確認をして、アイクは部屋を飛び出した。

「少しでも拠点を離れる時があったら、絶対に安全と言える場所以外では必ず装備を怠るな」

・・・グレイルがアイクに教えた、生き延びるための知識の一つである。

「親父っ！」

ゲバル城の正面の城門を出たところで、アイクはグレイルに追いついた。

「・・・アイク！？ お前、起きていたのか？」

グレイルは驚いた様子で息子を見つめる。

「ああ、どうにも寝付けなくてぼんやり外を眺めてたら、親父が城を抜け出すのが見えた。こんな時間に一体、どこへ行くんだ？」

アイクはそう父に聞いたが、グレイルは渋る。

「・・・お前には関係ないことだ。城に戻って寝ろ」

だがアイクは食い下がらない。

「いい加減子供扱いはやめてくれ。どうしようが、俺の勝手だろう？」

するとグレイルは、少し考えてから笑う。

「・・・フツ、頑固なやつだ。少し、歩きながら話すか？」

「・・・ああ」

夜の熱帯雨林を、二人の親子は静かに歩く。空には満天の星空が広がり、クリミアでは見えないような星座も見えた。満月は、かなりの高さまで昇っていた。

「どうだ。少しは傭兵団の戦いつてもものがつかめてきたか？」

グレイルはアイクを見ず、まっすぐ前を見つめたまま話しかけた。

「戦いには・・・少しは慣れた気がする。だが、親父がどうして新米の俺に団のことを任せようとするのかは、理解ができない」

アイクも、前を見たままそう言った。

「いやに突っかかるじゃないか。反抗期ってやつか？」

ぼかした返事をしたグレイル。それに対して、アイクは今度はグレイルの方を向いて言う。

「ちゃんと答えろよ。俺はまだ、傭兵としての仕事もまともにこなせてないんだ。人を動かすのは無理だ」

それを聞いて、グレイルは立ち止った。少し何かを考えて、アイクを向いた。

「・・・一緒に覚えていけばいい。どちらも経験を積みれば、様になるさ」

グレイルはそう答えたが、アイクはまだ納得がいかなかった。

「だが・・・ついこの間まで・・・親父は絶対、そんなことは言わなかった」

「・・・」

アイクは、父に聞いたかったことを問うた。

「何があっただ？ 親父。何をそんなに、あせってるんだ？」

「・・・」

少し沈黙が流れたが、グレイルは口を開いた。どこか、悲しそうな表情を浮かべて。

「・・・アイク、お前、母さんのことを少しでも憶えているか？」

「な、なんだよ、いきなり・・・」

「どうなんだ？」

いきなり、母のことを聞くグレイル。アイクはそんな父親に困惑したが、少し考えてみる。

（俺の記憶の中では・・・母さんはあんまりよく覚えてないな。でも・・・）

「そうだな・・・優しい人だった、気がする。でもよく覚えてない。親父は何も話してくれないし」

「そうか・・・」

その後、再び微妙な沈黙が流れる。二人は一言もかわさず、ただ歩く。

・・・と、突然グレイルは立ち止まった。

「親父？ どうしたんだ？」

アイクは不審そうなグレイルに聞くと、返事が返ってきた。

「・・・ここまでだ。俺のことは放っておいて、お前は城に戻れ」

「なんだよ、いきなり！？」

訳が分からずアイクは聞き返したが、グレイルは険しい表情をして重ねる。

「団長命令だ！ 城に戻れ！！」

グレイルはアイクを向き、黄色いマントをひるがえし、城の方へ手を向ける。

「わ、分かったよ・・・」

仕方なく、アイクはそれに従った。

「・・・」

おずおずと来た道を引き返すアイクを、グレイルはずっと見張っていた。ちゃんと城に帰るか、見届けるかのように。

やがてアイクの姿が森の木に隠れてしまつのを見届けてから、グレイルは歩きだす。

（・・・城だ）

アイクは、ゲバル城に帰ってきた。振り返るとさっきまで父と歩いた、熱帯雨林が広がっている。

（・・・親父・・・一体何をしようとしてるんだ？ この、森の中で・・・）

城に帰れ、と言われたが、アイクは城の中に入る気分になれなかった。しばらく、熱帯雨林を見つめる。

（何だろう、胸騒ぎがする。嫌な予感がしてきた・・・）

無性に、アイクは心臓の鼓動が高まるのを感じた。緊張というか、恐怖というか・・・そんな感情が沸き起こる。

（親父・・・！）

気が付くとアイクは、走っていた。夜の熱帯雨林の中を通る、さっきグレイルと歩いていた道を。

「はあっ・・・はあっ・・・」

満月は、最も高い位置に差し掛かろうとしている。

「くそっ・・・ほつとける訳ないだろ、親父のやつ！」

森の中を、ひたすら走ると・・・何か、金属がぶつかり合うような音が響いてきた。

「ふんっ」

ガキン！！

夜空の頂点へ達した月の真下で、巨大な戦斧と黄金に輝く大剣が激しくぶつかり合う。お互いの武器はぶつかった途端、火花を散らした。

戦斧を持った人物は、他ならぬグレイルだった。

「ぬおうあー！！」

戦斧を振りかざし、戦っている相手に向かって突撃する。そしてぶつかると見えた途端、グレイルは戦斧を振り下ろした。

だが、グレイルが使う戦斧は、相手の大剣によってあっさり受け止められる。

黄金に輝く大剣を操る人物は、全身黒甲冑に身を包んで深紅のマントをはためかせる男。メリテネ砦で見かけた、あの漆黒の騎士だった。

アイクは、森の中の少し開けた空間に出た。そこで、彼は見る。

「！！！」

グレイルが、漆黒の騎士と一騎討ちで戦っている場面を。

グレイルと漆黒の騎士は、激しくつばぜり合いをしていた。

ギギギ・・・

だが、グレイルが少しずつ、押されている。漆黒の騎士はゆっくりゆっくりと剣で斧を押し返し、最後には思い切り、グレイルごと戦斧を吹っ飛ばした。

シャキン！

「ぐっ・・・」

グレイルは、後ろにあった倒木より、さらに後ろまで飛ばされる。隣に、戦斧が転がった。

何が起こってるか分かっていないアイクは、思わず駆けだした。

「親父っ！！！」

「アイク！？」

その声に、グレイルは驚き、すぐに大声で返す。

「来るなっ！！！」

「！！！」

アイクは、反射的に足を止める。すると漆黒の騎士は、ちらつとアイクを見てから、再びグレイルに向き直った。

「……この剣を使われよ」

そう言つて、さっきまで自分が使っていた黄金の大剣を、グレイルの方へ放った。大剣はグレイルの目の前に転がっていた倒木に突き刺さる。

「……何のつもりだ？」

グレイルは立ち上がりつつ、漆黒の騎士に聞いた。

すると漆黒の騎士は、腰からもう一本の剣、白銀に輝く大剣を抜く。

「貴殿との戦いを楽しみにしていた。まともな武器で、全力を尽くしていただこう」

白銀の大剣をグレイルの前に降り降ろし、付け加える。

「……神騎将、ガウエインよ」

グレイルはそれを聞いて、静かに答えつつ、足で倒木を転がして剣を倒木から引き抜いた。

「昔・・・そんな名で呼ばれたこともあったな。だが・・・」

引き抜いた剣を、再び漆黒の騎士の目の前に投げ返す。剣は漆黒の騎士の前の地面に突き刺さった。

「とうの昔に、その名と剣を捨てた。今の相棒は、これだ」

傍らに転がっていた戦斧を構え、得意げな表情をグレイルは浮かべる。すると漆黒の騎士は、独り言でも言うかのようにつぶやいた。

「死ぬ気ですか・・・？」

漆黒の騎士のつぶやきは、グレイルにも聞こえたようだ。グレイルが口を開く。

「その声・・・覚えているぞ。たった十数年で、師であるこの俺を追いついたつもりか？ ふん、若造が・・・」

グレイルは表情を改め、叫ぶ。

「それでも、食らうがいい!!」

その叫びとともに、再び漆黒の騎士に向かって突撃していく。同じように、漆黒の騎士もそれに応じた。

斧と剣が、何度かぶつかり合う。

だが、今度の勝負は・・・

すぐに決まった。

グレイルの背中から突き出た白銀の刃が、月の光を反射させて輝く。

「っ！！」

その間、漆黒の騎士はまた静かに独り言を言った。

「……どういうことだ……？ この手応えの無さは、一体……？」

グレイルの体を貫いた白銀の大剣を、引き抜く。グレイルはよろけ、戦斧を取り落とした。

「親父……！！！」

アイクは、もうじつとせずには飛び出した。一騎討ちの最中だとか、敵が目の前にいるだとか、そんなこと構っていられなかった。体を貫いた剣が引き抜かれるとともに、よろけたグレイルを支える。

だが、支えきれずにアイクはグレイルともども地面に倒れる。

そんな親子の様子を、漆黒の騎士は静かに見ていた・・・。

「親父、親父っ・・・！！ おやじいいいいー！！！！」

夜空の頂点に浮かぶ満月に、いつしか雲がかかり始めていた・・・。

「・・・信じられんな。これが我が師の、なれの果てだというのが・・・」

漆黒の騎士のつぶやきなど、アイクの耳には入らなかった。

「親父っ！ 親父っっ！！」

必死にグレイルに呼びかけるアイク。すると、グレイルはわずかに目を開く。

「アイ・・・ク・・・」

「しっかりしろ！」

グレイルを励ますアイクをよそに、漆黒の騎士が歩み寄る。

「・・・さあ、渡してもらいましょうか」

グレイルは、漆黒の騎士の方を向いて弱々しく返事をする。

「あ……れは……もう……捨てた……」

それを聞いて、漆黒の騎士は笑ったような声で、答える。

「フツ、あれがどんなものか最もよく知るはずのあなたが、あれを捨てたなどと……もう少し、まともな言い訳を期待しましたが？」

「く……話は……終わりだ……」

グレイルはそう言い残し、口を閉じる。しかし漆黒の騎士は、話を終わらせない。

「どうあっても、口は割らぬ、と？ 確かに、死人に口はなし……だが……まだしばし時がある」

そう言って、漆黒の騎士はアイクを見る。

「……息子の死に顔を見て、なお同じセリフが言えるか……試してみるのもいいでしょう」

「……」

アイクは漆黒の騎士をにらみ、立ち上がる。腰からリガルソードを引き抜き、構えた。

「やめろ！ アイク……」

グレイルがそんなアイクを見て、そう言った。だが、頭に血が昇っていたアイクに、そんな言葉は届かなかった。

「でやあっ!!」

アイクはリガルソードを水平に構え、漆黒の騎士に向かって居合斬りを繰り出す。だが、漆黒の騎士はその重そうな装甲とは裏腹に、信じられないほど速い動きで居合斬りをかわした。

「！」

「・・・」

背後を取った漆黒の騎士は、剣を持っていない方の手で、アイクを殴り飛ばす。その信じられないほどの力で、アイクは近くに生えていた木に叩きつけられた。

「・・・っ・・・!!」

「アイクっ!!」

グレイルが身じろぎするが、痛みのせいか再び倒れ込む。漆黒の騎士が、アイクの方へ歩み寄る。アイクに向けて虚空へ大剣を振り下ろし、静かに言った。

「次は、外さん」

続いて、グレイルを振り返った。

「・・・例のものを渡せ。おとなしく従うならば、息子命だけは保障しよう」

「やめ……ろ……!! 息子に……手を出すな……!」

その時、どこかですさまじい遠吠えが響き渡った。それは、昼間に聞いたメリテネ砦でのガリア兵たちのものとは比べられないほど、威厳に満ちた咆哮だった。

「これは……『獅子王 ししおう』か……」

漆黒の騎士はその咆哮を聞くなり、一人でそうつぶやいてからどこかへ去っていかうとした。

「やむを得ん、ここは一度退くか……、……!」

漆黒の騎士の脚が、急に重くなった気がした。漆黒の騎士は足元を見てみると、アイクが脚をつかんでいる。

「逃がすものか……っ!!」

怒りの形相で自分を睨む少年に対し、漆黒の騎士は静かに語りかける。

「……お前も、父と同じ愚か者か？」

グレイルが、それを聞いて呻く。苦しそうだった。アイクはあわてて漆黒の騎士の脚を離し、グレイルの元へ駆けよった。

「親父……!」

グレイルは苦しそうにアイクに言う。

「・・・やめろ。お前の勝てる相手じゃない・・・」

「しかし・・・！」

「アイクっ！」

二人の様子を見て、漆黒の騎士はアイクに聞く。

「・・・来ないのか？ ならば、こちらから・・・」

そこまで言った時、再び威厳のある咆哮が熱帯雨林の中で響き渡った。さつきよりも大きくなっている。

「近いな・・・今、やつらと事を構える訳にはいかん。フッ、命拾いしたな小僧」

漆黒の騎士は二人に背を向け、粉のようなものを地面にまく。すると彼の足もとに模様のようなものが現れ、彼の体を光が包む。

光が収まった時、そこにはもう誰もいなかった・・・。

ポツリポツリと、水が落ちてくる。どうやら、雨のようだ。音はあつという間に激しくなり、辺りは熱帯特有の雨、スコールとなった。

「・・・全く。しょうがないやつだな・・・、もつとも、そんな風に、育てたのは・・・この・・・お・・・れ・・・」

雨に混ざって、グレイルの弱々しい声が聞こえた。アイクはグレイルを見る。

グレイルは、目を閉じていた。

「・・・親父・・・？ 親父！？ しつかりしろ！ ここじゃ何もできない・・・し、城に・・・戻らないと！」

「・・・っ・・・」

アイクはグレイルを背負う。本来アイクよりも重いはずだが、アイクはそんな重さなど分からなかった。というより、感覚があいまいになっていた。

とにかく、グレイルを城まで運んで手当てしないといけない！

「アイ・・・ク・・・」

アイクの背中で、グレイルの声がわずかに聞こえた。まだ、生きてる！

「親父！？ 気が付いたか？」

アイクはそう聞く。するとグレイルは、消えそうな声でアイクに話します。

「お前に・・・言っておく・・・事が・・・ある・・・」

アイクは断る。

「……後で聞く。今は城に戻る方が先だ」

だが、グレイルはアイクの断りなど全く聞かず、話し続ける。

「……仇を討とう……などと思うな……あの……騎士の事は……忘れる……」

「な……んだって？」

グレイルが言ったことに、アイクは耳を疑った。さらにグレイルは話を続ける。

「ガリア王……を……頼り……ここで……平和に……暮らせ……」

「親父！　しゃべるな！！　体力が奪われる！！　頼むから……！！」

静かに話すグレイルは、まるで遺言でも残すかのような話し方だった。アイクはこらえきれずに、グレイルに怒鳴る。

しかし……

「……後の……ことは……すべて……お前に……まかせたぞ……、みんなを……ミストを……」

「待て……ダメだ、そんなこと言っな！！　もうすぐ、灯りが見える……」

そこで、アイクは倒れてしまう。だがそれでも、再び起き上がり、グレイルを背負う。雨の音も、雷の音も、アイクにはもう聞こえなかった。

前には、ゲバル城の灯りがほんのり見えてきた気がした。

だが、アイクは意識があいまいになってきていた。自分が何を言っているかすら、自分で分かっていない。

視界が、暗転する。

「あと少しっ……！ あと少しでっ……！！」

運命の一夜（後書き）

グレイル・・・。

父の面影（前書き）

運命の夜から、一夜明けた日。

昨夜から降り続けていた雨は夜明け前にやみ、見渡す限りの晴天となった。

だが、傭兵団のメンバーは、みな深い悲しみに包まれていた。

その日の夕方・・・。

父の面影

『何だ、もう終わりか？ ほら来い！ その程度じゃあこの俺には届かんぞ！』

俺がガキだったところから、親父は俺に生きるための技術を叩きこんできた。

戦闘訓練では、ガキの俺を木刀で容赦なく転がせてたっけ……。

いや、だが今思い起こすと、親父は思い切り手を抜いていたことくらい分かる。でも、あの頃は本気でボコボコにされているんだって、思っていたが……。

何度倒されても、俺は起き上がり、親父に木刀を振りかざした。

『……やれやれ、頑固な所まで、俺に似たのか？』

物心ついたところから、俺は親父に憧れていた。親父を超えることが、俺の目標になっていた。

ティアマトと傭兵団を立ち上げ、セネリオ、シノン、ガトリー、キルロイ、オスカー、ボーレ、ヨファ、そしてワユ……同じように親父を慕うやつが、親父の元に集った。

戦いの技術だけでなく、知識も深く、人望もある親父……頑固で

厳しかったが、俺はあんたを超えたかった。

・・・結局、それは出来なくなっちまったがな・・・。

『アイク！ 早く大きくなれ。・・・お前はきっと、いい戦士になるぞ』

「親父・・・これは・・・夢じゃないんだ・・・現実・・・なんだ・・・な・・・」

グレイルが使っていた戦斧が、森の入口に突き立っている。斧の根元には白と黄色の花が束になって添えられていた。

この斧の下に、グレイルが眠っている。昨日まで生きていた・・・アイクとミストの実の父親が・・・。

夕焼け色に染まるグレイルの墓標。その前で、アイクは呆然と立ち尽くしていた。その横で、アイクの妹ミストは座り込み、顔を手で覆う。

「・・・」

「日が暮れて・・・冷えてきた・・・中に戻るぞ、ミスト」

「・・・」

ミストは、動こうとしない。

「ミスト・・・」

泣いていた。

「・・・つく、ひ・・・いつく・・・」

「ミスト・・・」

「・・・」

アイクは、ミストに言葉をかける。

「俺は、側にいたのに親父を守れなかった。すまん・・・」

「・・・ひ・・・つく・・・」

「・・・」

それ以上、妹に言うべき言葉が、見つからなかった。妹を見下ろし、兄は黙り込む。

すると、今度はミストが口を開く。

「・・・お父さん・・・いなくなつて・・・、・・・ひつく・・・、わ・・・わたし・・・もう・・・どうしていいか・・・わかん・・・ない・・・」

それは、ミストの心の本音だった。父になついていた娘の、本音だった。

アイクはそれを聞いて、ミストの隣に腰を下ろす。

「・・・俺がいる」

ミストは顔を上げる。涙で濡らした顔を、兄に向ける。

「お兄・・・ちゃん・・・」

ミストが本音を言ったように、アイクは自分の決意を打ち明ける。

「俺が、団長を継ぐ。親父の代わりに・・・お前も、傭兵団のみんなも守ってみせる」

それを聞いて、ミストは思わずアイクに顔をうずめ、声を上げて泣き出した。

「・・・う・・・っ・・・お兄ちゃ・・・お兄ちゃん・・・、お兄ちゃん・・・」

「・・・」

アイクは、優しくミストの頭をなでた。するとミストは、幾分落ち着いたようだ。まだ、顔をうずめたままだが、声を絞り出すように言う。

「・・・いやだからね・・・お兄ちゃんまで・・・何にも言わず・・・いなくなっちゃったりしたら・・・いやだからね・・・」

ミストの、たった一人の肉親に対する、願いだ。

「ああ、約束だ・・・」

アイクの返事は小さな声だったが・・・力強い声だった。

再び泣きだした妹を、兄は何も言わずに見守った。

やがて太陽は西の地平線へ沈みだし・・・昨夜よりもほんのわずかに欠けた十六夜　いざよい　の月が、東から姿を出し始めた。

父の面影（後書き）

アイク、ミスト・・・そして傭兵団が失ったかけがえのない存在。

それは、あまりにも大きすぎるものだった・・・

Greil's Mercenaries (前書き)

団長グレイルを失った傭兵団。

グレイルの息子アイクは、団長を引き継ぐことを決心する。

だが・・・アイク達がない間、ゲバル城の中では・・・新たな問題が起こっていた。

Greil's Mercenaries

くゲバル城く

「っざけんじゃねええ！！！」

怒鳴りながらこぶしをテーブルに叩きつけたのは、シノンだ。

シノンは完全にキレた様子で立ち上がり、向かいの席に座ったティアマトに言う。

「グレイル団長が興したこの傭兵団を、アイクみてえなガキに任せるだあ！？ あんなやつに、何ができるってんだよ！！ 寝言は寝てから言えよなあっ！！」

それに対し、ティアマトは静かに諭す。

「シノン・・・どうか分かってちょうだい。もともと、グレイル団長の跡を継ぐのはアイクだって決まっていたのよ？ 確かにあなたから言わせれば半人前でしょうけど・・・でも、彼もだいぶ成長したわ」

だが、シノンは認めない。

「あの新米ヒヨッコのガキの、どこが成長したってんだ！！ グレイル団長の息子だからって、ひいきにも程があるぜ！ 最も実力が高えやつが団長になる方が、絶対正しいと思うがねえ！？」

そして、シノンは隣に座っていたガトリーを見下ろす。

ガトリーは一瞬ビクツと震えたが、シノンは再びティアマト他団のメンバー（アイク、ミスト、ヨファ、キルロイは今いない）をさも嫌そうににらみつけ、言い放った。

「オレはこんな頭の固えやつらとつるむなんざ、まっぴらだぜ。オレはオレの好きなようにさせてもらう・・・こんなクソ集団とは、今日限りでおさらばだな！！」

シノンの言葉を聞いて、それまで黙っていたオスカーとボーレが身乗り出した。

「シノン、何を言い出すんだ！」

「団を抜けるってことか！？」

わずらわしそうに、シノンが答える。

「さっきから、そう言っただろうが！！」

そう言っ、隣に置いてあった荷物と弓矢を背負う。

新参者のワユが何も言えずに、ただ事の様子を見守っていた横で、ティアマトがもう一度シノンの説得をする。

「あなた、本当に団を抜けるの！？ グレイル団長にあった恩義は・・・どうするのー！」

シノンの手が、止まった。
だが、すぐに動き出す。

「・・・団長には、恩はあるさ。けどな・・・次期団長がアイクつてのが、オレは気に入わねえんだ!!」

そう言つて、荷物袋のほこりを手で払う。

そんなシノンの横で、ガトリーはオロオロしていた。

「シノンさん・・・本当に出て行っちゃうんすか？　お、おれは・・・どうなっちゃうんすか？」

シノンはガトリーを見る。ガトリーはシノンに言い募る。

「おれは・・・シノンさんのこと尊敬してるっす！　でも・・・シノンさんが団を離れちゃったら・・・おれは・・・」

「・・・ガトリー」

「？」

シノンはガトリーに不意に話しかける。

「お前は勝手にしろ。オレは、出て行くからな」

そして、荷物を背負って勝手口に立つ。

「あばよ」

シノンはそう言って、出て行ってしまった。

「え？ ええ！？ し、シノンさん！？」

残されたガトリーはうろたえる。優柔不断な性格の彼は、勝手口と団のメンバーを互いに見合わせ、あわてた。

「・・・」

ガトリーはしばらくそのままだったが・・・立ち上がる。

「シノンさん待つて！ お、おれもいくつすよー！！」

荷物など何も持たず、ガトリーは勝手口を開け、シノンの後を追って出て行ってしまった。

「そんな・・・ガトリーまで・・・」

ティアマトは頭を抱えた。そんな彼女の前で、オスカーとボーレが立ち上がる。

「副長、私とボーレで、何とか二人を説得してきます。ボーレ、行くぞ」

「分かったぜ！」

ティアマトは、頭を押さえながら、言った。

「うん・・・お願いね・・・」

ワユは一人で部屋まで戻り、ベッドの上に腰かけた。

「グレイルさん・・・」

ワユは今でも信じられなかった。あんなに強い人が・・・突然帰らぬ人となったことが。

（あたしを助けてくれたあの人・・・死んじゃったんだ・・・）

ふと、窓の外を見てみると、夕焼けはいつの間にか夜の帳に包まれつつあった。空には星が輝きだしている。

（昨日まで・・・生きてたんだよね・・・）

ほんの僅かに欠けた月が、東の空に昇っていた。

（団のみんながバラバラになっちゃって・・・この先どうなっちゃうんだろうね・・・）

「ふう・・・どうしてこう・・・次から次へと・・・」

食堂に残ったのは、ティアマトとセネリオだ。ティアマトは頭を抱

え、セネリオは静かにその様子を見る。

と、そこへアイクが戻ってきたことに、セネリオは気付く。

「・・・！ アイク・・・」

ティアマトはそれを聞いて、戸口の方を向く。蒼い髪に新緑のハチマキを巻いた少年が、そこに立っていた。

ティアマトはあわてて顔を上げ、努めて平静を取り繕った。

「あ、アイク・・・！ ミストは？」

「部屋で休ませた。キルロイとヨファが看てくれている」

普段から無愛想なアイクだが、今日はいつもにもまして表情が堅い。どうやらミストは、相当ショックが大きいようだ。無理もない・・・。

ティアマトはほっとする。

「そう。よかった・・・あのままじゃ、あの子までまいっちゃうもの。あなたも無理しなくてもいいのよ、アイク」

ティアマトの気遣いに、アイクは答える。

「俺はもう大丈夫だ。どんなに嘆いたところで・・・親父が生き返るわけでもない・・・。それより、世話をかけたなティアマト。セネリオも」

「いえ・・・」

「いいのよ、そんなこと・・・」

セネリオとティアマトの返事を聞いてから、アイクは食堂を見渡してから二人に聞く。

「それで・・・みんなは？」

アイクの問いに、ティアマトが口を開く。

「アイク、実はね・・・」

言いかけたところで、食堂の脇にあった勝手口が開き、オスカーとボーレが入ってきた。オスカーがティアマトに報告に行く。

「オスカー、ボーレ、戻りました」

「どうだった？」

ティアマトが二人に聞くと、ボーレは不愉快そうな顔で答える。

「振り返りもせず行っちゃいましたよ！ まったく、薄情なやつらだぜ！」

「ボーレ、どうしたんだ？」

状況が読めないアイクは、ボーレに事情を聞く。ボーレはアイクに驚いた。

「アイク！ おまえ、もういいのか？」

「ああ。それより、何があつたのか、説明してくれ」

ボーレは口ごもる。今アイクにあのことを、言わない方がいいと思つたからだ。

「え、あ、その・・・なんだな。えゝつと・・・」

「シノン、ガトリーが出て行きました」

だが、セネリオがはつきりと言ってしまった。ボーレはセネリオを非難する。

「セネリオ！」

だが、セネリオは目を閉じてもっともな答えを言う。

「隠す必要もないでしょう」

アイクはそれを聞いて、少し驚いた。

「二人が出て行つた？ 理由は？」

アイクはそう聞きかけたが・・・すぐに思い当たつた。

「いや・・・そうか。俺のせいだな？」

まさにアイクが言つた通りの理由だったため、ティアマト達はうな

ずくしかなかった。

「アイク……」

一応説明にと、ボーレが口を開く。

「……ティアマトさんが、次の団長をアイクにするつつて。それにシノンがキレて、ガトリーと一緒にさっき出て行ったんだ」

オスカーも、口を添える。

「後を追って説得してみたが、無駄だったよ」

さつきから黙って成り行きを聞いていたセネリオが、自分の考えを言う。

「元々、グレイル団長の後を継ぐのはアイクだと、決まっていたじゃないですか。それが予定より少し早まっただけのこと。納得できないというものを、無理に引きとめる必要はありません。戦力の低下は、新団員を募って補えばよいでしょう」

そのどこまでも徹底した現実主義の発言に、ボーレは反論する。

「そこまで言うなよ。ずっと一緒に戦ってきた仲間じゃねえか」

「ごめんなさいね、アイク。私の力が及ばなかったばかりに……」
セネリオとボーレの議論を横目に、ティアマトはアイクに申し訳な

さそうに言う。アイクは首を横に振った。

「・・・ティアマトのせいじゃない。シノン達の行動は当然だ。こんな新米が団長じゃ、命がいくつあっても足りないからな」

真顔で答えるアイクに、ティアマトは少し怒りめの声で返す。

「アイク！ 自分のことをそんな風に言わないで！」

だが、アイクはそんなつもりではなかった。

「卑下して言っているんじゃない。これは事実だ。今の俺なんかよりも、シノンやガトリィの方がずっと実力は上だ」

そこまで言って、アイクはやや語気に力を込めつつ続ける。

「だが、俺は・・・それでも、この団を守る役目を自分から放棄する気はない」

それを聞くと、ティアマトは顔を上げる。

「アイク！ じゃあ・・・？」

「親父の遺志を継いで団長になる。ここにいる皆が認めてくれるなら、そうしたい」

アイクのその声に、傭兵団のメンバーは全員納得した。

「もちろんだわ！」

副団長のティアマトは顔を輝かせ、

「元より、そのつもりだよ」

先輩のオスカーは当然の如くうなずき、

「いきなり差が付くってのはしゃくだけどな。まあ、認めてやるぜ、新米団長！」

一応先輩のボーレは、アイクの肩に手を置いて、喜んだ。

そこへ、キルロイの声が聞こえてくる。

「僕も、賛成です」

戸口の方を見ると、キルロイが立っていた。アイクはキルロイに駆け寄る。

「キルロイ！」

キルロイはどうやら、少し前にすでにここに来ていたようだった。

「ミストは眠ったよ。今はヨファが付き添ってる。それで、ここに来ただけれど・・・話はだいたい分かった。新団長はアイク。うん、じっくりくるよ」

一人、何も言っていない人物がいた。セネリオである。アイクはセネリオのところにも行き、聞いてみる。

「セネリオは？」

するとセネリオは、少し不安そうな顔でアイクを見上げた。

「・・・アイク。僕は、あなたの力になれますか？ あなたの傭兵団に・・・僕の居場所がありますか？」

アイクは、珍しく少し笑顔を見せつつ答える。

「・・・変なやつだな。俺はいつでも、お前を頼りにしている。これから助けてくれるんだろ？ セネリオ」

セネリオもまた珍しく、嬉しそうにうなずいた。

「はい・・・！ お側で、お守りします」

最後にアイクは、そこにいる全員を見渡して言った。

「みんな、ありがとう。頼りない団長だが、当分は大目に見てくれ」

アイクは、この団の名前は変えなかった。

『グレイル傭兵団』・・・

アイクは、最も尊敬する人物を旗印に、団長となったのだ。

その後、アイクは副長のティアマトから、団長としてやるべき仕事を聞く。

団の経費の収支の把握や、団員全員の装備をそろえること・・・

団員を知ったり、対人関係を頭に入れたりといった、情報収集のこと・・・

クリミアから逃げてきた行商隊が、この傭兵団と行動を共にしようと申し出ていること・・・などなど。

ティアマトは次々とアイクに言ったが・・・

「ティアマト！」

「なに？」

アイクはティアマトの話を止める。

「確かに何でも言ってくれとは言ったが・・・いっぺんにまくし立てられても訳が分からん。とりあえず、やりながら覚えて行きたいんだがそれで構わないか？」

アイクに言われて、ティアマトは反省する。

「あ……え、ええ。そうね。ごめんなさい、私ったら」

「……ここからは俺に任せて、あんたも少し休んでくれ」

「私なら平気……」

だが、ティアマトが無理しているのはアイクでもすぐ分かった。

「無理しないでいい。俺なりにだが、精いっぱいやるから」

「アイク……」

戸口から廊下の方へ出て行ったアイクの後ろ姿を見ながら、ティアマトはため息をつく。

「……っ……う……うつ……」

ティアマトは、涙を流し出す。

「……グレ……イル……っ……」

そのままふらふらと、勝手口から外へ出て行った……。

その頃アイクは、ゲバル城の玄関で……。

「あら……もしかして、あなたが傭兵団の団長さん？ ふふ、本

当にまだ若いのね」

黒い髪に薄い紗をかぶった、濃い化粧の女性が、アイクに話しかける。アイクがそちらに目をやると、4人の男女が玄関に立っていた。

「あんたたちが、ティアマトの言っていた商人たちか？ 俺たちと一緒に行動したいっていう・・・」

アイクの問いには、ひげ面で坊主・・・というかハゲ頭の大男が答えた。どうやら、この行商隊のリーダーのようだ。

「ああ、そうだ。こうして出会えたのも、何かの縁だと思ってね。あんたらが、わしらの安全を守ってくれるなら・・・わしらは、あんたらの望む物資を調達しよう。どちらにとっても、損のない取引だと思うが・・・どうかね？」

アイクは、純粹にその好意を受ける。

「それは・・・確かに願ってもない」

するとひげの大男は、右手を差し出した。

「じゃあ、これで契約成立だ。わしは武器商人ムストン。あんたらの好みの武器を仕入れてくるよ」

アイクはその右手を受け取り、握手を交わす。続いて、濃い化粧に黒髪の女性が自己紹介をする。

「わたしは、道具売りのララベルよ。色んな装具を用意してお待ちしているわ」

さらに、後ろに並んでいたよく似ている二人の青年のうち、金髪を後ろで束ねている方が自己紹介する。

「おれは、ジョージ。古物屋をやってるんだ。いらない武器や道具があつたら買い取るぜ」

そして、もう片方の茶髪を束ねた青年が自己紹介する。

「ぼくは、ダニエル。武器の錬成をやってる。お客さんのご希望通りの品を作り出すよ」

何でも、ジョージとダニエルは双子の兄弟らしい。よく似ているわけである。

一通り自己紹介が終わったところで、武器商人のムストーンがもう一つ提案する。

「それから・・・もし信頼してくれるなら、傭兵団の補給部隊として輸送隊も兼ねていいと思うとるがね。どうしようか？」

断る理由はない。それどころか、ものが増えてきていてそろそろ困りだしていただけに、うれしい提案だった。

「ありがたい申し出だ。ぜひ、利用させてもらう」

「そうか。じゃあ、これからよろしく頼むぞ」

「ああ」

アイクは、行商人の4人を空き部屋に案内した。アイクがいるこの場所は古くても城のため、部屋は余るほどたくさんあるのが救いだっ
た。

4人と別れ、アイクはふと、もう一度グレイルの墓に行こうと思
立った。

城の外に出たら、もう夜もかなり遅い時間だった。わずかに欠けた
月が、夜空の頂点にさしかかっている。

昨日の今とほぼ同じ時間に・・・グレイルは殺されたのだ・・・。

アイクは、熱帯雨林の入り口に突き立っているグレイルの戦斧を目
指した。

・・・と。

「・・・人の声・・・こつちか・・・？」

わずかに、人の声が聞こえてきた。一応アイクは警戒し、茂みに身
を隠す。

茂みからは、ちょうどグレイルの墓が見えた。その墓の前にひざま
ついているのは、赤い髪を一本のみつあみにし、白い鎧をまとった
人物。

「ティアマト・・・？」

ティアマトは、泣いていた。グレイルの墓の前で。

「・・・っ・・・く・・・っ・・・、グレ・・・イル・・・ど・・・して・・・
・どう・・・して・・・」

アイクは、少し変に思った。

（いつもティアマトは・・・親父のことを「団長」と呼んでいたはずだ。どうして、呼び捨てなんだ・・・？）

だが、そんなことアイクに分かるはずもなかった。

そのうちしばらくして、ティアマトは立ち上がって城の方へ帰って行った。アイクは茂みから立ち上がり、グレイルの墓に向かい合う。

「親父・・・」

たった今から24時間前に、グレイルは逝ったのだ。

使いこまれた戦斧だ。グレイルが、自作したものである。

そこで、アイクは柄に刻まれた文字に気が付いた。

「『ウルヴァン』・・・？」

さらに、その下には読めない文字が刻まれてあった。アイクはその

文字は読めなかったものの、見覚えはあった。

（セネリオが前言ってた・・・『古代語』だろうか？）

古代語とは、テリウス大陸ではるか昔に使われていた言語のことである。非常に難解だったため、古代語はやがてあまり使われなくなり、現在では「現代語」という言語が一般的だ。

魔道士が使った魔道書は現在でも古代語で書かれているため、魔法の知識がある者ならある程度は読めるらしいが・・・。

（セネリオも、きっと疲れてるだろう。無理させない方がいいだろうな）

アイクはそう思い、墓を後にした。

城に帰ったアイクは、ミストの様子を見るために妹の部屋へ行く。すると、その部屋からヨファが、静かに出てきた。

「・・・」

「ヨファ？」

アイクが呼ぶと、ヨファはこちらを見てアイクに気付く。

「あ・・・アイクさん。ミストちゃんなら、さっき眠ったよ」

「そうか・・・面倒をかけたな」

「ううん・・・」

まだ子供なヨファにも、疲労感が漂っているように見えた。

「もう時間も遅い。お前も寝た方がいい」

「・・・うん・・・」

ヨファは、何か言いたそうに下を向く。

「どうしたんだ？」

アイクは、ヨファに聞いてみた。するとヨファは、アイクを見上げて答える。

「・・・ミストちゃんは、だいじょうぶだよ」

「？」

ヨファが言うことがよく分からないアイクに、ヨファは付け加える。

「アイクさんがいるから・・・だから、だいじょうぶだよ」

「！」

それを聞いて、アイクははっとなった。ヨファは、ミストの気持ち
が分かってる。

最後にヨファは、明るい顔をした。

「それだけ！　じゃあね、おやすみなさい」

そして、自分の部屋へ帰って行った。

「ヨファ・・・ありがとな」

部屋へ戻るヨファの後ろ姿に、アイクはそうつぶやいた。

「よっ 新米団長！　早速仕事か？　おれにできることあったら、何
でも言えよな」

廊下ですれ違ったボーレは、アイクに笑いかける。そんなボーレに、
アイクは聞いたかったことを聞いてみた。

「・・・ボーレ。お前な、本当のところはどうなんだ？」

「なにが？」

「俺が団長を継ぐってこと・・・前はあんなに嫌がってただろ？
だから、本音はどうなのか聞いておきたい」

ボーレは、少し考える。

「・・・そうだな。お前の今の实力を知ってりや・・・危なっかしくて下にはつきたくねえかもな。けど・・・アイクが次期団長になるのは・・・グレイル団長が望んでたことから・・・おれはなんとしても、叶えてえんだ」

「・・・」

静かに聞くアイクに、ボーレは続ける。

「・・・団長は兄貴だけじゃなく、おれも団員として雇ってくれた。親父が死んで・・・小さいヨファを抱えて・・・おれは途方に暮れた。・・・オスカー兄貴が騎士団を除隊して、戻ってきてくれたけど・・・生活は苦しくってな」

ボーレの境遇はアイクはすでに知っていたことだったが、改めて聞くと、とても苦しい生活だったということがとても伝わる。

「そんな、おれたちに・・・寝る場所と満足な食事・・・それから、仕事をくれたのは、団長だった」

今度は、アイクが口を開く。

「・・・お前たち兄弟は、団の一員として十分働いていたんだ。そこまで恩に着る必要はないと思うが？」

ボーレは首を横に振る。

「恩だけじゃないぜ。団長は、おれたちのことも家族だつて言ってくれただろ？ その家族を守るため・・・おれはお前に協力する」

「そうか・・・」

アイクが納得すると、ボーレはいきなりアイクの右肩にこぶしをぶつけた。もちろん、本気ではないが。

「・・・そういうこつた。だから、遠慮なんかすんじゃねえぞ。分かったな！」

アイクも、ボーレの右肩にこぶしをぶつける。アイクはまた、珍しく笑顔を見せた。

「ああ、はりきってこき使わせてもらっ

「お、おう・・・！ 男に二言はねえ。どーんと来い！」

城の中にあつた教会の跡地のような部屋で、キルロイは一人、ひざまづいていた。

組んだ手にライブの杖を持ち、頭を垂れる。すっかり朽ち果てた、女神像に。

そして、ゆっくり立ち上がって教会を後にしようとしたとき・・・ろうそくを持ったアイクと鉢合わせになった。

「・・・キルロイ？」

「アイク・・・」

アイクは、ろうそくを近くの長椅子の上に置いた。

「何をしてたんだ？」

「・・・祈ってた」

「親父のために・・・？」

「そう・・・団長の・・・」

ろうそくの明かりに照らされたキルロイの顔は、涙に濡れていた。

「キルロイ・・・」

キルロイは堰を切ったかのように、泣きだす。

「・・・ごめ・・・っ・・・君の方が・・・辛いはず・・・なの・・・に・・・」

少しの間、キルロイは泣き続ける。そんなキルロイに、アイクは言う。

「・・・ずいぶん昔・・・親父に聞いた話なんだが・・・死者は・・・そいつのために流された涙の分だけ、女神から安らぎが与えられる・・・らしい」

アイクは、静かに教会の女神像の前まで歩いて行く。そこで、キルロイを振り返る。

「俺は・・・なんでだか・・・泣けないみたいだからな。・・・キ

ルロイが、俺の分まで泣いてくれるのなら・・・ありがたい」

「・・・ア・・・イク・・・」

「・・・ありがとな。親父のために・・・ありがとな・・・キルロイ・・・」

教会跡の朽ちた女神像は、割れた窓からの月光を浴びて、美しく輝いていた。キルロイの涙に、答えるかのように・・・。

G r e i l ' s M e r c e n a r i e s (後書き)

話中心ですみません><;

アイクを団長として再出発したグレイル傭兵団。この先、彼らに待ち受ける運命は？

8章 　く絶望そして希望　く　前編（前書き）

グレイルがこの世から去ったのち、アイクはグレイル傭兵団の団長を継ぐことを決意する。

しかし、それをよしと思わぬシノンは、後輩であるガトリーを引き連れて団を抜けてしまった。

それから、さらに2日後のこと・・・。

8章 く絶望そして希望く 前編

くゲバル城く

窓の外から見える景色は、どんよりとした雨模様。ときおり稲光が走り、雷鳴が轟く。

アイクは着替えながら、静かに窓の外を眺めていた。激しい雨が、たまに窓の中に降り込んでくる。それもそのはず、窓にはガラスの類はなく、完全な吹きさらしだからだ。

（蒸し暑い・・・）

熱帯雨林特有の蒸し暑さは、この豪雨の中でも全く和らぐ気配はない。

ふと、窓の外の景色を見て、3日前の夜を思い出した。

（あの夜は・・・親父がこの城を抜け出したんだっとな。ここからちょうど、その様子が見えて・・・）

再び、雷鳴が響き渡る。

（・・・そして、あの騎士の手にかかったんだ・・・）

着替え終わったアイクは、階段を下りる途中でオスカーに会う。アイクを見つけたオスカーは、こちらに走ってきた。

「アイク、おはよう。今、城の玄關にラグズが来てたよ。食料届けにね」

「オスカー、おはよう。そうか・・・すぐ行く」

玄關に行くと、3人のラグズが控えていた。

リーダーと思われる真ん中のラグズが、アイクの方を向いて礼をする。灰色の髪をして、真面目そうな雰囲気の大柄の男だ。

「おはようございます。傭兵団の代表の方でしょうか？」

「ああ、そうだ。あんたたちは、食料届けに来てくれたのか？」

アイクの問いに、灰色髪のラグズはうなづく。

「はい。ライ隊長のご命令で、2日分ほどの食料を届けて参りました。・・・あなたたち、持って来なさい」

「はっ、キサ班長！」

キサ・・・というらしい灰色髪のラグズは、部下と思われる後ろの2人にそう告げる。すると、部下2人は共に猫に化身し、一旦外に

出た。

アイクは、キサに礼を述べる。

「助かった。そろそろ食料が底についてきていたんだ。こんな雨の中、ありがとうな」

「いえ、ライ隊長のご命令ですから」

すぐに、キサの部下のラグズ達が戻ってきた。どちらの猫も、背中にたくさんの荷物を載せている。

「ご苦労だったわね。もう、戻ってよろしい」

人型に戻った2人は、荷物を玄関の脇に積む。だが、露骨にアイクに対して嫌そうな目線を送っていた。

そんな彼らに、キサはたまに戒めるような目を向ける。すると、2人はしぶしぶ作業を続けた。

アイクはそんな2人に気付かず、別の気になったことをキサに質問した。

「なあ、ライの話によると・・・そのうちガリア王宮から連絡が来るらしいが・・・あんたたちは、聞いていないか？」

「そのことでしたら、ライ隊長がおっしゃっておいりました。我が王は近いうちに、連絡をされるおつもりですよ。どうか、今しばらくお待ち願います」

食料をボーレと一緒に倉庫へ運び込んでから、傭兵団の団員全員は朝食のために食堂へ集まった。

「おはよう、アイク。調子はどう？ うまくやれそう？」

目玉焼きをナイフとフォークで切りながら、ティアマトはアイクに聞いてきた。

「ティアマト。もういいのか？」

ソーセージにがつきながら、アイクは逆に聞き返す。するとティアマトは一瞬考えたが、気丈に振る舞った。

「ええ、もうすっかり元気」

だが、アイクはティアマトが無理してるようにしか見えなかった。

ハムをのせた食パンを口に入れつつ、アイクは思う。

（ティアマト・・・あなたは、過去親父と、何があったんだ？ あんたは、毎晩親父の墓に行って泣いてるみたいだが・・・一体、何が・・・）

だがその思いは、アイクの口から出ることはなかった。食パンと一緒に、腹の中にしまい込むことにした。

朝食も終わり、団員全員はテーブルの周りを囲うように座る。

「さあ、バリバリ働くわよ！　まずは新団員の募集を・・・いえ、ガリア王との謁見が先ね。アイク、ガリア王宮からの連絡はあった？」

聞かれたアイクは、ティアマトが無理してるように見えながらも、答える。

「いや、まだだ。食料を届けてくれたラグズの話では、近いうちに連絡をくれる手はずなんだが・・・」

その時だ、窓際に座っていたセネリオが声を上げた。

「・・・アイク、大変です！　窓の外を見てください！！」

「！！！」

アイクが窓の外を見ると、無数の黒い鎧の兵士たちが、城を包囲しているのが見えた。

一見見ただけでも、すごい量だ。アイクは緊張した様子で、震える声を出す。

「あれは・・・！」

「げ、幻影でなければ・・・デイン王国軍一個小隊かな・・・こん

な時に、来なくても・・・」

隣にいたキルロイも、血の気が引いた顔で、声を絞り出す。

「おい、おい！　ここはガリア王国領内だぜ！？　こんなところまで追ってくるなんて、正気かよ、あいつら！！」

ボーレは、信じられないという様子で騒ぐ。オスカーが、冷静に言う。

「ここまで入り込んで来るからには、決死隊ということだろうな」

「どうにかして、逃げられないかな・・・」

ワユも珍しく、弱気を言う。

そこへ、周囲を偵察に行っていたセネリオが戻ってきた。

「・・・駄目です。完全に囲まれました。・・・逃げ出すことは不可能です」

それを聞いて、ティアマトは唇をかむ。

「この戦力であの人数とやり合うなんて・・・最初から負けが見えてるわ」

アイクは、窓の外を睨む。

「それでも・・・やるしかない。全員、戦闘準備を！」

「・・・了解！」

「すぐに対策案を用意します」

傭兵団員は、それぞれ戦支度にとりかかる。武器や道具が不足している者は先日避難してきた行商隊から買い、またそれぞれの持ち物も必要に応じて交換をした。

アイクは、部屋できずぐずりなどの道具を整理していた。その時だ。

「・・・ん？ この本は・・・」

持ち物入れの奥に、古びた本が入っていたことに気付く。本には、「祈りの書」と書かれていた。

「これは・・・確かメリテネ砦の宝箱にあった・・・」

興味本位で本を開くと、なぜか一文字も書かれていない。一体どういうことだろう？

だが、本を全部のページをめくり終わった後、祈りの書の裏表紙に唐突に文字が浮かび上がってきたのだ。

『死の淵に瀕した時こそ、女神へ祈るがよい。女神による、生死の審判が下されよう・・・』

そして、祈りの書から緑色の光があふれ、アイクを包み込み、アイ

クに吸収されるかの形で光は消え去った。

そして、祈りの書は・・・まるで役目を終えたかのごとく、ボロボロに崩れ、あっという間になくなったのだ・・・。

「何だっただ、今の・・・？」

呆然とするアイク。だが、すぐに気を取り直して準備に取り掛かる。余計なことを考えている余裕は、今はない。

そこへ、ミストの声がした。

「お、お兄ちゃん！」

見ると、部屋の入口の戸のところで、ミストが震えていた。

「ミスト！ お前はヨファと一緒に奥に隠れてろ！」

「でも、お兄ちゃん・・・っ！」

アイクに言われても動こうとしないミスト。アイクは、もう一度ミストに言う。

「早くするんだ！！・・・大丈夫だから、な？」

安心させるように、アイクはそう押した。ミストも、少し落ち着いたようだ。

「う、うん・・・気を付けてね・・・」

アイクは荷物の整理が終わり、走り出す。戦場へ・・・。

ミストは、そんな兄の様子を見送っていた。その時、あることに気付く。

「・・・あ・・・！ また・・・メダリオンが光ってる・・・」

ミストはそつと服の中からメダリオンを取り出し、両手のひらの上に置く。

以前、エリンシアに見せた時と同様、メダリオンの中心から、蒼い炎のような光があふれていた。

心を落ち着かせるようで・・・また、心を奮い立たせるかのような、不思議な・・・だが、見る者を魅了させる美しい光・・・。

「お母さん・・・お父さん・・・もし、わたしの声が聞こえるなら、お兄ちゃんたちを守って・・・！ お願い。お願いだから・・・」

メダリオンを握りしめ、ミストはそう願う。握りしめた指の間から、蒼い光はあふれていた・・・。

「みんな・・・準備はいいな？」

グレイル傭兵団の団員たちは、玄関で円陣を組んでいた。

「ええ、いつでも戦えるわ！」

「何としても、この状況を打破しましょう」

「デイン軍などに、簡単に負ける気はない！」

「おう、おれたちの力を思い知らせてやろうぜ！..」

「みんな、支援なら僕に任せてね」

「よし、いっちょやってやろうじゃん！」

みんなの心は、決まっていた。お互いがお互いを奮い立たせ、デインに徹底抗戦をする。

勝ち目の薄い戦いだろう。むしろ、勝つ方がおかしいくらい、敗色濃厚な戦いだ。

それでも、アイク達は戦う道を選ぶ。

このゲバル城には、クリミア王女エリンシアはいない。エリンシアの安全は、ガリア王宮が守っている。だから、アイク達が負けても、

クリミア再興は可能であらう。

アイク達にとって、この戦いは雇い主 クライアント との契約を果たす戦いではない。

「生を勝ち取るため、生き残るため」の戦いだ。

「グレイル傭兵団、出撃だっ！！」

オオーーーー！！

新団長、アイクの出撃命令とともに、団員たちは武装し、戦場へと飛び出していった。

8章 く絶望そして希望く 前編（後書き）

デイン軍に完全に包囲されたアイク達・・・果たして、彼らは生き延びることができるのだろうか？

ゲバル城をめぐる戦いの火ぶたが、今斬って落とされる！

8章 　く絶望そして希望　　後編（前書き）

デイン王国軍の決死隊が、グレイル傭兵団が待機するゲバル城を突如強襲する。

新団長アイクの命令で、団はこれを迎え撃つことを決定。非常に勝ち目の薄い戦いだが、戦うしかない。

団員全員の命をかけた壮絶な戦いが、ここに幕を開ける。

8章 く絶望そして希望く 後編

くゲバル城く

「カムラ隊長、報告します！ 傭兵どもが武器を持ち、姿を現しました！！」

激しい雷雨が降り続けるゲバル城近くの熱帯雨林。

デイン兵の一人が、決死隊の隊長であるカムラに報告を行っていた。重厚な甲冑に身を包んだカムラは、報告を聞いて兵に指示を飛ばす。

「そうか、やつらが現れたか……。よし、騎兵部隊は正面からの突撃を試みよ！！ 重歩兵部隊は東の石段から進撃し、アーチャーと魔道士は援護を！！ ソルジャー部隊は西から奇襲をかける！！ 全方位から、傭兵どもをかく乱するのだ！！」

カムラの指示に従い、デイン兵たちはあわただしく持ち場に着く。

ゲバル城の西側では、大勢のソルジャーたちが待機をしていた。正面からの騎兵隊が突入を開始し始めたら、ソルジャー部隊も一気に攻め込む手はずだからだ。

そんなソルジャーたちの中に一人、少女の魔道士が紛れ込んでいた。

「・・・」

薄い紫の髪を二つに束ね、魔道士風の軽い衣装を身にまとっている。雨のせいかもしれないが、顔色があまりよくない。

その時彼女は、他のソルジャーの一人と肩がぶつかってしまった。

「おいこら、どこ見てんだ？」

ソルジャーは因縁をつけ、少女につかみかかった。

「す、すみません・・・よく、見てなかったの・・・」

そう言ったが、ソルジャーは聞かない。

「見てなかった、じゃねえだろうがよ！ てめえのせいで肩の骨が折れちまったらどうしてくれんだあ！？」

「す・・・すみません・・・」

「あのな、謝つてすめばおれたち兵隊なんざいらねえんだよ！ クリミア人のくせによ、おれたちデイン人様に喧嘩売ろうってか？」

そんな時、ゲバル城の正面の方で、ホラ貝の音と怒声が響いてきた。騎兵隊が、攻撃を開始したのだろう。

「突撃だー！！」

「オオー！！」

騎兵隊の突撃に合わせて、ソルジャー隊も奇襲を仕掛けるべく突撃

命令が下る。

「ちっ、もう突撃か・・・おい、クリミアの女。後で覚えてろよ！」

少女魔道士に因縁つけていたソルジャーは、そう言っただけで突撃に加わる。仕方なさそうに、少女も周りに合わせてゲバル城の西にある階段へ走っていった。

「ティアマトは正面から来る騎兵を抑えてくれ！　ボーレとセネリオは東の通路を塞げ！　オスカーとワユは俺とともに、西側の通路で戦う！　キルロイ、援護は任せたぞ！」

アイクの指示通り、団員は襲い来るデイン兵と戦いだした。

「騎兵隊、突入だー！！！」

かなりの数のデインの騎兵たちが突入を試みる正面。ティアマトは、そこに立ちふさがる。

「そこをどけ！！！」

ブン！　シャキン！！

「誰がどくもんですか！！！」

ズシャアア！！

「デイン王国万歳・・・ぐふっ」

だが、倒しても倒しても次々と、騎兵は襲いかかってくる。

「これじゃキリがないわ・・・！」

「食らえ、おれの力ああ！！」

ガシャアアーン！！

「ぐはっ・・・」

ボーレはハンマーを振り回し、重歩兵の一人に殴りかかる。重歩兵やジェネラルに有効なこの武器は重い上に命中もさせにくい、が、重厚な甲冑を瞬時に打ち砕くことが可能だ。

「よし、何とか倒したぜ・・・」

だが。

「隙あり！ ファイアー！」

ポボボッ！

「ぐ、熱っ！」

重歩兵の後ろに控えていた魔道士が放ったファイアーを、ボーレは
まともに食らってしまう。

「くそ・・・これでも食らえ！」

ボーレは武器を手斧に持ちかえ、魔道士に向けて投げる。手斧に当
たった魔道士は、そのまま倒れた。

さらに、重歩兵が続く。

「重歩兵には魔法が有効・・・ウインド!!」

セネリオはウインドを連続で唱え、後ろの重歩兵をかまいたちで斬
り刻む。

だが重歩兵は倒せたものの・・・。

「!! ウインドの魔道書が・・・」

そう。今ので、ウインドの書の魔力を全て使いきってしまったのだ。
魔道書は、あっという間に崩れさる。

「セネリオ、こいつを使え！」

ボーレが、さっき倒した魔道士から何かを拾い上げる。赤い魔道書・
・・・ファイアーの書だ。

「ボーレ、助かりました」

「いってことよ！　がんばろっぜ！」

2人は再び、敵に向かい合う。

「はあっ！」

ズシャ！

「うぐっ」

オスカーは滑らかな動きで鉄の槍を操り、ソルジャーの一人にダメージを与える。

「ワユ、今だ！」

「任せて！　えいっ！」

スパアン！

「・・・我が生涯に・・・後悔はない・・・」

ワユの攻撃で、ソルジャーは倒れた。オスカーがそんな彼女を見て、一言言う。

「思ったよりも、いい動きをしてるな」

「え、そうだった？　ありがとう！」

「いえいえ。・・・生き残るためにも、がんばろう」

「うん！ オスカーさんもね！」

そんな時、近くで鉄の剣を振るっていたアイクが、オスカーに注意を呼び掛ける。

「・・・おいオスカー！ ポールアクスだぞ、気をつけろ！！」

「なにっ！？」

アイクが言った方を見ると、そちらには柄の部分はかなり長くした形の斧を担いだ戦士が、オスカーを狙っていた。

「へへへ・・・騎兵なんてオレ様の相手じゃねえ！！」

戦士はそう叫ぶと、ポールアクスと言う斧を振りかぶり、オスカーに振り下ろしたのだ。オスカーはよけきれず、まともに食らう。

「ぐはああ！！！！」

「オスカー！！」

オスカーは、ものすごい重傷を負っていた。今にも、やられそうなほどに。

「アイ・・・ク・・・」

「オスカー、無理するな！ 後方でキルロイに治してもらって来い！」

「すまないな・・・」

オスカーはそう言つて、後方へ撤退した。

ポールアクスとは、騎兵と戦うことに特化した性能を持つ斧のことである。普通に使うこともできるが、馬に乗って戦う相手に対しては、威力が跳ね上がるのだ。

「覚悟しろ・・・！」

アイクは、ポールアクスを持った戦士に向き直り、剣を振り上げる。そしてそのまま、戦士に走っていった。

「でいつ！」

アイクは、ジャンプしたままの勢いで頭上から剣を振り下ろす。しかし。

ガキーン！

その攻撃は、あっさりとポールアクスで防がれた。

「へへ・・・そんな攻撃など当たらんぞ・・・っ!？」

だが、それはアイクの作戦の一つにすぎなかった。

剣をはじめた反動を逆に使い、アイクはそのまま一回転をして背後をとる。

「し、しまっ・・・!!」

シャキイン!!

「ぐお・・・」

アイクは、戦士の胴を一文字に斬り裂いた。戦士は、倒れ込む。

「よし、何とかなったな・・・」

が・・・。

「うぐぐ・・・まだだ・・・まだ終わってねえ!!」

「!!!?」

何ということだろう！ 戦士は起き上がり、ポールアクスをアイクの頭上に振り下ろしたのだ。

「お前も道連れだあっ!!」

ズバァッ!!

「が……ふ……」

ポールアクスを持った戦士は、突然倒れた。

「大将、油断しちゃだめだよ！」

倒したのは、ワユだった。

「……ああ。これからも気を付ける」

ひたすら敵を倒し続ける傭兵団。だが、敵の数は一向に減らない。
城を囲う熱帯雨林の中から、次々と増援が送り込まれているからだ。

「……いつまで戦えばいいの……」

ティアマトは、ただひたすら斧を振るう。倒した敵の数を数えるのは、もうやめた。

「……あんだ、誰だ……？」

雨の中、とりあえず敵の一波をしのぎ切ったアイクは、一人の少女に気が付いた。

薄い紫の髪に、魔道士風の服。小柄というよりも、華奢な少女だ。

周囲の敵は皆こちらに突撃してきたのだが、彼女だけが動かないのが不思議に思えたからだ。

「・・・私・・・旅の魔道士で・・・イレースと言います・・・この城に・・・あつ・・・」

そこまで言って、少女はよろける。アイクはあわてて、支えてやった。

「お、おい大丈夫か？」

「すみません・・・雨が・・・冷たくて・・・さ、寒い・・・」

見ると、イレースと言うらしい少女は震えている。どうも、顔色も良くないようだ。

「・・・顔色が悪いぞ。どこが悪いのか？」

イレースはそれを聞いて、少しだけアイクに笑いかける。

「・・・優しいんですね・・・」

「あんたは、どう見てもデイン兵には見えないからな。・・・奴らに協力しているのは、何か事情があるんじゃないか？」

アイクの問いに、イレースは素直に答えた。

「一緒に旅をしていた商人たちと・・・はぐれてしまって・・・雨宿りしようと思って・・・ここに来たら黒い鎧の兵たちが・・・私のこと、クリミアの残党だろうって・・・」

「！」

アイクには、思い当たることがあった。先日この城を訪ねてきたあの、行商隊だ。もしかしたら……。

イレースの話は、まだ続く。

「違うって言っても……信じてもらえなくて……だから……あの人たちの仲間になって……あなたたちに攻撃を……しました……。ごめんなさい……。」

申し訳なさそうに、イレースはうつむく。アイクは首を横に振り、答えた。

「いや、誰だって命は惜しいだろう。それより、商人の一団ならこの城の中にいる。確か武器屋がムストーン、道具屋がララベルって名乗ってたが……。」

アイクがそう言うや否や、イレースは急に顔を輝かせた。

「その人たちです！　よかった……無事だったんですね」

「俺たち傭兵団と商人たちは契約を結んでいる。あんたがああの連中の連れならもう、戦う必要はないんじゃないか？」

「もちろんです。私も、あなたがたの仲間にしてください」

アイクは、うなづく。

「分かった、イレース。そろそろ敵の第二波がやってきそうだし、ここは危険だ。あんたは城の中で隠れていてくれ。外の敵は、俺たちが防ぐ」

しかし、イレースはそうしない。

「いえ・・・私も戦います」

「だが、あんた体が・・・」

まだ、イレースはふらついている感じがする。アイクはそれを心配した。

イレースは、熱帯雨林の方を向いて答える。

「・・・デイン兵は、今見えている数だけではありません。森の中にもまだ・・・伏兵がいます・・・ですから・・・」

イレースが言うには、デイン兵の数はこんなもんじゃないというのだ。今でさえ厳しい状況のため、アイクは少し考える。

そして、結論を出した。

「・・・そうか。じゃあ悪いが頼む」

「はい・・・!」

一方ワユは、城の通路の一角で、一人のソルジャーと戦っていた。

「クリミアの女ごときに、遅れをとるオレ様じゃねえよ」

グサツ！

「痛っ・・・あたしだって！」

シャキーン！

「くっ、女がなめた口きいてんじゃねえぞこら！」

ワユは、かなり苦戦していた。槍に対して剣は不利というものもあるが、ワユの場合非力なのだ。鎧をまとったソルジャーにも、あまり大きなダメージは与えられない。

「あたし・・・こんなところでやられちゃうのかな・・・」

と、その時だ。敵ソルジャーの頭上で、黄色い光が炸裂したのは。

「サンダー！！！」

ピシャアアン！！

「ぐおおあ！？」

ソルジャーは突如頭上からの落雷のようなものを食らい、その場にひざまづく。

「い、今のは一体・・・？」

ワユが声が出た方を見ると、そこには薄紫の髪をした少女・・・イレースが、黄色い魔道書を片手に立っていた。

「・・・大丈夫でしたか？」

「あ、うん。あたしは平気だよ。助けてくれてありがとうね！」

「いえ・・・」

「ぐ・・・くそ・・・」

サンダーの魔法を食らって倒れたソルジャーは、憤怒の目でイレースを睨む。

「やっぱり、裏切りやがったな・・・クリミアの女め・・・!!」

そして、手にした手槍をイレースめがけて投げつける。しかし・・・。

「えいつ！」

キーン！ カランカラン・・・

アイクが、その手槍を剣で叩き落とした。

「・・・」

「な、なに・・・」

アイクの後ろで、イレースは再び魔道書を開く。

「これで、終わらせます・・・サンダー!!」

ピシャアアン！ ドドーン!!

「ぎゃあああ!!」

先ほどイレースに因縁を付けていたソルジャーは、そのイレースによって倒されたのだった。

その後も何度も戦ったが、数は一向に減らない。アイク達傭兵団にも、疲労が溜まってきていた。

「リライブ！」

キルロイは、青い宝玉がはめられた杖をワユにかざす。すると、ライブよりも大きな光がワユの体を包み込み、かなり深い傷が一瞬で消え去ったのだ。

リライブとは、ライブよりも一段上をゆく回復魔法だ。強力な癒しの力により、怪我を大幅に回復させることができる。

リライブの杖は、キルロイがエリンシアからもらい受けたものである。

「キルロイさん、ありがとう！」

「いいえ、ワユさんも、無理しないでね」

「ちくしょうっ・・・なんて敵の数なんだよ!!」

ボーレは、東側で苦戦していた。重歩兵たちの後ろから、アーチャーや魔道士が攻撃してくる。ボーレは手持ちのきずぐすりで怪我を治すので、手一杯だ。

「敵の数がどのくらいか・・・全く見当が付きません・・・」

セネリオも、疲れた顔でそうつぶやく。

「はあっはあっ・・・っ・・・まだ兵がいるのか・・・!」

アイクは、辺りを見渡してみる。無数のデイン兵が、次々とこの城に乗り込んでくる様子が分かった。

このままではまずい!

「ハアッ・・・全員、城内に戻れ! 繰り返す! 一旦、城内へ戻るんだ!!」

もはや、これほどの数では辺りに分散して戦っても厳しい。城の正面玄関に全兵力を集中し、敵を抑えるしか方法はない。

アイクの命令を聞き、全員が玄関の中へと退避してくる。

「みんな・・・よく聞いてくれ。俺たちは今、全滅の危機にひんしている。このまま打って出ていつては、確実にやられるだろう・・・。それを避けるためにも、ここで一丸となってとにかく、玄関を守るんだ」

全員の輪の中心で、アイクはそう全員に告げる。

「もはや、後はない。何が何でも、ここを守り切るんだ。絶対に敵を、中に入れるな!!」

8章 く絶望そして希望く 後編（後書き）

追い詰められた傭兵団・・・

彼らの運命やいかに！

なお、次回は他のFE作品より、ちょっとしたゲストが登場予定です、お楽しみに

西方からの旅人（前書き）

グレイル傭兵団が待機するゲバル城に、突如デイン王国軍の決死隊が襲いかかる。

アイク達は一致団結して抗戦するが、デイン軍の圧倒的な戦力の前に戦線の後退を余儀なくされていた。

その頃、ガリア王国の西に広がるレグス海に、テリウス大陸を目指す一隻の密航船があった。

西方からの旅人

くレグス海く

昇る太陽をバックに輝く鏡のような海面に、一隻の帆船が浮かんでいた。

旗は全く掲げておらず、どこにも国名などは書かれてもいない。密航船である。

密航船が進んでいる進路は、ガリア王国の西海岸を目指していた。

「ふく、今日もいい天気だな！」

一人の男が、船室から出てくる。

青い髪をツンツンに立たせ、頭にひもを巻き、切れ長の目をした人物だ。体格はそれほど大柄ではないが、戦士らしい雰囲気醸し出している。

「全く・・・この地方は暑いぜ」

そうばやきながらも、どこか嬉しそうである。男は甲板に立ち、一人で体操を始めた。

そこへ、今度は女が船室から出てくる。髪から服から全てが赤い、小柄な女だ。

「ジェイクー！ ご飯できたわよ！」

ジェイクと呼ばれた青い髪の男は振り返るや否や、すぐに手を振る。

「そうか。アンナ、今すぐ行くからな！」

そして、2人は再び船室の中へ入っていった。

「アンナ、いつもうまい飯ありがとうな！」

アンナが作る食事は、ジェイクにとって何事にも代えがたいおいしさだ。

「そんな・・・あなたが喜んでくれるなら私もうれしいよ？」

「ははっ、参ったぜこりゃ」

そして、2人で笑い合う。平和なひとときだ。

2人は、世界中を旅する恋人同士だ。様々な大陸を旅してまわっている。

テリウス大陸のはるか西方、アカネイア大陸から、2人はやってきたのだ。

アカネイア大陸の盟主である神聖アカネイア帝国の、ノルダの町出身のアンナと、グルニア王国の元戦車兵ジェイク。ひょんなことで出会った2人は、アカネイア大陸で巻き起こった二度の戦争が終了したのち、世界各地を回る旅に出ることを決めたのだった。

「なあアンナ、俺たちが旅に出てから、どのくらい経ったんだろうな？」

おいしそうに朝食をとりながら、ジェイクはアンナに尋ねる。するとアンナは、右の人差し指をあごに当てて考える。

「うーん・・・2ヶ月くらいじゃないかな？　ほら、英雄戦争が終わったのが2月の中頃だったじゃない？」

「なるほど、もうそんなになるんだな」

ジェイクは、船室の隅に積んである、木と鉄を組み合わせ、車輪をつけた機械のようなものを見る。

「俺の相棒も、乗れなくなっちゃったしな・・・これから行くテリウス大陸には、油がとれる木の実があればいいんだが」

この機械は暗黒戦争の折、ジェイクがグルニア軍に志願した時から使っていた「シューター」と呼ばれる戦車のような機械である。暗

黒戦争ではグルニア軍だった時も、マルス王子率いるアカネイア同盟軍に寝返った後も、このシューターを使って大活躍したのだった。

だが、英雄戦争が勃発してから、シューターの車輪を動かすための油がとれる木の実が、全く成らなくなってしまったのだった。そのため、シューターは動かせず、動けないただの砲台と化した。

ジェイクは泣く泣くシューターをあきらめ、斧と弓を手にすることにしたのだった。恋人のアンナは大陸各地で店を開きつつ木の実を手に入れようとがんばってくれたが、それもかなわなかった。

「アンナ・・・お前にはいつも苦勞をかけてすまなかったな」

食事を終えて、ジェイクはそう言う。

「そんなこと言わないでよ。私はいつも、ジェイクの味方よ？」

アンナは明るく答える。その明るさが、ジェイクの元気のもとであった。

「ところで俺たちは、テリウス大陸のどこに着く予定になってるんだ？」

ジェイクが聞くと、アンナは世界地図を広げる。この地図は本来普通のルートでは手に入らないものだ。秘密の店を開いていたアンナだからこそ、手に入れられたのだ。

「そうね．．．今いる場所は、ガリア王国つて国の西側のこの．．
・レグス海のこの辺りのはずよ。このまま行けば、ガリア王国の西
海岸に上陸できるわ」

「そうか、分かったよ。今度の大陸でこそ、いい商売できるといい
よな。秘密を守りつつ繁盛．．．難しいな、参ったぜ」

「そうね。秘密の店、繁盛させたいし．．．油がとれる木の実も、
見つかるといいわね！」

「ああ、こいつは俺の相棒だからな！」

そう言いつつシューターを見るジェイクに、アンナは横目を使う。

「えゝシヨックゝ．．．私のを差し置いてシューターの方が大事だ
なんて．．．」

ジェイクはあわてて首を横に振る。

「うわわ、もちろん君の方が大事に決まってるさ！！」

「本当．．．？」

「ああ、大好きだよ」

アンナは顔を赤く染め、うなずく。

「私も．．．大好き！」

一組の恋人を乗せた密航船は、ガリアの西海岸を目指して順調に航海を続ける・・・。

西方からの旅人（後書き）

「FE新・紋章の謎」より、ジエイクとアンナを登場させました

2人のことをよく知らないという方は、カミユさんの小説「新・紋章の謎 本編」を参考にどうぞ

ガリアの戦士達（前書き）

ゲバル城を強襲した、カムラ率いるデイン王国軍の決死隊。

アイク達は彼らに応戦するものの、負けはすでに見えていた。グレイル傭兵団は一旦城の玄関まで戦線を後退させ、そこで彼らと戦うことにした。

だが・・・もはや彼らの命運は、尽きかけていた・・・。

ガリアの戦士達

くゲバル城く

「・・・ハアツ・・・ハアツ・・・畜生！　まだやられてたまるか・・・っ！」

豪雨の中、アイクはたった一人で玄関前に立ち、ひたすら剣を振っていた。

アイク以外の団員は全員重傷を負い、現在城の中に避難している。もはやともに戦えるのは、アイクしか残っていなかった。

「弱小国の取るに足らぬ傭兵団など、これでおしまいだ！」

ヒュン！　サツ！

「くっ・・・こんなところでやられる訳には・・・！」

ザシユ！！

戦士が振るう鋼の斧をすれすれでかわし、剣の切っ先を胸に突き立てる。

「背後が隙だらけだぜえ！！！」

グサッ!!

「うぐっ・・・!?!」

アイクが背を向けた隙に、重歩兵が鋼の槍でアイクの左肩を突き刺したのだ。肩から大量の血液が流れ出し、足元に雨と混ざった血だまりができる。

「畜生・・・!!」

動かなくなった左腕をあきらめ、リガルソードを右手に重歩兵に斬りかかる。リガルソードは重歩兵のまとう甲冑を斬り裂き、重歩兵は倒れた。

「お兄ちゃん!!」

敵の波を何とかしのいだ時だった。アイクのすぐ後ろ、玄関の中から、ミストの声が聞こえる。アイクは驚いて振り返った。

「ミスト!? 出てくるんじゃない・・・」

「いやっ!!」

アイクの注意をさえぎり、ミストはアイクの腰に抱きつく。

「ミスト・・・?」

「・・・もう、逃げられないんでしょう? わたしたち・・・ここで・

「・・・死ぬんでしょ？」

アイクは首を横に振る。

「バカを言うな！　どんなことをしてでも、お前とヨファだけは逃がしてやる！！　ここを抜けだしたら、2人でガリア王宮にいるエリンシア姫を頼って・・・」

「わたし、どこにも行かない。お兄ちゃんとみんなと・・・ここに残る」

「・・・」

再びミストは、兄の言葉をさえぎる。そして、雨に濡れ、傷だらけの兄の顔を見上げる。

「いっしょに死ぬのは、怖くないよ？　お母さんと・・・お父さんにも・・・会えるし。だから・・・」

ミストは、泣いていなかった。笑顔でもなかった。

「だから・・・お願いだから・・・逃げろだなんて言わないで・・・ね？」

ミストからの、切実な願いだ。妹の純粋な瞳を見て、アイクは少し考える。そして、結論を言い渡す。

「・・・分かった。だったら、ここにいろ」

それを聞いて、ミストは初めて表情を動かす。心から嬉しそうに、喜ぶ。

「ありがとう、お兄ちゃん」

しかし・・・アイクの出した結論にはまだ続きがあった。

「・・・けどな、母さんたちには会えないぞ」

「え？」

不思議そうに首をかしげる妹に、理由を言い渡す。

「お前は俺が守る。絶対に、死なせはせん」

そう、アイクは・・・

『・・・後の・・・ことは・・・すべて・・・お前に・・・まかせたぞ・・・』

あの夜・・・

『・・・みんなを・・・ミストを・・・』

父と、約束したのだ。

『待て・・・ダメだ、そんなこと言っな!! もうすぐ、灯りが見える・・・』

傭兵団の団長として、仲間を・・・そして、ミストの命を守ることが。

『あと少し・・・!! あと少しでっ・・・!!』

誰も、死なせてはいけないんだ・・・。もう、こんな悲しみを繰り返してはならない。

「親父と・・・約束したんだ」

そう言って、アイクは再び戦場を向く。

「お兄ちゃん・・・」

「ハアツ・・・ハアツ・・・」

左腕が動かないアイクは、それでもリガルソードを手にデイン兵を何人も倒し続ける。そんな彼の目の前に、重厚な黒甲冑に身を包み、ショートスピアを手にした男が立っていた。

決死隊の隊長、カムラである。

「・・・たったこれだけの人数でここまで耐え抜くとは・・・敵ながら見事。だか・・・それももう終わりだ」

「くっ・・・」

アイクはふらふらになりつつ、剣を構える。そんな彼に対し、カムラはショートスピアを振り上げ、命令を下す。

「全員、かかれ！ 傭兵団長を討伐せよ！！」

命令とともに、アイクを包囲していたデイン兵たちは、その包囲円を崩して一斉にアイクに襲いかかる。

だが、それでもアイクは逃げず、抵抗する。

（こんなところで・・・負けてたまるか・・・！！）

そう思った。いや、思ったのではない。そう、叫んでいたのだ。

「こんなところで・・・負けてたまるかああああ！！！！」

狂ったように、アイクはリガルソードを振り続ける。居合斬りで戦士を斬り飛ばし、斬りかかってきた剣士にはカウンターで反撃し、ソルジャーを鎧ごと叩き割り、魔道士をまとめてなぎ払う。

だが、デイン兵の圧倒的な戦力の前に、アイクは押されてきていた。

（俺は・・・負けない！俺がやられたら、城に侵入されてみんな殺される・・・そんなこと、絶対させん！！）

気合いや根性で、アイクは戦い続ける。疲労などとづくに限界を超え、全身の傷も深く、命の危険があるほどなのは誰の目にも明らかだ。

それでも、倒れない。

（俺が戦うのは、みんなのためだ。傷ついたみんなが、城の中にいる・・・。だったら俺は、守るべきもののために・・・戦うだけだ！！）

その時だった。戦線の後方から、悲鳴が響き渡ったのは。

「ぐ、ぐわああっ!!?」

「な、何だ・・・一体・・・?」

カムラは、困惑して周囲を見渡す。周りのデイン兵も、アイクへの攻撃そっちのけとなった。

「ぐえあー!!」

「は、半獣・・・」

悲鳴は、次々とこちらに近付きつつ聞こえてくる。地面を疾走する足音のようなものも聞こえる。

突如、アイクを包囲していたデイン兵の一人が、背後から水色の毛並みをした虎に襲われる。さらに、その横にいたデイン兵は、オレンジ色で首にリボンを付けた猫に襲われた。

それからは、あっという間だった。猫と虎、2頭の牙獣は、またたく間にカムラ以外のデイン兵を掃討してしまったのだ。

「・・・ガリアの半獣・・・っ!? なんと・・・なんと圧倒的な力・・・」

カムラは、そうつぶやく。

「これが・・・これがラグズの力か・・・」

アイクもまた、ラグズの2人の力に驚いていた。

カムラの目の前に、オレンジ色の猫が立つ。カムラは震えながらシヨートスピアを突き出すが、猫は難なくそれを避けて見せる。

「フーーーーッ!!」

猫は尻尾を立て、カムラを威嚇するかなうなしぐさをした直後・
・

バリバリバリ!! ザッシャー!!

カムラの甲冑に取り付き、甲冑ごとズタズタに切り裂いてしまった。

「・・・ぐ・・・は・・・化け物め・・・」

そして、カムラは倒れた・・・。

カムラが倒れたのち、猫と虎、2人のラグズをゲバル城に招き入れる。

瀕死の重傷を負っていたアイクはそのままキルロイに治療をされたが、キルロイ自身精神力を使い果たしていたため、治癒力はあまりなかった。仕方なくアイクは、応急処置で済ませることにした。

だが、左腕はうまく動かなくなっていた。障害が残ってしまったのだ。

「さっそくだが、あんたたちが王宮からの使いか？」

全身包帯でぐるぐる巻きになったアイクは、杖をつきつつふらふらと玄関に現れる。そんないでたちでも、口調ははっきりしていた。

「ソうだ。ガリアの戦士モウディだ。蒼い髪、オまえがアイク、ソうだろう？」

先ほど水色の虎に化身していた、大柄で水色の髪をしたラグズが、そう返す。発音があまり上手ではないが、言葉は通じていた。

「確かに俺がアイクだ。さっきは、助かった。礼を言う」

アイクがそう答えると、モウディは嬉しそうな表情になる。

「ライは言った。アイクは悪くないヨそ者だと。モウディたちは、キッと仲良くナれるだろう」

しかし、不機嫌そうにしていた者がいた。モウディの後ろにいた人物。先ほどオレンジ色の毛並みをした猫に化身していた、オレンジ髪の小柄な少女のラグズである。

「・・・そんなこと、まだ分からない。こいつら【ベオク】は、表と裏、2つの顔を使い分けるようだからな」

それを聞いてモウディは、少女を戒めるように呼ぶ。

「レテ！」

どうやらこの少女は、レテと言う名らしい。アイクは、レテに聞く。

「ベオク・・・？ 何のことだ？」

するとレテは、相変わらず不機嫌そうに答える。

「お前たちのことだ。我々、力ある者を【ラグズ】、お前たち能なしを【ベオク】と呼ぶ」

「・・・何だと？」

アイクの問いに答える前に、モウディがレテに反論した。

「レテ！ オまえがヨくない。王は禁じている。ベオクとの争いを！」

しかし、レテも食い下らない。

「だが、ほとんどのベオクは我らをあの侮辱的な名前で呼び、蔑んだ目で見ろ！ それが友好を築こうと言う態度か！？」

そのやり取りを聞いていて、アイクは思うことがあった。

以前、ライのことを「半獣」と呼んだ時の、彼の反応である。おそらく、「半獣」という呼び方はラグズに対する差別用語なのだろう。

知らなかったとはいえ、ライにはつらい思いをさせてしまったのだ・
・・。

「・・・確かに俺たちは、ごく普通にその呼び名を使っていた。それがよくない言葉なんだと、少し考えれば分かりそうなものなのに・
・それ以外の呼び名を知らなかったんだ。すまん」

アイクはそう謝ったが、レテの憤りは全く収まらない。

「知らなかった？　・・・バカにされたものだ。我らに隷属を強いたお前たちは、そうやって安易に忘れる。だが、我らは忘れない。お前たちに受けた仕打ちを・・・王が何とおっしゃるうとも、私はお前たちを信用しない」

どうやら、過去にはベオクが、ラグズに対してひどい仕打ちをしてきたようだ。そして、それを忘れられないほどに、彼らの心にトラウマを植え付けてしまったのだ。

それを乗り越えてお互いが信頼しあえるようになるのは、とても難しいことなのかもしれない・・・。

「・・・で？　そういう恨み事を聞かせるために来たんですか？
ハハッ、半獣の考えそうなことだ」

突然、先ほどまで黙っていたセネリオが、口を開いたのだ。ラグズ

の2人に向かって、暴言を。

「貴様っ！ その呼び名を使う者は、我々ガリアの敵だ！！」

「ハ、ハ、半獣・・・敵・・・コいつ、敵・・・！」

当然ながら、ラグズ達はセネリオに怒りを覚える。しかしセネリオは、それを涼しい顔で受け止める。

「自尊心だけは人間並み。そうでしょう？ 毛だらけの醜い半獣ども！！」

「グワオオオオオ！！」

怒りに駆られたモウディは、全身からピンクの光を出す。光が収まった時、そこには一頭の水色の毛並みの虎が立っていた。

「モウディ、やってしまえ！！」

レテが、モウディに指示を出す。セネリオは、静かにその場に立っていた。

「グワオオオオ！！」

セネリオにモウディの鋭い爪が襲いかかろうとした、その時。

何と、アイクがセネリオの前に立ち、攻撃を代わりに受け止めたのだ。傷だらけの体で。

「っ・・・！」

「！！！」

「ア・・・イク・・・」

これには、獣牙族の2人も驚いた。モウディはすぐに化身を解き、アイクの元に駆け寄る。

「・・・アイク、すまない・・・才まえに怪我をさせて・・・モウディは・・・」

心配するモウディに、アイクは弱々しく答える。

「モウディ、こんな怪我、大したことはない。大丈夫だ・・・」

しかし、アイクの後ろでセネリオは、怒りの形相に顔を歪めていた。

「獣の分際で・・・！ ファイア・・・」

「やめろ！ セネリオ！！」

セネリオがファイアーを唱えようとしていたのを、アイクは止める。

セネリオは、アイクに抗議をする。

「どうして止めるんですか！？ こいつは、あなたを傷つけた！ 許すわけにはいかな・・・」

「お前が挑発しなければ、こうはならなかった。違うか？」

抗議をさえぎって、アイクは最もなことを言う。アイクに諭されたセネリオは、急におとなしくなる。

「！！・・・すみません・・・」

アイクは杖につかまりながら立ちあがり、獣牙族の2人に向き合う。

「モウディ、レテ。団員の無礼は謝る。セネリオを許してやってくれ」

すると、モウディとレテも、怒りをすっかり静めたようだ。

「アイクはモウディを許した。だからモウディも、セネリオを許す。誰も怒ってはいない」

「・・・こちらも、非礼は詫びよう。自分たちの使命を忘れるとは・・・とんだ失態だ」

「使命・・・？」

レテの言った使命と言うものが何かと、アイクは疑問に思う。

「王が、傭兵団を招かれた。我らは、お前たちをガリア王宮に案内するために来たんだ」

一方、話は変わって・・・

レグス海

ジェイクとアンナを乗せた密航船は、順調にガリア王国西海岸を指していた。

ある日の昼下がり、見張り台に昇っていたアンナが、歓声を上げる。

「り、陸だー！！ ジェイク、陸が見えたよ！！」

それを聞いて、船室からジェイクが飛び出してくる。

「本当か！？　すぐそっちに行くから！」

ジェイクはいそいそと見張り台に上り、望遠鏡をのぞきこむ。

「うお、本当じゃないか！　テリウス大陸に、無事到着だな！」

「うん！ 明日の午前には、海岸に着くはずよ」

2人は興奮した様子で、陸を何度も見る。

無理もない。2ヶ月間もずっと、船の上だったから。

「よし、そうと決まれば下船準備だ！ 今から始めるぜ！」

「あゝジェイクってば、まだ早いよ！」

2人は大急ぎで、船室に入っていったのだった・・・。

ガリアの戦士達（後書き）

どうにかデイン軍を退けたアイク達。

彼らの前に、獣牙族の戦士レテとモウディはやってきた。

とうとう、ガリア王宮から許しが出たのだ。

果たしてガリア王国は、クリミア再興に力を貸してくれるのか？

そして、アイクの左腕は、無事に治るのだろうか・・・。

9章 くガリアにてく 前編（前書き）

ゲバル城で Dein 軍をしのいだアイク達だったが、アイクはかなりの重傷を負ってしまった。

左手が、動かなくなってしまったのだ。今後の戦いに支障をきたすほどの負傷である。

グレイル傭兵団は、ガリアの戦士であるレテ、モウディとともに、ガリア王宮を目指すべく、ガリア王国の西海岸沿いの道を進むこととなった。

一方、アカネイア大陸からの密航者であるジェイクとアンナは、いよいよガリアに上陸する段階まできていた。

9章 くガリアにてく 前編

くタタナ海岸く

「ジェイク、この辺りに接岸すればいいんじゃないかな？ 海岸だし」

「そうだな。だが、ここはちょっと潮の流れが急だ。別の場所の方がいいと思うぜ」

2人は、接岸の準備に取り掛かっていた。もうすでに、陸に下りても大丈夫な装備をしている。

見知らぬ土地に上陸するのだ。当然、戦える装備である。

そんな彼らの船の後ろに、海賊船が停泊している。海賊船の首領は、2人の乗る船を見て陽気な声を上げる。

「俺たちや海の、ならずものく おいおい、野郎ども！ あの船を襲ってやろうぜく！」

「了解しやした、ネダタの兄い！」

海賊船からは次々と小型ボートが出され、たくさんの海賊たちが2人の乗る船を目指す。

「うつほっほ」

「ひゃっほっほ」

「俺たちや海の、ならずもの」

「獣の国でも何のその」

「斧を振るってひと稼ぎ」

海賊たちの陽気な歌が、海上を不気味に渡る・・・。

2人にも、沖合から聞こえてくる海賊たちの歌声が聞こえてきた。ふとそちらを見ると、ものすごい数のボートが、海賊たちを乗せてこちらにやっけてきている。

「あれは・・・海賊!?!」

「まずいぞアンナ・・・あれは確実に、俺たちのことを狙っている」

今から接岸して逃げようにも、もう時間がない。すぐそこまで、迫ってきているのだ。

「くそっ、もう間に合わないか! アンナ、俺はあいつらを食い止めるから、お前は船室に・・・」

「いやっ!?!」

アンナは、ジェイクにすがりつく。

「私も、戦える。だから、一緒に居させて……」

「……分かった。それなら、ここにいてくれ」

大急ぎでジェイクは、船室からシューターを引っ張り出してきた。車輪を動かす燃料の油はないが、矢を撃ちだすことは出来る。

「来たな、海賊……。久々にこいつの力、見せてやるぜ！ 食らえ、ファイアーガン！！」

シューターの弦に巨大な火矢ファイアーガンをあてがい、一艘のボートに狙いを付けながら弦をレバーで引き……。一気にファイアーガンを放つ。

プッシューン！！

ファイアーガンは潮風を切りつつ、正確に敵のボートに命中する。ボートが、炎上する。

「よっしゃ！ いっちょ上がり！」

ジェイクはそう言うと、次のファイアーガンを弦にあてがった。

「私も……戦えるわ！」

アンナも後部甲板にやってきて、一冊の魔道書を取り出す。取り出

したのは、黒い魔道書。

「闇よ・・・理を飲み込み、無に帰せよ・・・フェンリル!!」

アンナが叫びながら手を突き出すと、先ほどとは別のボートの周辺の空間が、突如歪む。

歪んだ空間は闇に包まれ、その闇が消えると・・・ボートの上に乗っていた海賊は、そのまま倒れてしまった。

「アンナ、お前もなかなかやるぜ。まあ、最初お前が『闇魔法を勉強する』って言った時は、さすがに心配したけどな」

「大丈夫よ。私は仕事柄、いろいろなこと経験してるもの」

闇魔法とは、光魔法や自然の力を操る理魔法とは異なる種類の魔法である。

「闇」という、人間にとって害悪となる力を魔力に寄せ、相手の生命力を奪う魔法だ。だが当然、その害悪は使用者にも及ぶ。きわめて危険な種類の魔法である。

闇に取り込まれてしまった者も、アンナは知っている。アカネイア大陸で起こった二度の戦争の元凶であるガーネフ、そのガーネフにそそのかされたハーディン・・・どちらも、心にできた隙を、闇に飲まれたのだ。

そのため、使用できる人間はごくわずかな者に限られる。すなわち生まれが元々特別か、強い精神力を持つ者のみだ。

アンナはアカネイア大陸で、闇魔法について独自に研究していたのである。

ちょうど同じころ、海岸でも戦闘が起こっていた。アイク達グレイル傭兵団と、ガリア領内に潜伏していた別のデイン軍決死隊の戦いである。

「アイク、左腕を負傷していますが、戦うことは出来ますか？」

セネリオが、不安そうにアイクの左腕を見ながら聞く。

「ああ、動きにくくはなっているが利き腕ではないし、問題はない」

アイクはそう答えたが、セネリオはまだ不安そうだ。

「・・・無理をしないでくださいね？ あなたにもしものことがあったら、僕は・・・」

「セネリオ、俺は大丈夫だ。無茶はしない」

「そうですか・・・分かりました」

そして、セネリオは近付いてきた敵ソルジャーに向かってウインドを飛ばす。傷ついたソルジャーは、アイクがきつちりとどめを刺した。

近くの敵兵をせん滅してから、アイクは団員に進軍停止命令をかける。

「みんな、待ってくれ。レテが言うにはこの先、道は砂浜部分と林間道の二つに分かれるらしい。そこで、部隊を二分したい」

「砂浜は騎馬系や重歩兵は脚を取られやすく、行動に支障が出る。敵もそのことを考慮し、重歩兵を林間道に多く配置しているようだ」

レテが、アイクの言葉を付け足す。ティアマトはそれを元に、考えをまとめた。

「だったら、私とオスカーは騎馬系だから、林間道を進んだ方がいいわよね。敵に重歩兵がいるなら、魔道士も一人くらいは必要はず……」

すると、団員の影の方から、か細い声が聞こえた。イレースだ。

「あ……でしたら、私がそちらの方の部隊に加わります……。雷の魔法、使えますから……」

イレースはムストンら行商団の一員だが、彼らの中では唯一戦うことができる。そのため、傭兵団と一緒に実戦の方にも加わっているのだ。

「よし、なら林間道を進む部隊はこの3人でいいな。残りは全員、海岸線を進むんだ！ レテ、モウディも、こつちを頼む」

「了解だ」

「まかせてくれ、アイク！」

・・・とその時だった。傭兵団の後方、行商団の方から、ミストの
声が聞こえてきたのは。

「お兄ちゃん！！」

「ミスト！ お前とヨファは下がっている。絶対、前に出るなよ！」

アイクは、ミストにそう注意する。これから戦いが始まるのだ。危険があつてはならない。

だがミストは、下がらない。

「ね、お兄ちゃん！ 私も・・・一緒に戦う」

アイクは、耳を疑った。

「何！？ そんなのダメに決まってるだろう！ それに、お前は何の武器も使えないんだし」

「これがあるもん！」

アイクの言葉をさえぎってミストが取り出したのは、赤い玉が取り付けられた杖。

「ライブの杖・・・？」

「キルロイに無理を言って、教えてもらってたの。ちょびつとだけ傷の回復、できるよ」

アイクを始めとする団員全員が、一斉にキルロイの方を向く。キルロイはばつが悪そうにうなづいた。

「ごめんねアイク。ミストがどうしてもって言って・・・それで・・・」

アイクは、ため息をつく。そして、ミストにもう一度説得を試みた。

「・・・ちょびつと程度で戦場に出す訳にはいか・・・ん？」

また、後方からもう一人が飛び出してきた。薄緑の髪の少年、ヨファだ。ボーレがそれを見て、駆けつける。

「いい加減にしろ、このチビ！」

ボーレはヨファをつかもうとしたが、ヨファはそれをよけた。

「ぼくも、いつしよに戦う！ 弓が使えるもん！」

そう言って、こちらは普通よりかなり小さなサイズの弓を取り出し、ボーレに見せる。だがボーレは、全く信用しない。

「ほう、それは初耳だなあ？ 嘘も休み休み言えよ！！」

「うそじゃない！」

喧嘩に発展しそうな兄弟の間に、ミストの声が流れる。

「うん、うそじゃない」

ボーレとアイクは、驚いた。

「ミスト!？」

「どういうことだ？」

ミストは、ヨファの持つ弓を見ながら話しかける。ヨファも顔を明るくした。

「ヨファ、いつも弓の練習してたけど、結構、うまいよね？」

「だよね？」

アイクは、不思議に思った。

「いつの間に弓の扱いなんて覚えたんだ？」

アイクたち傭兵団のメンバーはみんな知らないことだが、ヨファはシノンに弓の扱いを教えてもらうべく、弟子入りしていたのだ。

今ヨファが持っている弓も、シノンがヨファの体格にぴったり合うように、オーダーメイドで作った特注品である。名付けて『ヨファの弓』。名前はあまりにもそのままだが、ひねくれ者のシノンが考えた、彼らしい名前ともいえる。

アイクに聞かれ、ヨファはしどろもどろになる。

「え、えーっと・・・あの、自然にできるようになって・・・」

シノンは、「絶対に、このオレが弓を教えただなんて言つなよお？
このことは、秘密だからな？」と、ヨファに約束していたのだった。だから、そのことを言えるわけがない。

ボーレはそれを聞き、再び怒った。

「嘘ついてんじゃねーぞ、このくそチビ！ 武器つてのはな、基本も教えてもらわずに使えるもんじゃねーんだよ！」

「だったら、ぼく天才だもん！ 一人でできるようになったもん！」

「こーの・・・!!」

ヨファのハツタリに、ボーレはこぶしを固め、殴りかかろうとする。だが。

「ボーレの分からずや!!」

「分からずや!!」

ミストとヨファは、大声でボーレをのしる。泣きそうな顔で。

「!!!!」

何も言い返せなくなったボーレに代わり、アイクが口を出した。

「お前たち、いい加減に・・・」

「もう、嫌なんだもん・・・」

「・・・？」

ミストが、アイクの言葉をさえぎる。ミストは泣いていた。

「・・・ヨファと2人で・・・お兄ちゃん達のこと心配しながら、待つてるだけなんて・・・それなら、一緒にいる方がいい！」

「・・・」

アイクは、考え込んでしまう。ボーレも、ヨファに聞く。

「お前も、そうなのか？」

「うん、絶対、いつしよに行く！」

「はぁ・・・どうする？ 新団長」

聞かれたアイクは、もう考えをまとめたようだ。

「・・・分かった。2人とも連れて行こう。側にいた方が、守りやすいつて利点もあるからな」

さっきまで泣いていたミストとヨファは、もう喜んで顔を明るくしていた。

「ほんと!？」

「ぼく、がんばるね!」

ボーレは、困り顔で頭をかく。

「まったく、しょうがねーな。ヨファ、なるべくおれの傍らから離れるなよ?」

「うん!」

「お、やけに、いい返事じゃねえか。どという風の吹き回しだ?」

ヨファは、とても嬉しそうに答える。

「ぼくが近くにいて、ボーレを守るからね。だから安心していいよ」

「・・・いや、そりゃ逆だつて!」

ミストとヨファが戦闘部隊に加わったことで、もう一度進撃の作戦の変更をするアイク。そこへ、海岸の方の偵察に出ていたワユが戻ってきた。

「大将! 海岸線の向こうの方に、民家が二軒建ってたよ! それと、沖合の方でも戦いが起こってるみたい」

「何、クリミアとデインの、海戦が起こっているのか?」

「うっん。見た感じ、海賊船と密航船の戦いみたいだよ。あと、この海岸にもその海賊船から海賊が向かってきてるみたい」

アイクと一緒に話を聞いていたセネリオが、それに関して口を開く。

「密航船と海賊船・・・どちらにせよ、関わり合いにならない方がいいかもしれませんが・・・。しかし、海賊がこちらに向かってきているのでしたら、向こうにあると言う二軒の民家が襲われるかもしれないですね」

アイクは、結論を出す。

「分かった・・・。なら、これより傭兵団を、海岸制圧部隊と林間進撃部隊に二分する。海岸制圧部隊に当たった者は、全速力で民家の防衛、及び海賊の撃破を優先してくれ！ 林間進撃部隊は、ただちにこの先のタタナ砦を攻め、デイン軍決死隊のせん滅を頼む！」

海岸制圧部隊に配置されたのは、ボーレ、ワユ、ヨファ、セネリオ、ミストの5人に、ガリアの戦士レテ、モウディを加えた7人。

林間進撃部隊は、アイク、ティアマト、オスカー、イレース、キルロイの5人。

互いに別行動をとり、一気にタタナ海岸及びタタナ砦を制圧する作戦である。

「じゃあ、準備はいいな？・・・グレイル傭兵団、出撃！！」

9章 くガリアにてく 前編（後書き）

更新、大変長らくお待たせいたしました。

読者の方が不評でした、「下書き中」というものは、なるべくなくすようにしていきたいと考えています。

どうか、これからもよろしく願います。

9章 くガリアにてく 後編（前書き）

ガリア王国の西に広がるタタナ海岸。

その沖合で、アンナとジェイクの2人は海賊に襲われてしまう。彼らは武器を手に、海賊に対して徹底抗戦の構えを取った。

一方アイク達グレイル傭兵団も、タタナ海岸にあるタタナ砦の前でデイン軍決死隊と遭遇。

ミストとヨファの2人も戦闘部隊に加わり、デイン軍との戦闘に突入する。

南国の美しい砂浜は戦場となり、無残にも血で染められていくのだった……。

9章 くガリアにてく 後編

くタタナ海岸：林間く

グレイル傭兵団の突撃に、待ち伏せしていたデイン軍決死隊も応戦する。先陣を切って飛び出したのは、緑の騎士オスカーだ。

「デイン軍の蛮行を、私は許さない！ 私の槍の錆となれ！」

オスカーは、鉄の槍を手に、こちらに向かってきたソルジャーを攻撃する。

「ぐっ……！」

ソルジャーも手にした槍で反撃するが、オスカーはすぐに馬を後退させてよける。そこへ、間を割って入ってきたのはアイクだ。

「今は、負ける気がしない……！」

アイクは動かない左腕をかばいつつも、ソルジャーに止めを刺す。

「よくもやりやがったな！」

倒したソルジャーの後ろから、手槍を投げつけようとする別のソルジャーがいた。しかし……。

「サンダー！」

ピシャーン！！

「ぐげえ！？」

手槍を投げつける寸前に、イレースが雷魔法のサンダーを放つ。サンダーが命中したソルジャーは、体が痺れて動けない。そこを見計らって、ティアマトが斧を構えつつソルジャーに向かう。

「とどめよ！」

ズシャアアッ！！

ソルジャーは、倒れた。

くタタナ砦

決死隊が制圧しているタタナ砦では、この決死隊の隊長であるコタフが、戦況の報告を受けていた。

「コタフ隊長、報告します！ 先日ゲバル城にて、カムラ隊長を討ち取ったと思われる傭兵団と、ここから東の地点で戦闘が始まりました。敵は作戦地点に入った模様です！ また、傭兵団は部隊を二分し、一方は海岸方面、もう一方はこの砦に続く林道へ進めているようです」

「そうか、ご苦労だった」

初老のハルバーディアであるコタフは、手に持ったナイトキラーという、騎馬系に有効な槍を取り出しつつ、部下に指示を出す。

「ならば、事前に配置した通りに兵を出撃させよ！ 林間へは重歩兵、騎兵、アーチャーの混成軍を、海岸へは剣士、戦士、魔道士を中心に送りだすのだ！」

「了解しました！」

伝令の兵士は、のろしを上げに走っていく。コタフはその様子を見送ってから、ナイトキラーを振り回し、隊員たちに檄を飛ばした。

「全兵に告ぐ、戦いの時は来た！！ 奴らは何としても、ここで仕留めるぞ！ デインに逆らった傭兵どもに死を！ 奴らに辱められた同胞たちの恥をそそぐのは、我らだ！！」

〈タタナ海岸：砂浜〉

空は抜けるような蒼さ。鏡のような水平線のかなたには、南国を思わせる入道雲。そんな美しい海岸線を、剣や斧で武装したデイン兵たちがこちらに襲ってくる。

「いい加減にあきらめろよ、デインの連中め！！」

ボーレは鉄の斧を担ぎつつ、砂浜を駆けていく。

「あきらめられるか！ カムラ様の部隊に参加していたおれの友を殺したお前たちを倒すのは、このおれだ！！」

向かってくるデインの戦士も、ボーレに立ち向かってくる。

ガキン！！

斧同士が激しくぶつかり合い、火花が散る。何度か斧がぶつかり合った後、ボーレの振り降ろしが敵の戦士の脳天をかち割った。

「さあ、次にかかってくるのは、どいつだ！ どっからでも来い！！」

「ファイアー！！」

セネリオは、前の戦いで入手したファイアーの魔道書を開いて魔力を解放する。真っ赤に燃え盛る火球が、こちらに向かってきていた剣士に命中。

「熱っ・・・このガキ！」

セネリオに斬りかかろうとした剣士の前には、ワユが立ちふさがった。

「あなたの相手は、このあたしがしてあげる！」

「くっ、なめんな女！！」

剣士はワユに斬りかかろうとしたが・・・

「・・・秘技、待ち伏せ!!」

スパアン!

「!？」

ワユは先手を取って剣士を切り裂く。それだけで、勝負がついてしまった。

「・・・ワユ、助かりました。ありがとうございます」

セネリオは、少し小さい声で礼を言う。

「いえいえ　あたし、速さなら誰にも負ける気しないから!」

しかし、そうワユが言った瞬間に彼女のすぐ横を、目にもとまらぬ速さで駆け抜けていく、オレンジの影があった。猫に化身した、レテである。

「デイン兵、覚悟!」

レテは砂浜を疾走し、敵の魔道士に襲いかかる。魔道士は顔を恐怖に染めた。

「ひっ・・・半獣だあっ!!　さ、サンダー!」

デインの魔道士がサンダーを放つと、レテのすぐ頭上から電撃が襲いかかる。しかし、電撃が落ちたところにはもう、レテはいない。

「その程度の魔法、当たらん！」

バリバリバリ！！

一気に魔道士に接近し、鋭い爪で無慈悲にも引き裂く。

「・・・すげー・・・これが、ラグズの実力ってやつか！」

ボーレはそれを見て、すっかり心を奪われてぼーっとしていた。だが、その時。

「隙あり！ 食らえ、手斧！」

「！？」

いつの間にか近付いていたデインの戦士が、手斧をボーレに投げつけたのだ。当然ボーレはよけることなどできず、怪我を負って砂浜に倒れ込む。

「くそ・・・いたた・・・」

「とどめだあつー！！」

一気に近付いて、手斧を振り降ろそうとした、その瞬間！

ヒュッ・・・グサッ！

「うつ・・・！？」

戦士の腕に、矢が突き立ったのだ。戦士は、矢が飛んできた方を向くと・・・

「や、やった・・・当たってくれた・・・」

ヨファが震えつつも、弓を構えていたのだ。その後ろからは、ミストがライブの杖を手にボーレに駆け付ける。

「ボーレ、今治すからね・・・ライブ！」

赤い玉から青い光があふれだし、ボーレの傷は癒された。

「助かったぜ、ミスト、ヨファ」

「このガキいゝ！！」

ボーレを襲っていた戦士は、ヨファを見るや否や手斧を構えた。投げつけるつもりだ。

「ひっ・・・！！」

「死ね！！」

しかし・・・

ドカァッ！！

立ち上がったボーレが、背後から斧を振り降ろしたのだ。戦士はた
まらず、倒れ込む。

「今だヨファ！ 矢を当ててやれ！」

「あ、うんボーレ！」

グサッ！！

「くそ・・・連携攻撃かよ・・・」

ボーレとヨファの連携攻撃で、見事戦士は倒れた。

「ボーレ、ちゃんと注意してなきゃダメじゃないの！」

「ああ・・・すまなかったなミスト」

ミストの注意を、ボーレは耳が痛そうに聞く。ヨファまで、ボーレ
に口を出す。

「やっぱり、ぼくが近くでボーレを守ってあげないとね」

「うぐ・・・」

ボーレは、何も言い返せなかった。

くタタナ海岸：林間く

敵を倒しつつ徐々に戦線を上げてきている林間部隊。現在は、敵の重歩兵たちと戦っているところだ。

「重歩兵には魔法やハンマーが有効・・・ティアマト、イレース、頼めるか？」

「アイク、任せて！」

「がんばります・・・」

ガシャガシャと音を立ててこちらに向かってくる重歩兵に少し距離を置いて、イレースは魔道書を開く。

「デインになんか、負けてたまるもんですか！」

ガシャアーン！！

ティアマトは、馬上からハンマーを振るい、手槍を持つ重歩兵を鎧ごと打ち砕く。

「イレース、手槍を持った重歩兵は倒したから、安心してちょうだい」

「感謝します・・・では私も・・・サンダー！！！」

ピッシャアアン！！

サンダーの魔道書を開いたイレースは、稲妻で別の重歩兵を倒す。

重歩兵をあらかじめ倒し終えた時、オスカーが不意に空を見上げた。
アイクは不思議に思って問いかける。

「オスカー、どうしたんだ？」

「あ、アイク・・・空からペガサスナイトが・・・」

見てみると、ピンク色の髪をした少女を乗せた天馬が、こちらに向かってきているのが分かった。

「アイクさん！」

天馬に乗ったピンクの髪の少女は、アイクを見るなり手を振りつつ、こちらに下りてきた。

アイクは、確かに彼女に見覚えがあった。

「あんたは確か・・・以前海賊にとらわれてた・・・」

そう言うと、少女は嬉しそうに答える。

「はい、マーシャです！ 約束通り、ご恩返しに来ました。仲間に
入れさせていただきますい！」

マーシャは、頭を下げる。

「アイク、この人は？」

ティアマトが尋ねると、アイクは簡単に答える。

「・・・以前、港町タルマの海賊討伐をした時、海賊に襲われていたんだ。怪我をしてたから、もらった薬で治してやったんだ」

「そうだったの・・・」

その時のエピソードについて詳しく知りたい方は、「3章」海賊討伐」をご覧ください。

ティアマトに説明をして、アイクは再びマーシャに向かい合う。一つ、思い出したことがあったからだ。

「でも、あんたはベグニオンの天馬騎士団にいたと・・・」

「やめてきちゃいました！ だから、この傭兵団に入れてもらえませんか？ お願いします！」

アイクはそれを聞いて、少し呆れつつ聞く。

「そんな簡単に・・・いいか、はっきり言うがうちは貧乏傭兵団だぞ？ 給金一つとっても、正式な騎士団とは比べ物には・・・」

「だめですか？」

アイクが言い終わらないうちに、マーシャはそう聞く。アイクは再

びため息をついた。

「あんたが損をするって話をだな・・・」

「全然、損なんかしません！ 一生懸命働きますから、入団させてください！ お願いしますっ！！」

マーシャは、天馬から降りて深々と頭を下げる。アイクはティアマトと目を合わせたが、ティアマトは別に問題なさそうな感じでアイコンタクトを返した。

「そこまで言うなら・・・とりあえず、やってみるか？ こっちも人手不足だからな、いきなり忙しいと思うが」

「はい！ まっかせといてください！！」

ペガサスナイトのマーシャが、仲間に加わった。

「タタナ海岸：沖合」

一方こちらは海の上。海賊たちとジェイクたちとの戦いは、いまだに続いていた。

「キラーボウを食らえ！」

「ミイル！！」

海賊たちはすでに船に乗り込んでおり、完全に制圧されてしまうのも時間の問題だった。

「アンナ、このままじゃまずいぞ・・・こうなったら、この船を捨てて逃げるしか・・・」

敵の波をしのぎ切った時、ジェイクはそうつぶやく。

「そつみたいね・・・ジェイク、どうやって脱出するの?」

「ははっ、聞いて驚け! 俺はな、この船にある仕掛けをしておいたんだ。絶対に安全に脱出できるものをな!」

「え、本当!? ジェイクすごい!」

ジェイクは扉に鍵をして、船室へとアンナを案内する。

船室の物置の中には、さつきしまい込んだジェイクのシューターやら、その他必要なものや大事なものがたくさん積んであった。

「ジェイク、この物置に何があるの?」

アンナが尋ねると、ジェイクは自信満々に答えた。

「あのな、実はこの物置自体が、緊急時に離脱できるように改造してあるんだよ。向こうの方には、ある程度操作ができるように操舵輪とかも取り付けてある。これに乗り込んじやえば、ひとまず安心

ってわけ！」

「うわゝよくこんなの作ったわね！ さすが機械のプロ！」

「あはは、そんなに褒めんなよ」

とその時、背後から大きな音が響いた。おそらく、船室の扉が破られたのだろつ。大勢の海賊が襲いかかってくる気配が感じられる。

「おつと、じゃあアンナ、乗り込んでくれ！ 忘れ物とかしないようにな？」

「うん、私は大丈夫。ジェイク、いつでも出発できるよ！」

「よつしや、じゃあ行くぜ！！」

物置のドアを閉め、ジェイクは奥に垂れ下がっていたひもを引っ張る。すると、物置がそのまま船から分離したのだ！

浮力を失った船は、沈没を始める。大勢の海賊たちを、巻き添えにして。

「よし、脱出成功！」

「よかったね！ あのままじゃ危なかった・・・ところで、これから先どこに向かうの？」

アンナは、操舵輪を握るジェイクに聞く。

「そうだな・・・ひとまず、今水面に出たら危険だ。あと数時間はこの緊急ボッドの中の空気は持つはずだから、それから浮上しよう。その後、もう一度上陸を目指すんだ！」

「分かったわ」

海上では、大混乱の極みだった。突如、船が沈没してしまったからだ。

「おいおい、これはどういうことだあ？」

海賊のボス、ネダタは、驚愕の表情を浮かべる。部下が、口を出した。

「ふ、船が沈没しちゃって、仲間はかなりやられちゃったみたいっすよ、ネダタの兄い・・・」

「ちくしょう・・・だったら仕方ねえ、陸の上におったって家を襲ってやろうぜえ！」

「おーそれは名案！ さっそく襲ってやりやしよう！」

「うっほっほ」

「ひゃっほっほ」

「俺たちや海の、ならず者」

くタタナ海岸：砂浜く

ネダタ達海賊は、民家のすぐ近くの波打ち際に上陸を果たした。

「ひゃっほっほ　　早速襲ってやるぜ！」

その様子を、ワユは遠目に見る。

「あ、あれは海賊！！　大変、急がないと……！」

だが、セネリオが引きとめて首を横に振る。

「いいえ……今から行っても間に合いません……」

「そんなっ……」

その時だった。海岸の左手、林の方から、ペガサスナイトが一騎飛び立っていったのは。

マーシャである。

「海賊め！　家は襲わせませんよ……！」

マーシャは細身の槍を手に、今まさに家を壊そうとしていた海賊に突っ込む。

「必殺の一撃！！！」

細身の槍を振り回しつつ、海賊を一撃で倒すマーシャ。それを見ていたネダタは、驚きの声を上げた。

「なんだなんだあ？ いきなり女が俺の仲間を・・・けど、お前なんかじゃ負けないぜ！」

ネダタは小舟から飛び降り、波打ち際に降り立つ。手には紫色に変色した、毒を仕込んだ斧を持つ。そして、マーシャに襲いかかったが・・・

「ガルアッ！！！」

空色の虎に化身したモウデイが、猛烈な勢いでネダタに突進を仕掛けたのだ。ネダタは吹っ飛ばされ、毒の斧を取り落としてしまう。

「獣まで襲って来やがったか、でも、ここで逃げたら笑い者、男の生き様、見せてやらねえとな！」

ネダタは素手でモウデイに殴りかかる。だが、そんなのが通用するはずがない。

「ガルルルアッ！！！」

牙を突き立て、ネダタを噛み砕く。ネダタはもう、起き上がらない。

後からやってきたボーレやワユに簡単に自己紹介したマーシャは、手前の方の民家を訪ねた。

しかし、中から獣牙族の女性が出てきたと思った瞬間……。

「……きゃあつ！？」に、に、ニンゲン……うん……」

扉を開けた獣牙族は、絶叫したと思いきやすぐに倒れてしまった。

「え……あの、どうかされました……？」

マーシャは不安になって聞き返すと、しばらくして獣牙族が起きあがった。明らかに、その目は怒っている。

「……もうっ、まったく！ 非常識よ、あんた！ こっちは死んだふりしてるんだから、あきらめでどっかへ行ってくれなくちゃ！」

「え、どうしてですか？」

話がよく分かっていないマーシャが、そう聞き返すと。

「え、だって……母さんが、ニンゲンに会ったら、こうしろって……」

「????？」

マーシャが困惑していると、獣牙族の女性は再び怒った表情になった。傍らから、何かを取り出す。

「・・・フン、だ！ 分かってたわよ、そんなの！ じゃあさ・・・これ、あげるからさっさと、どっか行っちゃってよ！ あたし、ニンゲンなんて大嫌いなんだから！ ホントは、口もききたくないんだから！」

そう言って手にした何かをマーシャに半ば押しつけるようにして渡す。

緑の玉が取り付けられた杖だ。確か、レストの杖というものである。対象の毒や睡眠、沈黙と言った、状態異常を治療することができるものである。

「フーンっだ!!」

獣牙族の女性は、『バターン!!』と扉を閉めてしまった。後には鍵をかける音まで聞こえた。

（ガリア王国の嫌べオク思想は、本当みたい・・・）

マーシャはそう思いつつ、団員の元へ戻っていった。

一方もう片方の家は、ボーレが訪問をしていた。

「クリミアの方々ですね？ 私は獣牙族の戦士です。あなたがたのことは、ライ殿から伺っております」

中から出てきたのは、虎に化身すると思われる獣牙族の青年。静かな雰囲気を出しており、丁寧な口調でボーレに話しかける。

「ライ殿・・・ああ、確かメリテネ砦で世話になったあの水色の猫か。あの時は、助かりましたよ」

「そうですか。こちら側も救助が間に合って、よかったです」

そこまで言って、獣牙の戦士は南のタタナ砦の方に視線を送る。

「・・・すでにお気づきでしょうが・・・南にあるタタナ砦は、現在デイン軍によって占拠されているようです。やつらには、くれぐれもお気をつけください。やっかいな魔道士もいたはずですから・・・」

獣牙族の青年が言うには、獣牙族は魔法・・・特に、炎属性の魔法は脅威となるらしい。

「私は、仲間との連絡のためこの家を離れる訳には行きませんが・・・対魔道士用の備えとして、これを差し上げます。これを使えば、魔法を防御する力が増すはずです」

青年がボーレに手渡したのは、紫色の刺繍が施された、お守りのようなもの。これを服などに縫い付けると、魔法に対して抵抗力がつくらしい。

「ありがとうございます。絶対、タタナ砦を落としてきますね！」

「どうか、お気をつけて・・・」

手を振りながら家を後にするボーレに、獣牙の青年は静かに祈りをささげていた。

くタタナ砦く

敵をほぼ全て倒し切ったグレイル傭兵団は、タタナ砦の前に集結した。

残るは、砦の前に陣取るコタフと、魔道士2名のみである。

コタフはアイクを見て、唇をかむ。

「お前が、傭兵団の新しい長か……。一体、どんな卑怯な手を用いて、我らの同胞を手にかけたのだ……。！？　そうでなくては・・・デインの正規兵たちがお前たちごときに、やられるはずはないのだ」

コタフのその言葉に、アイクは少しうんざりしつつ、まっすぐ前を見て答える。

「……お前たちは、そうやって最初から俺たちを見下している。いい加減、気付いたらどうだ？　そこに隙ができるから俺たちごときに、勝てないんだって」

アイクが言ったことに、コタフは激怒し、ナイトキラーを手にアイ

クに襲いかかった。

「黙れ！ 黙れ！ この小童が！！ おい魔道士、こいつを始末してやれ！！」

「はっ、・・・ファイアー！」

「ウインド！」

二種類の異なる魔法が、アイクに襲いかかる。アイクはそれらをよけ、コタフのナイトキラーを剣で受け止めた。

「こいつ・・・片腕を怪我してるのにどうして・・・!?」

そう、アイクは左腕が今、うまく動かないのだ。それにもかかわらず攻撃を受け止めたことを、コタフは驚いた。

「だから・・・そういうのを『見下している』って言うんだ」

アイクはそう言い放ち、コタフと距離を取る。

「オスカーとマーシャは、魔道士を頼む！ 俺は、コタフの相手をする！！」

「やあっ！！」

ザシュ！

「えいつ！」

グサッ！

魔道士が2人にやられたのを見て、アイクはコタフに問いかける。

「さあ、残るはお前だけだ。それでも、まだ俺たちを見下すつもりか？」

「ぐ……ぐぬぬ……！ そんな、我らデインが、こんな傭兵どもに……！」

コタフは、ナイトキラーでアイクをひたすら攻撃する。だが、アイクには全く攻撃は当たらない。

「これで、終わらせてやる！」

アイクは足払いをかけ、コタフの体制が崩れたところに、胸の鎧の隙間を狙って突きを繰り出した。アイクの剣はコタフの心臓を貫通する。

「ぐっ……ぐぐ……ぐ……祖国のため……汚名を……そそがねば……」

コタフは、絶命した。

タタナ砦の制圧を無事完了させたグレイル傭兵団は、互いの無事を確認し合っていた。

「とにかく指揮官は倒したが・・・奴らの目的は一体何なんだ？」

「・・・エリンシア姫を追うことだけが、目的ではなさそうね」

ティアマトが言うとおりだった。ガリア王国にまで決死隊を送り込むと言うことは、かなり大きな目的があるということである。

単純にエリンシアを捕まえるだけなら、ガリアに逃げ込まれた地点であきらめるはずだ。

「・・・いずれにせよ、デインが国境を侵したことでガリアとデインは、いつ開戦してもおかしくない状態になったと言えます」

「また、戦争になるのか・・・」

セネリオの意見に、アイクは考え込む。ティアマトも真剣に腕を組んだ。

「ベオク対ラグズの戦いになるなら・・・他の国も、当然黙っていないはず・・・。デインは、大陸中に火の粉をまき散らす気だとも言うのかしら・・・」

ティアマトの意見は、最悪のケースである。だが、もし本当に、デイン国王アシュナードが、そう考えていたら・・・？

アイクがそう考えていると、セネリオが口を出した。

「いずれにせよ、我々の動向を決めなくてははいけませんね。どちらに味方するのかを」

それを聞いたティアマトが声を上げる。

「どちらにつて・・・デインに味方するわけ、ないでしょう!」

「・・・といって、人間である僕らが半じゅ・・・ラグズと組んで人間と戦うなんて・・・それこそ、考えられません?」

ティアマトとセネリオの議論を尻目に、アイクは歩きだす。

「ベオクか、ラグズか・・・」

アイクがふらふらと辺りを歩きながら考えていると、レテとモウデイがやってきた。レテはセネリオとティアマトの方を見やりつつ言う。

「・・・まだ、起きてもない戦のことを論じ合うのか。ベオクは・・・よほど気が小さいのだな」

「レテ! そんな言い方をシてはイケない・・・!」

モウデイがそう戒めるが、レテは聞き流す。アイクはそんな2人に、思っていたことを聞いてみた。

「・・・あなたたちは、どうだ? 戦になると思つか?」

するとレテは、まるで答えを用意してあったかのような早さで毅然と答える。

「デインがガリアの領土を荒らすなら、我らは戦うことを辞さない。

王がご決意なされば、すぐに戦になるだろう」

反対にモウディは、やや考えてから悲しそうな顔をして答える。

「モウディはイヤだ・・・戦いは・・・沢山の悲しみをウミだす・・・」

「・・・」(確かに、レテが言うことも最もだが、モウディが言うことも正しいな・・・)

そうアイクが考えていると、レテが呼びかけた。

「・・・とにかく、王宮へ急ぐぞ。予定外に時間をとってしまった。日暮れまでに、今夜寝る場所にたどり着かなくては・・・」

「王宮へは、まだ遠いのか？」

「ベオクの足ならば、まだ遠い。さ、急ぐぞ」

再び出発してからしばらくして、ティアマトが口を開いた。

「そう言えば・・・アイクにはまだ言っていなかったつけ。私ね、昔ガリアに行ったことがあるのよ。少しの間だったけど・・・」

「そうだったのか?・・・ああ、それでラグズを見ても、そんなに驚かなかったんだな?」

アイクは、メリテネ砦でライ達が生援に来てくれた時のことを思い出した。

「ええ。ガリア王国との交換武官に志願してね、それでガリアの王宮にお世話になったの」

それを聞いてアイクは、一つ思い出したことがあった。

「・・・そう言えば親父も、古城の場所を知っていたり・・・ガリアに来たことがあるようなそぶりだったな？」

ティアマトは、一瞬悲しそうな顔をしたが、すぐに表情を改めて答えた。

「ええ、団長だけではなく・・・あなたもね、アイク」

「え、俺も？ そんな記憶全くないが・・・」

突然ティアマトの口から、そのような言葉が出てきたため、アイクは驚いた。だが、聞き返してもティアマトははっきりとは言わない。

「・・・この話の続きは、ガリアの王宮にたどり着いてからにしましょう」

「あ、ああ・・・」

9章 くガリアにてく 後編（後書き）

ガリア王国に潜伏していた Dein 軍の部隊を撃破したグレイル傭兵団。

以前助けたマーシャを仲間に加えた彼らは、ガリアの王宮を目指して進み続ける。

ティアマトが言っていた、「アイクはガリアにいたことがある」とは、どういうことなのだろうか？

そして、ガリアの獅子王カイネギスは、クリミア再興に力を貸してくれるのだろうか？

次号を待て！！

獅子王カイネギス（前書き）

ゲバル城を立つてから3週間ほどして、グレイル傭兵団はようやくガリア王国の王宮にたどり着いた。

ガリア王宮は、熱帯雨林の中にひっそりとまぎれるように建っていた。湿気に強い建材を用い、荒々しいが頑丈そうな城である。クリミアで見慣れていた建築様式とは、だいぶ異なっているのが印象的だ。

エリンシア姫はライ達、もうすでにこの城に送り届けられているはずである。

城門前の見張りにレテが指示をすると、重そうな城門がゆっくりと開く。レテとモウディは、そのままアイク達を獅子王カイネギスとの謁見場所へと案内した。

獅子王カイネギス

「ガリア王宮：謁見の間」

「アイク様！ みなさま！」

謁見の間には、すでにエリンシアも来ていたようだ。アイク達の姿を見て、感嘆の声を上げる。

「エリンシア姫」

アイクはそれを認めて、エリンシアの方へ歩み寄る。エリンシアはアイクに対し、どこか申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「あの・・・グレイル様のこと・・・伺いました。・・・あの・・・私、何と言えばよいか・・・」

どうやらグレイルの死は、もうすでに連絡係のガリア兵を通じて、ここ王宮にも伝わっていたらしい。

アイクは、エリンシアに首を横に振って見せる。

「気を使わないでくれ。大丈夫だ。俺たちは、何とかやっている」

「・・・アイク様・・・その、腕のお怪我は・・・？」

ふと、エリンシアはアイクがつるしている左腕を見て聞く。

「？・・・ああ、これか？　デイン兵とやり合った時、傷めてしまった。だが、この程度は問題はない。心配はしないでくれ」

「そうですか・・・」

しばらくして、場の空気が突如変わった。先ほどまでは話し声などが聞こえていた謁見の間は、急に厳粛な雰囲気になったのだ。

「王がお見えになりました」

一人のガリア兵が、アイクにそう伝える。それを聞いて、アイクは目の前の玉座を見た。

玉座の脇のカーテンの裏から出てきたのは、たてがみを思わせる赤い髪やひげを生やした大男だ。威厳のある顔つきに、筋骨隆々とした体つき。ただ者ではない雰囲気を、醸し出していた。

「・・・！」

アイクもエリンシアも、その後ろにいた団員たちも、みな一様に緊張する。そうしているうちに、玉座に座ったその大男は口を開いた。

「ガリア王宮へよく来てくれた。わしがガリア国王カイネギスだ」

カイネギスの威厳のある言葉に少し緊張しつつ、アイクも名乗る。

「・・・グレイル傭兵団、団長のアイクだ」

名乗り終えたところで、カインギスの表情がわずかに変化した。懐かしいものを見るような、そんな表情に。

「・・・たくましく育ったな。見違えたぞ、アイクよ」

「!？」

まさか獅子王の口から、そのような言葉が出るとは思わなかったアイクは、激しく動揺した。

その後ろで、ティアマトが口を添える。

「ここにいた時は、まだ、小さな子どもでしたから」

カインギスは、今度はティアマトの方を見る。

「ティアマトか。よく来てくれた」

「お久しぶりです、カインギス殿」

2人のやり取りを、アイクは不思議そうな目で見る。

「2人は知り合いなのか？ 王は・・・俺のことも知っているのか？」

するとカインギスは、アイクにうなずいた。

「うむ。グレイルについて、お前に話しておくべきことがある・・・レテ、モウディ、お前たちは席を外してくれ。傭兵団の方々がゆっくり休めるよう、部屋を用意して差し上げるのだ」

「はっ！」

レテとモウディは、獅子王の命令を受けて退室していった。それに続き、他のガリア兵たちも出ていった。

それを見て、エリンシアもおずおずと聞く。

「あの・・・私も、失礼したほうがよろしいですか？」

カインギスは、首を横に振った。

「いや、王女にもいてもらいたい。後、この者もな」

そう言つてカインギスが視線を送った先には、部屋の隅にて静かにたたずむ、これまた筋骨隆々な大男がいた。こちらは獅子王とは異なり、黒い髪、ひげを生やしている。

「こやつはジフカと言つて、わしの影だ。空気のようなものと思つてくれればよい」

ピクリとも動かずにじつとこちらを見やるジフカを少し見てから、アイクも答えた。

「分かった。こちらも、ティアマトとセネリオをこのまま同席させてほしい」

「・・・」

セネリオは不快そうだったが、あえてそれを口には出さなかった。カインギスは、アイクにうなずきかける。

「いいだろう。さて、何から話したもののか。ティアマト。グレイルは、どこまで息子に話していたのだ？」

話を振られたティアマトが答える。

「アイクは、ガリアのことを何も知らずに育ちました。ここにいた記憶ありません」

カインギスは、腕を組む。筋肉が、また盛り上がったように見えた。

「そうか・・・では、わしの知る全てを話した方がよいだろうな。・・・最も、あまり多くはないのだが」

それを聞いて、アイクが身を乗り出した。

「いや、どんな小さなことでも構わない。親父のことを聞かせてくれ」

身を乗り出したアイクを、カインギスはまた懐かしそうに見る。グレイルと、重ねてみているのだろうか。

「・・・父親と同じ、いい目をしているな」

獅子王カイネギス（後書き）

ガリア王国の国王カイネギス。

「獅子王」の異名を持つ彼は、クリミア復興に協力をしてくれるの
だろうか？

そして、グレイルの過去とは・・・？

決意（前書き）

ガリア王宮に招かれたアイクは、そこでエリンシアとの再会を果たす。

ガリア王国の王、獅子王カイネギスとの謁見をとり行う彼ら。

獅子王の口から、グレイルとアイクの過去が語られる・・・。

決意

「ガリア王宮：謁見の間」

「グレイルは昔・・・ガリアの傭兵として働いていたことがあってな。浅からぬ縁がある」

アイクの目を見つつ、カインギスは話しだした。アイク達はみな、耳を傾ける。

「わしは、まだベオクを信用しきつてはおらん。だが、お前の父グレイルと・・・エリンシア姫の父ラモン殿、そして王弟レニング殿・・・この3人だけは別だ。どの者も、傑出した人物で、信頼に足る男たちだった。・・・おっとティアマト、そなたも別格だったぞ。ベオクの女では、唯一な」

「恐れ入ります」

カインギスに言われて、ティアマトは一步進んで頭を下げた。

「親父がガリアの傭兵・・・」

アイクがそうつぶやくと、カインギスもうなずいた。

「そうだ。お前と妹が生まれたのも、このガリアなのだ。ほんの短い間ではあったが、お前たちは、この土地で育った」

「・・・そうか・・・何も覚えてはいないが・・・俺とミストは・・・この地で生まれたのか・・・」

奇妙な感覚を覚えるアイクに、カイネギスは話を続けた。

「お前の両親は、何か重大な秘密を抱えているようだった。そして、その秘密ゆえ、何者かに追われていた。十数年前・・・お前の母親が追っ手に殺され、グレイルがガリアを去る時・・・わしは、あやつに何もかも打ち明けるよう迫った。『なぜ、追われているのか？』『このわしが力になれることはないのか？』と。しかし、何も聞きだすことは出来なかった・・・」

獅子王の目は、とても残念そう、悲しそうな色をしていた。

「・・・あやつが再び、ガリアに現れたと聞いて・・・わしは今度こそと思ったのだが・・・あのようになつて残念だ・・・もう少し早く、駆けつけておればと・・・悔やまれてならん・・・」

それを聞いてアイクははつとなった。グレイルが漆黒の騎士との一騎討ちに敗れた際、響き渡った、雄々しく威厳のある獣牙族の咆哮だ。

確かあの時漆黒の騎士は、「これは『獅子王』か・・・」と言ったはずだ・・・。

「！　そうか、あの時の声は・・・あんだだったのか・・・」

カイネギスはその問いにうなずく。

「あの傷では助かるまいと分かったのな・・・残されたわずかな

時間を邪魔するまいと思い・・・姿を現さないでおいた」

そこまで言うてから、カインギスはアイクに手招きをした。それに応じると、カインギスは周囲を見渡してから、アイクに耳打ちで質問したのだ。

「アイクよ・・・あの黒鎧の騎士の正体を、お前は知っているのか？」

カインギスは、アイクがあのかの騎士のことについて他の誰にも話していないことを見抜き、わざわざ耳打ちしてくれたのだ。アイクはそんな彼に感謝しつつ、答えた。

「・・・騎士の正体は・・・分かん。だが、よく通る声をしていて、静かで堂々としている印象だった。剣の腕は、すさまじいもので・・・あんなに頑丈そうな鎧を着ているのに、信じられないほど素早かった・・・気がする」

「ふむ、そうか・・・」

アイクの話聞いて、獅子王は耳打ちをやめる。今度は、普通に質問をしてきた。

「アイクよ、あやつは最期に・・・お前に何と告げた？」

アイクは思い出した。あの嵐の、満月の夜を。

「・・・親父は・・・俺に傭兵団を任せると・・・カインギス殿を頼り、このガリアの地で、平和に暮らせと・・・言った。全てを忘れて・・・」

カインギスはそれを聞いて、それに対する答えをすぐに言う。

「・・・そうか。では、わしができることをしよう。お前たち傭兵団がここでの暮らしを望むのであれば、わしはそれを許そう。住まいと、土地を与える」

カインギスの発案に、後ろで控えていたティアマトとセネリオが驚きの声を上げた。

いくらアイクの父であるグレイルと縁があるとはいえ、一国の王が、外国人の一介の傭兵に土地と住まいを無償で提供すると言うのだ。破格の待遇である。

だがアイクは、それを受け入れない。

「・・・王の気持ちはありがたい・・・だが、俺はこのまま、ここで安穩と生きる気にはなれない。俺は、親父の仇を討ちたい。このまま、忘れるなんてできない・・・」

後ろにいたティアマトが、思わずアイクに声を上げる。

「でもアイク！ それは・・・」

アイクはその声に、振り返った。

「分かってる。今の俺には・・・力がない。親父ですら勝てない相手に、かなうわけがないんだ・・・」

再び、カインギスの方に向き直る。

「・・・だから、今は強くなることに専念する。親父の残した傭兵団をまとめながら、いつか来る機会に備えるつもりだ!」

その強い意志を目の前の蒼髪少年の瞳に見たカイネギスは、少し口元をほころばせて賞賛した。

「賢明な判断だ。もつと直情的に動くように見えるが・・・さすが、グレイルの血は争えんな」

ティアマトも、賛成してくれたようだ。

「ふふ、成長したわね、アイク。ついこの間までは、ほんの子供だと思っていたのに」

「ティアマト・・・」

ふと、カイネギスはまた顔を思案顔に改め、アイクに話しかけた。

「・・・そこで、提案したいことがある。アイクよ、お前の傭兵団の力・・・このエリンシア姫に貸してやってはくれぬか?」

「!?!」

「カイネギス様!?!」

カイネギスの提案は、アイクとエリンシアに強い衝撃を与えた。なぜここで、グレイル傭兵団がエリンシアにまた、力を貸すことになるのだろうか?

その答えを、カイネギスは静かに話した。

「確かに、ガリアとクリミアの間には同盟が結ばれている。だが、それは王族間のもので民間には、ほとんど浸透しておらん」

カイネギスが困り顔でそう言うのを、ティアマトはアイクにフォロ―を入れる。

「クリミアでガリア人を見ることがなんてないでしょ？　・・・同盟国であっても、ラグズに対する理解はほとんどない。“半獣”なんて言葉がまかり通るようにね」

言われてみればその通りだ。アイクは実際つい最近まで、「ラグズ」という言葉すら知らなかったのだから。

エリンシアも、話の輪に入る。

「・・・父は、そのことで心を痛めていました。歴代の王とは比べ物にならないほど、ガリア王国との国交を深めることに心血を注ぎ・・・そして・・・」

そこまで言って、彼女は自分がまた泣いていることに気付いた。ハンカチを取り出し、嗚咽を漏らす。

「・・・それゆえ、反ラグズ運動の強いデインに狙われたのかもしれん」

獅子王はエリンシアの様子を見ながら、ため息とともにそう言った。

「・・・」

アイクも、エリンシアの方を見ながら、この先のことについて考える。そんな時、カインギスは話の続きを始めた。

「わし個人の心情で言えば、ガリアがエリンシア姫の後見となり、クリミア再興に尽力したいところだ。しかし、我がガリアにおいてもまた、反ベオク感情が高いのも事実なのだ。この度、クリミア王女を我が国が保護したことが、デインがガリアを攻撃するための絶好な口実を与えたのではないかと・・・危ぶむ重臣も多い・・・」

カインギスはあるべく遠まわしに言っているのだとは思うが、アイクは彼が何を言おうとしているのかは、分かっていた。

「つまり・・・ガリアは、エリンシア姫の力にはなれない・・・そう言うことなんだな？」

「残念ながら、そうだ・・・」

獅子王は、とても申し訳なさそうな顔をしている。

ガリアが無理なら、どこに助けてもらえばいいのだろうか？

カインギスとの謁見が終わり、謁見の間から出たところで、エリンシアがアイクに話しかけてきた。

「アイク様。カインギス様は、クリミア再興を目指すのであれば、ベグニオン帝国を頼るべきだとの助言をくださいました。宗主国であるベグニオン帝国に正式に申し立てをして、後ろ盾してもらってください・・・」

「ベグニオン帝国？」

アイクが疑問に思うと、セネリオが簡単に説明する。

「アイク。ベグニオン帝国はこのテリウス大陸の中で、最も長い歴史と大きな版図を誇る大国です。クリミア王国もデイン王国も、元はそのベグニオン帝国から独立したものなんです」

「そうなのか・・・」

アイクが納得すると、今度はティアマトが思案顔になった。

「ベグニオンまでは、海路で数力月の旅になるわ。確かに護衛が必要ね・・・」

その意見に、アイクもうなずいた。

「・・・俺たちも、まっとうに傭兵団として動けるほどの人員がない。もし、姫の護衛として雇ってもらえるなら、それは願ってもないところだな。ティアマト！ セネリオ！ 俺は王の申し出を受けたいと思うが、構わないか？」

すると、ティアマトは嬉しそうな顔で答える。

「団長の決めたことでしょ？ 私たちは、信じて付いて行くだけよ」
セネリオも、賛成してくれた。

「あなたの望むまま・・・進んでください。僕は、その道が確かな

ものになるよう、全力を尽くすのみです」

2人の賛成で、アイクの心はきまった。

「分かった。では、グレイル傭兵団はこれより、クリミア王女護衛の任務を請ける」

続いて、エリンシアの方を向く。

「エリンシア姫、これから長い付き合いになりそうだな。よろしく頼む」

アイクは、エリンシアに右手を差し出した。エリンシアは一瞬その意味が分からなかったが、すぐに理解をした。

アイクは、握手を求めているのだと。

「あ、ありがとうございます。こちらこそ、よろしく願いします・・・！」

エリンシアは緊張した様子で、自分の右手を目の前の少年の右手に合わせようとする。すると、アイクが自分からエリンシアの手を捕まえ、ギュッと握ったのだ。

「っ!？」

たちまち、エリンシアは真っ赤になる。だが、アイクはエリンシア

の様子の変化には気づかない。

アイクはエリンシアに別れを告げ、自分の部屋へと去っていく。

その後ろ姿を、エリンシアはいつまでも見ていた。蒼髪の彼の姿が廊下の角に消えても、まだ動けなかった。

・・・たった、数秒の出来事だった。だが、彼と握手をしたと言うだけなのに、エリンシアはそれがものすごく長い時間に感じられた。熱帯の気候のせいか、それとも自分の体温が上がっているせいか、ひどく体感温度が高く感じられる。なぜか鼓動が鳴り響く自分の胸に、彼女はついさっき握手を交わした、右手をそつと当ててみる。

まだ、彼の手の感覚が残っている。エリンシアはその感覚を忘れないよう、そつと左手も右手に合わせる。

しばらく、その場を動くことは出来なかった。

決意（後書き）

ガリア王国は、クリミア再興に力を貸せないらしい。

カイネギスの助言を受け、グレイル傭兵団はエリンシア姫を、ベグニオン帝国まで護衛することになった。

クリミア再興は、無事実現するのだろうか？

新たなる旅立ちの日（前書き）

ガリアの国王カイネギスがアイクに伝えた話は、グレイルの過去に深く結び付くものだった。そして、それは幼いころのアイクにも、直接関係してくる。

獅子王はエリンシアに、残念ながらガリア王国はクリミア再興には力添えができないと返答をする。ラグズとベオク・・・両者の対立は、このような場所にも現れていた。

獅子王の助言に従い、やむなくクリミアの宗主国、ベグニオン帝国を目指すことになったグレイル傭兵団一行。エリンシア護衛の任務は、さらに厳しいものとなるのであった。

新たなる旅立ちの日

「ガリア王宮」

ガリア王宮に来て、5日目の朝のことである。この日に、とうとうグレイル傭兵団は、ガリア王宮を立つことになっていた。

「でやあっ!!」

アイクは、たった一人でガリア王宮の中庭で、剣の特訓を行っていた。敵に囲まれた状況を想定し、それを突破するという訓練である。

（俺は、親父の仇をこの手で討つ！ それまでに少しでも、強くなつてやる！）

アイクは、漆黒の騎士のことを思い浮かべつつ、ひたすら木刀を振るった。

そんなアイクの様子を、そっと見ている者がいた。エリンシアだった。

（アイク様・・・）

ガリアでアイクと再会してから毎日、彼女はアイクの剣の特訓を見ていた。自分でもなぜかはよく分からないが、アイクのことをとても気になるのだった。

再会した日・・・アイクとの初めての握手・・・。その時に感じた彼の手の感触を、エリンシアは忘れられなかった。なぜかその日の夜は、全く眠れなかった。アイクのことを考えるたびに、居ても立っても居られない、胸が苦しくなるような感覚に襲われるのだ。

まだ時間は朝なのに、辺りの気温はかなり高い。だが、それはここが熱帯だからというだけではないのかもしれない。

しばらくして、アイクは特訓を終えたようだ。木刀を入れ物にしまい、歩き出した。そこで彼は、エリンシアに気付いた。

「あっ・・・」

ついアイクに気が行き過ぎていて、エリンシアはその場を離れるのがやや遅れた。アイクの訓練をずっと見ていたことが、彼に気付かれてしまった。

不自然に背中を向けて駆けだそうとはしたが、もう遅い。

「エリンシア姫、どうしたんだ、こんなところで？」

アイクにそう呼びかけられ、エリンシアは観念して振り返った。

「あ、アイク様おはようございます・・・。えっと・・・朝早いですね・・・」

緊張で、言葉がとぎれとぎれになってしまう。

「朝早く？ もう、朝食を食べた後だからそれほど早くもないと思うが・・・それより、メシの時も会ったと思うぞ？」

そう指摘され、エリンシアは恥ずかしさのあまり顔を赤くする。

「え、あ、そうでしたね。ごめんなさい私ったら・・・」

「？ まあいいが・・・」

その時だ。2人の背後から唐突に、陽気な声が聞こえたのは。

「よお、アイク！ 聞いたぜ、ベグニオンに行くんだってな？」

「！！？」

エリンシアはその声に、ことさら驚く。だがアイクは、ごく普通に反応した。

そこに立っていたのは、水色の髪をした猫の民の獣牙族。メリテネ砦でアイク達を救ったガリア王国国境警備隊隊長の、ライである。

「ライか。お前には礼を言おうと思っていたんだ。旅立つ前に会えてよかった」

アイクがそう言うと、ライは感心した表情を浮かべて笑いかける。

「義理堅いね。そういやお前、ここの生まれなんだってな？ おかしいと思ったんだよ。ベオクにしてはいやに懐っこいなって。つと、ベオクつてのはだな・・・」

「知っている。俺たち人間のことだろう？」

アイクは、レテが以前言っていたことを思い出す。

「お、知ってたか。じゃあついでに教えとくと、オレたちが“ニンゲン”って言葉を使うときは、お前たちの言う“半獣”ってのと同じ意味だと思って間違いないぜ」

「そうなのか？ “人間”と“ニンゲン”・・・知らなければ、何も気付かないだろうな」

ライが言うには、“ニンゲン”という言葉はラグズが奴隷時代だったころ、ベオクに隷属を強いられていたラグズ達がベオクに対し、使い始めたのが始まりらしい。

発音が“人間”とほぼ同じなため、バレることはないとのことだ。

「・・・もし、その言葉を使うラグズに出会ったら気をつけろよ？ 絶対、敵意があるからな」

ライの忠告に、アイクは感謝した。

「分かった、ありがとう。肝に銘じておく」

「さて、じゃあ本題と行くか」

「？」

ライが突如話を打ち切ったのでアイクが疑問に思つと、ライは今度はエリンシアの方を向く。

「エリンシア姫、少しよろしいですか？」

「は、はい！」

エリンシアが返事をする、ライは持つてきていた大きな皮袋をエリンシアに差し出す。

「我が王より、姫への贈り物です。どうぞお納めください」

エリンシアがその袋を受け取ると、ジャラツと言つ音が鳴った。硬貨がお互いこすれ合う音に違いない。

「！これは・・・」

驚いた表情を浮かべる彼女に、ライは説明を加える。

「その皮袋には、ベオクの共通硬貨で2万ゴールドが入っています」

エリンシアは、困惑する。

「お気持ちはありがたいのですが・・・こんなに高額なゴールドを軽々しく受け取る訳にはまいりません。カイネギス様には、もう十分よくしていただきました。ですから・・・」

そう言つて皮袋をライに返そうとするが、ライはその手を押しとどめる。

「・・・王は、自らがあなたの後ろ盾となれないことを、申し訳なく思っておられるのです。それを、どうか察しくださいませんか？」

「でも・・・」

「・・・なら、こういっのはどうでしょう？」

「え？」

ライは名案を思い付いた顔をし、アイクの方を向いた。

「『クリミア王女をガリアまで無事に送り届けた分の報酬』として、このゴールドは全て、姫のお手からアイクの傭兵団へ支払われる・・・」

「あ・・・」

エリンシアは納得がいった様子だが、アイクはその意見に、疑問を示す。

「おい、ライ。いくらなんでも、報酬としては高すぎないか？」

グレイル傭兵団が今まで遂行してきた任務の報酬は、せいぜい500～1000ゴールドほどである。以前グレイルが自ら行った、カタールの街での盗賊団討伐任務の時は諸侯からの依頼と言うこともあってかなり高額だったが、それでもせいぜい5000ゴールドほどだったはずだ。

今まで、こんな大金を手にしたことは、アイクはない。

だがライは、アイクの疑問に首を横に振った。

「いや、むしろ安すぎるくらいだ。一国の王女の命は、こんな金額で買えるものじゃない。それに・・・傭兵団が失った命のことを考えたら・・・この数十倍、数百倍もらってもおかしくはない」

「・・・」

アイクが考えていると、エリンシアが手を小さく挙げた。

「私・・・やっぱり、ご厚意をお受けします。そしてこれは、アイク様に・・・アイク様、受け取っていただけますね？」

エリンシアは、ライから受け取った皮袋をアイクに差し出す。アイクは、エリンシアに向き直った。

「・・・分かった。ありがたくもらおう」

「はい」

エリンシアから差し出された皮袋を、アイクが受け取る。ジャラリと硬貨が擦れ合う音がし、皮袋の重さが腕に伝わった。

「さて、丸く収まったところで次だな。我がガリア王国は、あいにく船を所持していない。と、なると・・・デイン軍がうようよいるクリミアに戻り、ベグニオンに行くための船を用立てるほか手段はない」

ライは腕組みをし、そう言う。

「・・・他に方法がないなら、仕方ないか」

正直、アイクはクリミアには戻りたくはなかったが、仕方なくライの意見に従うことにした。

「デイン軍の裏をかくにしても、いくらかの戦闘は免れないだろうから・・・それは覚悟しておいてくれ」

「分かっている。それでも・・・行くしかない。戦力不足はいまさらどうしようもないが、旅立ち前の戦支度は念入りにやっておくつもりだ」

アイクがそう言うと、ライが顔を上げた。

「戦力については、わずかながらも提供しよう。レテ！ モウディ！」

ライが呼ぶと、中庭の向こうで話していたレテとモウディがこちらにやってきた。モウディがアイクに笑いかける。

「アイク。モウディは、オまえたちと行くぞ」

「モウディ！ レテも・・・いいのか、2人とも？」

アイクがやってきた2人に聞くと、今度はレテが、かなり不機嫌そうな表情で答えた。

「・・・他の者は皆、ベオクと行くのを嫌がったんだ。私だって、ベグニオンに行くのは震えが来るほど嫌だが・・・王のご命令とあらば、従うほかあるまい」

レテは嫌だろうが、アイクは2人が協力してくれたことに素直に感謝した。

「それでも、助かる。獣牙族の戦闘能力の高さは、何度か見せてもらったからな」

「マかせておけ！」

モウディは元気に答えた。だが、レテはツンとした表情で、アイクを指差す。

「フン！ 慣れ合うつもりはない。心しておけ！！」

そして、モウディを連れて再び戻って行ってしまった。ライはその後ろ姿を見て、やれやれと肩をすくめた。

「まあ、あいつの憎まれ口は許してやってくれ。オレは、王に報告を済ませて戻ってくる。アイク達は、それまでに出発の準備を完了しといてくれるか？」

「分かった」

ライやエリンシアと別れ、アイクはひとまず自室に戻ることにした。荷物の整理を行うためだ。

だが、途中で自室がどこだったか、分からなくなってしまった。

「しまった・・・道に迷ったようだな。えっとここは・・・」

「ソこのベオク！ 貴様、ソこで何をシている！？」

アイクが周囲を見渡していると、城の見回りをしていたらしいガリアの獣牙兵がアイクを呼んだ。駆けつけてくるガリア兵に、アイクは事情を説明する。

「部屋に戻ろうとして迷った。どっちの方が教えてくれないか？」

「・・・コつちだ。ツいて来い」

だが、ガリア兵の後に続いてアイクが歩き出すと、突然ガリア兵は大声で叫んだ。

「アあ！！ 近寄るな！！ モっと離れて歩いてくれ」

「！」

アイクが思わず離れると、ガリア兵ははっとなってアイクに頭を下げる。

「・・・スまん。王の命令で・・・ベオクとは親しく接しなければいけないのだが・・・まだ・・・慣れんのだ。本能で覚えているんだろうな・・・先祖が・・・ベオクによって奴隷とシて虐げられていた時代の記憶が・・・血にヨって受け継がれているんだ・・・」

ラグズがかつて、ベオクに虐げられていたということは、ライからすでに聞かされている。だが、まさかその記憶が遺伝されているほどにひどいものだったとは・・・。

アイクは、しばらく言葉を失ってしまった。

「・・・分かった。離れて付いて行く」

「・・・デは、行こう」

アイクは、ガリア兵よりかなり後ろの方を付いて行くことにした。ラグズとベオク・・・この距離が縮まる時が、いつか来るのだろうか・・・。

部屋での準備もすぐに終え、アイクはひとまず他の団員の様子を見に行くことにした。だが、多くの団員はまだ準備に時間がかかりそうだった。

とりあえず、外に出たアイクは、中庭の一角にいた天馬を見つける。純白の天馬の傍らには、ピンクの髪をしたペガサスナイト、マーシヤが、天馬に様々な装具を付けていた。

「これに乗せて、完了!」

最後に天馬の背中に鞍を乗せて縛り付ける。そこにアイクは、歩み寄って声をかけた。

「準備がか?」

その声に気付いたマーシヤは、アイクに頭を下げた。

「あ、アイクさん! はい、準備完了です!」

「思ったよりも、手際がいいんだな。・・・違うか、ミストがどんくさいだけか？」

さつきミストの部屋に行ったらものすごい剣幕で「お兄ちゃんっ！　勝手に入ってこないで！」と怒鳴られ、枕を投げつけられたのを思い出し、アイクは少し笑う。おそらく、着替え中に誤って入ってしまったのだろう。カギくらいかけておけばいいのに。

そうしていると、マーシャが口を開いた。

「私、聖天馬騎士団で・・・支度は迅速にやるようにって、訓練を受けてますから。だから、他の女の子より早くて当然ですよ」

「そうだったな。しかし・・・あんたも義理堅いな。ベグニオンの聖天馬騎士団を辞めてまで来てくれるとは・・・」

すると、マーシャは不安な表情でアイクに聞く。

「やっぱり、迷惑でしたか!？」

だが、アイクは首を横に振った。

「いや、ありがたい限りだ。前にも言ったが、見かけどりの人員不足だからな」

「よかった・・・えっと・・・アイクさん、私が騎士団を辞めたことなんですけど・・・気にしないでくださいね？　辞めた理由は・・・アイクさんにお礼がしたかっただけじゃないから・・・」

「他にも理由があるのか？」

マーシャは、目を伏せる。

「はい。私・・・行方不明になった兄を探しているんです。どうしようもない人なんですけど・・・2人きりの兄妹ですから・・・あの時、海賊船でアイクさんに助けてもらった時も、兄の消息を追ってたんです。でも、私一人だと・・・やっかい事に巻き込まれるばかりで」

「確かに。それで、傭兵団に入りたかった訳か。納得した」

「・・・呆れましたか？」

マーシャが上目づかいに聞いたが、アイクはそんなことはなかった。マーシャの兄の行方を、彼なりに心配していたのだ。

「いいや。それより・・・兄さんが、早く見つかるといいな」

「はい、ありがとうございます」

ガリア王宮の正面玄関の前には、レテとモウディがすでに控えていた。2人ともとくに、準備を終えたらしい。アイクも、彼らのところに行った。

「・・・」

レテは、目をつぶって背中を柱に預け、貧乏ゆすりをしている。

「・・・憂鬱そうだな」

アイクが声をかけるとレテは目を開け、不機嫌そうな表情になる。

「当たり前だろう。くだらないことを聞くな。・・・遅い。みんなまだ揃わないのか？」

見渡した限りでも、まだ集まっているのはアイク以外に3、4人ほど。アイクはそれを見て、レテに謝る。

「悪いな。あんたたちみたいに、身一つで動ければ楽なんだろうが・・・武器の用意なんかは、結構手間取るんだ」

するとまた、レテは不機嫌そうになる。と言うか、レテの表情はこんな感じのものしか、アイクは見えていない気がする。

「『鉄』の武器か。ベオクは軟弱だ。あれがないと、まともに戦えないのだからな」

それを聞いてアイクは、レテの足の横に付けてある小さなものを見た。

「・・・だが、レテ。あんたも短刀を持ってるじゃないか。その足に付けてるのは、鞘だろう？」

「これは・・・戦い用じゃない」

「なに用なんだ？」

「・・・肉を食べる時、小骨をとったり・・・果実を口に入れる大きさにしたり・・・なかなか重宝するんだ」

「・・・」

アイクはそれを聞きつつ、レテの顔をじっと見る。レテは、思わず声を上げた。

「何だ！？ 言いたいことがあるなら、はっきり言え！」

「ベオクが嫌いでも・・・ベオクの作るものを使っただな？」

「いいものは、いい。当然の評価を捻じ曲げてまで、否定論に固執するのは愚か者のやることだ」

そこまで言って、レテは目を伏せて続ける。どこか表情が、悲しそうなものになっている気がした。

「・・・私だって・・・ベオクの全てを否定している訳じゃない。ベオクが皆、お前のように我らと普通に接するなら・・・きっと・・・」

「レテ」

アイクの呼びかけに、レテははっと顔を上げる。そして、恥ずかしそうな表情で必死に叫んだ。

「く、くだらない話をしてしまった！！ わ、私はもう行くからな
！！」

そして、そのままその場から逃げるように去って行った。

「・・・」(普通に接するなら、か・・・)

アイクは、レテがわずかにのぞかせた本心を、心の中で反芻した。

やがて、団員全員が集まり、出発できる体制が整った。獅子王カイネギスとその影であるジフカ、さらには数多くの獣牙族に見送られ、アイク達は出発をする。

クリミア王国の最西部の港町“トハ”で、ベグニオン行きの船に乗ることが決定した。港町トハまでは、ライも道案内として同行することになった。

グレイル傭兵団の、新たな戦いへの旅立ちである。

新たなる旅立ちの日（後書き）

ベグニオン帝国を目指す船に乗るために、一旦クリミア王国へ戻る
ことになったグレイル傭兵団。

クリミア再興に向けて、彼らの足は止まらない。

10章 く捕虜解放く 前編（前書き）

グレイルの後を継ぎ、傭兵団の新団長となったアイクは、再びクリミア王女の護衛として雇われる。

次に目指す先は、テリウス大陸最長の歴史と、最大の版図を誇る帝国、ベグニオンである。帝国の藩国として誕生した歴史を持つクリミア王国を再興するためには、宗主国ベグニオンの支持は絶対に不可欠なものだった。

また、ベグニオンが持つ強大な力の後ろ盾なき再興は不可能に近いという。

ベグニオンとガリアに国交はなく、険しい山脈により両国は隔てられている。

傭兵団は、やむなく一度クリミアに戻り、船を仕立てて海路をとることになった。

一行は、案内役を買って出たガリアの戦士ライを伴い、ひとまずクリミアに戻るためガリア王宮を後にした。

10章 く捕虜解放く 前編

くカントウス城く

グレイル傭兵団は、順調に国境を超えて、無事クリミア入りを果たした。国境付近で警戒をしていたデイン王国軍の待ち伏せ部隊と遭遇することも、とりあえずのところは避けることができた。

暦は、5月の下旬になっていた。ここクリミア王国にも、夏が近づいてきたのだ。

国境を越えてしばらく進むと、唐突に森が開けた。彼らの行く手には、石造りの大きな建造物が建っている。付近にある看板には、「カントウス城」と書かれてあった。ガリアとの国境付近にあったメリテネ砦やゲバル城と比べると、まだ比較的新しい建物である。

「止まってくれ。港町への道中だし、せつかくだからここに寄り道していいっつ」

先頭を進むライが突然立ち止まり、振り返る。アイクは、前方に建っている城・・・カントウス城を見上げつつライに尋ねた。

「この城に、何かあるのか？」

するとライは、カントウス城を振り返りつつ話した。

「ここカントウス城は・・・デインに占領されて以降、捕虜収容所になってる。そして、クリミアの遺臣が何人か、この地下牢に捕らえられてるって話だ」

「ほ、本当ですか!？」

ライの言葉に驚きの声を上げるエリンシアに、ライは自信ありげにうなずいて見せた。

「確かな情報です」

それを聞いていたティアマトも、腕を組んで考える。

「・・・クリミアの正規兵をうまく助け出し、仲間に加えられれば・・・心強いわね」

グレイル傭兵団は、深刻な人手不足である。少しでも、仲間は多い方がいい。アイクもティアマトの意見に賛成した。

「そうだな。・・・危険を冒す価値はあるだろう」

グレイル傭兵団は一旦城から離れ、見つけた小川の近くで小休止をとることにする。ついでに、カントウス城潜入のための作戦を立てていた。

「見たところ城の大きさは、それほど大したことはない・・・正面から突撃しても、大丈夫かもしれないが・・・」

アイクはあぶり肉を口に入れつつ、そうつぶやく。するとボーレも声を上げた。

「おお、だったら正面から派手にババーンとやってやろうぜ！ デインの連中を片っ端から、倒してやってやる！」

だが、オスカーが反論をする。

「アイク、ボーレ。確かに城の大きさはそんなに大きくはないが、中にどれほどの勢力がいるかは分からないんだ。それに、捕虜たちが人質に取られたりしたら、ますますやっかいなことになるぞ」

「・・・確かに、それもそうだな。さて、どうしたものか・・・」

オスカーの意見に、アイクは再び考え込む。横に控えていたティアマトが、口をはさんだ。

「とりあえず、ここは偵察に出ているセネリオの帰還を待つてからの方が、いいかもね」

しばらくして、セネリオが偵察から戻ってきた。

「アイク、城の内部について報告します。城の地上部には、かなり大勢のデイン兵が潜んでいる模様です。まともにぶつかりあうのはかなり危険でしょう」

「なるほど、そうか。じゃあ、突撃してやり合うのはやめた方がいい

いな」

「はい。それから地下部ですが、無数の牢屋が並んでいました。ただ、捕虜の人数は確認しただけでは3、4人ほどこいけません。地上に比べて、地下は見回り以外いないようです」

「分かった。偵察、ありがとうな」

「いえ・・・」

セネリオの報告を聞き、アイクは作戦を立てる。

「・・・このまま突っ込もうにも、かなり分が悪い。ここは、極力少人数で潜入し、無駄な戦闘は避け、捕虜の救出を最優先で行いたいな」

アイクがそう言うと、ライが待ったをかけた。

「アイク、潜入するだけなら少人数でも問題ないが・・・問題は、捕虜が閉じ込められている牢をどうやって破るか、だよな」

「・・・牢にはカギがかかってるよな？ それを開ける手段となると・・・」

アイクは、再び考え込む。そんな彼に、セネリオが助言を出した。

「普通は看守が持っています。それを奪うしかありませんね。運が良ければ、見張りが持っているかもしれないませんが・・・扉を武器で壊すという方法もない訳ではありませんが、大きな音が鳴るから、まず間違いなく気付かれるでしょう。いずれにせよ、秘密裏に行わ

ないと。城中の兵を相手にする訳には、行きませんから」

「なら、なるべく壁沿いに、敵を避けながら進むか。まずは、カギを手に入れることが先決……」

そこまでアイクが言った途端、近くの木の上からガサガサという音が聞こえてきた。ライが音がした方に向かって、声を上げる。

「……！ 誰だっ！？」

全員が武器を手にとって待ち構えた。デイン兵が潜んでいるのではないかと、勘ぐったからだ。

だが、木の上から降りてきたのは、黒い装束に身を包んだ謎の男だった。

鋭い眼光を瞳に宿し、触れただけで怪我をしそうな雰囲気醸し出す人物である。見た感じ中年の男のようだが、詳しい年齢は分からない。

その男は突然アイクに詰め寄ると、見た目の印象通り暗い声で聞いてきた。

「……グレイル殿に用がある。どこだ？」

アイクの隣にいたセネリオが、そんな彼に対して逆に聞き返す。

「いきなりとは、ぶしつけですね。ご用件は？」

「本人に話せば分かる。取り次いでくれ」

セネリオの意見に対して、男はそう返す。どうやら、グレイルと関わりのある男のようだ。

その時、ティアマトが絞り出すような声で男に言った。深い悲しみの淵から、絞り出すような声で。

「・・・それは・・・無理な話よ・・・グレイル団長はもう・・・亡くなったわ・・・」

アイクは、ふと思った。ティアマトは、グレイルのことを思い出しなくなかったようだ。

親父が死んで・・・彼女はかなりやつれたように見える。人一倍、シヨックだったのだろう。時折見せる元気な表情も、痛々しく・・・無理しているように見える。

無理もない。ティアマトはグレイルの思想に共感し、傭兵団を共に立ち上げたのだから。

「グレイル殿が死んだ？・・・そいつは、まいったな」

謎の男は、そう言って頭をかく。そんな彼に対しティアマトは、誰もがしたかった質問を投げかけた。

「あなた、誰なの？」

「・・・フォルカ。グレイル殿に雇われていた 情報屋だ」

「親父に？」

思わずそう聞いたアイクの顔を見て、フォルカと名乗った男は話を続ける。

「・・・グレイル殿の息子か。だったら、あんたでもいい。グレイル殿に頼まれて調べていたことがある。報告書を渡すから、代金をもらいたい」

「いくらだ？」

「5万ゴールドだ」

「5万・・・ずいぶん高いな」

「それだけの価値はあるさ」

獅子王カイネギスから、エリンシアの手を経てアイクが受け取った額は、2万ゴールド。それよりもはるかに高い金額を、フォルカは要求しているのだ。

「・・・今はゴールドがない。しばらく時間が欲しい」

そうアイクが答えると、フォルカは少し声の調子を変えて聞いてきた。

「ということは、払う気はあるんだな？」

「ああ、親父が依頼したことだ。それなりの理由があるんだろう」
いつか代金を払うと言ったアイクに、ティアマトは不安な表情になる。

「いいの、アイク？ 本当かどうか分からないものよ？」

だがアイクは、自信を持って答えた。

「・・・中身を見れば価値は分かる。確認するまでは、俺たちともにいてもらおう」

アイクのその考えに、フォルカはどこか楽しげな表情をした。

「なるほどな、さすがはグレイル殿の息子だ。・・・だが、そいつは金ができてからの話だろう？ あいにく、俺はそれほど暇じゃない。この件は、ひとまずお預けだな。金ができたら呼んでくれ。ちよつとした町の酒場ならどこでもいい。主人に『火消しに用がある』と言ってくれば、1週間以内に姿を現す」

そう言つて、フォルカは踵を返してその場から立ち去ろうとする。その時だ。セネリオが彼を呼び止めたのは。

「・・・待つて下さい！ 情報屋、と言いましたね？ あなたが売るのは、情報だけですか？」

するとフォルカは、ほんの少しだけこちらを振り返る。鋭い眼光が、セネリオを捕らえた。

「・・・何が聞きたい？」

「カギ開けは・・・できませんか？」

「・・・一回に付き、50だな」

「50ゴールド・・・」

アイクは、セネリオに聞いた。

「ここの扉を開けさせるのか？」

確かに、カギを看守から奪って開けるのは、発見される危険が伴う・
・彼がカギ開けができるのなら、雇うのも悪くはないと考えた。

だがティアマトは、反対の声を上げる。

「大丈夫なの？ たった今会ったばかりの男よ？ こんな状況で・
・素性の分からない人間を信用するのは、危険すぎないかしら？
私は反対」

その意見に対し、セネリオも反論する。

「牢破りを成功させるためには、多少の危険は覚悟すべきです。カ
ギを奪う手間が省けるだけでも、捕虜を助けだせる可能性は高くな
る・・・。試してみる価値はあると思います」

「・・・」

アイクは、2人の意見をよく聞いて考える。ティアマトもセネリオ
も、どちらももつともなことを言っている。だが・・・やはり、こ
こはフォルカの素性が怪しくとも、捕虜救出のためには活用すべき
だろう。

「・・・フォルカ。ここの牢を破るのを、手伝ってくれないか？」

「金さえもらえるんなら、俺は構わない」

「ああ。扉や・・・もしあるのなら宝箱を開けた数の分だけ、後で必ず支払う。ティアマト、構わないか？」

先ほど反対していたティアマトに、アイクは一応意見を聞く。だがティアマトは、首を縦に振った。

「前にも言ったでしょ？ 団長はアイク、あなたよ。あなたが決断したのなら、私は従うだけだわ」

その後、アイクはフォルカも交えて作戦を再び立てることにする。

セネリオの話をもとに地下牢の見取り図を作り、見張りや捕虜、宝箱の位置を正確に割り出していく。捕虜救出後の逃走ルートも念入りに検討し、作戦は立てられた。

「じゃあみんな、今回の作戦を言う。何度も言うが、今回は捕虜の救出を目的としている。決して、カントウス城を攻め落とすのが目的じゃない。だから、今までとは全く違う戦い方となるだろう」

そこまで言うってからアイクは一呼吸置き、続ける。

「地下牢に潜入するのは、俺とフォルカ、そしてあと一人。その、

3人だけだ」

この発言に、団員たちは皆ざわめいた。たった3人で何ができるのだ、といった意見が、多数出たのだ。だが、セネリオがその意見について説明する。

「今回は、戦うことが目的ではありません。敵に気付かれぬように潜入するには、少人数の方が有利なんです。その方が敵に見つかる可能性も低くなり、行動も迅速に行えます」

団員は、それを聞いて反論を止めた。アイクが話を続ける。

「問題は、残り一人を誰にするか、と言うことだが・・・もしかしたら、歩けない捕虜がいるかもしれない。そこで、できたらそう言った捕虜を担ぐことができる、騎馬に乗った者がいい」

すると、マーシャが手を上げた。

「あ、じゃあ私が行きます！」

「いいえ、あなたはやめた方がいいです」

だがセネリオが、否定してしまう。

「ええ、何で!？」

「天馬では、羽音や色で目立ちすぎてしまうからです。馬ならばゆつくり歩かせれば平気ですけど・・・。それに、アーチャーの姿も多く確認しましたから、いざ戦闘になったら危険です」

「じゃあ、私も白馬だしやめた方がいいわね」

ティアマトも自分の馬を見て、そうつぶやいた。
残る騎馬系は、オスカーである。

「オスカー、一緒に来てくれるか？」

アイクが聞くと、彼は快く引き受けてくれた。

「もちろんだよ。捕虜解放、絶対成功させよう」

「ああ」

アイク、オスカー、フォルカの3人以外の団員は、ひとまず城の外で待機と言う形になった。

出撃の準備をしているアイクに、ライが話しかける。

「じゃあ、オレはちよっくら行ってくる。健闘を祈ってるから、がんばれよ」

「何だ、みんなと一緒に待機してるんじゃないのか？」

「そうしたいのは山々なんだけど、オレも忙しくてね。終わרי次第、合流するよ」

そう言うとライは、水色の猫に化身する。

「そうか、気を付けてな」

「ああ、お前たちもな！」

ライは、元気に駆けだしていき、やがて森の中に消えていった。

「じゃあ、そろそろ行ってくる。ティアマト、もし城の方が騒がしくなったら、待機メンバー全員を引き連れて突撃してくれ。そうならないように、事を運ぶが」

「ええ、分かったわ。そっちもがんばってね」

ティアマトに留守を任せ、3人はカントウス城に潜入しに行く・・・。

10章 〽捕虜解放〽 前編（後書き）

たった3人で、出撃をしたアイク。

無事に彼らは、クリミアの捕虜たちを救出することができるのだろうか？

そして、突如アイク達の前に現れたフォルカとは、一体何者なのだろうか？

次回、「9章 〽捕虜解放〽 後編」

炎の紋章が蒼く輝くとき、戦いは始まる。

10章 く捕虜解放く 中編（前書き）

デイン軍が占拠してからは、捕虜収容所となっているカントウス城。ライの話によると、この城の中にはクリミアの遺臣が、数人とらわれているらしい。

港町トハへと向かうアイクだが、傭兵団の戦力増強のためにも、ここで捕虜を解放することにした。

今回は、極力戦闘を避けることを目的とした行動である。城に潜入するのは、アイク、オスカー、そしてグレイルが雇ったという、自称“情報屋”のフォルカ。

彼らは無事に、捕虜を解放することができるのだろうか・・・

10章 く捕虜解放く 中編

くカントウス城く

アイク達3人は、無事にカントウス城に潜入を果たした。見たところ1階は、それほど警戒もされていないようだ。それが返って、彼らにとって都合がよかった。

「セネリオやライの話だと、牢獄は地下にあるらしい。まずは、地下へ降りるための階段を探そう」

アイクが先頭を進み、その後ろをオスカーとフォルカが付いて行くという形で、彼らはカントウス城の1階部分を探索する。

オスカーは馬から降り、引いて歩く。騎馬の足にはめてあった蹄鉄は音が響いて見つけやすいため、ここでは外しておいた。

フォルカは、全く足音をさせずに静々と進む。気配もほとんど伝わらないため、アイクは時々はぐれてないか、不安になって振り返った。まあ、そんな心配はいらないのだが。

「・・・それにしても、さっきセネリオは兵がものすごく多いと言ってたが・・・あまりいいないな」

「そう言えばそうだね。もしかしたら、別の場所にいるのかな？」

アイクとオスカーがそんな話をしていると、足音と鎧の金属音がガ

シャガシャと響いてきた。3人は慌てて、近くの物陰に隠れる。オスカーの馬は気性が穏やかだったため、静かに主人に従って身をひそめた。

「・・・ん？」

3人が潜隠れている、たくさん積み重なった荷物の目の前で、デイン兵が足を止める。

「誰か・・・いるのか・・・？」

デイン兵は槍を構え、周囲に警戒をした。

（くそっ・・・早くどこか行ってくれ・・・！）

アイクはそう願う。だが、デイン兵のソルジャーは積まれた荷物の方に歩み寄り、調べ始めた。

（ここで発見されたら、まずい・・・頼む、あっち行ってくれ）

その時だ。別の方から、別のデイン兵の声が聞こえてきたのは。

「おい、どうしたんだ？ 何かあったのか？」

「いや・・・何でもない、気のせいだ」

先ほどアイク達が隠れている場所を調べようとしていた兵士は、同

僚にそう答える。

「そうか……。それより、早く2階の講堂に集まれ。もうすぐ、漆黒の騎士様の講演が始まるぞ!」

（漆黒の騎士!?!）

駆けつけてきたデイン兵が言ったセリフに、アイクは激しく動揺した。

（漆黒の騎士が……。親父の仇が……。この城に来ているのか!?!）

その間も、デイン兵たちの会話は続いた。

「なに、もうそんな時間か!?!」

「ああ、あと3分で講演が始まる。地下牢の看守以外は全員参加して話、忘れたのか? もうみんな、集まってるぞ」

「そ、そうだった……。わざわざ教えてくれて助かったよ」

「いいって。それより俺、超楽しみなんだよな! 漆黒の騎士様のお姿見るの、初めてだし!」

「俺も初めてなんだよな……。こうしちゃいられん、急いで講堂に行こうぜ!」

「ああ!」

ザッザッザ・・・

デイン兵たちの足音が遠ざかってから、3人は再び表に出た。アイクは漆黒の騎士がこの城にいると言うことに動揺していたが、漆黒の騎士が何者かを知らないオスカーは、そんなアイクに気付かず、口を開く。

「さっきの兵士たちの話だと、地下牢の看守以外の兵士は全員、講堂に集まってるみたいだね。これなら、見つからずに地下牢までは行けるね」

「あ、ああ・・・そうだな・・・」

程なくして、ようやく彼らは階段を発見した。降りた先は案の定、地下牢である。

先ほど作った見取り図を開き、指示を出す。

「フォルカ、ここから先はあんたが先に進んでくれ。看守の動きを見つつ、安全だと判断したら俺たちを呼んでくれ。捕虜がいる牢屋や宝箱を見つけたら、カギ開けを頼む。安心しろ、カギ開けの代金は後で払う」

「・・・金さえ払うのなら、任せておくがいい。“仕事”は、きちりとやらせてもらう」

そう言つて、フォルカは先に看守の様子を見るべく、先行をした。それを見送つて、今度はオスカーに話しかける。

「オスカーはさっき言つた通り、俺と一緒に捕虜救出の支援を頼む。敵に見つからないよう、慎重に行つてくれ」

「分かつた」

その頃、地下の奥の方にある牢には、2人の捕虜が相部屋で囚われていた。片方は赤い鎧と兜をした騎士風の青年で、もう片方は茶色い重厚な甲冑を身にまとつた中年の大男である。

大柄の甲冑男は、つらそうな表情で赤い騎士に聞く。その声は、希望がほとんど見えないほどに、悲壮感漂うものだ。

「・・・なあ・・・騎士さん。わしらは、どうなるんでしょうなあ？ 何人もおつた仲間は・・・デイン兵に連れて行かされたつきり、一人も戻つてくりやあせん・・・はああ・・・恐ろしいのお・・・」

そう言つて、彼は肩をがっくりと落とす。そんな大男に、赤い騎士は毅然とした態度で、激励の言葉を贈つた。

「・・・弱音を吐くな。たとえ、どんな仕打ちを受けようとも、クリミア騎士としての誇りを捨てず、耐えて耐えて、耐え抜くんだ」

だが、甲冑の中年男はその言葉に、ため息をつく。

「無茶言わんでくだせえ。わしゃあ、しがない民兵でさあ。・・・はああ・・・残してきた家族は大丈夫かのお・・・このまま2度と・・・会えんのかのお・・・」

大男は、甲冑の中から小さな巾着を取り出し、握りしめる。男の家族が拾った小さな石を巾着袋に入れただけの代物だが、彼にとって家族の思いがこもった、大事なお守りである。いつしか彼は、目に涙を浮かべていた。

そんな中年男の様子を見て、赤い騎士は悔しそうに歯がみをする。寄りかかっていた壁にこぶしを、ドンと叩きつけた。

「・・・くそっ・・・せめて、武器があれば・・・！」

そんな2人とは別の牢屋。そこにも、捕虜が捕らえられていた。

水色の鎧兜をし、明るい緑の髪をストレートに伸ばした、若い女である。

実は、彼女が捕らえられていた牢は、クリミアの女専用の牢なのだ。以前は、彼女以外にも大勢の女性捕虜が囚われていた。だが、この城の看守長であるダノミルに、次々と連れだされていき、今では彼女だけが残った。

ここにいた女性捕虜が、ダノミルに何をされたか・・・そう考えると、彼女は恐ろしい気持ちになった。

・・・あと、1時間。あと1時間で、とうとう彼女の番が来る。ダ

ノミルに呼ばれ、物のように扱われ・・・そして最後には、殺される。

だが、彼女は希望を捨てなかった。

「・・・助けは・・・来る・・・負けない・・・」

目の前に並ぶ鉄格子をにらみつつ、そうつぶやく。

一方アイク達は、すでに行動を開始させていた。

「フォルカ、近くの牢に一人、捕虜がいるはずだ。看守に気を付けて、牢を開けてくれ」

アイクの指示通り、フォルカは牢を開けに行く。すぐ近くに看守がいるにもかかわらず、フォルカは気付かれない。気配を消すのが、相当うまいのだろう。

「開けてきたぞ。これで、あとで50いただく」

「助かった。あとで必ず払う」

アイクとオスカーは、フォルカが開けた牢屋に入る。

中には、僧服を着た背の高い男がいた。長い黒髪をしており、きれ

いな顔立ちをしている。壁に寄りかかり、眠っているようで、アイク達に気が付かない。

「おい！ 助けに来たぞ」

アイクは、僧服の男をゆすつて起こす。僧服の男は目を開けた。

「・・・！・・・」

「あんたの、その服装・・・兵士じゃないな？」

男は自分が置かれている状況を理解したのか、アイクの目を見つづ答えた。

「私は・・・巡礼僧です。名をセフェランと申します」

セフェランと名乗った巡礼僧は、美しく、張りがある声でそう自己紹介する。

「僧がどうして捕まってるんだ？」

「・・・近くの村で、傷ついたクリミア兵の治療を行っていたところを連行されました。そして、審判も何もありませんまま、こうして牢に繋がれている次第です」

セフェランはそこまで言って、口を閉ざす。話を聞いたアイクは、どこか疑問に思いつつも理解をした。

「そうか・・・だいたい事情は分かった。俺たちは、捕虜を解放しにきたんだ。あんたも早く逃げろ」

「助けてくださるのですか？ それは、ありがたいことです。差支えなければ、お名前を……」

「グレイル傭兵団のアイクだ。さあ、牢の外へ」

そう言うと、セフェランも立ちあがった。

「分かりました。では、アイク殿。後ほど……」

牢を出たところで、オスカーがやってきた。

「アイク、まずは一人目だな。この調子でどんどん、解放していこう」

「ああ、敵に感づかれる前に、何とか終らせよう」

続いてオスカーは、セフェランに話しかけた。

「司祭殿、その服装では移動に何かとご不便でしょう。私の馬に、お乗りしますか？」

セフェランは、ありがたそうな表情でオスカーに礼を言い、馬にまたがる。

「ありがとうございます」

そんな彼らを、フォルカが呼んだ。

「おい、そろそろまた看守が来る。俺が脱獄の偽装工作するから、お前たちは隠れてくれ」

そう言つて、フォルカはさつきセフェランが入っていた牢のなかに行き、デコイを設置する。設置したデコイには、白い布をかぶせておいた。セフェランが着ている、僧服と誤認させるためだ。最後にもう一度力ギをかけ直し、出てきた。

セフェランがデコイとすり替わっていることに気付かず、看守が通り過ぎたのを確認してから、彼らはさらに奥に進む。

奥にも、無数の牢屋が延々と続いていた。中には、拷問の後が生々しく残っている部屋もあった。

一番奥の牢屋には、2人の捕虜がいた。赤い鎧兜をした者と、茶色い甲冑を着込んだものだ。

看守が来ていないことを確認し、フォルカが力ギを開ける。2人は早速中に入り、捕虜を助けた。

「あんだ、クリミア兵だな!? 助けに来たぞ!」

茶色い甲冑の中年男にアイクが呼びかけると、男は驚いた顔を見上げてきた。

「・・・ほ、本当か? わしゃあ、夢でも見とるんじゃないか?」

信じられないといった様子の中年男に、アイクは首を横に振った。

「俺は、クリミア王女に雇われた傭兵だ。詳しいことは後で話す。とにかく、逃げてくれ」

「おお！ 王女の！ ありがたいことじゃ。よっこいしょ・・・うう・・・体があちこちなまってしもって・・・あたたた」

男は、自分の名をチャップと言った。起き上がるのが辛そうだったため、アイクは手を貸す。ありがとうな、とお礼を言うチャップに、アイクは手招きをする。

「こつちだ！ 看守がまた回ってくるから、来る前に隠れる」

「よ、よし・・・！」

そう言つて、アイクは先に行ってしまう。自分よりもかなり年若い蒼髪の少年を見て、チャップは歩きだす。だが、歩き始めたところで彼は、疑問に思った。

「・・・はて？ 王様にはお子がおらんかったような・・・」

「何をしてる！ 急げ！」

チャップの疑問は、アイクの声に吹き飛ばされた。自分が置かれていた状況を思い出した彼は、急いでアイクの後に続く。

「はい、はい！」

一方のオスカーも、赤い鎧の騎士に呼びかけていた。

「クリミアの方ですね？ 私は、あなたがたの味方です。牢のカギを開けましたので、この隙に逃げてください」

そう言つて赤い騎士に近付くと、突然彼はオスカーに向けて、驚きの声を上げた。

「お、お前っ！！」

「え？」

オスカーが困惑していると、騎士は兜を脱ぎ捨ててオスカーを指差した。赤い騎士は、髪や瞳まで燃えるような赤い色をしていた。

「忘れもしないぞ、その糸目！ 貴様、クリミア騎士団第12小隊にいたオスカーだろ！？」

そうわめく赤い騎士に、確かにオスカーは見覚えがあつた。

「君は、確か・・・ケビン？」

「そうだ！ お前の永遠の好敵手、ケビンだ！！」

彼は、オスカーと同期の騎士、ケビンだったのだ。オスカーはかつてクリミア騎士団にいたことを思い出し、旧友との再会を嬉しく思った。

ちなみに、カイン（FE紋章）やアレン（FE封印）などと同じく、FEシリーズ恒例の「赤い騎士」である。

「やあ、久しぶり。元気そうで何よりだ」

オスカーは、柔らかな表情になってそう言う。ケ빈はそれを聞いて、腰に手を当てて返す。

「相変わらず、気の抜けるような返事だ。3年前に除隊したお前が、なんだってここにいる！？ ハッ、まさか・・・貴様、デイン側に寝返ったんじゃないだろうな！？」

「あ、いや・・・」

一方的に誤解をするケ빈に、オスカーは口をはさむ。だが、そんな余裕与えてくれない。オスカーにつかみかかり、前後に激しくゆすりだす始末だ。

「くーっ、見下げ果てたやつだ！！ オレの永遠の好敵手としての誇りは、どこへやったんだ！！」

ゆすられつつも、オスカーが答える。

「・・・私の所属する傭兵団は今、エリンシア姫に雇われているんだ。それで・・・クリミアの捕虜を解放しているところ・・・」

「エリンシア姫だと！？ 王宮騎士でもないお前が、どうして姫のことを知っている！？」

「いや、だから、姫は私たちの雇い主で・・・」

オスカーが説明しようとはするが、ケ빈は全く話を聞かない。し

かも、やたらと大きな声である。

「ハハン・・・さては貴様、手柄狙いだな！？ オレより先に聖騎士 パラディン になろうって、そういう魂胆なんだろう？」

「私は任務で・・・」

「くそう！ 貴様にだけは絶対負けんからな！！ 姫！ すぐにオレがお側に参ります！！」

そう言いつつオスカーを解放するなり、ケ빈は猛ダッシュで牢獄の外へ飛び出していった。そんな旧友の後ろ姿を見つつ、オスカーは肩をすくめる。

「・・・騒々しさに磨きがかかったようだな。あれがなければ、いい騎士なのに・・・」

「エリンシア姫ええ！！」

そう叫びながら牢屋から飛び出したケ빈は、出てすぐのところでアイクに腕をつかまれた。

「・・・頼むから、もっと静かにしていてくれ。今敵に見つかっては、まずいんだ。ほら・・・」

アイクが目配せした先を見ると、ケ빈の声を聞きつけた看守が牢屋の様子を見に来ていた。牢屋の中にはすでに、フォルカがデコイを置いてあり、カギもかけてあったので平気だったが。

その様子を見て、ケ빈はアイクに素直に謝る。

「これは失礼致した。ここから脱出するまでは、静かにする。こつちも戦うにしろ、武器がないのでは話にならない。敵に背を向けるなどは、オレの騎士道に反するが・・・姫の大事・・・やむを得んだ！」

「ああ、頼むぞ」

その頃残る一つの牢獄の前に、重厚な鎧を着込んだ、スキンヘッドの男がやってきていた。重歩兵よりも更に上位のクラス、ジェネラルの男である。

「ククク・・・」

この男こそが、ここの牢獄の看守長であるダノミルだ。ダノミルの姿を見て、囚われていた女性捕虜は驚く。

「・・・！」

「さて、ネフェニー。時間が来た。出て来い」

牢の鉄格子が開き、ネフェニーと呼ばれた女性捕虜は腕をつかまれて立たされる。

「・・・どうして？ まだ・・・約束の時間じゃない・・・」

ネフェニーは、表情が消えた顔をする。さっきまで瞳にあった希望の光は、消えてしまった。

「細かいことを気にするな。さあ、いい子にしてるんだぞ。たつぷりと、大勢でかわいがってやるからな」

ネフェニーを連れて、ダノミルは看守長室へと向かう。

そんな様子を、物陰に隠れてアイク達は見ていた。オスカーが、怒りに震えた声を出す。

「くそっ……許せない、デインめ……!」

この後、ネフェニーと言う女性がどんな目に遭うかは、容易に予想が付く。一刻も早く助けなければ、彼女が危険だ。

そこで、アイクは方法を考える。

「……セフェラン、チャップ、ケビン。あんたたちは、先从这里から脱出していてくれ。近くの小川のほとりに俺たちの仲間がいるはずだから、彼らに保護してもらっていてくれ。オスカーは、俺と一緒に行動だ。セネリオが言うには、看守長室には力ギはかかっていないらしいから、そこに突撃をする。フォルカ。あんたはその間、宝の回収をしていてくれ」

だが、その作戦に疑問を指摘したのは、オスカーだ。

「アイク、待ってくれ! そんなことしたら、騒ぎを聞きつけて敵

の増援が来るかもしれないぞ」

「ああ、確かにそうなるかもしれない。だから……この作戦はとにかく早く終わらせる。ダノミルを倒し、ネフェニーを救出しよう！」

「分かった。アイクがそう言うなら、私も協力するよ」

見回りをしている看守の目を避け、彼らは何とか看守長室の前までたどり着いた。

看守長室は牢獄からやや離れているため、見回りの看守はやってこない。また、すぐ近くに外に出るための非常階段があるため、脱出も楽である。

「よし、じゃあここで行動を分かれる。あとで落ち合おう」

捕虜だった3人は非常階段へ。フォルカは宝の回収へと向かう。そんな彼らの様子を見て、アイクとオスカーはうなずき合った。

看守長室のドアノブに手をかけると、しっかりと回った。やはり、カギはかけていないようだ。

「よし、このまま突撃するぞ！」

10章 く捕虜解放く 中編（後書き）

今回も、実際とはだいぶ異なる話になってしまいました。

実際は、ここまで話は濃くないんですが・・・もし読んでいて不快に感じてしまった方がいましたら、すみませんでした。

あと、この回は「中編」にしましたので、ご了承ください。

10章 く捕虜解放く 後編（前書き）

カントウス城に無事潜入をしたアイクは、驚くべき事実をデイン兵から聞く。

アイクの父グレイルを手にかけた張本人、漆黒の騎士が、カントウス城にやってきているというのだ。詳しい情報が知りたいアイクではあったが、ひとまずのところはそれは置いておくこととした。

アイク、オスカー、フォルカの3人は、順調に捕虜の解放を進めていた。だが、最後の一人、ネフェニーと言う娘が、看守長のダノミルによって別室に移されてしまったのだ。

アイクはフォルカに室の回収を任せ、オスカーとともに看守長室に突撃を試みるのだった。

10章 捕虜解放 後編

カントウス城：看守長室

「・・・」

ネフェニーは、両手足を固く縄で縛られていた。彼女の目の前には、ダノミルと、3人のデインの剣士が、下卑た視線を送っている。

これから何が始まるのか・・・ネフェニーにはおおかた、予想が付いた。

（ここまで・・・か・・・）

そう、心の中でつぶやいた。

・・・その時だ。

ガチャツ・・・

「!？」

突如ダノミルの背後で、扉が開いたのだ。ダノミルと剣士たち、そしてネフェニーが見た先には、蒼髪少年と緑の鎧の騎士の姿。

アイクとオスカーが、入ってきたのだ。

オスカーが扉を閉めるのを横目で見ながら、アイクが剣を抜いて口を開く（ちなみに、この扉は防音素材でできていると、フォルカが言っていたので、中で大騒ぎになっても音は聞かれないのだ）。

「・・・武器を捨てて降伏しろ。そして、その捕虜をこっちに引き渡せ。それができないなら・・・斬る」

だが、ダノミルは全く動じる気配を見せない。それどころか、かえって嬉しそうな表情となり、歓迎でもするかのように、両手を広げて話しかけてきたのだ。

「よく来た！ 心から歓迎するぞ。さあ、お前たちも俺の捕虜となり、楽しい獄中生活を送るがいい！」

まるで、気が狂つてるとしか思えない発言だ。オスカーは早速、馬上で鋼の槍を構える。

「ならば、ここで終わらせる！」

鋼の槍を構えたオスカーが、ダノミルに向けて馬を走らせる。だが、その目の前に剣士3人が立ちはだかった。

「おっと、まずは俺たちが相手だぜ」

剣士たちは、鋼の剣を構えてオスカーに斬りかかった。だがさすがは元クリミア騎士、無駄のない動きで、剣士たちをあっさりと屈伏させた。

その間アイクは、ダノミルに相對していた。ダノミルがアイクを見る目は、実に嬉々とした色をしていた。

「いいぞ、お前・・・そのふてぶてしい眼光こそ、俺が囚人に望むものだ。その眼が次第に希望の光をなくし、濁って行くさまは・・・いつ見てもいいものだからな」

アイクはダノミルのその発言に、頭にきた。

「・・・ふざけるなっ!!」

怒りのあまり、鉄の剣をしまつてリガルソードを引き抜くアイク。そしてそのまま、ダノミルに向けて突進をする。

「おやおや、ずいぶんと活きのいい捕虜だ。ならば、少しは大人しくさせないとな」

アイクがダノミルを斬りつける瞬間に、ダノミルはかなり大きな剣鋼の大剣で、攻撃を防ぐ。予想以上に素早いその行動は、漆黒の騎士を思わせた。

・・・もつとも、實際漆黒の騎士と比べたら、天と地の差があるだろうが。

「くっ！」

「その余りある元気は、我が収容所での重労働で使ってほしいものだ」

「冗談じゃない！」

アイクとダノミルは、つばぜり合いを行う。だが剣の大きさの差もあってか、アイクが徐々に押されていた。

その時である。

「はあっ！」

ヒュン！

何かが風を切るような音がすると、ダノミルの横腹に槍が刺さったのだ。

「ぐっ・・・」

「アイク、私も手伝う！」

オスカーが、ショートスパを投げてくれたのだ。痛手を受けたダノミルは体制が崩れる。その瞬間、アイクは一気に有利になった。

「でやああっ！！」

いったん離れたアイクは、そこからジャンプし、大上段からリガル

ソードをダノミルに向けて振り下ろす。薄暗い場所でもほのかに輝く刀身は、ダノミルのまとう黒い甲冑をやすやすと斬り裂いた。

「これで、終わりだ！」

崩れ落ちたダノミルに、オスカーは鋼の槍を突き出す。だが・・・

「くっ・・・まだだ・・・お前たちを・・・捕虜に・・・!!」

「!!」

ダノミルは、傍らに立てかけてあつた鋼の槍を取り出す。それでオスカーの槍をはじくと、オスカーを槍で突き飛ばしたのだ。なすすべもなく、馬から落ちてしまう。

「オスカー!!」

「くそ、油断した・・・」

あれほどの重傷をおつていながら、ダノミルは立ち上がる。落馬してしまったオスカーに向けて、槍を構えた。

・・・とその瞬間である。扉がわずかに開いた気がしたと思ったその途端、ダノミルが突き出した槍は、見当違いの方向に突き出されたのだ。彼の目の前に立っていたのは、黒い装束の男。

「な、なに・・・」

愕然とするダノミルの前で、アイクは黒装束の男に声をかけた。

「フォルカ！　ずいぶん早かったな、もう宝の回収は済んだのか？」

「ああ。開けたカギは扉と宝箱、合わせて9つだ。あとで450ゴールド、きっちりいただく」

「ああ、分かっている」

「それと・・・通常の戦闘ならば、サービスしてやる。金は取らんから、安心しろ」

そこまで言ってフォルカは、ダノミルを向く。

「あんたには悪いが、これも“仕事”だ。悪く思わないでくれ」

そして、目にもとまらぬ速さでダノミルに近付き・・・

ザシュ！！

ダノミルの首から、血が吹き出る。こうして、看守長は倒れたのだ。
った。

フォルカに10ゴールドで頼んで、ネフェニーの縄をほどかせる。
やつれた様子の彼女だったが、確かに瞳には希望の光が戻ってきていた。

「その・・・助けていただき・・・ありがとうございます・・・」

そう言うネフェニーに、アイクは答える。

「いや、当然のことをしただけだ。それより、他の捕らえられていた捕虜たちも、俺たちの仲間のところにいるはずだ。敵に気付かれないうちにここから脱出し、仲間のところに行こう」

「はい・・・」

こうして、捕虜解放は無事に終わった。

10章 く捕虜解放く 後編（後書き）

結局、この章は3回に分けて紹介することにしました。

長くなってしまったかもしれませんが、どうかご了承ください。

同志、同じ旗の下で（前書き）

カントウス城の地下牢でダノミルを倒したアイク達は、救出した捕虜たちとともに仲間のところへ駆けつけた。

同志、同じ旗の下で

くカントウス城付近く

「捕虜になっていたクリミア兵を連れてきた」

捕虜たちを連れてきたアイクは、仲間たちにそう伝える。みな口々に、アイクたちの無事を賞賛した。

その時エリンシアは、大急ぎでアイクのところへ駆けつけると、捕虜たちの方を見て心配そうな顔で話しかける。

「・・・あのっ！ きつとご存知ないでしょうが・・・実は、私は・・・」

「エリンシア姫っ！」

クリミア王ラモンの娘エリンシアです、と彼女が言おうとしたのを、大きな声がさえぎる。エリンシアはあっけにとられた。

「え・・・あ、はい」

エリンシアを呼んだ大声の主は、真っ赤な鎧を着た騎士、ケビンであつた。

「自分は、ジョフレ將軍のもと、第5小隊隊長を務めておりました、ケビンと申します！ エリンシア姫をお守りするため、王都より街

道までお供したのは、自分の隊であります！」

ケビンが言った言葉に、エリンシアは驚く。

「・・・そんな・・・！　じゃあ、あなたはあの時の・・・」

「はいっ！　レニング様の命により、我が上官ジョフレ將軍と自分の隊が、エリンシア姫の身をお守りし、ガリア王国へ落ち延びていただく手はずでした！　しかし、我らの力及ばず、姫を見失うという失態を・・・まことに、まことにふがいなく・・・！　こうして、姫君のお姿を目にする機会に恵まれようとは・・・自分は、感動で目の前が・・・くっ！」

ケビンは自分がしてきた境遇を語っているうちにだんだんと鼻声になり、最後には泣き出してしまふ。よほど、エリンシアに再び会えたことがうれしかったのだろう。

（騎士の気持ちか・・・）

アイクには『騎士』というものがどんなものかは、正直よく分かっていなかった。

（このケビンと言う男が言うことが本当だとしたら、俺がエリンシア姫を助けた、あの街道にたくさん転がっていたクリミア兵の死体は、みなこの男の部下と言うことになる。エリンシア姫の命は・・・あの無数の騎士たちの命よりもずっと重い・・・ということか？）

それと同時に、王侯貴族というものもまだ、正直よく分かってはいない。

（エリンシア姫と俺は、異なる人間だということか？　いいや、同じ人間のはずだ・・・ベオクとラグズも、人間であることに変わりはない。じゃあ、王族、貴族とは何なんだ。そんなの、誰が勝手に決めたんだ・・・）

そんなアイクの考えには気付かず、エリンシアは、嗚咽を漏らすケビンに質問する。

「ケビン・・・あの・・・他には・・・？」

「えっ！？」

慌ててケビンは顔を上げ、聞き返す。エリンシアは、言葉が足りなかったと反省しつつ、もう一度聞く。

「あなたの他にも生き残った兵は・・・いますか・・・？」

少し考えてから、ケビンは胸を張って答えた。

「・・・もちろんです！　自分はふがいなくも、虜囚の憂き目を見ましたが・・・ジョフレ將軍、そして配下の何名かはデイン軍の追撃を辛くもかわし、今もクリミアの地のどこかに潜伏しておられるはずです！」

エリンシアはケビンの話を聞き、不安そうだった顔を明るくした。

「ジョフレが・・・生きている・・・？　ああ・・・それを聞けただけでも、心が軽くなる思いです。ありがとうケビン・・・生きて

いてくれて・・・本当にありがとう・・・！」

うれしさで涙するエリンシアに、ケ빈はまた胸を張り、大きな声で答える。

「はっ！ もつたいなきお言葉！ このケ빈、これから先、エリンシア様のお側にてこの命果てるまで、お仕えいたします！！」

その後ケ빈がオスカーのところへ行き、何やら騒いでいるのを見送ってから、アイクとエリンシアの2人は別の捕虜　チャップとネフェエーのところへ行く。

「とりあえず、ケ빈は問題ないとして・・・あなたたちは、どうなんだ？ エリンシア姫がクリミアの王女だと、信じてくれるか？」

アイクが2人に聞くと、茶色い甲冑を着た中年男、チャップがエリンシアの方を向く。

「わしは、チャップ。このネフェエーつつう娘と同郷の田舎兵士です。わしらには、お偉い貴族さんのことはよう分かりません。でも・・・クリミアがこのままなくなってしまうのは困ります。デインの王さんは、恐ろしい人間らしいじゃないですか。田舎に残してきた家族がどうなるやら・・・わしゃあもう、心配で心配で・・・」

ネフェエーも、兜の下から小声でエリンシアに聞く。

「・・・王女様がデイン王に勝てば・・・この国は元通りになります」

すか？」

「努力します。父のようにはいかないでしょうが、クリミアをこのままにはできません……」

ネフェエーの質問は単刀直入極まりなかったが、エリンシアは優しく答えた。それを聞いてチャップとネフェエーは、互いにうなずき合う。

「だったら、なあ、やるこたあ一つじゃ」

「はい」

「わしらも戦います。お姫さんたちと一緒に、デインのやつらをクリミアから追っ払ってやります！」

チャップの力強い一言に、エリンシアは感謝した。

「あ、ありがとうございます！」

「失礼します……」

2人の話がまとまった時、不意にアイクの背後から声が聞こえた。振り返ったところにいたのは、白い法服に錫杖を手にした、黒髪長髪の長身の男 セフェランダ。

「あんたは……」

アイクがそう言葉を発しようとするのとほぼ同時に、チャップとネ

フェニーが口々に呼びかける。

「聖者様・・・！」

「セフェラン様！ ご無事でしたか！！」

そんな2人に、セフェランは優しく笑いかける。

「チャップさん、ネフェニーさん・・・お2人とも、お怪我はありませんか？」

チャップは、申し訳なさそうな表情になる。

「セフェラン様こそ、わしらのために捕まっけてしもうて・・・ほんまに申し訳ない」

「そんなことはよいのです。みなさんが助かったのならば、それで・・・」

「聖者様・・・」

チャップとネフェニーは、セフェランを尊敬の目で見ていた。

アイクはそんな様子を見て、疑念を抱いていた。そして2人がセフェランから離れたのを見計らって、彼に近づく。

「ちょっと、いいか？」

「はい？・・・ああ、あなたは先ほどの・・・おかげで助かりました。心よりお礼申し上げます」

アイクに対して深々と頭を下げるセフェランに、アイクは言葉を続ける。

「礼はいい。それよりも、あんたのことに興味がある。どうして、クリミア兵を助けた？」

「・・・私の素性をお疑いですか？」

そう聞き返すセフェラン。だが、アイクはその通り、セフェランの素性を疑っていた。

「この状況下で・・・デインに楯突いてクリミアに味方する巡礼僧だ。疑うなと言う方が無理だろう？」

アイクがそう言うと、セフェランは少し考え、そして逆に聞いてきた。

「あなたなら、目の前にいる怪我人を放っておくことができますか？」

予想外の質問に、アイクは少し考える。そして、正直に答えた。

「・・・通常なら、できない。だが、この状況下で、命と引き換えにやるとなると・・・悩むところだな」

「ふふ、正直な方だ。だけど・・・本当にその場に居合わせれば、あなたのような方は迷いませんよ。怪我をしている者を見れば反射

的に体が動く・・・そうでしょう？」

そう言われて、アイクは一つ思い出したことがあった。父が漆黒の騎士によって、刺されたあの晩だ。

あの時、目の前には漆黒の騎士がいた。いくら父が重傷を負っていたとしても、その状況で救出に向かったら、今度は自分の命が危ないことくらい、誰でも分かる。

しかしアイクは・・・それでもグレイルのもとに駆け付けずにいられなかった。

セフェランは、人の心の中が読めたりでもするのだろうか・・・？

「・・・あなた、何者だ？ その落ち着いた態度とか・・・やっぱり只者には思えないんだが」

アイクのその言葉に、セフェランは答えない。

「・・・とりあえず、今は失礼します。さようなら、若き剣士殿。きつと、また・・・お会いすることもあるでしょう」

そう言って、セフェランは錫杖を鳴らしつつ、その場から立ち去ってゆく。

「・・・」

セフェランの後ろ姿を、アイクはただ見送っていた。彼は一体、何者なのだろう？

・・・と、その時だ。アイクの背後から、呼ぶ声が聞こえたのは。

「・・・アイク」

気配は、全く分からなかった。いつからそこにいたのか、振り返ると、茶髪をバンダナでまとめた黒装束の男が立っていた。

「フォルカか。何だ？」

「俺は当分、お前たちについて行こうと思う。付かず離れずの距離で動くから、用がある時は声をかけるがいい。代価を払えば助けてやる」

「何ですって!？」

ティアマトが駆け付け、フォルカに『信じられない』といった表情をする。アイクも、フォルカに聞く。

「どういうことだ？」

「お前たちに興味がわいた・・・とでも言っておこうか」

だが、ティアマトはあくまでも慎重論である。

「残念だけど、それじゃ理由にならないわ」

「堅苦しく考えるな。別に団に入れると言う訳じゃない」

「だけど・・・」

「ティアマト」

アイクがティアマトを呼びかけようとした時、今度はセネリオも駆けつけてきた。どうやら話をずっと、離れた場所から聞いていたらしい。

「いい話じゃないですか？　これから先、この男の能力は役に立ちます。胡散臭い男ですが、金で片が付くということはある意味、卸しやすいとも言えます」

「おい、本人の目の前だぞ」

アイクはセネリオの、例によって徹底した現実主義な言動を注意するが、セネリオは静かに返す。

「気にするようには見えません」

「それはそうだが・・・」

ティアマトも、アイクに判断を聞いてくる。

「どうするの、アイク？　あなたが決めて」

アイクは、少し考える。

（ティアマトが言うように、正直フォルカの真意がどこにあるかは分からん。だから、怪しいといえば怪しい。だが、セネリオが言っていたように、うまく使うことができればこの先の戦いが有利になるだろう・・・さて、どうしたものか・・・）

しばらくして、結論を出した。

「分かった、フォルカ。あんたの好きにしろ」

それを聞いてフォルカは、フツと笑う。鋭い眼光が、妙に印象的だ。

「じゃ、何かあったら呼んでくれ。代価に合った“仕事”をしてやるさ」

「あの盗賊と言い、あの聖者様と言い、怪しいことこの上ないな」

また再び、アイクの背後で声がする。アイクが振り返ると、ちょうど水色の猫がピンク色の光を出し、化身を解いて人型に戻るところだった。

「ライ！ 用は済んだのか？」

「バツチリ。で、あの2人だが・・・」

「ああ、どうにも胡散臭いな」

ライも、アイクと同じ考えのようだ。

「ま、聖者様の方は悪者って感じはしないけど」

ライはそう言ったが、アイクはどうにも腑に落ちない。

「相手が敵なのか味方なのか・・・俺には見極める必要があるんだが・・・難しいところだな」

「判断を下すには、まだ材料が少なすぎるさ。ともかく、まずは先に進もうぜ」

「ああ」

カントウス城を後にしたアイク達は、さらに歩を進める。速い速度で進まなければ、デイン兵と遭遇する危険も上がってしまうからだ。行軍途中でアイクは、ふとカントウス城の中で聞いた話を思い出していた。

（漆黒の騎士が・・・あの城の中にいたんだ。親父の仇・・・俺はいつか必ず、お前を倒す。お前を超えて見せる・・・）

漆黒の騎士のことは、ガリア王カイネギス以外の誰にも話していない。アイクは心の中で、漆黒の騎士に対する決意を新たにした。

くカントウス城く

一方その頃カントウス城では、大騒ぎになっていた。

「じ、これは・・・!!」

地下牢の見回りが、変わり果てたダノミルを発見したのが始まりである。なぜか看守長のダノミルの姿を見なかったため、様子を見に来たのだった。

「てっ・・・敵襲だ！ 何者かが侵入し、ダノミル様をつ・・・！」

ちょうどそのころ、2階の講堂では漆黒の騎士の講演会が終わった時であった。

講演会の終了とほぼ同時に、地下牢襲撃の伝令が入ったのだ。みな、大騒ぎとなった。だが。

「皆の者、鎮まるがよい」

漆黒の騎士は、そう言って騒ぐ兵士たちをあつという間に落ち着かせる。

「この私が、様子を見てこよう。誰か案内してくれ」

「あ、でしたらお任せ下さい！」

漆黒の騎士に真つ先に拳手をしたのは、ソバカスが浮いた顔をし、背中に弓と矢立てを背負った、スナイパーの青年。

「ノシトヒか。頼むぞ」

「はい、こちらです」

ノシトヒと言うらしいスナイパーは、漆黒の騎士を連れて地下牢へ案内する。

「こちらです」

看守長室の扉を開けて中に入ると、そこにはダノミルと配下の剣士たちが、無残な姿となっていた。

「・・・なるほど。襲撃者たちは、看守たちの目を盗み、捕虜を解放し、彼らを倒して脱出した・・・と言うことか」

「はい、そのように思われます。また、捕虜たちはデコイとすり替

わっていました」

「ふむ・・・なかなか面白い策を使う・・・」

感心する漆黒の騎士に、ノシトヒは指示を仰ぐ。

「漆黒の騎士殿。未だにこの地下牢を襲撃したものたちはこの付近にいるはずです。今からこの辺りに非常線を張れば、取り押さえられるかもしれません」

漆黒の騎士はそれを聞き、うなづく。

「そうだな。私も、彼らと出会ってみたいものだ。もしかすれば、彼らは・・・」

「え、彼らがどうしましたか？」

漆黒の騎士が言いかけたことを、ノシトヒは聞き返す。だが、漆黒の騎士はそれ以上は言わない。

「いや、何でもない」

（もしかしたら、この城に侵入をした者は・・・）

漆黒の騎士は、ある人物を想像していた。あの夜、傷ついた父親を見て飛び出し、自分に向けて剣を振るってきた、あの蒼髪少年を。

（・・・アイクよ。お前も、父と同じ愚か者か・・・？）

あの夜彼に言ったことと同じことを、漆黒の騎士は心の中でつぶやいた・・・。

同志、同じ旗の下で（後書き）

アイク達は船に乗るべく、港町トハを目指す。

デインの包囲網を突破しつつ・・・。

炎の紋章が蒼く輝くとき、戦いは始まる。

港町トハ（前書き）

カントウス城からの捕虜救出に無事成功したグレイル傭兵団は一路、クリミア最西の港町、トハを目指す。

ガリアから道案内役を買って出たガリアの戦士ライは、国境警備隊隊長ということもあり、クリミアやデインの情勢に詳しかった。そのおかげでアイク達は、デイン軍と遭遇することなく、無事に進軍をすることができた。

カントウス城を立って3日後の朝・・・潮の香りが強くなり、彼らの行く手に、大きな町が見えてきた。

暦は6月。強い日差しと高い気温・・・クリミアにも、本格的な夏が訪れつつあった。

港町トハ

く港町トハく

「着いたぞ。ここがクリミア最西の港町、トハだ」

傭兵団が街門をくぐっている時、先頭に行くライはそう言った。

ライ、レテ、モウデイの3人はこの暑い中、頭からフードをかぶり、コートを着ている。

ラグズの特徴である、耳や尻尾をうまく隠すためだ。

彼ら自身もかなり暑い格好であることは承知だったが、ベオクの、ラグズに対する差別は根強い。ゆえに、仕方がないのだ。

ライの隣を歩くアイクは、何か違和感を感じつつ周囲を見渡す。

市場からは八百屋や魚屋などの威勢のいい声が響き、路地裏では子供たちが楽しそうに、地面に描いた円を跳ぶ。

野良猫がよく焼けた魚をくわえて駆けだすのを、エプロン姿のおばさんがお玉を振り回しつつ追いかける。

ごくごく平和な町が、広がっていた。とてもここが、敗戦国とは思えない。

「・・・どういうことだ？ 普通に賑わっているように見えるが・・・」

「ここらにはまだ、デインの手が届いていないからな。ほとんど影響が出てないんだろう。デインは、まず王宮を陥落させ、王都を掌握し、そこから着々と侵略の輪を広げている・・・ゆっくり、確実に」

やはり、ライは各国の情勢についてはかなり詳しいようだ。アイクはそんなライの説明に納得する。

「そうか、ここの住民も・・・全く知らないわけでもないのか」

すると2人の話を聞いていたのか、セネリオも一番前までやってきて話に入ってきた。

「無知であるがゆえの余裕・・・ですね。ここの住民たちは、敗戦国の民がどんな扱いを受けるものなのかを知らない」

セネリオは、目をつぶる。どこか、いつにもまして冷たい表情をしつつ、話を続ける。

「・・・クリミアは、平和で恵まれた国です。王家の気質が穏やかなせいか、領地間の争いも少なく、大がかりな 国全土を巻き

込むような 戦はもう何百年も起きていません。デイン王国との確執による戦いは幾度となくありましたが・・・被害を受けるのはいつも、デインと接している地域・・・つまり、王都より東側ばかりでしたから」

だがアイクは、それだけの理由では納得できず、セネリオに反論する。

「と言って、ただじゃ済まないことくらいは俺でも想像つくぞ？ 偵察の時、出会ったデインのやつら・・・俺たちがクリミア側つてだけで、即、襲ってきたぐらいなんだし」

その反論にも、セネリオは淡々と答える。心底呆れたような声で。

「人間は図太いものです。自分に身近な不幸以外にはとても鈍感にできている・・・だから、自分には関わりのない悪事には見て見ぬふりをするということが出来る。自分や、自分の家族に起こる不幸でなくてよかった、と胸をなでおろしてね。だって、所詮は他人事なんですから」

「だが、この国で起きた戦だ。他人じゃなく自分のことだろう？」

アイクは、そうセネリオに言う。セネリオは、街並みを無表情で見渡し、つぶやいた。

「・・・デイン軍がここにたどり着いた時・・・彼らは思い知るようになるでしょう。平和に慣らされ、他の不幸を省みなかった自分たちの末路がどんなものかをね。同情の余地はありません」

「・・・」

セネリオが再び隊列の後ろへ戻って行ったのを見て、ライがアイクに話しかけてきた。

「なんとまあ、真実だからこそ言いづらいことをずけずけと・・・この傭兵団は、ずいぶんおもしろい参謀をお抱えだ」

アイクは、そんなライの声を聞きつつ、セネリオの背中を見送る。

「・・・わりと何に対しても手厳しいところはあるんだが・・・いつもとは、様子が違ったな」

その隣で、ティアマトも仕方なさそうな表情になる。

「仕方がないでしょ？ この町には、私も少し呆れたわ。もう少し緊張感を持ってないのかしら・・・セネリオは敏感な子だからこういう雰囲気、耐えられないんじゃない？」

アイクとティアマトの後ろで、ライは独り言を話したず。

「知ったところでどうしようもならないから、知らぬふりをする・・・ってこともある。ま、生まれに恵まれなかった者からすれば、恵まれた者がそのことに気付くことに生きていくことこそが妬ましい、か・・・」

「ライ、どう言う意味だ？」

「独り言だ、忘れてくれ」

「？ あ、ああ・・・」

ライの意味深な独り言は、何なのだろうか？ アイクは少し疑問に思った。

まるで空気を変えるように、ライは明るい声で話した。

「さて、オレは船の手配を済ませてくる。アイク達はその間に、支度を整えていてくれ。これからの旅に備えて、いろいろと入用だからな」

そう言って、ライはさっさと駆けだして行ってしまった。

ティアマトは、ベオクの町でラグズがたった一人で行動するのを心配していた。

ガリアとクリミアは確かに同盟を結んでいるがそれは上層部だけで、民衆にはほとんど浸透していない。それを考えての心配であった。クリミアでも「半獣」という言葉もまかり通っている。

だがライが言うには、クリミア国王がラモン（エリンシアの父）の代になってから、以前よりもだいがマシになったらしい。

以前はいきなり襲われることも多かったらしいが、最近ではめったにないとのことだ。

そもそもライ自身、安請け合いをしたわけではないらしい。ツテがあつてのことだ。

残った傭兵団は、町の中央の広場で時間までに集合とし、それまでは各自、自由行動にすることにした。

港町トハ（後書き）

どうも、執筆を再開いたしました。

また、よろしくお願いします。

11章 く流れる血の色はく 前編（前書き）

港町トハにたどり着いたアイク達は、ライが船の手配を済ませるまで、自由行動をとることにした。

戦争に負けたというのに、この町ではまるで何事もなかったかのような、安穏とした空気が漂う。

アイクは、ただ呆れるしかなかった。

11章 く流れる血の色はく 前編

く港町トハく

アイクは、一人で行動をしていた。自分の装備や持ち物を買いきろえるのももちろんだが、グレイル傭兵団の団長として、各地の情勢や海上での気候といった情報も、集める必要があると考えていたからだ。

ここに来るまで世話になったライとは、この町で別れることになる。

「よう、その旅人さん！ 何か買い忘れないかい？ おれの店なら、どんなものでも他よりもずっと安く買えるよ。ちよいと覗いていっちゃあ？」

通りを一人で歩いていると、露天商の青年が手招きをしつつ、呼びかけてきた。アイクは、その青年に近付く。

「ちょっと尋ねたいんだが？」

「はいはい、何だい？」

アイクは周囲を顎でさしつつ、尋ねる。

「この町の人間は、デインのことをどう思っているんだ？ 奴らに支配される前に、クリミアから逃げ出そうとは思わないのか？」

すると、青年は首をすくめた。

「・・・逃げる？ めっそうもない！」

「だが、クリミアは戦争に負けたんだぞ？」

「ああ、知ってるさ。だけどおれたち平民には、あんまり関係ないと思うけどなあ。だってそうだろ？ 誰が上にいたって、どうせ、おれたちには顔もよく知らない雲の上のお人なんだし。極端に税の額が変わるってなら、悲鳴を上げるけど・・・デイン王って言うても、同じ人間だろ？ おれたちが働いているから贅沢ができるんだ。だったら、おれたちをそう粗末に扱うこともしないだろう。今と変わらない生活をさせてくれるなら、おれは、そこまで気にしないけどなあ」

青年は、のんびりした表情でそう話す。だが、アイクは違った。

（・・・こいつ、どうしてそこまで落ちつけるんだ？ デインがそんな、甘いことするとでも思っているのか？ あいつらは、敗戦国の人間にはどんなことをしてもいい、そう考えているんだぞ・・・しかも、大勢のクリミア兵や傭兵がクリミアのために戦っている一方で、どうしてそんなことを言っていられるんだ・・・）

アイクの目は、明らかに怒っていた。だが露天商の青年は気付かず、今度はのんびりした表情を、まるで小バカにしたような表情に変える。

「・・・あ、でも、ガリアが攻めてきたってんなら話は別だぜ。あの野蛮な半獣どもに国を乗っ取られたら・・・おお、怖っ！ 考えたくないね」

そう言つて、青年は笑い声を上げる。どう見ても、ラグズをバカにしている笑い方だった。

「・・・」（こいつ・・・!!）

アイクは、青年に怒りを募らせる。無意識に、こぶしに力が入った。しかし、すんでのところで目の前の青年を殴ろうとする自分を抑えた。そして踵を返して、笑う青年を無視し、さっさと通りの雑踏へ歩き出した。

「・・・え、あ、ちよつと！ だんな！ なんだよ、冷やかしならおとといきやがれてんだー!!」

露天商のそんな叫びを背中で受け流して、アイクは歩き続ける。

気が付くとアイクは、港までたどり着いていた。まぶしい日差しがみなもを反射し、水平線の上には入道雲が立ち上る。町中の暑い空気とは対称に、潮風が心地よい。

さっきアイクは頭に血が昇って、うっかりあの露天商の青年を殴っ

てしまうところだった。

傭兵団の団長として、もしそんな問題を起こしてしまっていたら・
・アイクはそう思うと、危ないところだった、と反省する。

（少し、ここで頭を冷やすか・・・）

そう思い、港湾の岸壁に腰を下ろし、すぐ後ろに建っている灯台の壁に、背中を預けた。

そんな時だった。アイクは、向こうの岸壁にいる人影に気付いた。
茶色い甲冑を着た人物・・・チャップだ。

「・・・」

チャップは、一人でいた。手のひらに何かを乗せ、じっと見ている。

「何を見ているんだ？」

アイクはチャップに近付き、そう話しかける。するとチャップは、
いつの間にか後ろにアイクが来ていたことに驚く。

丸い顔の、人のよさそうな中年だ。彼は手のひらに乗せた古びた巾
着袋を見せ、静かに話した。

「いやあ・・・これはね、わしが家を出る時・・・家族が持たせて
くれた、お守りですわ。うちは貧乏なんで、使い古した小袋にそれ
ぞれが拾った小石が詰まってる・・・それだけのシロモノなんです
がね。わしにとっては・・・大事なものでねえ。毎日、こうやって

何回も、取り出しては話しかけるとるんですわ。『みんな元気かい？父ちゃんは、がんばってるぞ。絶対、帰るからな』って。・・・情けない話なんですがね、こうでもせんと、わしゃあ・・・戦うことが恐ろしくて・・・」

そこまで言つて、チャップは巾着袋をしまつ。彼が言つとおり、どこか震えているように見えた。

チャップとネフェニーは、クリミアの片田舎出身の民兵だという。国に徴兵されたのか、自ら志願したのかは分からないが、どちらにせよ、大勢の村人に見送られて、軍に参加したのだらう。

軍に入つた以上は、もう命の保証はない。いつ死ぬか分からないような日々を生きるのは、恐ろしくて当然だ。

ましてや彼らは、戦いの経験もなければ、訓練もろくに積んでいないに違いない。アイクのように、生まれながらの戦士として、厳しい訓練に耐え抜いてきたような人間とは、全く条件が違うのだ。

「・・・無理せんでも、笑ってくれて構わんよ。いい年して、情けない親父じゃってね」

無表情で話を聞いていたアイクに、チャップは作り笑いでそう言ってきた。だが、アイクはそれを否定する。

「情けなくなんかない。あんたは、家族のために戦おうとしている強い人間だ。あんたの家族は・・・きつと、あんたを誇りに思っている」

そう言いつつ、アイクはチャップにある人物の面影を重ねる。

『命令は一つだけだ、誰も死ぬな！！ 血の繋がりがあるとかないとか、そんなことはどうでもいい。俺たちは、一つの家族だと思え。家族を悲しませなければ、生き伸びろ！！』

そう、グレイルもまた、家族のために戦った。結果的には家族を悲しませることとなったが、アイクはそんな父を誇りに思っていた。

「・・・ズツ、ズズツ・・・、うん・・・ありがとう・・・ありがとう・・・よお・・・」

チャップもまた、家に残してきた家族のことを思う。大家族だった。

畑仕事を終え、自宅に帰ると、たくさんの子供たちが出迎えてくれていたのだ。「父ちゃん、おかえり！」そんな声を、また聞きたい。聞かなければならない。

目の前の少年の言葉は、チャップに確かな勇気を与えたのだった。

港でチャップと別れたアイクは、今度は情報を集めるべく、町の酒場に赴く。

酒場には、大勢の船乗りやらゴロツキやらが、昼間から酒を飲んで呑ちゃん騒ぎを起こしていた。客から情報を聞き出すのはひとまずあきらめ、カウンターに向かう。

先客がいた。カウンターに座ってマスターと話をしているのは、黒装束をまとう茶髪の男。

アイクは、フォルカの名を呼んだ。

「フォルカ」

「アイクか。済まんが今は取り込み中だ。後にしろ」

フォルカはこちらを全く向かず、そう言う。

「分かった」

仕方なくアイクは、待つことにした。

酒場のマスターがフォルカの目の前に、真っ赤な液体の入ったグラスを差し出す。

アイクは酒のことは詳しくなかったが、あの赤い酒は、この酒場の看板に描かれていたものと同じだった。おそらく、この店で一番高いものなのだろう。

赤い酒を一口飲んでから、フォルカが口を開く。

「依頼の報酬金の残り半額を受け取りに来た。3万だ」

右手を差し出し、そう言う。

「なるほど、さすがは“火消し”・・・では、残額を支払おう」

マスターも、すでに金を用意していたらしい。カウンターの下から、皮袋を取り出してフォルカに渡す。ジャラリと音がした。

フォルカは、その皮袋を持ち上げて、重さを確認する。どうやら彼は、重さを見るだけで袋にいくら金が入っているかが、すぐに分かるらしい。

「・・・確かに、受け取った。また、俺の力が必要になったら呼ぶがいい。きつちりと“仕事”させてもらう」

そう言って酒を飲みほし、料金を払って、フォルカはカウンターを後にした。

「アイク、待たせたな。何の用だ？」

アイクに向き直り、そう聞いてくる。

「いや、別に大したことじゃないんだが・・・あんたは、やっぱり俺たちと同じ船にものるのか？」

「当然だ。一緒に行動させてもらおうと言っただろう？」

「やはりそうか・・・なら、あんたも集合時間にはちゃんと、広場に来い。遅れたら置いて行くからな」

フォルカはそれを聞いて、フツと笑う。

「たとえ置いていかれようが、問題はない。気にするな」

そして、そのまま酒場を去ってゆくフォルカ。酒場にたむろしていた客たちは、なぜかフォルカを避けて道を作る。そこを悠々と歩いて行き、彼は出ていった。

酒場のマスターからも、あまり有益な情報は出なかった。仕方なく、酒場を出ようとしたアイクは、突然腕をむんずとつかまれた。

振り返ると、たらこ唇の大男が、アイクをつかんでいた。

「おう、兄さん。この町じゃ見ない顔だな。旅の傭兵か？」

見かけによらず、気さくな感じの男だ。アイクはとりあえずつかまれた腕を振りほどき、答える。

「まあ、そんなところだ」

たらこ唇の男は、アイクの腰に佩いた2本の剣
鋼の剣とリガ
ルソードを見て、聞いてきた。

「剣を帯びて・・・なかなか強そうじゃねえか。もし次の仕事にあ
てがないなら、自警団に入らねえか？」

「自警団？」

たらこ唇は、疑問顔のアイクに得意そうな表情になって答えた。

「町のために悪漢をぶちのめす集団だ。腕に自信がある奴なら、大
歓迎だぜ？」

どうやら、この男はこの町の自警団の団長らしい。アイクは少し考
え、首を横に振る。

「・・・悪いな、先約がある」

「そうか、残念だぜ。船にでも乗る気かい？」

「まあな」

「だったら、これをやるぜ」

たらこ唇の自警団長は、一振りの剣を取り出し、アイクに見せる。

「何だ、これは？」

美しい鞘もさることながら、すらりと抜かれた刀身は、まるでさざ波のように波打っている。かなり刀身は長めで、重量もそこそこありそうだ。

柄と刀身の境目には、碧色の玉がはめられてあった。

「とっておきの剣だ。海に出るなら、絶対役立つはずだ」

「いいのか？」

自警団長は、快くうなずいた。

「ああ。・・・その代わりと言っちゃあなんだが、もし、用が終わってこの町に帰ることがあったらその時は・・・自警団のこともう一度、考えてみてくれ」

「・・・分かった。ありがたくもらっておく」

とりあえず、酒場を出て時計台の方を向く。すると、もうすぐ集合の時間だった。

アイクは最後に、装備などの確認を済ませ、集合場所の広場へ急いだ。

11章 く流れる血の色はく 前編（後書き）

話続きですみませんね（汗）

今回は、ちゃんと戦いますので。

あと、みなさんお待ちかねのしっこくハウス、もう間もなく開演です〜！

11章 く流れる血の色はく 中編（前書き）

港町トハでの住民感情は、アイクの予想を遥かに超えたものだった。彼らは、愛国心などほとんどなきに等しいだけでなく、かなりラグズに対する差別も強いのだ。

町の中での準備を終えたアイクは、集合予定の広場に到着する。

今回は、かなりアイクが原作以上にひどいことをしてしまいます。ご了承ください。

11章 く流れる血の色はく 中編

く港町トハく

アイクは、集合場所に定めた広場にたどり着き、周囲を見渡してみる。だが、まだほとんど誰も集まっていなかった。いや、正確に言うと、エリンシアしかいなかった。ぼんやりと、通りの方を見ている。

「エリンシア姫」

アイクは、エリンシアに歩み寄る。例によって姫は、とても驚いた様子で振り返った。

「あ、アイク様・・・どうかなさいましたか？」

「いや、ちょっとしたことなんだが・・・何を見てたんだ？」

すると彼女は再び通りの方に顔を向ける。しばらくして、声が聞こえた。

「・・・町を、見ていました。私は、自分が暮らしていた離宮とその近くの場所しか知りません。こうして人々が暮らしている様子を見るのは初めてで・・・何もかも、目新しくて。これが・・・町、なんですね？ 活気があって、みんな楽しそうで・・・」

無数の人間で、商店街はごった返していた。

アイク自身、町と言うものはあまり慣れてはいない。だが、エリン

シアはそれ以上に全く知らないのだ。

隠されてきた、王女。世間から隔絶された存在。全く、外の世界を知らなかった彼女にとって、今はどのような思いを抱いているのだろう。

デインによる突然のクリミア侵攻。そして、彼女の目の前でアシユナードの手にかかった両親。戦場で散った彼女の叔父、王弟レニング。デインの追撃によって壊滅した、ケビンが率いていたクリミア第五小隊。

・・・そして、謎の存在によって殺害された、アイクの父グレイル。彼女の周りで、たくさんの悲劇が起こった。おそらく、普通の人間とは比べ物にならないほどの悲劇。しかも、彼女が生きてきた17年間の間は、外の世界を全く知らなかったのだ。

晴天の霹靂などという、生易しい話ではない。
デインの王都奇襲のその日、彼女の人生全てが変わってしまったのだ。

「まるで、何も起きなかったみたいですね。すぐ近くで、大勢の人間が死んだなんて・・・嘘のよう・・・」

エリンシアは、商店街の方を向きつつそうつぶやく。

「ああ・・・」

アイクは、どう答えればいいのか分からなかった。

その時だった。町の時計台から、午前10時を表す鐘の音が響いたのは。集合予定の時間だった。

だが、周囲を見渡してもまだ、団員は集まっていなかった。

「そろそろ時間だが・・・みんな、まだかかりそうだな」

「アイク様は、もうよろしいのですか？」

エリンシアは、そう聞いてきた。おそらく、エリンシア自身も用意はもういいのだろうか。

「俺は、剣があればそれでいい」

自信あり気というか、至極当然にというか・・・アイクは、それだけ答える。右手で、リガルソードの柄を軽く触ってみた。

「剣だけ、ですか？」

「ああ。あとは・・・このマントがあればどこでも眠れるし、食うものも・・・まあ、何とかなるだろう」

それを聞くと、エリンシアはクスクスと笑いだす。どこかその目は、うらやましそうな色を宿しながら。

「フフ、それは素敵ですね」

「そうか？」

「はい、とっても」

アイクはマントを正しつつ、肩をすくめた。

「・・・王女様ってのは、よく分からんな」

ところで、この町の診療所でアイクは、負傷していた左腕を診てもらっていた。すると、もう完全に完治だ、と言われたのだった。

長い間彼を不自由にさせていた左腕が、ようやく治ったのだ。

医師の見立てでは、「全く動かない状態から、ここまで早く治るの言うことはめったにない」とのことだった。常日頃から過酷な状況で、鍛えられた人間だからこそその治癒力なのではないか、とも。

何はともあれ、彼はこれでまた、全力で戦うことができるようになったのだ。

その時である。突然、周囲の空気が変わったのだ。辺りの人々が、騒ぎ出す。

「何だ？ 急に騒がしく・・・」

周囲を見渡すアイク。そんな彼に、エリンシアはある一店の方角を

指差し、注意を向けさせた。

「アイク様！ 町の入り口の方に人が集まって・・・」

そちらの方を向いたアイクは、驚きの声を上げる。

「あれは・・・！」

港町トハの南西にある街門。そこに、大勢の人だかりができていた。人だかりの向こう側に見えるは、黒い鎧の兵隊たち。

デイン王国軍の魔手が、この町にも届いたのだ。

兵隊たちの先頭にいるアクスナイトのデイン兵が、手にした斧を振り上げつつ、トハの住民に呼び掛ける。

「聞け！ この町にクリミア軍の残党が紛れ込んだとの報告があった！ これより、町全体をデイン軍が封鎖する！ 何者も、我が軍の許可なしに町を出入りすることを禁ずる！ よいか！ 船を出航させることもまかりならん！！」

広場の片隅でその声を聞いていたアイク達のもとに、ティアマトが駆け付けた。

「・・・アイク。デイン軍が・・・」

「・・・分かっている。このまま、やつらに見つからないように船に近付くしかないだろうな」

「ライは？」

ティアマトがアイクに聞くと、アイクは周囲を見渡してライを探す。

「まだ・・・いや、来たようだ。ライ、こっちだ！」

港の方から走ってくる、フードとコートを身に付けたライを見つけ、アイクは手を振った。

すぐに、アイクのもとにやってくる。町の入口の方を顎で指示しつつ、ライは困り顔を浮かべた。

「ヤバいことになったな・・・」

「首尾は？」

「全て完了だ。とにかく、ここをうまく抜け出して港へ向かうんだ。そこに、ナーシルっていう浅黒い肌の男が船を用意して待っている。ナーシルは、信用できる男だ。お前たちのこともだいたい話しているし・・・船に無事、たどり着きさえすれば、黙っててもベグニオンまで連れてってくれる手はずだ」

どうやら、ライは無事に船の手配を済ませたらしい。アイクは、ライにもう一つ聞きたいことがあった。

「分かった。・・・なあライ、お前はやっぱり、ガリアに帰るのか？ できたら、俺たちと一緒に来てもらえるとうれしいんだが」

「そうしたいのは山々なんだけどな、デインの動向が気になる。オレはガリアの国境警備隊長だ。戻って、王に報告を・・・」

ライが、そこまで言った時だった。

たまたま走ってきたらしい女性が、ライにぶつかってしまったのだ。

ドシンン！！

「きゃあっ！？」

ライにぶつかった女性は倒れてしまったが、すぐに立ち上がって頭を下げる。

「ご、ごめんなさい！ あたし、ちょっとよそ見してて・・・」

ライもぶつかった女性の方を向く。

「いや、こつちこそ・・・」

だが、ライがそう言いかけた時だった。頭を上げた女性は、顔を恐怖に歪めて固まっていた。信じられないものを見ているような目で、ライを見る。

そして、叫んだ。

「ひっ！？ きゃーーーーっ！！？ は、半獣っ！！」

「・・・！」

どうやら、先ほどぶつかった衝撃で、ライがかぶっていたフードが取れてしまったらしい。彼の、水色の髪を生やした頭には、はつきりと猫耳があつた。

女性の悲鳴を聞きつけたのか、野次馬がライの周囲に集まる。

「ほ、本当だ！」

「半獣だ！」

「なんだって、こんなところをうるついてやがるんだ！！」

野次馬たちは、ライをまるで汚いものを見るかのような目で、そう罵る。対するライは、無表情のままコートを脱ぎ捨て、野次馬たちを見やる。

コートで隠れていた水色の尻尾が、自然と逆立った。だが、彼は何も動かない。

すると突然野次馬の一人が、ライに殴りかかったのだ。しかしライ

は、それをよけようとしなかった。

ライの顔面に赤く、こぶしの跡がつく。

それを契機に、一斉に野次馬たちがライに石を投げ始めた。

「くそつ、半獣ごときが、人間様の町に足を踏み入れるんじゃないやねえよ！」

そう叫びつつ、ライめがけて石を投げつける者がいた。アイクはその人物に、見覚えがあった。
あの、デインに対して楽観的で、ガリアを毛嫌いしていた、露天商の青年だった。

そのうち、ライめがけて飛ぶものは石だけではなくなった。

「ああ、汚らわしいねえ！ あつちにお行きつてば！！！」

そう喚くおばさんは、確かさつき焼き魚を盗んだ猫を追いかけていた人物だ。先ほどの平和そうな様子はどこへやら、彼女は手に文化包丁を持ち、顔を憎々しく歪めていた。明らかに、殺気を放っている。

そして、その手にした文化包丁を、ライめがけて投げつけたのだ。

包丁は、ライの左足に刺さった。

「くつ……」

思わず、ライは倒れ込む。刺さった包丁を引き抜く。

そんな彼に対し、集まっていた人々は一斉に、よってたかってライをリンチにかかった。倒れたライを蹴飛ばし、踏みつける。

「……くそっ!!」

気がつくと、アイクは剣を抜いていた。そして、思わずライの方へ駆けだした。

しかし、彼の目の前に大柄の、コート姿の男が立ちふさがる。モウデイだった。

「モウデイ!?!」

「アイク! 戻ってはいけない……!」

そう言つて、アイクの前に仁王立ちになる。

「!?! ライを助けないと……」

「……コの騒ぎだ。すぐにデイン兵が集まる」

「だからこそ、早く……」

すると今度は、背後から左腕をつかまれた。振り返った先には、小

柄なコート姿の人物。レテであった。

レテとモウディは、諭すようにアイクに話しかける。

「あいつならうまくやる！・・・放っておけ」

「ライは強い。モウディたちより、ズつと。だから・・・」

だが、アイクは彼らの言うことに従わない。

「ライのやつ・・・化身しないってことは、戦う意思がないってことだろ！？　一方的にやられるのを、見てられるか！！」

そして、レテの腕を強引に振りほどき、モウディの横をすり抜け、駆けだして行ってしまった。

「あ、アイク！！」

モウディがそう呼びかけたが、彼は立ち止まらない。そんなアイクの後ろ姿を見て、レテはため息をついた。

「・・・バカめ・・・」

リンチは、まだ続いていた。野次馬たちが、未だに暴力行為を行っているようだ。

アイクは、そんな野次馬のところに突っ込んでいった。右手には、

鋼の剣が握られている。

頭に血が昇っていたアイクは、野次馬の一人を何のためらいもなく、剣で叩き斬る。続いて、ライを取り囲む他の人を、次々剣で殺していった。

アイクは、自分がしていることを止められなかったし、止めようとも思わなかった。それほどまでに、頭に来ていたのだ。

「どけっ！！」

強引に、アイクは残りの野次馬を押しつけ、ライのもとに駆け寄る。

「きゃあっ！？ 人殺しっ！！」

アイクに気が付いた住民たちは、大急ぎでその場から離れていった。

彼はライを守るような位置で両手を広げる。右手に持った鋼の剣には、まだ鮮血がしたたっていた。ライの周囲には4つほど、野次馬の死体が転がっている。

アイクは、完全にキレていた。港町トハの住民が、デイン以上に許せなかった。

「こいつに手出しする奴は、俺が斬る！！」

「な、何だお前？ 人間のくせに半獣を助けようつてのか？」

恐る恐ると言った様子で、露天商の青年がアイクに尋ねる。するとその横で先ほどライにぶつかった女性が、アイクを指差して叫んだ。「あたし、知ってる……こいつも半獣の仲間よ！ さっき話してるの見たわ！」

頭に血が昇っているアイクは、怒鳴り返す。

「それがどうした！！ ラグズとベオク、何が違っってんだ！！」

それを聞いて、露天商は何か思いついたかのように、声を上げた。

「おい、クリミアの王族って、ガリアの半獣とつるんでたよな？ もしかして、こいつらが……デインの探してる、軍の残党ってやつじゃないのか！？」

その意見に納得したらしく、近くにいたおじさんが、町の入口の方へ向け、両手を口に当てて叫んだ。

「おーいっ！ デインの兵隊さんよお！！ こっちに、怪しい奴らが紛れ込んでいるぞーっ！！」

その声は、街門まで聞こえたらしい。先頭のアクスナイトのデイン兵が、指示を出す。

「……む？ あっちだ。急げ！」

周囲の野次馬に加え、デイン兵までもがアイク達を取り囲んだ。

信じられないといった表情で、アイクは住民たちに聞く。その声は、震えているようだ。

「お前たち・・・正気か？ この国の王は、デインに殺されたんだぞ？ そのデインに・・・お前たちは協力するのか・・・？」

「そ、それは・・・」

ここに来て初めて、先ほどデイン兵を呼んだおじさんが返答に詰まる。だが、露天商の青年と包丁を投げつけたおばさんは、こぶしを突き上げつつ声を張り上げた。

「王は、ガリアの半獣どもと同盟を結んだりするから、死ぬことになったんだ！」

「そうだよ！ どうせ手を組むなら、半獣よりデインの方が、はるかにマシだね！」

「そーだ、そーだ！ 少なくとも、同じ人間だからなあ！！」

その返事を聞き、アイクは再び怒りが頂点に向かいつつあるのを感じた。

「・・・いつらっ！！」

一方騒ぎを聞きつけ、町の酒場から剣士たちが4人ほど出てくる。
先頭の男は、たらこ唇の大男。

アイクに自警団への勧誘をしたり、剣をくれたりした、あの自警団長だ。

「半獣がいると言うのは、どこだ！」

手近な位置にいた老人にそう聞くと、老人は嬉しそうな声を上げた。

「来たか！ 頼もしきトハ自警団よ！！ 半獣とその助けをする悪党どもを捕らえてデイン軍に差し出し、この町の恭順の意を示すのじゃ！」

たらこ唇の自警団長は、目を輝かせる。

「おお！ 半獣狩りなら我らに任せておけ！！ よし野郎ども、準備はいいか！」

だが、団長の出撃に対して待ったをかける者がいた。

「ちょっと待ってくれ。敵の戦力も分からない状況じゃ、やみくもに戦ったところで無駄死にするだけじゃないのか？」

団長に進言したのは、長い銀髪で長身の男。灰色と紫の間の色の服装をしている。肌の色は透き通るほどに白く、碧色の美しい瞳を持った切れ長の目は、鋭い眼光を携えていた。

「ああ？ ……まあ、確かにそうだな。けど、それじゃ俺たちの

獲物がなくなっちまわねえか？」

「いや、“半獣”が出たつてのは本当だろう？　だったら、近くに来てから叩くだけで十分なはずだ。攻め入る役目はデインの兵隊に任せるべき、と言っているのだが」

「そうだな・・・よし野郎ども！　新入りが言うとおり、俺たちはここですばらく待機だ。向こうからやってきたら、派手にぶちのめすぜ！！」

「アイク」

その頃ライは目覚め、自分をかばう蒼髪の剣士を呼び掛けていた。

「ライ、無事か！？」

アイクは包帯を取り出し、ライの怪我した左脚に巻きつける。そんな彼に対し、ライはため息をつく。

「はぁ・・・どうして戻ってくるかなあ、お前は・・・」

「化身もしないで、無抵抗なままやられるバカがいたからだ」

「・・・仕方ないだろ。ガリアはクリミアと同盟を結んだ。何があるうとも、手出しするわけにはいかないんだ」

「愛国心の欠片もなさそうなやつでもか？」

「それでも、ここに住んでる限りはクリミア人ってことさ」

アイクはそれを聞くと、自分たちを囲む住民たちを睨みつける。

「ガリア国民じゃない俺は、あいつらに手加減する気はさらさらない」

ライは、再び盛大にため息をついた。

「・・・まあ、すでにお前は何人かやつちまったみたいだしな。けどな、頼むから分かってくれよ。オレたちは、ひとつつるみだって思われてるって」

「・・・つまり、俺たちは・・・デインの追撃をかわし、この町の住民や自警団には手を出さず、全速力で港まで行つて、ナーシルつて男に会つて、みんなで船に乗れ・・・ってことか？」

「そう！　よくできました！」

だが、アイクの答えには続きがあつた。

「努力は、する。だが、向こうから仕掛けてきたら問答無用で叩っ斬るからな」

「・・・っておい！　それじゃあ、あんまり意味ないって！」

そこへ、ティアマトが駆けつけてきた。後ろには、団員全員がしっかりとついてきている。ただ、フォルカの姿が見えないのが気がかりではあつたが。

「アイク！ みんなを集めてきたわ」

「助かる。ティアマト、エリンシア姫と行商団、それにあと何人かを連れて、先に港の方へ迂回していてくれ。敵は、俺たちが引き連れる。頼むぞ」

「ええ、分かったわ！」

ティアマトは、行商団とエリンシア以外に、マーシャ、キルロイ、ボーレの3人とともに、町の裏路地の方へ消えていった。

続いて、セネリオもアイクのもとに話しかけてきた。偵察に行っていたらしい。

「アイク。どうやらこの騒ぎに乗じて、盗賊が町に入り込んだ模様です。僕としてもこの町の住民のことは好きになれませんが・・・このまま放置しておく、と、盗賊によって町の建物が破壊される恐れがあります」

「そうか・・・どうするべきか・・・」

すると、先日カントウス城から救出された赤い鎧の騎士ケビンが、声を上げた。

「アイク殿！！ 我がクリミアの自国の民が、盗賊に襲われると言うことは我々クリミア騎士には耐えがたいことなのだ！ どうか、民家の防衛はオレとこのオスカーに任せてほしい！」

オスカーも、賛同しているようだ。

「私も、正直ここの住民の態度は許せないが、だからと言って盗賊を見過ごせはしない。民家のことは私たちに任せてくれないだろうか？」

アイクは少し考えたが、認めることにする。

「・・・分かった。盗賊の討伐、あんたたちに任せるぞ」

セネリオの報告には、続きもあった。

「それから・・・どうやら、この町の自警団もデイン軍に協力する意向のようです」

「自警団？」

アイクは、先ほど剣をくれた男を思い出した。

（結構、いいやつに思えたんだが・・・）

腰に佩いた3本目の剣、先ほどもらった長い刀身の剣を触りながら、そう思った。

「ええ。ですが彼らは、自分からこちらにやっては来ないと思われます。小さな路地裏に陣取っている上、そのような話を先ほど聞きましたので」

「そうか・・・じゃあ、そいつらは無視する方向でいいな」

アイクは、団員を見渡して声を張り上げた。

「全員、港へ向かえ！ この町の自警団には、できるだけ手出しするな！ 行くぞ！！」

11章 く流れる血の色はく 中編（後書き）

デイン軍の包囲する町を抜け、船を目指すアイク。

無事に彼らは、町から抜け出すことができるのだろうか・・・。

11章 く流れる血の色はく 後編（前書き）

港町トハの住民によるライへの暴力は、アイクにとって許せないことだった。

あろうことか、デイン兵の味方さえしだす住民たち。そんな彼らに怒りを募らせるアイクを、ライは何とかなだめる。

「港に走って、船に乗れ！」

そんな叫びを聞き、アイク達は港を目指してデイン兵との戦いを始める。

11章 流れる血の色は 後編

く港町トハく

デイン軍によって制圧されたトハの港。その灯台のもとに、この部隊の指揮官と思わしき人物がいた。

彼の名はマツコヤー。緑の髪を芸術的な髪形にした、初老のパラデインである。左利きなのか、左手に持った剣を頭上に掲げ、馬上から指示を飛ばす。

「歩兵部隊は敵を包囲せよ！そこを、騎兵隊が斬り込むのじゃ！
よいか、クリミアの残党を1人たりとも逃がしてはならんぞ！
怪しいものは、端から捕らえて参るのだ！」

マツコヤーの指示通り、デイン兵たちは動きだす。そんな時、一人の兵士が伝令にやってきた。

「マツコヤー將軍！この町の自警団が、我が隊への協力を申し出ています。いかがいたしましたしょう？」

マツコヤーからすると、それはやや予想外のことだった。普通なら、抵抗してこちらへ戦いを挑むだろう。それが、協力するとは一体どういうことか。

彼は少し考えたが、理由など分かるはずがない。

「……ふーむ……、まあ、いいだろう。好きにさせておけ」

「はっ！」

伝令役のデイン兵が再び去っていった時、マツコヤーの背後から男の声がした。

「……失礼。あなたがこの軍の指揮官か？」

マツコヤーが振り返った先に立っていた人物は、浅黒い肌をしたかなり大柄の男だ。薄い水色の長い髪を、軽く波がかった形にしている。どこか異国の雰囲気のある服装をし、顔や体の表面には、入れ墨なのか模様が刻まれていた。

「そうだが、あなたは？」

マツコヤーが馬から降りつつ聞くと、謎の大男はマツコヤーに近付き、港に停泊している船を指し示した。

「私は、あの停泊している船の船長で、ナーシルと言う者だ。この町へは、たまたま商用で立ち寄っただけなのだが……あなたの配下の兵士たちに、出航の邪魔をされて迷惑をしている」

妙に凄みのある迫力の男の声に内心怯えつつ、マツコヤーは釈明する。

「それは大変、申し訳ない。だが、クリミア残党の逃亡を阻止するために……民間船にも協力を願っているのだよ」

するとナーシルは、何かの紙を取り出してマツコヤーに見せた。証書のようなものだ。

「この行商許可証の通り、私の船はベグニオン帝国の正式な行商許可を受けている。この証書を提示すれば、クリミアとは無関係だと証明できるはずだが・・・？」

ナーシルが見せた証書には、確かにベグニオンとの行商許可の旨が書かれている。帝国元老院議員の一人、アニムス公の印鑑まで押されてあった。

だが、マツコヤーはそれでも首を横に振る。

「デインの支配下にあつてはこんな・・・ベグニオンの証書など、ただの紙切れでしかない」

「しかし・・・！」

反論しようとするナーシルに、マツコヤーは忠告とも脅しともとれることを言う。

「・・・ナーシルと言ったか？　あまり強硬な態度をとると、もしやクリミアの協力者ではないかと、あらぬ嫌疑をかけられるやもしれんぞ？」

「・・・」

ナーシルは、それには答えない。これ以上言っても無駄と思ったのか、マツコヤーに背を向けて船の方へ去っていった。

そんな彼の後ろ姿を見て、マッコヤーはデイン兵を呼ぶ。

「誰か、おらぬか！」

「ここに」

一人の重歩兵のデイン兵が、マッコヤーに応じる。

「船の見張りを強化せよ。あの男、何か企んでいるような素振りであった……。何があっても、船を出航させるでないぞ！」

「はっ！」

一方アイク達は、広場にてデイン軍との戦闘がすでに始まっていた。行商団もエリンシアも、すでにティアマト達が船に向けて連れて行っているはずである。

怪我の応急処置を済ませてもらったライは、アイクに笑いかける。

「……頼むぜ、アイク。うまくやってくれよ？」

「ああ。……今まで、ありがとうな」

「ははっ。こっちこそ、お前に会えてよかったぜ。……さーて、オレの方はいちょ、デインのやつらを引っ掻き回してやつか！」

そう言うと、彼は瞬時にピンク色の光に包まれた。光が収まった時、

そこには水色の毛並みの猫が立っていた。

猫に化身したライは、デイン兵の脇を駆け抜けて町の外へ駆けだす。慌ててデイン兵の数人が、ライを追いかけていった。

「ガリアの半獣だ！ 追え！ 逃がすな！！」

そんな様子を眺め、アイクは思う。

（ライ・・・また、どこかで会えるかな？ いいやつだったよ、お前・・・）

「クリミアの残党を倒せ！ 1人たりとも逃すなあっ！！」

広場に駆けつけてきたソルジャー数人が、グレイル傭兵団に襲いかかる。

「早速きたか・・・！」

アイクは再び剣を抜き、ソルジャーに相對する。そして、瞬時に力をためて居合斬りを放った。

「でいつ！！」

ズバッ！！

「つ、強い・・・」

「ウインド!」

セネリオはこの町で買ったウインドの魔道書を手に、別のソルジャーに向けて魔法を撃つ。

「ぐ・・・風魔法か・・・!」

傷ついたソルジャーは立ち上がり、槍を振りかざしてセネリオを狙う。だが。

「させないよ! 必殺の一撃っ!!!」

ザシュッ!!!

ワユが飛び出し、ソルジャーを必殺の一撃で斬り飛ばす。

「ぼ・・・ぼくも!」

ヨファは、残る1人のソルジャーに向けて弓を引き絞る。幸い、相手はヨファに気付いていないようだ。

シノンからもらった弓の弦を引き、そして手を離す。

ヒュン・・・グサッ!

「!!! 矢・・・?」

デイン兵は、矢が飛んできた方を向いて驚愕する。当然だ。どう見ても子供のヨファが、弓を構えていたからだ。

「くそっ・・・ガキが！」

手槍を構え、ヨファめがけて投げつける。だが。

ガキイン！

ヨファの目の前に、茶色い甲冑が立ちはだかり、自ら盾となって手槍を落とす。チャップだ。

「チャップさん！ あ、ありがとう・・・」

「いやいや、坊やも無理しちゃだめだよ」

そしてチャップは、手槍を投げたソルジャーを見る。

「あんたらなあ、子供相手に大人げないっておもつとらんのかね？」

「黙れ！ 敗戦国の愚民が、我らデインに意見するな！！」

ソルジャーは鋼の槍に持ちかえ、チャップのもとへやってきて、槍を突き立てる。

しかし、頑丈な鎧の上からはまともにダメージが通らない。

「わしゃあ、本当は戦いたくなんかない。でも、これが戦つつつもんなんか・・・」

チャップはそうつぶやき、逆に手にした鉄の槍でデイン兵をつらぬいた。

一方こちらは広場から少し離れた場所にある住宅街。そこに、盗賊が紛れ込んでいた。

「へっへっへ・・・向こうでワイワイやってくれている今こそがチャンスだ。悪事の限りを尽くしてやるぜ」

そう言つて、目の前の民家に向けて走り出す。しかし・・・。

「そこまでだ！」

「!?!」

盗賊の目の前に、緑の鎧を着た騎士が立ちふさがる。オスカーだ。

「くそっ・・・」

そそくさと引き返して逃げ出そうとする盗賊。だが、今度は後ろに赤い鎧の騎士、ケビンが立ちふさがった。

「もう逃げられないぞ！ 覚悟しろ!!」

「ち、ちくしょう!!」

盗賊は、ナイフを逆手にケビンに襲いかかる。だが、そんな程度の攻撃で、ケビンには打撃は通らない。

「これで終わりだ！ 食らえ、一発屋！！」

ケ빈は馬上で、斧を振り上げて力をためる。そして、それを盗賊めがけて振り下ろす。その一撃は、必殺の一撃となつて盗賊を真っ二つにかち割つた。

一発屋とは、ケ빈が得意な技である。力を思い切り溜めてから攻撃するというものなのだが、当たれば非常に強力な攻撃となるが、反面外すことも多い。

ドラクエで言う、まじん斬りみたいなものと思つてくれていい。

「ケ빈、さすがだ。私が騎士団を除隊してからかなり時間がたつが・・・腕を上げたようだな」

オスカーがケ빈をほめる。

「はっはっは！ 当然だ！！ クリミア騎士として、訓練は常日頃から欠かしていない！ それに今は、王都メリオルに凱旋するまで・・・ひたすら修行あるのみだからな！！」

「・・・そうだな。絶対に、デイン王を倒さない」と

「ああ！ オスカー、貴様も我が永遠の好敵手であり続けるためにも、常に本気で戦え！」

「あ、ああ・・・そうだな」

盗賊を倒すと、今度はそこにデイン兵たちまで集まってきた。戦線

はケビンに任せ、オスカーは民家を訪ねる。

民家から出てきた若い女性は、すぐ目の前でケビンが大勢のデイン兵と戦っている様子を目の当たりにして、驚く。

「・・・まさか、あなたたちは・・・デイン軍と戦っているんですか？」

「はい。我々は、クリミアの傭兵です。デイン軍から逃げる訳には参りません」

オスカーがそう答えると、女性は顔を下に向ける。

「クリミアが負けたという噂が届いてからというもの・・・この町は、こんなふうになってしまいました。もう誰も・・・恐ろしいデインに刃向おうとはしません。逆らわなければ今まで通り、平和に暮らせると・・・」

「・・・」(この町の住民があんな態度を取ったのは、そんな理由があつたからなのか・・・)

オスカーは、何も言えなかった。

強いものには逆らいたくない。その気持ちも、分からないではないでも・・・。

オスカーがそんなことを考えていると、女性は何かの本を取り出した。風属性を表す、緑色の魔道書だ。

「この魔道書・・・エルウインドの書をお持ちください。デイン軍に殺された・・・私の兄の形見です。力を持たない私の分まで・・・

どうか・・・」

「・・・分かりました、ありがとございます。必ず、デインを倒すことを約束します」

「やあやあ我こそは、クリミア騎士団第5小隊隊長、ケビンなり！
！ このオレを・・・」

ケビンがそこまで言いかけた時、ケビンの腕に矢が刺さる。

「・・・痛っ！　こら、オレの自己紹介を聞かずに攻撃とは、見下げ果てたやつだ！！」

「ふん、戦場で自己紹介など言語道断！　我らデイン軍の力、思い知るがいい！」

5人ほどの騎兵隊が、ケビンを取り囲む。

・・・とその時だった。

「サンダー！」

ピシャアアン！！

「ぐわっ、雷！？」

一人のデイン兵が、サンダーに貫かれて槍を取り落とす。サンダーを撃ったのは、イレースだった。

「よかった・・・間に合ったみたいです・・・」

イレースはそうつぶやく。そんな彼女の背後からは、水色の鎧のソルジャーが駆けつけてくる。ネフェニーだ。

「デインには負けない・・・!」

右手に持った鉄の槍で、麻痺したデイン騎兵をつらぬく。その一撃で、騎兵は倒れた。

「ガルアツ!!」

「ひつ、半獣だあつ!!」

レテとモウデイもそれぞれ猫と虎に化身し、集まってきたデイン兵に襲いかかる。

「フーーーーッ!!」

バリバリバリ!!

「グハッ、こ、これが半獣の力・・・」

またたく間に、付近のデイン兵は倒れた。

「ケビンさん！ 怪我を治しますよ」

ミストはライブの杖を手に、ケビンに駆け寄る。

「む・・・そう言えば、先ほどの戦闘で負傷をしていたな。助かる！」

「いえいえ。・・・ライブ！」

杖の先端からあふれた光がケビンを包むと、彼の怪我は瞬時に治った。

「どうもありがとう、アイク殿の妹、ミスト殿！・・・さあデイン軍よ、どんどんかかってくるがいい！！」

そう言つて、ケビンはまた馬を走らせていく。当初アイクから言われていた『民家の防衛』の任務を、忘れてはいないだろうか？

「あ、無理しないでくださいねー！」

ミストのその声は、聞こえていないようだ。

オスカーは、別の民家も訪れていた。

酒場の隣に建っていた民家から出るのは、先ほどライへのリンチに加わっていたおじさんだった。

どうやらオスカーはアイクの仲間とは思われていないようだった。

とりあえず、今現在町の中に盗賊が入り込んでいることを伝える。

「何！？ この混乱に乗じて、半獣だけじゃなく盗賊までうるついでやがるのか！　すぐに門を閉めなきゃな。教えてくれてたすかつたぜ、あんた！」

「いえ・・・」

さつきとはまるで態度が違った。さつきはライがラグズだと知った途端に、暴力をくわえていたのに、だ。

「・・・おっと、礼を忘れるところだったぜ！　こいつを持って行ってくれよ。何でも、必殺の一撃とか言うやつが出やすい、強力な槍だぜ。キラーランスって言っんだ」

「どうも、ありがとうございます」

全身が赤く、先端が非常に鋭い槍を受け取り、オスカーは頭を下げた。

その頃、町の入口の方から、何かが羽ばたくような音が聞こえてきていた。町の外から飛来してきたのは、5頭ほどの飛竜と、それにまたがる騎士。

デイン王国の、竜騎士部隊だった。彼らは街門のすぐ目の前の着陸をする。

この中では最も小さく緑の鱗を持つ飛竜にまたがる、赤くて長い髪

を後ろで縛った少女が、町の方を見て驚きの声を上げる。

「あ、大変！ もう戦いが始まっている！」

そう言つて、背中から鋼の槍を取り出して町に向けて飛び立とうとする。だがそんな彼女を、別のデイン兵の竜騎士が止めた。

「ジル殿、隊長の指示なしでは突撃はできません。どうか、しばしお待ちを」

竜騎士は、そう言つて隣の男を目で示す。

そこにいるのは、この竜騎士隊の中でもひととき立派な体軀を誇る黒い飛竜にまたがる男だ。右目が隻眼となっており、デイン兵の象徴である、黒い鎧をまとっている。年は、20代後半くらいだろうか？

おそらく、彼がこの部隊の隊長だろう。だが、眼帯が付いていない左目は閉じ、彼は船をこいでいた。どうやら、寝ているようだ。飛竜にまたがりながら、である。

先ほど仲間にジル、と呼ばれていた少女は、隊長格の男を振り返つて呼ぶ。

「ハール隊長！ のんきに寝ている場合じゃありません！ 半獣が出たそうですよ！！ 我が部隊も出撃しましょう！！」

その声で目が覚めたのか、ハールというらしい隊長格の竜騎士が、戦場に似合わない大あくびをした。

「ふああああ・・・やめとけ。俺たちがやらなくても、血気盛んなマッコヤー配下の者たちが働いてくれる」

渋い声でジルを諭すハール。だが、ジルは反論する。

「武勲を得る絶好の機会を、他の部隊にみすみす渡していいのですかっ!？」

「手柄なんぞ、いくらでもくれてやれ。いちいち、くだらないことで俺を起こすな・・・」

そう言つて、ハールは再び目を閉じる。

「あ、あなたと言う人は・・・」

ジルは、かなりがっかりした様子でハールを上目遣いに見たが、ハールは気にせず、あくび交じりに話を終わらせる。

「戦いが・・・ふああ・・・終わったら、起こしてくれ・・・zzz」

「・・・もういいです！ 私ひとりでも、出撃しますから!！」

再び眠ってしまったらしいハールと、ジルの出撃を止めようとはやる他の竜騎士を無視し、彼女は自分の飛竜に鞭をくれようとした。だが、その時。彼女の後ろからは眠ったはずのハールの声がした。

「zzzz・・・ジル、ちよつと待て」

呼ばれたジルはすぐにハールを振り返る。その顔は先ほどと違い、

とても嬉しそうだった。

「はい！ 気が変わりましたかつ！？」

だが、ハールの返事は彼女の予想を裏切る。

「この俺、ハール配下の竜騎士隊はここで待機。相手が手を出すまでは動くな。これは、上官命令だ。以上・・・zzz」

「・・・もうつー！！」

みたび眠ってしまった隊長に呆れるジル。そんな彼女に、他の竜騎士たちが話しかけてくる。

「ジル殿、ハール隊長はああ見えてしっかりした人ですから、きっと隊長にも考えがあるんだと思いますよ」

でも、ジルは納得できない。

「けど・・・！ 今日私の初陣なんだ！ 軍人である父上に憧れて、私はやっと、デイン軍人の仲間入りを果たした。なのに・・・父上にいい報告が全くできないまま本国に帰るなど・・・私にはできない」

「ジル殿・・・」

だが、隊長の命令とあらば仕方がないことも事実である。仕方なくジルは、町の入り口から戦いを見ることにした。

所変わってここは港町トハの路地。化身を解いたレテが物陰に隠れ、何かの様子をうかがっていた。

「あいつらが・・・この町の自警団か・・・」

レテの目線の先には、剣で武装した男たちが数人立っていた。

レテとしては、彼らが許せなかった。ラグズを貶すものは、万死に値する・・・。そう思ってしまうのだ。

（だが・・・ガリアとクリミアは同盟を結んだ。決して、クリミア人には手を出してはいけないんだ）

そのジレンマが、レテの心を駆け巡る。

その時だった。自警団の一人・・・長い銀髪をした色白の男が、レテに気付いたのは。

「！しまった・・・」

レテは、お急ぎでその場を立ち去ろうとする。しかし。

ガシッ！

「・・・！」

即座に、レテは腕をつかまれた。銀髪の剣士が瞬時に近付き、あつ

という間に捕まえたようだ。

レテは、強引にその腕を振りほどく。尻尾が逆立ち、己の中の闘争心が芽生えるのを感じた。だが、それを強引に抑えつける。

「・・・消える。クリミア人には・・・手を出さん」

殺気を放ちつつ、レテは剣士にそう告げる。だが、剣士からの反応は予想外だった。

「待ってくれ！・・・俺は、ラグズの敵じゃない」

「・・・なんだと!？」

一瞬、目の前の長髪の剣士の言った言葉が、分からなかった。だが剣士は、なぜか手にした剣を腰の鞘に納める。

戦う意思がないことを、表しているのだろうか？

「俺がこの町の自警団に入ったのは、あんたたちを逃がすのに都合がいいからだ・・・。町の連中の目は、俺がごまかしておくから・・・その隙に、君は逃げろ」

鋭い眼光を放つ緑色の瞳を見ると、嘘をついているようには聞こえない。だが、レテはそれでも信じられなかった。

まさか、アイク以外にラグズをかばうベオクに出会えるとは思ってもみなかったからである。

「・・・ベオクの言うことなど信用できない・・・」

そうつぶやくと、剣士は再び剣を抜いた。妙に湾曲した形で、赤紫

の色をした剣である。

「・・・では、この場で自警団のやつらを斬れば・・・俺を信じてくれるか？」

「なっ・・・！？」

真剣な表情でそう聞いてくる剣士に、レテは戦慄さえ覚える。剣士は、さらに問い詰めた。

「1人が、2人か？ それとも全員・・・？」

「や、やめろっ！！ なぜそこまでして・・・っ！」

思わず震えた声で、剣士の言葉をさえぎる。無意識のうちに彼女は、剣士の腕にすがりついていた。

剣士は、少しの間返答に困る。だが、答えた。

「・・・君を救いたい。・・・それだけだ」

レテはそれを聞くと同時に、剣士の腕をつかんでいたことに気付く。慌てて手を放し、態度を改めた。

「・・・分かった・・・とにかく、敵じゃないってことは・・・信じる・・・」

「ありがとう。じゃあ、早く町の外へ・・・」

レテは、首を横に振った。

「だが、逃げる訳にはいかない。仲間・・・とともに、船に乗らなくてはならない」

「あきらめられないか？　今は、危険が大きすぎる。自警団もデイン兵も、ラグズを目の敵にして襲ってくるぞ」

「だめだ」

すると剣士も、説得をあきらめたらしい。

「そうか・・・そこまで言うなら、仕方ないな」

「・・・」

だが、次の言葉はまたしても、レテの予想を超えるものだった。

「俺を・・・君たちの仲間にしてくれ」

「ば、バカを言うな！」

焦るレテ。だが剣士は、そんな彼女には構っていない。

「君、名前は？」

「・・・レテだが？」

「いい名だ」

「・・・じゃなくって、お前な・・・」

レテの考えとは裏腹に、話がどんどん進んでいく。

「俺は、ツイハーク。見ての通り剣士だ。ゆっくり自己紹介している余裕はなさそうだ。とにかく、急ごう」

ツイハークという名の剣士は、そう言ってさっさと港の方へ走りだす。

「ま、待て！ 私は許していないぞ！」

レテも追いかけてつっそう呼ぶが、ツイハークは聞かない。

港では、アイク達がデインの騎兵たちと激しい戦いを繰り広げていた。

だが、すでに勝負は決まったようなものだった。多くのデイン兵は倒れ、残るは敵将マツコヤーを含めて数人となっていた。

とうとうマツコヤーが、先頭に出てくる。

「ふーむ・・・町から逃げもせずこちらに向かってくるとは・・・我らデイン軍を、いささか甘く見過ぎたのではないかな？」

最も弱そうと判断したのか、マツコヤーは鉄の弓で、ミストを狙う。

ヒュッ・・・

「させるかつ！」

ガキン！

矢を剣で叩き落とすアイク。

「お兄ちゃん、ありがとう」

ミストの感謝を聞きつつ、アイクはマッコヤーに対峙する。

「行くぞ、覚悟しろ」

剣を振り上げる動作の後に、アイクはマッコヤーめがけて突進する。マッコヤーはそんなアイク目がけて矢を撃つが、そうなる前に接近されていた。

「やあつー！」

バシュッ！！！！

アイクの握るリガルソードは、マッコヤーの体を斬り裂く。だが、それだけでは倒せなかった。

「ふーむ、なかなかやるようだな。こちらからも行かせてもらおうとするかの」

いったん距離を置いて、今度は剣を引き抜く。その剣は、アイクは確かに見覚えがあった。

「！ あの剣は！！」

かすかに波打った長い刀身と、柄にはめられた碧玉。アイクが先ほど自警団の団長に譲り受けられた剣と、全く同じだった。

「ガルルル・・・！」

突撃してくるマッコヤーの目の前に、モウディが立ちふさがる。だがマッコヤーは、しめたとばかりの表情を見せる。

「森を出たのは誤りであつたな、半獣よ」

モウディめがけて、剣を振り下ろす。

その瞬間、剣の碧玉が輝き、モウディの周囲で爆発が起こったのだ。思わぬ重傷を負ったモウディは、化身が解けてしまう。

「ぐっ・・・なぜだ？ モウディ、力が入らない・・・」

「モウディ、あんたは下がってる！」

アイクはそう呼ぶが、モウディは動けない。そんな彼のもとへ、マッコヤーは再び剣を向けて馬を走らせる。

「この『ラグズソード』は、半獣に対して有効な打撃を与えることができる剣。半獣よ、これで終わりじゃ！」

マッコヤーがみるみる駆けよってきて・・・！！

バシッ！！

スカッ！

「！？」

マツコヤーが振り下ろしたはずの剣は、なぜか消えていた。何も持っていない右手が、むなしくモウディの前に振り下ろされる。

「ら、ラグズソードが消えた！？」

狼狽するマツコヤー。そんな彼の頭上から、声が聞こえる。

「おっと、あんたの落とした剣は・・・この剣かい？」

「その声は・・・！」

その場にいた全員が、近くの建物の屋根を見上げる。

「フォルカ！」

そう。フォルカが瞬時に駆けつけ、マツコヤーの持つ剣を奪ったのだ。

「アイク。この剣はあなたの傭兵団にくれてやる。しかも、特別に無料でだ」

「フォルカ、あなたはどこに行つてたんだ？」

「あなたの依頼主のあの王女たちを、船の中へ誘導していた」

「そうか・・・助かった、ありがとうな」

フォルカのおかげで、無事にエリンシアや行商団たちは船に乗り込めたらしい。

「さて、じゃあ俺も先に船で待っている」

「ああ、すぐに行く」

フォルカは屋根から屋根へと飛び移りつつ、あっという間に船の方へ消えていった。

「くっ・・・武器を奪うとは、なかなかやるものであるな。万事休す、か・・・」

近くを攻撃できない鉄の弓だけを持ったマツコヤーは、周囲を完全に囲まれる。

「これで、終わらせます・・・！」

ネフェニーがとどめに槍で貫く。

「甘く見たのはこちらであつたか……さもありなん。……閣下……後は……お任せしましたぞ……」

マツコヤーは、意味深なセリフを吐きつつ倒れた。

その頃、ワユは残る民家を訪ね終えたところだつた。住民からもらった「竜の盾」という、防御力を上げる魔道アイテムをポーチにしまい、アイク達本隊のもとへ走っていく。

「ああ、早くしないと大将たち出航しちゃうよう！ 急がないと……」

だが、ある民家の前をかけぬけようとした時であつた。

ガチャツ……

唐突に、民家の戸が開いた。中から出てきた人物が、普通の住民だつたらワユも無視して走って行つただろう。だが、違った。

全身に漆黒の鎧と兜をまとい、深紅のマントをたなびかせる者が、出てきたからだ。

ワユは知らないが、彼はグレイルの敵の漆黒の騎士だ。

「えっ・・・デイン兵の生き残りが、まだいたの？」

ワユは立ち止まる。

漆黒の騎士は、静かにワユを見ていた。そして、腰から白銀に輝く大剣を引き抜く。

「・・・」

ガシャッ・・・ガシャッ・・・

甲冑の音を鳴らしつつ、ワユに近付く。普通のデイン兵とは比べ物にならないほどに、圧倒的な恐怖感があった。

「え・・・待って・・・！」

ワユも剣を引き抜いて相對するが、明らかに腰が引けていた。

漆黒の騎士はある程度までワユに近付くと、白銀の大剣をワユに向ける。そして、大きく振りかぶって・・・

「・・・っ！」

振り下ろした。

バリバリガッシャアアッ！！！！！！！！

「きゃああああっ！！？」

想像を絶するほどの痛みが、ワユを襲う。剣から発せられた衝撃波はワユを正確にとらえ、容赦なく斬り裂く。

そして、ワユを襲った奔流は向かいの家屋も直撃し、その民家は一瞬にしてがれきの山となった。

がれきに、ワユは埋もれる。

「・・・この程度の兵力にてこずるとは・・・私の見込み違いだったか・・・？」

がれきと化した民家・・・いや、そのがれきに埋もれているであろうワユを見て、漆黒の騎士はそうつぶやく。

そのすさまじい音は、港まで響いた。

「何だ、今の音は！」

「向こうの方から聞こえたよ！」

町の一角から、煙が上がっている。アイクは、その煙のすぐ近くに、“仇”を見た。

「・・・！！ あいつは・・・！」

そして、わき目も振らずに駆けだすアイク。

「あ、ちよつとアイク！ どこへ行くんです！」

セネリオの問いかけを背中ではじき、アイクは港から飛び出す。

アイクが走るその先には漆黒の騎士が、静かにたたずんでいた・・・。

11章 　　ゝ流れる血の色はゝ　　後編（後書き）

突如現れた漆黒の騎士。

ワユは無事なのか？

アイクの運命は？

次回を待て！！

正午の月光（前書き）

突然民家から現れた漆黒の騎士に、ワユは倒されてしまう。

一方、港で漆黒の騎士に気付いたアイクはセネリオの制止を振り切り、漆黒の騎士のもとへ駆け寄る。

父を殺した仇との一騎討ちが、始まろうとしていた。

正午の月光

「港町トハ」

がれきと化した民家。その前に、漆黒の騎士は立っていた。彼は港の方から聞こえてくる足音に気付き、そちらを向く。

「・・・ほう、誰かと思えば・・・」

アイクだった。彼はリガルソードを引き抜き、体の前に両手で構える。

漆黒の騎士は、剣を構えない。右手はだらりと垂らしたままだ。

「漆黒の騎士・・・会いたかったぞ・・・」

リガルソードを構えたまま、アイクは言う。すると漆黒の騎士は再びがれきの山の方を向く。

「・・・先ほど、私の前を通りかかった少女剣士と、この場で戦った。ガウエインの残した傭兵団がどれほどの強さか・・・確かめるためにな」

「・・・？」

ガウエインとは、グレイルの昔の名前である。漆黒の騎士は、グレ

イルの過去を知っているようだが・・・。

アイクは、漆黒の騎士が何を言っているのか、分からなかった。そんな彼に、話を続ける。

「まるで、話にならない強さだった。我がエタルドの一撃・・・手加減したはずなのだが」

「・・・！ まさか、お前・・・ワユを・・・？」

漆黒の騎士が話す内容が、ようやく理解できた。そういえばまだ、ワユは港に集合していない。

アイクは、漆黒の騎士の前にある家屋のがれきに駆けより、がれきをあさる。

「ワユっ！ しっかりしろ！！」

しばらくして、がれきの中から藍色の髪が、そしてオレンジの皮鎧が出てきた。

「おい、大丈夫か！！」

がれきから出てきたワユは、全身ひどい傷を無数に負っていた。おびただしい量の出血を起こし、各部の骨折もしているようだった。

「・・・た、大将・・・ごめん・・・ね・・・」

「待ってる！ 今何とかする！！」

力なくつぶやくワユに、アイクはきずぐすりを飲ませ、さらに包帯を巻いていく。だがきずぐすりを飲ませても、怪我は全く治らない。

「あたし・・・たぶん、もう・・・助から・・・ない・・・よ・・・」

「バカなことを言うな！ あんたは、絶対に死なせない！！ 誰一人として、死なせはせん！！」

何度きずぐすりを飲ませても、効果が出ない。それはすなわち、すでに手遅れの状態である、ということだった。それでも、アイクはあきらめない。

だが、やがて手持ちのきずぐすりは全て使ってしまった。

「大将・・・あたし・・・ね・・・あなたたちと・・・一緒に・・・戦えて・・・本当に、よかった・・・よ・・・すごく・・・いい傭兵団・・・大将に出会えて・・・うれしかった・・・」

ワユの目から、一筋の涙が流れ落ちる。

「だめだ・・・頼むから、そんなこと言うな！！ 絶対に死ぬな！
これは、団長命令だっ！」

その時だった。アイクのもとに、羽音が聞こえてきたのは。

音がする方を向くと、港の方から天馬が飛来してきていた。マーシヤだ。

「アイクさん〜！！ ワユさんは、私が船まで運びますから、まかせてください〜！」

手を振りつつそう叫ぶマーシャ。すぐに近くに着地し、ワユのもとへ駆けより、天馬に体をくくりつける。

「マーシャ、分かった。ワユを頼んだぞ。・・・俺も、すぐ行く」

「港の方の制圧も完了しました。じゃあ、先に船で出航の準備しますね！」

マーシャは、再び船の方へ飛んで行った。

「・・・ワユ、と言ったか。先ほどの剣士は」

ずっと静かに事を見守っていた漆黒の騎士が、口を開く。それを聞いてアイクは、がれきの山から下りて、騎士のもとへゆっくり歩いていく。

手には、父親がアイクのために打った剣、リガルソードが握られていた。

「・・・くごしろ・・・」

歩きつつ、アイクが何かをつぶやく。頭がやや下向きになっているせいか、彼の目は前髪に隠れていて影となり、よく分からない。

「……？」

漆黒の騎士は、アイクの声が聞き取れなかったため、わずかに首をかしげる。すると今度は、アイクはもう少し声を大きくする。

「……覚悟しろ……」

わずかに震えたような声で、彼は確かにそう言った。

「……覚悟しろ……漆黒の騎士……覚悟しろ……っ！」

次第に、声の調子を上げていく。そして……。

「漆黒の騎士……覚悟しろおっつ！……！」

ある地点まで近づいて、唐突にアイクは頭を上げて叫ぶ。蒼い炎の如き髪は振り乱れ、深緑色のハチマキは激しくなびき、手にしたリガルソードは曇り一つない刀身に漆黒の騎士を映し出す。

そして、猪突の如き勢いで駆けだし、高く飛びかかりつつリガルソードを振り降ろす。剣は、確かに漆黒の騎士を捕らえていた。

だが、何の手ごたえもなくアイクは着地する。すぐに周囲をうかがうと、漆黒の騎士はアイクのすぐ背後、時計台の目の前に、何事もなかったかのように立っていた。

「くっ・・・」

「・・・なぜ、手向かう？　今のお前に、この私が倒せるとでも思っているのか？」

挑発めいた発言。当然、アイクは再び漆黒の騎士めがけて駆けだす。

「お前は・・・この俺が倒す！！」

リガルソードを横に構えて力をため、渾身の居合斬りを放つ。この攻撃も、明らかに騎士を捕らえていたはずだった。

だがまたしても、騎士はアイクの背後を取った。がれきの前に、静かにたたずんでいる。

「速すぎる・・・あの鎧を着て、どうして・・・」

それを聞いてか、漆黒の騎士は少し笑ったような声になった。

「フツ、まだまだだな。その程度の實力では、この私の相手は務まらない。・・・もつとも、務まったとしても勝つことは不可能だ」

「何だとっ！」

いきり立つアイク。そんな彼に、漆黒の騎士は聞いてくる。

「・・・それでも、私と殺り合うつもりか？」

アイクは、迷わない。

「ああ。お前を倒すのは、この俺だ！」

「フツ、そうか。ならば、こちら本気で行かせてもらおう。手加減をするつもりは、ない」

ジャンプ斬りや居合斬りは、隙が大きくてすぐに見切られる。かといって、隙の小さな足払いや殴打、振り抜きと言った技では、あの装甲相手には満足なダメージは与えられない。

カウンターで反撃を狙うのも考えたが、漆黒の騎士が持つ白銀の大剣 エタルド、と言うらしい 相手では受け止められる自信はない。

アイクは、自分が編み出した新技を試してみようと思いついた。

（装甲の硬い敵に有効な突き技・・・漆黒の騎士に対しては、効果があるはずだ）

アイクは瞬時に間合いを詰め、漆黒の騎士の目の前まで接近する。そして、その場で瞬時にリガルソードを持つ右手を手前に引き、刀身を横向きにする。

そして漆黒の騎士の左胸の辺りを狙い、一気にリガルソードを突き出した。

盾砕き・・・堅い守りの敵に対して、高い効果を誇る剣技である。
頑丈な鎧の前でも、正確に鎧の継ぎ目などの弱点を突いて攻撃することが可能だ。

いや、可能なはずだった・・・。

だが、漆黒の騎士はそれほどまでにアイクに接近されていたにもかかわらず、エタルドを瞬時に目の前に持ってきてアイクの盾砕きをはじめて見せたのだ。

「!!」

リガルソードとエタルドがぶつかり、火花を散らす。そのまま、つばぜり合いとなった・・・が。

「弱すぎる」

シャキーン！

あまりにもあっけなく吹っ飛ばされるアイク。背後にそびえる時計台のレンガの壁に、思い切り叩きつけられた。

そして・・・アイクの持つリガルソードは・・・無残にも木っ端みじんに刀身が砕け散っていた。

手元に、刃のない剣の柄のみが残る。

「っ、強すぎる・・・」

柄を投げ捨て、アイクは何とか立ち直る。少しだけ後ろを振り返ると、アイクがぶつかつた時計台のレンガ壁が、ちょうどアイクがいたあたりだけひびが入っていた。相当な衝撃があつたのだろう。

アイクでは手も足も出ないほどに、恐ろしい強さの相手だ。到底、かないっこない。

「やはりお前は、父と同じ愚か者だな、アイクよ」

漆黒の騎士は、アイクにそう話しかける。

「くそっ・・・こんなところで・・・!」

「せめて、最後は楽に終わらせよう」

漆黒の騎士はそう言うと、エタルドをゆっくりと振り上げ・・・それを振り下ろした。

ゴオオオツ!!!

すさまじいという言葉ではもはや言い表せないほどの衝撃波が、アイク目がけて襲いかかる。刀身から発せられた、紫のオーラをまとう衝撃波は、一気にアイクに殺到した。

「っ!!!」

間一髪で、アイクは横に身を投げる。衝撃波を何とかよけることができたようだ。

体の前面を着地の衝撃が駆け巡る、そんなアイクのすぐ近くで、巨大な轟音が鳴り響いた。

ドドーン！！ バリバリバリバリ・・・ガラガラガラ！！

時計台のレンガ壁にぶつかった衝撃波は、時計台を一気に揺るがしたらしい。時計台の建材が、雨のように降り注ぐ。

その時だった。

ゴーン・・・ゴーン・・・ゴーン・・・

台の最上部の鐘が鳴り響く。時計は、12時を指していた。正午だ。

鐘の音が6つほど鳴った時、唐突に時計台の崩落は始まった。

時計台の最下層から、まるで押し潰されるかのように崩れ落ちていく。その間も、鐘は鳴り続けていた。

ゴーン・・・ゴーン・・・

最後の12回目の鐘が鳴る。それと同時に、時計台は完全に崩れ去った。鐘と、時計だけが残る。

時計の針は12時キツカリを指したまま、完全に止まった・・・。

「・・・」

アイクは、何も言えなかった。まさかエタルドの衝撃が、これほどの破壊力を誇るとは思っていなかったからだ。

とんでもない人物を相手にしてしまったことに、正直後悔もしていた。

アイクはそもそも、漆黒の騎士と戦うのは、もっと自分の力をつけてからだと言ったはずだった。にもかかわらず、まだ力不足だと言うのに勝負を挑んでしまった。

先ほど漆黒の騎士が言っていた言葉の意味を、ようやく理解した。

（今の俺には・・・勝ち目がない・・・）

立ち上がった彼のもとに、漆黒の騎士が歩み寄る。手にしたエタルドは、不気味なほどに美しい銀色に輝いていた。

「あの衝撃をよけるとは・・・なかなか、やる。だが・・・これまでだ。次は、外さん」

漆黒の騎士はエタルドを天に掲げる。すると、漆黒の騎士自身の体が、まばゆいほどの光に包まれたのだ。

「奥義・・・月光。安らかに逝くがよい」

光は真円を描き、騎士と重なる。それはまさに、闇夜の空に浮かぶ満月さながらだ。

光は漆黒の騎士を中心に再び集まり、凝縮され・・・エタルドに集まる。

全ての光が剣に収束された瞬間、漆黒の騎士はアイクに一気に近付いて・・・。

バシュッ！！ ザシュッ！！ スパァン！！ シャキーン！！

目にもとまらぬ速さで、光り輝くエタルドでアイクを切り刻んだ。

「ば・・・バカな・・・みんな・・・済まない・・・」

アイクの全身から血が噴き出し、彼は倒れる。その周囲はあっという間に、血だまりとなった。

「ガウエインの息子の最期、か・・・」

つぶやく漆黒の騎士が持つエタルドの光は、いつの間にかおさまっていた。

正午の月光（後書き）

港町トハで、漆黒の騎士に敗れたアイク。

ワユ、そしてアイク。彼らは・・・。

失った仲間には、もう会えない（前書き）

アイクと漆黒の騎士の一騎討ちの直前、マーシャによって救助されたワユ。

彼女は・・・。

失った仲間には、もう会えない

〔港町トハ：トハ港〕

トハの港に、立派な帆船が停泊している。帆の柄を見ると、商船のようだ。

ナーシルという男の持ち物である。先ほどまでは、マッコヤーを始めとするデイン軍が、船の監視に当たっていた。

だが、現在はトハの町を占拠していたデイン兵は、ほぼ全員が討死、あるいは逃走した。もう、すぐにでも出航できる状態だった、

デイン軍の増援が来る前に出航をしたい・・・そう考えている団員達の元へ、天馬が舞い戻ってきた。マーシャだ。

「マーシャ、戻りましたっ！！」

血相を変えて船の甲板に降り立つペガサスナイト。甲板で出航準備を手伝っていたボーレが駆け付ける。

「あ、戻ってきたか。ワユとアイクのやつ、すぐに来れそうだったか？」

少し考えて、マーシャは答える。

「・・・アイクさんは・・・たぶん戻ってくると思います。でも、それより・・・」

「でも？」

切羽詰まった様子のマーシャを見て、ボーレも不安になる。そんな彼に、マーシャは堰を切ったように話した。

「ワユさんが・・・ワユさんが大変なんです！！　す、すぐに誰か、杖を使える人を選んで！！　このままだと・・・！！」

「・・・なんだとっ！　おい、ワユは連れてきたのか！？」

「は、はい！　こっちに！」

腕を引かれてボーレが付いていくと、天馬にワユはくくりつけられていた。

ひどい怪我だった。全身をかまいたちで斬り刻まれたかのような無数の切り傷。まるで、身に付けていた皮鎧など何の意味もなしていない。申し訳程度に包帯が巻かれていたが、全て大量の血で真っ赤に染まっていた。

そして・・・ワユの大きく見開いた両目は焦点を合わせておらず、胸は全く動いていない・・・回復魔法や医学の知識がからつきしなボーレでも、危険な状態であることは疑いようがなかった。

「なんだこりゃ・・・！　おい、ちょっと待ってる！　すぐミストとキルロイを呼んでくるから、ワユについててやってくれ！！・・・」

・おい、ミスター！！ キルロイ！！」

ボーレは船室に駆け込む。後に残されたマーシャは、ワユの方をもう一度見た。

（・・・これが・・・戦争・・・？）

元ベグニオン聖天馬騎士団の団員とはいえ、マーシャは実戦経験はまだ薄い。死の淵に瀕した味方を目の前に見たなどということは、今までなかったことだ。

だが今彼女の目の前で倒れている、自分とさして年代の変わらない少女は・・・生死の境をさまよっている。マーシャは、自分の目で見ている光景が本当のことだとは思えなかった。

思わず、ワユの手を握る。

まだ、暖かい。だが、血の通っている様子はない。

「・・・ワユさん・・・どうか、死なないで・・・女神アスタルテよ、彼女にお慈悲を・・・」

「連れてきたぜ！！」

しばらくして、船室の中からミストとキルロイを連れたボーレが出てきた。さらにそれに続いて、船に到着していたグレイル傭兵団と

行商団メンバー、エリンシア、さらにはナーシルも集まってきた。

「ワユさん！？　しっかりして・・・ライブ！」

ミストはライブの杖を。

「早く治さないとまずい・・・リライブ！」

キルロイはリライブの杖をワユの近くに向け、集中をする。

二つの杖の先端の、赤と青の玉から、水色の光があふれだす。

心配そうに団員たちが見守る中、水色の光はワユを優しく包み・・・体に浸透していく。

だが・・・。

「・・・どうして？　ライブの魔法が・・・効かない・・・？」

ミストがそうつぶやく。見ると、光が浸透したにもかかわらず、ワユの傷は全く癒えない。そればかりか、意識も回復する様子はない。

「もう一度、やってみよう。今度こそ・・・！」

キルロイがリライブを使うのを見て、ミストもそれに従う。

しかし、結果は同じだった。光は浸透しても、容態は変わらない。

「ミストちゃん、キルロイ様、私も協力させていただけますか？」

「エリンシア様？」

キルロイが振り返ると、エリンシアもリライブの杖を持っていた。

「先ほどの町で・・・買ったものです。あまり私には魔力はありませんが、杖の使い方も少しは心得ていますので・・・」

「・・・分かりました。すみませんが、お願いします」

「ライブ！」

「リライブ！！」

「リライブ！」

三つの杖の先端の宝玉から水色の光があふれ、まばゆいほどの光にワユは包まれる。包んだ光はワユの体に少しずつ吸収されていき・・・。

そして・・・何の変化もないワユの体が現れた。

「そんな・・・3人でもダメだなんて・・・」

ミストが、絶望感に落ち込む。一度に多くの魔力を使ったため、息切れも起こしていた。

「一体……どうしてでしょう……」

エリンシアも、肩を落としていた。やり切れない気持ちになる。

少しして、キルロイが口を開いた。

「……ライブやりライブの杖を使えば……普通は怪我が治る。どんな生き物に対しても、命さえ残っていれば……その生命力を再燃させて怪我を治せる。それが……僕たち杖使いたちが使える回復魔法なんです……」

「命さえ……残っていれば……？」

目のあたりが前髪の影になったまま、ミストが聞く。

「キルロイ……それは、どう言う意味……？」

「……命が無いもの……つまり、死んでしまった生き物の生命力は……回復魔法ではもう……」

「……」

沈黙が流れた。

今いるメンバーの中では、おそらくキルロイが最も杖を使ったこと

が多いだろう。それだけに・・・彼の口から出た言葉は、重くのしかかった。

「・・・ワユさん・・・」

キルロイは、ワユに呼びかける。

『秘技、待ち伏せ!!』

『細かいことは気にしない』

『あたし、役に立つから・・・だから、どこにでもいけ、だなんて言わないでね?』

『いつか、宿命のライバルと出会っんだ!　そして、あたしはその人と剣で勝負することになるの!』

『「これぞ男の生き様!　ついていくしかない」って感じで!　グ

レイルさんってすごい人なんだね〜!』

「……ルロ……さ……」

「……?」

いつしか涙を流していたキルロイは、何かの音……いや、声を聞いた。

「……キルロ……さ……ん……」

「……ワユ……さん……?」

すぐに、ワユの方を向く。

ワユは……顔をこちらに向けていた。確かに、焦点は合っている。

「ワユさん！ 気が付いた！？」

奇跡だった。あの状態から意識が回復するとは……。

「キルロイ……さん……ありがと……う……あたしの……
ために……」

「いや……いいんだよ。それより、意識が戻ったなら早く治療を……」

キルロイはミストとエリンシアにも、また杖を使うように言う。そして、自分自身もリライブの杖を構える。

だが……。

「……ううん……もう……いいの……。……あたし……
もう……ダメだか……ら……」

「え……待って！ でも、今やれば治る……」

「……ごめん……ね……何か……分かるの……ああ、あ
たし……もう、死ぬんだな……って……うまく言えない……
けど……不思議な……気持ち……」

「……」

キルロイが何も言えないと、ワユが重ねて口を開いた。

「・・・あたし・・・ごめんね・・・もう・・・お別れ・・・みたい・・・」

どこか、眠そうな様子でそう言うワユ。そんな彼女に、キルロイが言う。

「・・・ダメだ・・・ワユさん、行っちゃダメだ・・・！」

思わず、手をつかむ。ほんのかすかに、握り返される感覚が伝わった。

「・・・あはは・・・しつかり・・・して・・・よ・・・」

「行っちゃダメだ・・・ワユさん、お願いだ・・・」

泣きながら、懇願するキルロイ。少しでも長く・・・ワユが命を保つていてほしい・・・そう願いつつ。

しかし・・・。

「・・・キルロ・・・イさん・・・それに・・・みんな・・・今まで・・・ありがと・・・う・・・あた・・・し・・・この・・・よ
うへ・・・いだん・・・入れて・・・すごく・・・うれしかった・・・」

・・・」

キルロイの手から、ワユの手が滑り落ちる。

ワユは、静かに目を閉じていた。眠っているような・・・それほどに、安らかな顔だった。

「・・・ワユさん・・・？」

返事は・・・なかった。

失った仲間には、もう会えない（後書き）

復活はない。

それが、ファイアーエムブレムの世界・・・そして、この世界である。

悲しみの船出（前書き）

ワユの死・・・そして・・・

悲しみの船出

く港町トハく

一つの命が、終わりを迎えた。

ともに戦ってきた仲間だった。寝食を共にし、深い絆で結ばれていた、かけがえのない仲間だった。

もう、彼女は何もしゃべらない。明るい笑顔も、卓越した剣技も、もう見ることはできない。

宿命のライバルに出会うことも、とうとう叶わぬものとなった。

命の終わりは、切ないほどに……どこまでも、あっけない。

「……っ……うっ……」

誰かが、嗚咽を漏らす。声は、だんだんと増えていく。

「……ワユさん……っ……どうして……」

泣きながら、キルロイが問いかけるが、返事はない。

みんな、ただ悲しかった。それ以外に、感情がはつきりと出ない。ワユを手にかけて相手が憎いといった思いは、不思議と湧き上がらなかった。

誰が殺したなど、どうでもよかった。分かっていることは、ワユがもう、この世にはいないということ。でもみんな、その事実を受け入れたくはなかった。

その時だった。

ドドーーーーン!!!!!!!!

町の中心のほうから、すさまじい音が鳴り響いたのは。

全員が音の鳴った方角を向くと、町の中心にそびえる時計台が目に見えた。ちょうど、時計の針が正午を指す瞬間だ。

ゴーン・・・ゴーン・・・ゴーン・・・

時計台の鐘が、町中に響き渡る。つい、その音に聞き入っていた傭兵団員。だが、突然時計台の倒壊が始まった。

ガラガラガラー！

白煙を上げ、まるで下層部が押しつぶされるかのように崩れていく時計台。その間にも、鐘の音は鳴り続けた。

ゴーン・・・ゴーン・・・

最後の12回目の音がなると同時に、時計台は完全に崩れ去った。さっきまでそびえていたのが、まるで嘘のように。

「何だったの、今は・・・」

ティアマトが、茫然とした様子でつぶやく。誰もが同じことを考えていた。

その時だった。彼女が、甲板に団員の一人がいなくなっていることに気付いたのは。

「ね、ねえみんな！ ミストがいなくなっているわ！」

「なにっ!？」

甲板には、もうすでに全員が集まっていたはずだった。船の中に入っていたのだろうか？

ワユの死、時計台の崩壊と、さまざまなことが一度に起こりすぎていたため、団員はみな、事態の把握などできていない。

「・・・ひとまず、船の中を手分けして探しましょう。見つければよいのですが・・・」

セネリオのその言葉に、一同は賛成した。

漆黒の騎士は、勝利を確信していた。目の前の血溜まりに倒れた、蒼い髪の剣士を見つづ。

「早すぎた死闘、若さゆえの過ち、か。いずれにせよ、愚かで・・・残念だ。少しは私を楽しませてくれると考えていたのだが」

そう言い捨てて、漆黒の騎士は踵を返し、立ち去ろうとすると・・・彼の視界に、1人の少女が入った。

「・・・」

茶髪のおかつぱ頭の少女・・・アイクの妹、ミストは、信じられないような目で、崩れた時計台と漆黒の騎士、続いて倒れた兄を見る。

「・・・その髪、その顔・・・お前は、ガウエインの娘か？」

そう問いかける声には耳を貸さず、ミストはアイクに駆け寄った。

「・・・お兄ちゃんっ・・・!!」

うつぶせに倒れているアイクを抱き起し、ゆする。自分の服が血で汚れることも気にせずに。

グレイルの墓と先ほどのワユの様子が、彼女の脳裏に浮かぶ。

「目を開けて！　お願い・・・もう、人が死ぬのはいや！　お兄ちゃんまで、いなくならないで・・・！」

必死にゆするが、アイクの様子に変化はない。ミストは、持つてきたライブの杖を使うことにする。

「・・・ライブ！」

優しい光がアイクを包むが、やはり治る様子はない。こちらも手遅れなのだろうか。

「ライブ！　ライブ！！」

何度やっても、治らない。そのうち・・・

「ライブ・・・っ!？」

パリーン・・・

ライブの杖の先端の宝玉が、音を立てて砕け散ってしまった。杖の耐久度の限度に至り、壊れてしまったようだ。もう、この杖は使えない。

「・・・おにい・・・ちゃん・・・」

こみ上げる絶望感。ミストはそれでも、あきらめなかった。両手を組み、祈る。

「死なないで、お兄ちゃん・・・女神様、どうかお兄ちゃんを救って・・・！」

その時。

ピカアアーーーー・・・

「・・・？」

アイクの体が、緑色に輝いたのだ。光はまるで柱のごとく、天の果てまで伸びている。

「え・・・これはいつたい・・・!？」

光はみるみる強まり、まばゆいほどに輝き、そして・・・

光が収まったのと同時に、アイクはゆっくりと立ち上がったのだ。

「お・・・お兄ちゃん、どうして・・・？」

ミストは、目の前で何が起こったのか分からなかった。だが、アイクはしっかりと生きていた。傷だらけではあるが、立ち上がっていた。

困惑する妹に、彼は話しかける。

「・・・どうやら、あの時に読んだ本が俺を助けてくれたみたいだ。心配させてすまない」

「え・・・ほ、本って？ どうしてそれで・・・」

「ミスト、話はあとだ。船に戻って出航するぞ！」

「ちょ、ちよつと待ってよ！」

アイクが言うことがまるで理解ができていないミスト。でも、それでもうれしかった。自分が慕っている兄が、こうして生きていることが。

だが、いざ駆け出そうとしていた2人の前に、漆黒の騎士が立ちふさがる。

「なるほど、『祈り』のスキルか。女神の慈悲で、致命傷を負っても運が良ければ命が救われるというスキル・・・だが」

漆黒の騎士は、ふたたびエタルドを引き抜く。

「幸運は、二度も続くようなことはない。次こそ、安らかに逝くがいい」

「くそっ・・・そこをどけ!!」

アイクはミストを背中にかばい、鋼の剣を引き抜く。

「お兄ちゃんっ!」

「ミスト、絶対にこの手を離すな! 何とか切り抜けてみせる!」

ミストの右手を左手でつなぎ、右手には鋼の剣を携え、駆け出す。そんな彼らに向けて、漆黒の騎士はエタルドを振りかざす。

「逃げるつもりか? 先ほどならば見逃したのだが・・・戦いたいと言ったのはお前だろう? 受けた勝負は最後までやるべきだ」

振りかざしたエタルドを振り下ろそうとした・・・その刹那だった。

ドカッ!!

「?」

何かが鎧にぶつかったのを感じた漆黒の騎士は、後ろを振り返る。

そこに立っていたのは、水色の毛並みの猫。

「ライ!」

「ライさん!」

ほぼ同時に、兄妹は声を発する。それに応えるように、ライは化身を解いた。

「よう、アイクとミスト！ オレを追いかけてたデインの連中なら、適当にあしらっておいたぜ。こいつもオレが何とかしとくから、お前たちはさっさと船に行つてろつて！」

「ライ・・・すまないな。じゃあ、頼んだぞ！・・・死ぬなよ」

「また、ライさん！ 絶対・・・また会いましょうね！」

アイクとミストは、そう言つて船の方へ駆け出す。

そんな彼らの後を、漆黒の騎士は追おうとする。だが、そんな彼をライの声が引き留めた。

「おい待て！ アイクたちには、手出しはさせない」

「・・・ガリアの戦士か。なぜ、彼らをかばう？」

振り返らないままに、漆黒の騎士は問う。

「あいつらは、オレの大事なダチだ」

「ほう？ 半獣とけなされているラグズのお前が・・・」

「・・・オレの勝手だ。ともかく、出航の邪魔はさせないぜ」

2人が睨み合っているうちに、港からは船が出航した。グレイル傭兵団を乗せた船は、大海原へと繰り出していった。

そんな船の様子を横目で見てから、漆黒の騎士は再び口を開く。

「ガリアの獣戦士・・・貴公には一度、会っているな。確か、樹海の古城だったと記憶している」

すると、ライもそれに応えた。

「オレの側からでは、二度だな」

「ほう？」

「月の晩にも見た。お前は、あの時・・・グレイル殿を手にかけた」

漆黒の騎士はそれを聞いて、思い出したように言う。

「フツ、師子王の傍らにいたのは貴公だったのか。おもしろい。側近の力を測ればおのずと王の実力も知れよう」

そして、エタルドをライに向ける。ライはそれに対し真剣な表情で、首を横に振った。

「あいにくだが・・・我が王は、オレごときで測れるような小さい器じゃない」

「そう願いたいところだ。では、参る」

「・・・」

ライも化身し、戦闘態勢を整える。

「どこからでもかかってくるがよい」

「・・・そうさせてもらうつー!!」

ライは尻尾を逆立て、小さな唸り声をあげてから、漆黒の騎士に飛び掛かった。鎧に取り付き、猛スピードで爪で切り裂こうとする。獣牙族の爪や牙は、ベオクのまとう鎧すらも切り裂くほどに発達している。重厚な鎧だろうと、攻撃は通じているはずだった。

・・・だが、攻撃が通じた様子はない。

(っ・・・どうして・・・)

ライは離れた位置に着地し、再び漆黒の騎士に向き合う。

「次はこちらからいかせてもらうつー」

漆黒の騎士は鎧姿とは思えない速さで瞬時にライに接近すると、そのままエタルドの一閃でライを切り裂く。

「ぐはっ・・・」

明らかに手を抜いたであろう一撃だったが後ろまで飛ばされ、ライの化身は解けてしまった。

「・・・っ・・・なぜだ・・・オレの攻撃が・・・きかない・・・」

ふらつき膝をつくライに、漆黒の騎士は独り言をいう。

「かなり、やる。だが、私の敵ではないな」

その時、ライの頭上で光が現れる。光はライの体を包み、傷ついた体をいやす。

「!?!」

驚いたライは、漆黒の騎士の背後から現れた長身の男に目を丸くする。

「お行きなさい。ここは、私が・・・」

その人物に、ライは見覚えがあつた。黒い長髪に法服、そして手にした錫杖。セフェランだった。

「・・・あなたは、確か捕虜収容所にいた・・・」

ライの疑問に、セフェランは軽くうなずき、騎士を見やる。

「・・・この騎士は、私には手出しできませんから・・・」

「・・・」

「さあ、早く!」

漆黒の騎士も、セフェランの言うことを認めているようだ。ライはその様子を見て安心する。

「・・・じゃ、遠慮なく！ 次に会ったら礼はするよ」

そしてその場から逃げるように、港町トハを後にした。

ライが立ち去つてすぐに、1人のデイン兵が漆黒の騎士の元にやってくる。

ソバカスを顔に浮かべた青年スナイパーであり、漆黒の騎士の配下の将軍である、ノシトヒだ。

「し、漆黒の騎士殿！ 船が出航しました！ こちらも船を仕立てすぐに後を追えば海上にて追いつきます！」

「・・・」

だが、漆黒の騎士は一言も話さない。代わりになぜか隣にいたセフェランが、ノシトヒに対して命じる。

「・・・デインの将よ。ここはお退きなさい。彼らの後を追うことは、私が許しません」

それに対し、ノシトヒは当然逆上する。

「なっ・・・貴様、何者だ！？ 誰に口をきいていると・・・」

「兵を集める。・・・撤退する」

ノシトヒの反論を遮ってそう命じたのは、漆黒の騎士。ノシトヒは混乱した様子で声を上げる。

「し、しかし・・・」

「・・・二度は言わん。すぐに実行するのだ」

「はっ、ははあっ！！！」

漆黒の騎士の、言葉には言い表せない絶望のようなオーラに、ノシトヒは恐れた返事をして、すぐに作業に取り掛かりに行った。

港町の入り口にて待機していたデインの竜騎士部隊のところにも、漆黒の騎士の命令が伝わってきた。

だが、手柄を立てたくて仕方がない新米竜騎士ジルは、隊長のハールを呼び起こしにかかる。

「ハール隊長！ 敵の船を追いましょう！ 半獣の仲間を逃がすわけにはいきません！」

しばらくして、飛竜の背中で寝ていたハールが起き上がるが・・・

「ふああ・・・よく寝たぜ。さて、戦いも終わったようだし、ハール隊、帰還するぞ」

「隊長！」

非難の声でジルが声を上げるが、ハールは部下を諭す。

「いいか、ジル。俺たちは明日には本国へ戻るんだ。こんなところで怪我でもしたら、お前の親父殿は喜ばんぞ」

「父が待っているからこそ、私が手ぶらで帰るなんて・・・絶対、できないのです！　ですから・・・！」

懇願するジルに、ハールは静かに説得する。

「・・・そう、熱くなるな。漆黒の騎士殿、直々の帰還命令を無視する気か？」

「そ、それは・・・」

ジルが反論に詰まったのを確認して、黒い飛竜にまたがる。

「さあ、分かったら行くぞ」

ハールと、続いて他の竜騎士たちが飛び立っていくのを見て、仕方なくジルも続く。

「・・・」

だが彼女の心の中では、ハールの言うことが納得できていないようだった。

（どうにか・・・手柄を立てて父上を喜ばせたい・・・！）

ワユが死んだことは、さっきキルロイに伝えられた。

「そうか・・・助からなかった、か・・・」

「ごめん、アイク・・・手は尽くしたんだけど・・・ワユさんは・・・」

「キルロイたちのせいじゃない。俺の責任だ。誰も犠牲者は出さないって、決めたのに・・・」

ワユの遺体は、木でできた手作りの棺桶に収められてあった。血が拭き取られ、傷も目立たないように化粧が施されてある。安らかな表情で組んだ手には、ワユの使っていた剣が握られている。

「ワユ・・・」

眠っているようにしか見えない。死んだとは信じられない。実感がわかない。

「ワユさん・・・この団に入ってよかったって・・・そう言ってた。アイクに出会えて、本当に良かったって・・・」

「そう、か・・・」

ワユもグレイルと同じく、漆黒の騎士の手によって命を落としたのだ。

「ワユさん・・・もう、あの人の笑顔は見られない。そう思うと、すごく・・・」

涙を流すキルロイに、アイクは声がかけられなかった。

その後、ワユの葬儀を行なった。葬儀と言っても、たいそうなことはできなかったが・・・。

「・・・」

棺の中に花と、団員全員の手紙を入れる。ふたを閉めたとき、団員たちからはすすり泣く声が漏れた。

ゆつくりと、甲板からせり出される棺。ある限度を超えたとき、棺は重力に従いつつ海へと落ちた。

静かに沈んでいく。ワユには、もう会えない。

「さようなら、ワユ・・・」

誰かが、そうつぶやいた……。

アイクは、船尾に立っていた。どんどん遠ざかっていく港町トハ。そして陸地。

もう、この旅は引き返せないところまで来ていた。

(……だったら……進むしかない。そして……)

港町での、屈辱的な敗北。そして、逃走。

(……俺は……強くなる。今度会うときは……負けない。お前を倒す！)

決意を新たにするアイク。

もう、陸地は水平線の彼方へ消えつつあった。

悲しみの船出（後書き）

悲しみを乗り越える決意。

デイン軍の猛攻を振り切ったグレイル傭兵団は、大海原へと進みだす。

彼らは、何を見るのだろう。

そして、多くの悲しみを超えた末に、彼らを待つ運命は・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8955q/>

ファイアーエムブレム ～テリウス動乱記～

2011年12月31日21時48分発行